
作戦従事命令

571レノにいさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作戦従事命令

【NZコード】

N5843P

【作者名】

571レーニコさん

【あらすじ】

『朝比奈みぐる』の来歴、周囲の人々とその活動、などについての簡略な物語

作戦従事命令1

「かねてより準備作業の進行中であったこの作戦工程は、いよいよ実施段階に移行することとなつた。」

はるかな未来、ここはある会議室。

「諸君。これはわれわれのいままでに存在している、この時間平面を防護するための重大秘密作戦工程である。失敗は絶対に許されない。万が一にも失敗した場合、作戦従事者は消滅するか、時間平面の迷子になつてしまふかである。この意味はわかるだろ？。・。・さて、そのうえで、ここに私は諸君の志願を求める。強制はしない。誰か！ われわれすべての命運を一身に背負い、はるかな過去の世界へと勇躍単身赴く、勇敢なる者はいないか？」

しばし会議室を沈黙が支配した。時間進行調整省長官は演説を終え、静かに室内を見渡している。居並ぶ若者達は官吏候補者。初期訓練を修了し、これから配属を待つ公務員の卵である。こうした募集は時折ある。危険な任務であることも多い。しかしそれだけに、任務達成の暁には、通常では望むべくもない栄進の道が開かれている。

この時代、公務員はまず官吏候補者として初期共通訓練を受け、それから志望、適性、能力等に応じて各官署に配属されることになつていた。召募といつて指名で採用されることもあれば、志願を募つて選抜することもあつた。そしてこの年度の採用はもう何度か実施されており、従つてここにいるのは、ここまで採用にからなかつた人々ということになる。なるほど室内は閑散としており、三百人ほどは入るうかという会議室にはその一割ほどの候補者達が散ら

ばつているばかりである。今年度の採用の機会はあと僅か。最後まで採用にからなければ、強制配属・・・あんまりいい職場はない。・・の運命が待っている。それを考えれば、これはまたとない絶好の機会ではあった。しかし、与えられる任務の重大性、危険性もまた途方もない模様である。会議室はしばらくの間、呼吸さえはばかられる沈黙の中に沈んだ。

と、突如一人の候補者が立ち上がった。いや、立ち上がるうとしたというべきか。その人物は勢いよく立ち上がるうとした拍子に机をひっくり返し、椅子を倒してしまい、本人も見事に転倒してみせたのだから。机や椅子が倒れ、悲鳴があがり、金属製の筆箱やノートやなんかが床に落ちたり、そこいらに転がったりする一連の騒音がおさまると、その女性が右手を挙げて立ち上がった。左手を額に当てているのは、転んだときにぶつけたのだろう。涙目のまま、彼女は申告する。

「わ、私が志願します！」

ふわふわした明るい茶色の髪の、美少女といつて何ら差し支えない容貌。しかも絶世の。たいそう幼く見えるが、候補者であるからにはそれ相応の年齢のはずである。長官が質問する。

「君は？」

「あ、あちゃひなです！　あしゃひにゃみきゅるでしゅー！」

緊張のためだかなんだか、途方もなく噛みたおしたこの候補者。「・・・大丈夫なのか？」という空気が流れたのも無理からぬことであろう。長官の受け答えがそれをはっきりと物語る。

「む、よし、君、・・・よく、志願してくれた。ええと、ほかに

は誰か・・・。」「

応じる者はない。

「君、名前をもう一度。」

「はい！ 朝比奈みくるです！」

「よろしく。それでは審査に付す。本日15時、第11上級会議室に出頭せよ。審査結果を通告する。ええと、それはそれとして、ほかには誰か・・・、「

やはり応える者はない。

「・・・以上。」

長面せまいじるもひうなだれて立ち去つた。志願があつた以上、必ず審査しなければならないのであつた。

さて、その15時。第11上級会議室に出頭すると、会議中な
で控室で待つようにとのことであつた。こうじうことは初めてでは
なかつた。志願申請する所待たされたりしてこれまで、
待たされたあげく「志願辞退通知」を渡されることが続いていた。

航空旅客運輸省

軍需省

平面路旅客運輸省

軍事輸送省

地球防衛軍

時間進行調整省の一般採用。

「平素は」高配にあずかり、厚く御礼申し上げます。また、当官署の業務にご協力をいただき、誠にありがとうございます。さてこのたびの貴殿の志願についてですが、誠に残念ながら、定員到達のため、辞退のやむなきにいたりました…」

ていのいい不合格通知というわけで、ほかに志願した役所を含め全部で13通、だいたい同じものを受け取っていた。成績は悪いほうではなかつたし、素行は善良、並外れたドジではあつたが、ここまで不採用になり続けるのは異例といえた。そんなわけで今回の志願は、まさに起死回生の、彼女なりの必死の挑戦であつた。このあと控えた採用は、工兵局、公共工事省など、体力勝負の職場が大部分。あるいは鉄道運転管理員、平面路郵便輸送管理員、国営銀行照合官、社会保障省照査官、財政省国庫査数官など、退屈さで嫌われている仕事。

いつ起じるとも知れぬ非常事態のためにブレーキボタンに手を置いていたまま延々と完全自動化電車に乗務したり、窓もない郵便護送列車になすこともなく、「監視警護」任務で長時間ひとりぼっちで添乗したり、勘定帳簿と伝票の山を相手にいつ果てるとも知れぬ書類の照合に時間を費やすことや、紙幣や硬貨の山を果てしなく査数機に供給し続ける日々など、それはそれで大事な仕事とはいえ、控えめに言つてもあまり気は進まなかつた。しかし、今回の志願に合格しているとは、残念ながら自分でも思えなかつたが。

「君。」

びっくりして飛び上がつた。ぼんやりしていたので、すぐそばに書記官が来ているのに気がつかなかつたのだった。書記官は黙つたまま封筒を差しだした。なかば諦めながら、彼女は封筒を開いた。

しかして、田に飛び込んできたのはこのような文言であった。

『任用通知書 朝比奈みくる殿 貴殿を時間進行調整省調整執行官として任用し、中級3等官の職位を与え、給与表B3：46号に準ずる俸給を支給する。』

朝比奈みくることって、世界は不思議なことだらけだった。単純に嬉しいというよりはむしろ複雑な気分。任用されたことも驚きであつたが、与えられた職位もそれに増して驚きだつた。中級3等官？何かの間違いとしか思えない。初級3等官・・・この時代の公務員のスタートライン・・・の間違いでは？しかし給与表等級の表記、B3：46が中級3等官の職位を間違いなく証明していた。・・・これは課長級に相当する地位なのである。半信半疑の、混乱した気分のまま再び封筒をあらためる。もう一枚紙があつた。

「作戦従事準備命令 時間運行調整省調整執行中級3等官朝比奈みくる殿 貴殿の参加が予定されている秘密調整作戦に従事するための準備作業にただちに着手せよ」

そりてもう一枚。

「出頭指令書」この文書を受領後ただちに時間運行調整省長官執務室に出頭せよ」

作戦従事命令2

時間進行調整省の、偉容を誇る高層のいかめしい庁舎の玄関までやつてくると、そこに、執務室にいるはずの長官が立っていた。いわく名状しがたい奇妙な表情を浮かべ、黙つてこっちを見つめる。微笑んでいるようでもあり、悲しんでいるようでもあり、あきらめているようでもあり、ためらつてしているようにも見えた。彼女は立ち止まつた。だしぬけに長官が話しあじめる。

「言つておくが、」

低い声が続く。

「普通の暮らしがしたいなら、引き返す最後のチャンスはまだ。」

長官はいつたん言葉を切つた。

「今しかない。やめるとこうなら構わないから、回れ右して立ち去つてくれてよい。こちらの都合で急遽雇用中止になつたことにしておぐ。見舞金も出そづ。支払い限度額面いっぱいでな。」

彼女はわけがわからなかつた。いつたい何が言いたいのだらう？

「重大任務なのだ。危険な任務もある。成功か失敗か。どちらかしかない。これについては部分的達成というものがりえないのだ。そして成功率はたいして高くない。」

長官は言葉を継いだ。

「だから、今、引き返すなら今しかないのだ。極秘任務もある。関わつたら、最後までやり遂げる以外道がない。」

いま、長面は庁舎玄関の石段の上、彼女は石段の下にいる。

「わあ、どうするかね。そこの石段を3段上がるか、それともやめとくか。君が決めることがだ。どちらにせよ、君の決断を尊重しよう。」

かすかなためらいがよぎった。しかし、一瞬後には彼女の心は決まっていた。白っぽい石の階段を踏みしめて登る。1段、2段、3段。

「来たか。」

長面はしづらべ沈黙し、ふいに呟いた。

「時間平面上の必然、か。」

「え・・・?」

「いや、なんでもない。」

彼女はその言葉の意味をまだ知らない。

「来たまえ。任務にあたつて当面すべきことを説明する。」

「はい。」

長面は先に立つて歩いていく。彼女はその後に続いた。

作戦従事命令3

エレベーターを7-3階まで上り、長い廊下をじばりく進むと長官執務室にたどり着く。

「ここで彼女は採用の辞令を拝命し、正式に官吏となる。」

「官吏宣誓、私こと朝日奈みくるは本日、すなわちXXXXX年X月XX日を以て時間進行調整省けりゅ・・・調整しゅ・・・執行、中級、3等官として服務すべくただいま着任いたしました。これよりは公共の福祉のま・・・ぞ、増進に寄与すべく・・・、」

型通りの宣誓の文言が続く。

「・・・ふへ・・・? 不偏不党、かつ不屈の精神をもつて、光栄なる奉仕に全力をあげて従事いたします。」

翌日から訓練教程が開始された。

この時代、訓練所や学校の様態は信じられないほど様変わりしている。

『画期的』というよりはむしろ革命的『べき』新技術、『生体IC/DO』の登場により、知識の獲得の点においては個人差はほんくなつた。要するに、ペーパーテストなら誰でも難なく100点がとれるということである。しかも全教科。期末テストもなくなつた。入試地獄もなくなつた。意味がないからだ。この時代においては、知識量はまったく問題にならず、知識を応用してどのようなことができるかが問われる。

インプットの検証からアウトプットの評価へ、といつわけだ。ある意味、よりキツイとも言えるが。

データベースに接続したヘッドセット、リクライニングシート、間接照明。

これがこの時代の教室の姿である。

彼女は数日の間、いわゆる「集中入力」を受け、任務に必要な知識のすべてを揃えた。知識の獲得だけならまことに手早い。しかし、行動はそうはいかない。したがって、その後には実践訓練教程が控えている。

「知つての通り、」

教官が口を切る。

「かの時代においては、生体IC／Dは実用化されていません。」

そんなことは想像すらできないというのが正直なところだつた。この時代、生体IC／Dはありとあらゆる場所に浸透しており、なしで暮らすことはまさに想像を絶した。

さて、物語を続ける前に、生体IC／Dとは何であるかを述べよう。

これは生体の微弱電流に直接情報を伝達させるシステムをその基礎としている。もともとこのシステムは生体・・・この場合は人体・・・の個体差によって生じるノイズが致命的欠陥とされていたのであるが、この2つとして同じものがいいノイズを個人認証の手段として逆用し、さらに認証の段階においてノイズを分離する技術の開発によって、実用化への道が一気に開けた。

例えば、あなたがちょっと買い物に出かけるとする。玄関のドア

に施錠する際、鍵はいらない。ドアについているタッチパネルを操作して、「施錠」に設定すればよい。このパネルがすでに生体IC／Dの機能をもっており、登録されている者以外の人間には操作できぬし、もし無断で開けようとした者があれば、住所氏名年齢電話番号などすべてを通報される運命が待つている。

さて、外出にあたつて、あなたは財布を持つ必要がない。
それどころか、持ち歩くものは、極端な話なにもいらない。

タッチパネルに触れる。

ただそれだけで、電車に乗ることができ、買い物ができる。本人認証と決済が連動しているわけだ。大抵の手続きは指先ひとつで終わり。

いわゆる「認証ノイズ」は偽造できず、偽装もきかない。「特定不能もしくは特定困難な複合的な要素によって個人差をもつ、生体の発する特徴的雑音波形」というのが「認証ノイズ」のおおよその定義なのであるから。

以上は生体IC／Dの「生体ID」の部分のざつとした説明である。

残りの「生体IC」の部分こそはまさに、先ほどてきた、この時代の教室の姿、「集中入力」などに直接関係のある部分である。すなわち、人間の脳髄の電気回路を大規模集積回路とみなし、直接知識の書き込みをおこなう技術。

こうして書くと、別々の2つの技術にも思えるかも知れない。しかし、この2つは実は同じ技術のもつ違う側面というだけのことなのだ。

当然欠点はあって、それは「生体IC／D基礎構造概念集積塊」

を「脳内に導入」（ヘッドセットを使うまでもなく、電極を皮膚にあて、ごく弱い電流とともに送り込む。10秒もあれば完了する。単に『施工』と称することが多い。）したが最後、削除ができないところ」とある。生体IC／Dは脳が存在する限り機能し続ける。

「この時代、生体IC／Dを『未施工』な人々は実に少ない。

「かの時代の人々は、記憶の獲得においても、本人認証の側面においても、徹底したローテクでおこなうほかありませんでした。」

「この時代にも読書家はいる。望めば本の一冊くらいあつという間に脳に直接ダウンロードできるこの時代にも、あえて目で字を追つて、一ページ一ページじっくり読み進めたい人々がいる。「趣味の読書家」というわけで、結構人数も多く、ポピュラーな趣味といってよい。また、あえてガリ勉をきどり、ローテクな勉強法を実践するする醉狂な連中もいる。こちらは言つなれば「趣味の勉強家」というわけで、どちらかというとコアな趣味に属する。

「したがつて、」

教官が続ける。

「『生体IC／D』を使用せずに生活することを身に付けねばなりません。まず、この庁舎内の訓練施設に入所して、疑似生活訓練をおこなつてもらいます。」

そう言つと教官は彼女を促してエレベーターに乗り込んだ。50階で降りてしばらく歩くと個室の並んだ一角があり、そのうちのひとつを教官が指示した。その部屋のドアにはタッチパネルがなく、彼女はいささか戸惑う。教官は小さな金属片を取り出してドアのノブの下にある出っ張りに差し込んで回した。かちり、と音がして錠がはずれる。

「これが『鍵』というもので、当時は開錠施錠の際必ず必要なものでした。今日からここがあなたの部屋です。この50階から63階までが訓練施設になっています。好きに動き回ってみて下さい。ただし、生体ECGはいっさい使えません。行動マニュアルなどの資料は部屋の中になります。それもいわゆる『印刷資料』です。さあ、訓練はもうすでに始まっていますよ。幸運を祈ります。私はこの訓練教程ではもうすることがないのでこれで。修了したと判断すればまたお目にかかります。では。」

教官はさつさと立ち去り、彼女は一人残された。部屋に入るとそこは簡素なビジネスホテルのような一室で、机の上には資料が山と積まれていた。名刺入れのようなものがその傍らにあり、中には細かい印刷のある長方形の紙と、数字などが刻印された金属の円盤が入っていた。

資料のいちばん上の一枚。

『訓練想定：現在は200X年、あなたはひとり暮らしの無職少女です。仕送りがありますから労働の必要は現在のところなし。まずは当時の生活に習熟してください。時宜により想定を変更します。マニコアルによく手を通して、不自然さが感じられないよう振る舞うこと。それでは訓練開始！！』

『『通貨の使用方法』現在ではほとんど田にする機会もなくなりましたが、当時は通貨が市中で通用していました。これは商品対価として支払うもので、紙幣と硬貨とがあります。種類は・・・』

『『携帯無線電話機の使用方法』現代の生体IC／D連動型の携帯無線電話機とは異なり、当時の電話機は・・・』

いくつか疑問が生じ、彼女は質問するために内線電話を探した。電話機は机の上に置いてある。はたと彼女の動きが止まる。何番に電話すればいい？・・・わからない。試しに教室の番号を押してみる。返ってくるのは「この番号にはおつなぎできません」とのメッセージのみ。思いつく限りの番号を押してみると結果は同じ。部屋を出て、エレベーターに乗ってみる。わかったことといえば、50階から63階までのボタン以外は押しても反応しないということだけだった。待って、教官は何て言った？・・・『修了したと判断すればまたお目にかかります。』・・・修了できなかつたら？

背筋がぞつと冷たくなる。これは思っていたよりずっと厳しい訓練なのだ。誰に質問することもできず、施設から出る手だてもなく、独力で学び取るほかはない。まさに、もう他に道がないのだ。

ボタンを押しまくったエレベーターが各階に停止し、そのたびに見慣れない風景が広がる。過去の世界の風景だ。まだ見ぬ任地の、いずれその中で暮らす世界の光景だ。・・・そう、あのとき、あたしは手をあげた。石段を登った。引き返すことなどもうできない。しつかり、やりとげなくちゃ。

部屋に戻つて、残りの資料に続けて目を通す。

「『重要・防犯対策について』かの時代にあつては、生体ICカードが存在しないことから、犯罪に巻き込まれる危険性が現代よりも高く、いかなるときでも油断は禁物です。基本的な防犯対策は常に心がけ、完全に習慣とするべきでしょう。住居には常に施錠すること。通貨を大量に持ち歩くのは避けること。・・・」

彼女は部屋のドアに施錠した。ここでは、すでに任地にあるかのようにふるまわねばならないのだから。

さて、そろそろおなかもすいてきたけれども、食事は自力で調達しなければいけない。『通貨』とやらはさいわい十分あるようなので、買つてくるか、外で食べてくるか、といふことになる。とりあえず外出。鍵をかけるのも忘れずに。

まったく知らない街で、おなかがすいて、手元に地図はなく、知り合いもない。「」丁寧にも施設の照明は落とされ、街灯が点灯して夜の雰囲気を存分に充满させている。心細いつたらない。通行人もほとんどいない。いや、この場合通行人役と言つべきか。

この施設は各階とも天井の高さ約10メートル、21世紀初頭時代の街並みが再現されている。

建物の中だとここの、「」歩き回ると妙に広く感じる。ビルや「」の階は「閑静な住宅街」という設定らしく、コンビニなどは見当たらない。

おつかなびつくりで別の階に移動し、おどおどしつつコンビニに入り、おろおろしながら品物を選び、わたわたしつつ会計をすませ、ふらふらになつて立ち去る。彼女にとつては初めての「非・生体IC／D決済」であった。

ちなみに、この時代においては、「生体IC／D決済」はもはや常識であり、現金での支払いはかえつて怪しまれるのである。

最初のうちこそ慣れずじたばたとするばかりだったが、さすがにしばらくするとそんなにあたふたすることもなくなり、余裕も

少しほどけてきた。

そうなると、「時宜により設定を変更」という文書の一節が気にかかりだす。

しかし、いつまでたっても指示はこなかつた。彼女は2週間あまり訓練施設を隅々まで歩き回り、どこになにがあるのか完全に記憶するばかりになつた。指示文書が郵便の形で少しづつ入つてしまつたが、それらは設定変更の指示ではなく、断片的な、意味のよくわからないものばかりだつた。簡単なものは『へ行け』というものから、精密な時間表通りに行動しなければならない複雑なものまでさまざまだつた。

指示通り行動したところでなにか特別のことがあるわけでもない。

たとえば『第22街区33番地民家の前へ行け』などという指示を実行しても、そこになにがあるわけでもなく、誰かが待つていてるわけでもない。

彼女は1時間、ほとんど2時間近くもそこでぼつねんと立ちつくしていたけれども、結局何もないわけがわからないまま引き上げるしかなかつた。

『実施コード』を初めて目にしたのもこの訓練中だつた。これは一見したところでは意味のわからない記号の羅列でしかないが、実は一種の暗号であり、一文字づつに付された意味、組み合わせによる意味の変化がかなり複雑なため、照合表があつたとしても読み取りは容易ではない。生体IC／IDによる書き込みによつてはじめて読み取りの鍵が得られる、というものである。

『至急・完全実施・非履行絶対不可・この指令の実施については貴官の未来が文字通りかかっているものと理解されたり・時機極限・時間厳守・やり直し不可能』

作戦従事命令5

彼女が一連の訓練を受けている「時間進行調整省」。この庁舎は奇妙な立地にある。

巨大な高層庁舎。しかし、通りに面してはいない。

L字型をした他の2つの官庁に「口」の字型に囲まれた、広く開けられた正方形の土地の中央にある。

ちなみにその片方は『国際警察公共安全保安部最高本部庁舎』、もう片方は『地球防衛軍情報局万国中央本部』である。

実のところ、「時間進行調整省」なる名前では存在意義のよくわからない巨大官庁は、『養成総局』、つまり「情報員養成機関」、ひらくいえば「スペイ学校」としての機能がその過半を占める。もちろん、こんなことは一般には知られていない。残りの機能は主に一つ。こまかい時間のねじれや歪みを調整し、また時間警察的な機能も有する『時間進行調整総局』、そして『第一作戦総局』である。この『第一作戦総局』こそはこの官庁の存在意義のまさに中核であつて、それ以外のすべては付隨的、傍系的なものに過ぎない。『第一作戦』、すなわちあるべき未来、すなわちこの未来世界のために、過去の時間において決定的な調整をおこなうための作戦、断言してしまえば、「『朝比奈みくる』を『涼宮ハルヒ』のもとに派遣する」作戦、である。この未来世界のすべては、この目立たない官庁に、ひいては『朝比奈みくる』の細い肩の上に、かかつているのだ。

『朝比奈みくる』は本名ではない。物語の便宜上、ここまで本名の「」とく表記してきたが、これは作戦のために設定された偽名である。

官吏宣誓の後のミーティングにおいて……、

「入省おめでとう。で、早速だが、君の本名は『（禁則事項）』だつたな。」

「はい、そうですが。」

「君は特別の作戦に従事してもらひうことになる。ついては、そのため別の名前を名乗つてもらわねばならん。」

「……そ、そうなんですか？」

「そうだ。本名ではまずい。」

「……そうなんですか。」

「そうだ。ついては、今、決めてもらわねばならん。早い方がいい。」

「はあ。」

「これが苗字のサンプルだ。」

分厚い本が差し出される。

「なんでもよい。自分が使いやすい名前、呼ばれて違和感のない名前を決めたまえ。」

そう言われてすぐに決められる人間はそうはいるまい。
彼女とて同じである。

しかし、考えるのに時間をとるのはなんだか気が進まなかつた。
本をぱっと開いて、田に付いたのは『朝比奈』。
なんとなく『未来』の字を読み替えて『みくる』。

「……『朝比奈みくる』でお願いします。」

「すいぶん早いが、本当にそれでいいのかね？」

「はい。」

「決定でいいんだね？」

「はい。」

「はい。」

「よろしい。では本田ただいまより君は『朝比奈みくる』だ。本名ではもう通用しないのでよくわきまえておくよ。』作戦期間中も一貫してその名前で通してもらつことになる。作戦開始までに、しっかりと自分の名前にしておくれよ。』

作戦従事命令6

「予定時間よりも早いですが、既にさもうお揃いのようすで、会議に入らせていただきます。」

時間進行調整省の会議室のひとつで、進行役が会議の開始を告げた。やつたりとしたソファが並び、高官たちが一堂に会している。

「養成のほうの意見はいかがでしょうか？」

「・・・情報員として養成しているなら、延長訓練か、不合格判定かの見切りをつけなきゃいかんレベルですな。判定会議にかけたとして、まあ間違いなく、7：3で不合格でしょう。尾行に全然気がつかないんだからお話にならない。情報員としては失格と言つていいでしょうね。」

「生活習熟については？」

「その点については問題ないとみてよいでしょう。その点についてだけは、ね。」

「不自然さは払拭されている、と。」

「まあまあでしょ。許容範囲です。」

「ありがとうございます。つぎに調整のほうの意見はいかがでしょうか？」

「時機であると考えます。」

「異論なし、と。」

「そうですね。」

「それでは当初のスケジュール通りの進行ということとで、なにか意見のあるかたは？」

答えるものはない。

「では、既定通り続行とします。閉会します。」苦労様でした。」

第一作戦総局主催の作戦進行管理会議はこつして無事終了した。作戦に支障なし、発動準備作業は予定通り進行中、というわけである。

ある朝、彼女が外出の用意をしていると、聞き慣れない音が聞こえた。なんだろうと思っているとさらにもう一度。入り口の横のインターホンから聞こえる。呼び鈴だ！ そういえば訪問者は訓練中には一人もなかつた。慌ててドアを開けると教官が立つていた。

「訓練終了。合格です。荷物をまとめなさい。」

そう言い残して、教官は立ち去つた。彼女は大慌てで荷物をまとめてかかつたが、どこに何を置いてあるかすぐには思い出せず、思い出すところどはスーツケースがないことに思い当たるといつた具合で、教官は姿を消したきり待てど暮らせど現れず、仕方がないので書き置きを残してスーツケースを買いに行き、戻ってきたきたで、あれをとろうとしてこつちをひっくり返し、これを詰め込もうとするとあつちがはみ出し、そういうしているうちにどれがどこにあつたかわからなくなり、こんどはスーツケースが一つでは足りなくなり、といったひとり大騒動が繰り広げられた。

四苦八苦の末、夕方近くまでかかったものの、どうにか荷物はできあがつた。しかし肝心の教官がいつまでたっても現れない。相変わらず電話は繋がらないし、エレベーターは指定階以外使えないまま。彼女は荷物の山の中で途方に暮れるほかはなかつた。

結局、教官が現れたのは3日後だつた。教官は部屋の中を一渡り見回し、最低限ほどくほかなかつた荷物を再び包み直している彼女に向かつて、

「ようじいでしよう。では、撤収としまじょ。」

とだけ言つた。

説明は何一つなかつた。

彼女の根深い業務に対するコンプレックスはこのあたりに端を発するのである。

情報員養成課程ではこの程度のことは珍しくもないが、彼女にとっては少なからずショックだつた。

彼女は自分がスパイ養成施設で訓練を受けていることを知らなかつたし、この官庁が事実上スパイ養成機関であることすら、相当後になるまで知らないままであつた。

作戦の都合上わざとそうしたわけだが、彼女は自分自身のいたらなさに原因があると考えたのだ。

教官の持つてきた手押し車に荷物を乗せてエレベーターの前まで来ると、別の養成課程に属しているらしい女性がそちらの教官になにごとか報告している場面に出くわした。訓練生も教官も制服を着用していたのでそれとわかつたわけである。訓練生の顔は見たことがないでもなかつた。何度か見かけただけだが、通行人役か訓練生なのあるいは教官なのか、私服では区別がつかないので。そちらの教官は訓練生の報告には何も答えず、ただ紙を一枚手渡して立ち去つた。訓練生はそれきり、銅像のよう立ち尽くしたままである。エレベーターがやってきて、動く気配もない。追い越し際、なんとなく訓練生の手元を見た。そこには『辞任勧告』とあつた。

『辞任勧告』！ 実物を目にするのはそれがはじめてであった。事実上の不合格通知である。再チャレンジの機会はないといつてよい。「不適格」と認定された場合に本人に手渡される。辞任といつても、この場合は情報員になれないだけで、公務員としての資格はそのままだ。しかし、秘密事項にふれてしまつて以上、この庁舎内で執務するほかない。飼い殺しというわけだ。事務員になれればまだよいが、清掃員や工事員もこの庁舎では自前の職員でまかなつていい。職務の性質上、業者を入れるわけにもいかないからだ。實際、そういつた人員のかなりの数が、スパイ課程の落第生で占められていた。いままさに、この訓練生にはその運命が降りかかつていたわけだつた。手に持つた紙と同じくらいに白い顔色で、泣き出すことすらできずに呆然と立ちすくむあわれな訓練生を尻目に、彼女は教官と一緒にエレベーターに乗り込んだ。この『さう』とは、彼女に強い印象を残さずにはおかなかつた。

養成総局の作成した成績表の評価。

『実効姓名朝比奈みくる・生活習熟中程度・指令実施能力良好・応用力貧困・即断適応力認められず・注意力散漫・総合判定F（失格）。情報員不適格。辞任勧告相当と認む。普通事務員への転用を推奨。』

養成総局は彼女の能力に対して、上記の「ごくじてんぱんな評価」をくだし、第一作戦総局への引き継ぎにあたつて懸念を表明した。これに対し、第一作戦総局の回答。

『誤解のないようお願ひ致します。我々が必要としているものは「朝比奈みくる」であつて、スパイではありません。どの道、彼女に代わることのできる者は誰ひとりおりません。彼女は、まさに「朝比奈みくる」であるがゆえに、我々にとつて必要であり、なくてはならぬのです。彼女の養成は長期間にわたつて我々の責任において実施されました。養成総局にお願いしましたのはいわば最後の仕上げであります。ご協力に感謝します。』

そう、事実その通りであった。ある意味、彼女の養成は彼女が生まれた瞬間からすでに始まっていたと言つても過言ではない。「好ましくない方向への分岐」は周到に削ぎ落とされた。秘密警護官が常に彼女の身辺に目を光らせ、妙な動きをする人間はすべて目立たない方法で片付けられた。一例を挙げよう。彼女が学校に通つていた頃、ある男子生徒が彼女に想いを寄せ、集中入力室の彼女の座席の上に、彼女が来る直前にラブレターを置いた。「古典的手法」というわけだ。しかし、彼が立ち去つて彼女がやつてくるまでの僅かな隙に、件のラブレターは秘密警護官が持ち去つた。そして、彼は彼女にとり、好ましくない方向への分岐を開いてしまうと判定され

た。彼の父親はその日のうちに転勤命令を受領し、家族もろとも地球の裏側への転居を余儀なくされ、あわれ、かくして彼は彼女の前から事実上永遠に姿を消した。この程度のことは枚挙に暇がない。

とにもかくにも、彼女は配属の発令を受け、第一作戦総局作戦局作戦部作戦課専従調査員として任用され、中級準2等官に昇格し、少尉の軍事称号を授与され、精勤功労章を受けられた。そして、軍情報局の群青色の制服と、時間進行調整省の青灰緑色の制服を両方交付されたが、結局どちらも袖を通す機会はついになかった。

いよいよ作戦開始前の最終工程が開始され、一通りの測定、健康診断、補充訓練などが連日行われた。

体力測定では測定対象者が彼女一人だけであるのに対しても測定員は種目ごとに最低3人はおり、その緊張もあってか、体力と運動能力のなさを遺憾なく發揮してしまった結果に終わった。すなわち、この衆人環視同然の中で、滑り、転び、よろめき、落っこち、あらぬ方向にすっ飛び、最低記録を更新してしまったわけだが、誰も何一つ言わないでの余計にいたたまれない感じだった。笑われでもしたほうがまだよかつたかも知れない。

健康診断はどうというほどのこととなかった。『文句なく健康優良。作戦従事にあたり問題なし。以上。』

補充訓練のなかには銃器の取り扱い訓練もあった。カリキュラム上、一応はやつておかなければならぬことのようであったが・・・。

「号令にあわせ、執銃姿勢より、発砲姿勢へ！　1、2、3、やめ！　右足遅い！　間隔が違う！　腰を低く！　そうだ！　もう一回！　1、2、違う！　そうではない！　・・・」

結局、発砲する以前の段階で挫折するに至った。

『銃器取り扱い資質に欠け危険なため携行禁止措置を推奨。』とのことであった。

入力で完璧な知識を身につけていても、それを実地に生かすことはときにならぬ難しい。

じつは経緯もあり、彼女のコンプレックスは悪化する一方だつた。いつ何時、『不適格！任務遂行資格なし！明日より給湯員として執務せよ！』などと言い渡されるかと恐れ、實際うなされもした。

給湯員とは要するにお茶くみの専従である。夢の中で彼女はお茶を淹れ、カステラを切り分けるのだが、どうやっても人数分に足りない。戸棚の中にはもうなにもない。お菓子が足りない。買いに行く時間もない。どうしよう・・・。決まってそこで目が覚めるのだが、あまりにリアルな夢なので目が覚めてからしばらくな乱することもしばしばだった。寝ぼけたまま大量のカステラを発注してしまい、あとで始末に困つたことすらあった。

思い悩んだ末、彼女は長官室に出頭して自分の懸念を打ち明け、不安な心境を訴えた。

「気にすることはない。」

長官が答える。

「君は養成をきちんと修了しているし、体力測定は参考データを採録しただけだし、銃器を取り扱う機会はそもそもありえない。さしあたつて不足している点は特にない。」

長官は一言葉を切った。彼女は変わらず不安なままで、じばりく沈黙が続いた。

「ああ、そうだ。」

やおら長官が何かを思い出したように言った。

「せつかく来てくれたんだから今言つておこうか。どの道そのうちに呼び出しあきやならなかつたところだ。」

そう言われて彼女は縮みあがるような思いだつた。何があるといふのだから。やはり・・・。

「中級準2等官朝比奈みくる、第一作戦総局は第一作戦の参加者として正式に君を招請する。受諾するかね？」

招請。招請？ それはつまり合格通知だ。任務遂行適格と認定されたところのことだ。

「は、はい、受諾します。」

「よろしい。それでは朝比奈みくる、あなたは第一作戦参加者として正式に認定された。命令を言い渡す。気をつけ！』『時間進行調整省第一作戦総局発令 命令第396号 作戦従事命令 中級準2等官作戦局作戦部作戦課専従調査員朝比奈みくる 命令 第一作戦に従事せよ ××××年××月××日 時間進行調整省長官

『以上。』

招請を受諾し、正式に作戦従事を命ぜられたからには、彼女のコンプレックスは解消してもよさそうなものであつたが、残念ながらそうはいかなかつた。確かに、一時的には安定し、例の「カステラの悪夢」も見なくなつたが、コンプレックスそのものが消えてなくなつたわけではなく、濶のように心の底に漂い続け、ふとした拍子に彼女の心をひどく乱し、苦しめ続けることになる。これが解消するには相当後のことだ。

しかしさしあたつて当面の心配事は一応なくなつたわけで、作戦従事に備えた集中入力と補充訓練が引き続いて連日実施された。作戦内容がここで初めて具体的な姿をとり、『涼宮ハルヒ』なる人物の観察がその主たる任務である、とのことであつたが、入力の内容ではそこまでしかわからなかつた。

そんなある日、2週間程度外出するつもりで荷物を用意せよとの命令があり、荷物を持って集合場所に行くと、一人だけで車に乗せられた。車は庁舎から出て街中を走つてゆく。そういうえばこれまで何ヶ月も庁舎内の寮室暮らしで、外へ出るのは久しぶりのことだつた。外では人々が歩き回り、当たり前の日常が、ほんの少し前まで彼女自身もその中にいた風景が、広がつていた。不意に、まったく不意に、ぱらぱらと涙がこぼれてきた。理由はわからなかつた。わからなかつたが、喻えようもなく、どうしようもなく、寂しくてしかたがなかつた。自分で、みんなから遠く、遠く離れて、ひとりに、まったくのひとりぼっちになつてしまつたような気分だつた。泣いているというような感覚ではなかつた。ただ、あふれる涙がいつまでもとまらなかつた。目的地に向かつて一路疾走する、自動制御送迎車の中で、彼女は一人きりで、ただ、涙し続けていた。誰か

が慰めの言葉でもかけてくれたなら、それこそ見も世もなく泣き崩れることができただろうに。よいかることのできる人は、今はだれもいなかつた。突然、彼女は気がついた。

ああ、そうか、そうなんだ。・・・もうすぐ私は、それこそ誰にもすがることのできないところへ行かなきやならないんだ。今この場所よりも、ずっとずっとひとりぼっちな場所に。はるかな過去の世界に。誰も、頼ることが、できない世界に。・・・がんばらなきや。がんばらなきや。こんなことで泣いてちゃいけない。しつかりしなきや。やりとげなきや。私が、自分で、選んで歩いて来た道だもの。最後まで、私が歩かなきやいけないの。・・・じらー・・・泣くな！ 朝比奈みくる！

さて、涙にくれるわたくしの朝比奈みくるが自分を奮い立たせようとひとり努力しているあいだに、物語を一旦中断して、彼女の奇妙な経歴についてもう一度みてみると。

だいたい、作戦従事命令が個人を指名して発令されると「う」とがまず奇妙極まりないことなのだ。普通この命令は組織を指名するもので、他の作業をすべて打ち切つて当該作戦に専従するよう指示するものである。すなわち、『朝比奈みくる』なる個人は、一組織、一部課、一個部隊に相当するとみられていて、ということになる。そんなバカな話が、と普通なら思つところだろうが、実に、驚くべきことに、その通りなのである。しかし、考えようによつては、そして不思議なことでもない。彼女の周囲は、生まれてこのかた、『不適切な分岐から作戦従事者を防護する』保安部隊がしっかりと固めており、これらの要員もひとしなみに作戦従事態勢にはいるといつことになるわけであるから。

彼女はいわゆる「けつこういこころのお嬢さん」であつて、基本的にお人好しで正直、こまかいことは気にかけず、お金の苦労と

は無縁に生きてきた。『個人指名の作戦従事命令』の奇妙さにも、過去の世界での活動資金の供給元にも、その資金の性質についても、彼女は一貫して無関心だった。『買いたいものはいつでもなんでも好きなだけ買える』金額が常に確保されていた活動資金。彼女は最後まで給与だと単純に信じていたが実はそうではなく、給与とはまったく別の「渡し切り資金」であった。

『朝比奈みくる』をあの『朝比奈みくる』として過去の世界に送りこむこと。これが保安部隊に課せられた警護方針であり、一貫して果たしていた役割であった。一国の軍隊がその身辺に集結しているがごとき涼宮ハルヒとは比べるべくもないが、『朝比奈みくる』の周囲にも、かなり多数の人間が集まつて、「共同の作品として彼女を仕上げ」、「その保持に日々努めている」のである。そのおかげで、彼女の人生は、複雑さがなく、女性につきもの各種の危険も遠ざけられ、その純真さを曇らせるあらゆる要素と縁遠いものであつた。

いりしている間にも、彼女の車の前方には、かなりの距離を置いてはあるものの、露払い役の偽装警備車が、後方には後衛役、上空には小型航空機、さらに上空には人工衛星が、彼女に注意を向けているのである。

第一作戦総局調整局というのがこの特殊任務にあたる部署であり、経験をつんだベテランの工作員たちが彼女の誕生から生涯の終わりまでその身辺を防護していたが、彼女が彼らに気付くことは最後までなかつた。

『調整目標』『工作対象』『暗号名「MILLEAM』『姫殿下』『お嬢様』すべて調整局の要員が彼女を指すときの符丁である。直接接觸は厳しく禁じられていた。調整局関係者で彼女に接近することが許されていた者は全期間合わせてもほんの数人である。例えば、時間進行調整省長官がその一人だ。時間進行調整省長官・第一作戦総局総監・調整局長。この3つを彼は兼務していた。ちなみに、彼女の所属する作戦局には、彼女以外誰も所属していない。局長も部長も課長もおらず、従つて、彼女は事実上、総局総監である長官の直属ということになる。今のところは。

彼女が志願に応募する以前に、一般採用で時間進行調整省を不合格になつたことは前に述べた。その当時彼女は時間進行調整省がいかなる官署であるかまったく知らず、受験日程にたまたまあつた隙間を埋めるために願書を提出したに過ぎなかつた。従つて、不合格の通知を受けても大してショックではなく、そのうちそんなことは忘れてしまつた。ともあれ、彼女はどうあっても、この採用選考に合格することはできなかつただろう。彼女の不合格理由は、一般採用の募集元の名称を記すだけで理解できよう。『時間進行調整省第

一作戦総局調整局人事部。

車は市街地を出外れ、郊外を走つてゆく。彼女は涙に疲れ果て、いつの間にか眠つてしまつていた。だから、突然窓ガラスを叩く音に驚かされて目覚めることになった。車は何かの建物の車寄せに停車しており、長官がいて、彼がガラスを叩いていた。

降りてみるとそこは、科学省基礎科学研究所数学部、俗に『数学宮殿』と呼ばれる建物であった。別名を『永久大学』ともいう。彼女はその広大な敷地の一角、『数学史料資料センター』の玄関にいた。「本日臨時休館」の看板が締め切られた自動ドアの向こうに下がつている。長官が口を切つた。

「荷物はそのまま車に積んでおいていい。ついてきなさい。」

長官は通用口から館内へ入つていく。彼女もその後に続く。入つて少し進んだところに『数学史年表』があり、数学史上の重要事件と、著名人の写真などが掲示されていた。長官がその一力所を指さす。『21世紀前半』のカテゴリーの右下、何人かの肖像写真のあいだに、見覚えのある風貌の一枚があつた。『涼宮ハルヒ教授』とある。

「知ってるね？ 聞くまでもないが。」

「はい。」

「では、これより本作戦の概要を部分的にあきらかにする。」

そう言つと長官は資料センターに付属する演習室のひとつに彼女を導き入れ、座席につくよう促した。そして紙を一枚取り出し、彼女の前に置いた。それは先ほどの数学史年表の写しであり、そこに長官は赤鉛筆で線を一本引いて、日付と時間を秒単位まで書き込んだ。『21世紀』の表記の少し後くらいの場所と日付だった。

「次元断層だ。」

唐突にそう言つた。

彼女が黙つていると、長官は続けて言つた。

「先般設立された考古学研究所の『実査部』がたいした成果を挙げられずにいるのを君は知つているか？」

彼女は知らないと答えた。

『考古学研究所実査部』については知らぬ者とてなかつた。もちろん彼女も知つていた。TPDDの実用化とほぼ同時に、鳴り物入りで設立された機関だつたから。「歴史的事件の現場に直接立ち合うことによる歴史探求事業の革命的変革」とかなんとか。しかし言われてみれば、華々しい登場からこのかた、消息を聞かなくなつているのは確かだつた。

「次元断層のせいだ。予想外のことだつた。実査部の研究員は次元断層に遮られてそこから先にどうしても行けない。この赤鉛筆の線が断層面だ。もちろん、原因の究明が行われた。その結果意外な事実が判明した。次元断層の原因である強烈な時間振動の震源を求めたところ、エネルギーの発生源の中心点、つまり時間振動痕跡の

指向性解析結果が時空四次元座標のただ一点に収束した。そこに存在していたのが誰であろう、この人物さ。」

その瞬間立体映像装置が作動し、彼女のすぐそばに女の子が登場した。等身大で目にするのはこれが初めてだった。整った顔立ちの美少女。漆黒の大きな目は睨みつけるように見開かれて星空のように輝き、一文字に結ばれた口元がまるで怒っているふうである。胸の前で腕を組んで、見るからに不機嫌そうにそつくり返っている。これが『涼宮ハルヒ』だった。

「こんな子がそんな強力な時間振動の発生源になり得るんですか？」

「普通有り得ない。普通でなくとも有り得るはずがない。まったくわけがわからないのだ。しかしこれだけははつきりしている。これは『彼女の時間振動』であり、『彼女の次元断層』なのだ。この点に疑う余地はない。」

「・・・信じられません・・・。」

「そりだらうとも。最初誰も信じなかつた。私だって信じられなかつた。途中で何か間違いが起こつたに違ひないと、測定結果を再分析し、始めてから計算をやり直し、検証し、さらにそれを再検討し、検算を繰り返した。しかし、三度その一連の作業を繰り返して、三度とも結果は同じだつた。信じるほかなかつた。」

作戦従事命令1-2

「その立体映像は次元断層発現当時のものだ。そしてこれが、」

映像が切り替わり、少し成長した姿になつた。髪は肩のあたりで切りそろえられ、実に楽しそうに笑つている。腰に手をあてて、古い型の学校制服の胸元を威勢良くそらしてふんぞり返つている。

「さつきとはずいぶんイメージが違いますね。」

「そうかね。君が関わるのはだいたいこのへんの年齢が中心になる。」

「そうなんですか。少し安心しました。さつきの映像の年齢だとちょっと苦労しそうですか？」

「そうだな。」

ふたたび映像が切り替わり、すっかり大人になつた『涼宮ハルヒ』が映し出された。白衣をまとつて手を胸の前に組み、いよいよ磨きのかかつた美貌に不敵な笑みを浮かべている。髪はふたたび長くなり、頭の後ろでくくられていた。

「結婚直前の姿といつことだ。」

スイッチが切られ、涼宮ハルヒは姿を消した。

「君の任務は、主な任務は、この涼宮ハルヒを観察すること、あらたに時間的変位を発現させないか見張ることにある。他にもあるが、まずはそれが中心だ。」

「はい。」

「君は涼宮ハルヒに一年先行して入学することになる。一年間は

訓練を兼ねる。一年目からいよいよ本務作戦開始となる、予定である。成績によつては前後する可能性がある。」

「はい。」

「何か質問は？」

「観察といふことですが、直接接觸はあるのでしょうか？」

「その予定はない。遠隔観察が主任務である。なにか変位があつた場合、即刻報告を為すこと。職務怠慢は言つまでもなく厳罰に処せられる。」

「赴任はいつになるのでしょうか？」

「所定の訓練をすべて修了してからになる。まだ少し残っている。」

「

レクチャーが終わると、ふたたび移動となつた。自動車はいなか道を進み、やがて山間部にはいり、舗装道路を外れ、でこぼこ道をしばらく走つて坂道を駆け上がり、とある建物の前で停車した。金属製のプレートが掲げられている。『地球防衛軍集中野外訓練場中央管理庁舎』。係員が二人近寄つて来て車のドアを開け、生体IC/DOの照合を求めた。彼女は差し出されたタッチパネルに指を触れる。

「照合完了。朝比奈みくるさん、訓練は明日から開始されます。荷物を持つてついてきなさい。」

彼女は簡素なビジネスホテルのような一室に通された。荷ほどきをしていると夕食をとつてくることの合成音声の自動放送が聞こえてきた。

『訓練生ならびに職員のみなさん、夕食の時間です。食堂に集合してください。本日は人員が少ないため、中食堂での配膳となります。注意願います。』

部屋のドアに貼つてあつた案内図を頼りに中食堂にたどり着いてみると少人数どころか彼女以外は人つ子ひとりおらず、彼女は「中食堂」とはいつもそれなりに広い食堂で、供食口から自動配膳されてきた食事のトレイを受け取り、落ち着かない気持ちで食事をとつた。何を食べているのかも、味も分からなかつた。周囲は静まり返つており、空調設備の動作音がどこからか低く聞こえてくるだけだつた。物音が妙に大きく聞こえる。彼女は食欲がなくなつてしまい、料理を半分以上残したままトレイを返却口に返すと逃げるよう

に食堂を立ち去つた。蛍光灯の冷たい照明に「じゅうじゅう」と照らされた廊下にも、サロンにも、ホールにも誰もおらず、事務室や受付は真っ暗だつた。玄関から外に出ようとすると、合成音声が突然警告を発したので、飛び上がるほど驚いた。

『この時間帯の外出は厳禁です。脱走ならびに强行外出は不正行為です。懲戒免職を含む処分の対象となります。あなたの生体ICカードの照合・特定はすでに完了しています。繰り返します・・・』

「！」、「じめんなさい！」

思わず謝つて自室に逃げ帰つた。

心細くて仕方なかつたが誰に相談するわけにもいかず、そもそも相談する相手がおらず、一人で悩んでいると、

『消灯時間です。おやすみなさい。』

と放送がはいり、突然真っ暗になつてしまつた。

暗闇の中でしばらく茫然としていると、やがて目が慣れてきて、窓の外が妙に明るいことに気がついた。窓に近寄つてみると、はるか遠方の山の中腹あたりからサーチライトが暗い空を探つており、ときおり点線状の光の筋が空を切り裂いて駆け上つていた。

おそらく対空防御演習でも実施しているのだろうと思われた。

してみると、まったくのひとりぼっちでもないわけだった。少なくとも、野外訓練場そのものには人がいるらしい。彼女はなんとか安心し、少しでも眠ろうと横になつた。

目が覚めるとほぼ同時に放送が入つた。ずいぶんぐつすり眠つていたようだつた。

『おはようございます。起床時間です。今日も頑張りましょう。

昨日よりもよい結果がだせるよう専心努力につけましょ。惑星の命運はあなたの双肩にかかりています。』

顔を洗つていると誰かがドアをノックした。

ドアを開けると長官が立っていた。

「おはよう。よく眠れたかね。」

「は、はい。あ、おはようございます。」

「聞けば昨日は夜一人だけだったそうだが、ずいぶん心細かつたのではないかな。」

「はい。」

「そうか。しかし今のうちに言つておくが、赴任してからは理由を告げられず、予告もなしに、突然本部との連絡がそれなくなることは珍しいことではなくなる、と聞いている。どのみち通信は厳重な制限を受けることになるらしいが、場合によつては作戦の都合上、故意に通信を遮断して『完全独立行動』にはつてもらうこともあり得るかもしない、ということだ。そうなつたら本当に、自分だけが頼りだからな。いまのうちに慣れておいたほうがいいかもしれない。そうそう、この施設にいるあいだはこれを服につけておくように。」

そう言つて取り出したのは時間進行調整省を示す青灰緑色の、情報職員の記章がはいつた職制標識バッジと少尉の階級章だった。

「君は行政将校として軍の施設に情報軍務訓練に来ているということになる。軍隊は、言つまでもなく、形式に非常に厳しいので、そうやつて行政情報将校としての資格を明示しておかねばならない。忘れていると誰何を受けたり、訓練を拒否されたりする場合があるので注意すること。」

「は、はい。気を付けます。」

そう言つと彼女は2つのバッジを服にとめた。

「よろしく。それでは10時にまた来る。」

辰巳はそう言つて立ち去つた。放送が告げる。

『朝食時間です。大食堂にて配膳します。所定の時間内に忘れず
に朝食をとつてください。』

大食堂に行くと、昨日とはうつてかわつて結構人がいた。
配膳されてきたトレイのうえにはおきまりのカーボンケーキとビ
タミンジェリー、強化飲料などがならんでいた。

カーボンケーキというのはこの時代の一般的な主食であつて、甘
味を取り除いたチーズケーキといえばイメージが伝わるだろうか。
そうたとえるのが一番近い。炭素と水と電力さえあれば簡単な設備
で非常に安価に製造できるので、いまや世界中をこの合成食品が席
巻している。少々加工の手間をかければ人工麦や人造米となる。人
造米は見た目普通の米に似ているが、よく見るとほんの少しが大
きく、形が正確なラグビーボール型なのでそれとわかる。ビタミン
ジェリーというのはカーボンケーキの添え物としてこれも一般的な
もので、名前どおり各種ビタミンが配合された食品である。ジェリ
ーとはいってもいわゆるゼリーとは違い、果肉の入つていらないジャ
ムのようなものだ。いろいろと種類があるが、製品ごとに定められ
た定量を摂取すれば一日分のビタミンが不足なく摂れるようになつ
ている。ちなみに、定量が多いほど、即ちビタミン含有量が少ない
ほど味がよいとされる。強化飲料も多種多様であるが、今日のもの
は栄養調整した乳酸菌飲料であった。

作戦従事命令15

食事を終えて部屋に戻ると、10時きっかりに長官がやつってきた。

「これより敵地適応生存訓練を実施する。」

「て、敵地、ですか？」

「この訓練場はもともとそのためのものだからな。」

「で、でも、敵地というのは、あのう・・・」

「もうすぐ君は過去の世界に赴任する。そこでの過ごし方についての総まとめだ。・・・うん、敵地というのはたしかに言いすぎかもしれない。でも、アウエイであることには間違いないからな。」

「は、はい。」

「では、行こう。」

そう言つと長官は彼女を伴つて廊下を進み、奥まつたわかりにくい場所にあるエレベーターに乗り込み、地下2階に降りた。

「階段は緊急用だ。必ずエレベーターを使用すること。」

「は、はい。」

エレベーターを降りたすぐのところで鉄扉が廊下をふさいでいた。彼女は長官に扉のタッチパネルに触れるよう促され、そうすると鍵があいた。

中に入るところは服飾品売り場のような空間だった。しかも途方もなく広い。そこにクラシックなスタイルの服が見渡す限りずらりと陳列されていた。

「これから服飾実用訓練を開始する。」

そのときまで彼女の着ていた服はいわゆる「官服」、つまり公務員用の汎用制服のようなもので、うすいベージュ色のジャンパーにエンジ色のスラックスという素っ気ない姿であった。任用の日からここまでずっと基本的にそのスタイルだった。例外は庁舎内の生活訓練所での期間だけで、その間は私服でもよかつた。でも通常ではそうもいかない。支給された正式の制服を着用するべきかと質問したこともあったが、その必要はないとのことだった。

「では、しつかり取り組みなさい。」

そう言つと長官は立ち去つた。女性教官が指示をくれだす。

「ではまず、なんでもいいので、とりあえず着替えてみてください。」

彼女は大量の衣服と対峙することになつた。

この時代の服飾は、われわれの時代のものと比べてもそう大した変化を遂げているわけでもないが、それでもやはりわれわれの目からすれば「スルドすぎる」ものがあることも事実で、差異が微妙なためにかえつて完全適応が困難という事情がある。そのためにこういった巨大施設が必要となるわけだ。ちなみにこの時代では、われわれの時代と比較すると、かえつて素肌の露出が少なくなっていることが特徴的である。やはり為政者の考えることはいつの時代も同じであつて、かなり早い年齢で導入されることになっている『社会生活倫理データ』にはかなり古い時代の道徳觀が反映されている。もちろん、生体ＩＣ／Ｄは知識を供給するだけで、個人の倫理觀を統御したりできるわけではない。しかし、知識として知つていると、いうことは、自然そのように誘導されるということも避けられない。おかげで、われわれの時代よりも世の中だけが『後退して』いる。

それで晩婚化少子化が一層進展して為政者はますます頭を抱えることなつてたりするのだが、それはまた別の話である。

なんでもいいので、と言われてもそうすぐには動けない。何せものすごい量なのだ。かえつてどこから手をつけていいのかわからない。教官のほうをうかがうと、

「慌てなくてよいです。まずは小手調べ。服飾イメージの傾向をみます。それにあわせて、訓練の方針を定めます。だから、最初はあなた自身が服の選択をせねばなりません。終わるまで待っています。」

そう言つと教官は椅子に腰掛けて待ちの姿勢にはいった。彼女は意を決して、延々と並ぶ洋服掛けの列の中に入り込む。なにせ、広大な空間に事実上独りきりなので、実に心細い。彼女はこわごわと手を伸ばし、ハンガーに掛かった服を一つ一つ見ていった。すぐにわかったのは、昔風のスタイルの服と、現代のデザインのものが無秩序に混ざっているということだった。彼女はクラシックなスタイルに思える何点かを選び出し、着替えて、教官のところに行つた。教官は彼女の姿を注意深く検分し、前後左右と斜め、計8方向から写真撮影し、特にコメントをするでもなく、次の服を選び出すよう指示した。しばらくは同じことが続いた。

「はい正面を向いて・・・姿勢を正して・・・はい、回れ、右・・・右向け、右・・・回れ、右・・・はい、半ば右向け、右・・・回れ、右・・・右向け、右・・・回れ、右・・・はいOK。次の服を選んで。」

少しすると、教官から渡された服に適当なものを合わせよと指示があつた。彼女は服の山の中を走り回り、彼女なりのベストな組み

合わせを探さなければならなかつた。服選び 着替え [写真撮影] ルーチンが続いた。続いて、教官の提示する服飾品が1品目から2品目が増えた。あるとき、教官の提示したブラウスとスカートが、色田を合わせるのがどうしても無理な組み合わせだったので彼女は素直にそう言つた。教官は特にコメントせず、別のものを出してきただけだつた。とにかく、何を着てこようが、提示された服を拒否しようが、一切コメントはなかつた。淡々と着替えと撮影の日々が続いた。

4日めあたりから突然撮影がものものしくなつた。軍情報部[写真] 部隊女子班の登場である。本式の撮影機材がだいたい円形にずらりと並び、気後れしてしまつほどだつたが、そんなことには誰一人おかまいなしで、着替えが終わると有無を言わざずその中央に押し出され、文字通り四方八方からのフラッシュの連続発光とシャッター音のただ中にさらされた。グラビア撮影でもしているのかと思つまどの勢いであつた。事実、一種のグラビア撮影ではあつた。

その前日、つまり3日めの夕方、教官は彼女を帰らせると、後片付けもそこそこに、管理庁舎の一室に仮設事務室を設けている長官のもとに出頭し、面会を求めた。長官の前に進み出ると、教官は告げた。

「朝比奈みくるの合格、教程の修了を報告いたします。」

「えらく早いじゃないか。日程は2週間のはずだが。」

「しかし、彼女はすでに完璧です。私が教えることはもうありません。この点において、彼女には明らかに天賦の才があります。」

「そんなにもか？」

「はい。私が請け合います。」

「しかしどうしたものか。日程はもう動かすわけにはいかない。」

「つきましては、お願ひがあるのですが。」

「何かな?」

「訓練用の資料写真の採録にお許しを頂きたいのです。」

「資料写真?」

「はい。彼女は見栄えもしますし、適任かと。」

「よからう。しかし、撮影は誰がするのだ?」

「写真部隊女子班に話を通してあります。」

「よし、許可する。節度をもつた撮影を心掛けること。」

「心得ております。」

つまりは、そういうことであった。彼女は後輩たちのための「写真資料のモデルに抜擢されたのである。『時間進行調整省隔時作戦要員養成資料：21世紀初頭編・資料番号第396号』。これが、事実上の彼女のグラビア写真集のタイトルである。ちなみに、次のような注意書きがついている『極秘・重要資料・持ち出し禁止・複写不可・データベース化不可・直接対面により責任貸与・使用後即返却・私室持ち込み厳禁』。

もし訓練所の資料室に立ち入る機会があれば、21世紀初頭担当予定の女性訓練生たちが5、6人集まって、この資料に真剣そのものな表情で食い入るように目を通し、仔細に検討を加えている姿を見ることができるだろう。

この「写真集はその先長きにわたって、第1級の基礎資料として重宝されることとなる。

6日め。自室で訓練場へ行く準備をしていると長官がやつてきた。
[写真部隊が非番のため、今日と明日は訓練がないとのことだった。]

「それで、本日は、一般訓練規定に従い、普通教程訓練を実施する。とはいっても、この場合はざつとした見学で終わりだ。まあ、ドライブに行くようなものだ。娯楽にしていい。ところで、準備はできているかね？」

「はい。一応は。」

「もう出れるかね？」

「大丈夫です。」

「よからう。では行こう。」

正面玄関の車寄せに出ると、黒塗りの幹部専用車が待つてあり、そばに女性の運転手がいて、彼女と長官の姿をみると直立不動の姿勢をとった。見たところまだ若いようで、時間進行調整省の青灰緑色の制服をきちんと着用している。階級章、技能章、職務章、所属記章、職制標識なども規程通りつけているようだ。彼女は、階級が自分と同じ『情報少尉』であること、時間進行調整省のいわば同僚であることと、自動車運転技能章を見分けることができただけだった。運転手の技能章のなかには、彼女が導入済みの「技能章データベース（簡易型）」の中に該当のないものがかなりあり、しかも数が多いことから、特殊技能に多く通じていることだけはわかつた。彼女は助手席につくよう促され、ドアを開けてくれた運転手の顔をふと見やつたとき、あれ、と思った。この人、見たことある。しかし、どこで見たのかは思い出せなかつた。きれいな顔立ちの女性であつたが、テレビや雑誌で見かけたわけでもなく、かといって話をしたことがある人間ではなかつた。しかし、見たような気だけ

はする。しかも何かしら印象的な場面でだ。

どうも思い出せない間に、3人を乗せた車は走り出していた。訓練に従事する兵士たちが皮肉混じりに『出世街道』と称する、訓練所の広大な敷地のど真ん中を突つ切つて伸びる観察車両用の舗装道路を、ぴかぴかに磨き上げられた電気自動車はモーターの唸りも軽やかに颯爽と進む。ところどころ戦車が横切るため舗装が荒れてはいるが、そんなことはほとんど気にならない走りっぷりである。そして車の左右には、今まさに戦闘訓練中の各部隊が展開していた。機械化高速歩兵部隊が行進し、戦車が進撃する。砲兵隊の一斉射撃が遠くからどどろき、空軍の航空編隊が空を切り裂いてゆく。・・・いずれもかなりの距離をおいてであるが。競合事故の危険を避けるため、各部隊は相当の間隔をあけて訓練しているのである。そのせいもあるて、見学する光景は一種間延びしたものであった。ときおり後部座席の長官が要点を解説したが、正直言つて彼女はよく理解できなかつた。軍事科学は苦手だつた。長官のほうでも、どうやら理解を要求してゐるわけではないらしく、だんだん説明が簡略になり、そのうちにほとんど黙つてしまつた。しばらく走ると十字路にさしかかり、交通整理担当の兵士が赤い旗を振つて停止を命じた。運転手は窓を開けて右腕を真つ直ぐ横に伸ばす。兵士は軽く頷くと、緑の旗を振つて進行を許可した。車は右折し、またしばらく走つて、管理庁舎とは別にいくつかある訓練施設のうちの一つに到着した。

「ここは軍情報部の訓練所だ。」

長官が説明する。それによると、養成訓練部隊にはD、A、B、C、Fの5部隊があり、それぞれ広報宣伝要員、エージェント、通信・放送部隊、コマンド、その他の要員を養成しているということだった。

『広報宣伝要員』については説明を要する。これは要するに『軍隊の看板娘』のことなのである。そう言つてしまつと実に暢気そつな響きだが、なかなか實際はそんなものでは済まない。なにせ、『軍隊の』『看板娘』なのだ。容姿端麗ることは言つに及ばず、普通兵科、特殊兵科の訓練教程でも成績優秀でなければならぬ。

『われわれは精銳を要求する』

養成訓練S部隊のスローガンの一つである。
こんなスローガンもある。

『不徹底とは罪悪にほかならない』

完全志願制で集められた候補生たちはただちに、徹底的な、猛烈な、途方もない訓練の日々のただ中に放りこまれる。たちまち脱落者が続出するが、そんなものは誰も意に介さない。

『ついていけない者、氣力を失つた者は直ちに申し出よ』

施設のあちこちにある貼り紙である。脱落の自由は無制限に認められており、その結果、訓練生がいなくなってしまったことも一度や二度ではない。

おりから訓練所の前庭ではS部隊の訓練中であり、一見学者にすきない彼女は、七転八倒の觀のある訓練生たちを当惑氣味に眺めていたが、ある感慨をもつてその光景を眺めている人間がもう一人いた。運転手である。運転手もまた、スターを夢見てこの過酷な訓練部隊に参加した一人であった。運転手の名は、ここでは仮に『ノゾミ』としておこう。

この訓練部隊は、「スターへの近道」として知らぬ者とてない。この時代の人間なら誰でも名前を知っている、綺羅星の「とき」大スターたちが、ほとんどみなこの部隊の出身者だという事実。実を言えば辛いのは「体力鍊成」と称する最初の3ヶ月だけで、あとは専門的な訓練に入る。ノゾミはその専門教程までを修了し、あとは「登用試験」（いわゆるオーディション）に合格するだけ、ということころまではいった。しかし、ノゾミは巡り合わせに恵まれなかつた。同期生のなかに、それこそ押しも押されもせぬ後の大スターたち、同期生だったというだけで自慢話の種になるような人々が、それもかなり、いた。ノゾミも普通なら十分登用の見込みがあつたのだが、そうそつたる面々の間にあつて震んでしまい、3回連續で受けた登用試験をいづれも落ちてしまつた。登用試験に3回不合格になつた場合、除隊することがこの部隊の鉄則である。この場合再入隊は認められず、このようにしてノゾミは、過去連綿と続く失望者たちのなかま、『スターになれなかつた人々』の仲間に加わることになつた。

その日ノゾミは3通目の不合格通知を受け取ると、意氣消沈して荷物をまとめ、S部隊部隊長のもとに出頭した。

「長らくお世話になりました。……」

「まあ、この上は仕方がない。……で、君、辞めて何するの。」

「まだ、何も。」

「軍隊の仕事で良ければ紹介するが。」

「は、・・・ありがとうございます。」

「では、C部隊人事掛まで出頭せよ。試験を受けて貰つことには

なるが。・・・では、元氣でな。」

「部隊長どのもお元氣で・・・。」

C部隊人事掛のもとに出頭すると、

「S部隊を任務解除により、C部隊試験を受験せよとのことで参りました。ホシ ノゾミであります。」

「よし。合格。」

「え？」

「合格だ。直ちに訓練に入れ。何か不満か？ 私は人事掛だ。決めるのは私だ。・・・何か質問は？」

「ございません！」

「よし。では回れ、右！ 駆け足！ C部隊長に引きあわせるー。」

ノゾミは、S部隊の訓練中、すでにある才能を開花させつつあった。それは格闘技の才能だった。S部隊では、映画や演劇で言うところのいわゆる「殺陣」の訓練を行う際、少しではあるが、格闘技の訓練を実施している。ノゾミはほんの少しのレクチャーを受けただけで格闘技の教官を圧倒するまでになり、疑いようもなく、天才ぶりを發揮してはじめていた。

さて、ここでちょっと時間をおくり。

時間進行調整省は、いよいよ間近に迫りつつあった「朝比奈みくの赴任」を前に、派遣部隊の陣容を検討した。彼女には一切知られていなかつたが、警護部隊や資金調達部隊など、かなり多数の人員が、彼女自身に前後して派遣される手はずになつていた。ところがここにきて、ちょっとした見落としが発覚した。・・・「彼女自身を、誰が連れて行くのか？」

TPDDは新任の人間には導入されない。ある程度現地、この場合「当該時間平面帯」ともいづべきか、とにかく、そこに慣れてから、ということになつていて。脱走や任務放棄への対策なのだが、これは当然彼女にも適用される。しかしそうなると、慣例の通り、「隔時交通担当者」を設けなければならない。しかし、その適任者がいない。また、警備部隊についても、万全を期して、格闘戦を担当できる人間がいたほうがよいのではないかということになつた。それで人選をしなければならなくなつたが、隠密性の高い作戦であるだけに、どうにも適當する人材が見当たらず、論議は行き詰つてしまつた。

ちなみに、警備態勢の強化には、長官の強い意向があつた。長官は朝比奈みくるの身の安全を非常に心配しており、あらゆる手を尽くして、身辺の防護を完璧にせよと厳命をくだしていた。

ノゾミはC部隊に配属されてから格闘戦の専門訓練を受け、訓練に比例してみるみるうちに腕をあげていった。そしてついに、『特定上級徒手格闘戦士』技能章を獲得するまでにいたつた。地球防衛軍全軍をあわせても、この技能章の持ち主は30人もいない。・・・。総兵員数約1億人のなかで、である。そして、訓練の仕上げとして、スペイ学校としての時間進行調整省の訓練施設に出向いた。そこには、奇妙な運命が待っていた。

そのころ、人選に詰まった時間進行調整省では、他の機関からやつてくる訓練生たちの身上書類を検討する、気の遠くなるような作業に取りかかろうとしていた。そして、まず軍情報部からとりかかると手に取つた最初の書類に、ある人事担当者はひきつけられた。滅多に見かけない、非常に珍しい技能章の保持者、ホシ ノゾミの身上書類であつた。検討の結果、彼女の資質は申し分ないもののように思われた。担当者は人事部長に有望な人材の発見を報告し、人事部長は長官に報告した。長官は自らあらためて身上書類を検討し、適任者の登場を確信した。緊急会議が招集され、そこには軍情報部の人事担当者も呼ばれた。そして、ホシ ノゾミを正式に時間進行調整省に移籍させるよう、申し入れが行われた。軍の人事担当者は首を縊に振らない。これは当然といえよう。やむを得ず、長官は最後の手段に出た。

「人事部少佐どの、この件に関するわれわれの意向は、『統監閣下』ご自身の意向であると解していただいて結構です。」

それで、すべては解決だつた。残るは、手続き上の問題だつた。正規の手続きを踏むとなると時間がかかりすぎる。「隔時交通担当

者」として養成しようとするなら、できれば今すぐにでも訓練を開始しなければならない。そこで、少々荒っぽい方法ではあるが、いつたん軍情報部から解任して、あらたに時間進行調整省に任用する方法がとられることになり、訓練中のノゾミは突如呼び出されて『辞任勧告』を突きつけることとなつた。・・・朝比奈みくるがノゾミを見かけたのはこのときである。

辞任勧告書を手にしたままノゾミはしばらく呆然としていたが、どうにか気を取り直すと、自室に戻つて荷物をまとめ、辞任勧告受諾の意を告げるために教官室に出頭した。教官はノゾミの辞任の意志を確認すると、ふと思ひ出したように「こんなことを言つた。時間進行調整省長官が、君に話があるらしい。長官執務室に行ってみてくれ。悪い話ではないということだ。

正直あまり氣の進まないところではあつたが、ノゾミは一応顔を出してみるとした。どうせ闇なのだ。その前に、さつきまでの訓練の都合上、昨日の朝から絶食でお腹が空いていたため、食事をとつてから出頭しようと食堂に入つていくと、ちょうど食事を終えて出てきた別の教官と鉢合わせ、この教官からも同じことを言われ、なるべく早く出頭したほうがいいと強く奨められた。そこで食事を後回しにする気になり、その数分後には長官の前にいた。

時間進行調整省長官はノゾミに、手続き上の都合から辞任勧告書を発行するほかなかつた事情を述べ、蒙つた精神的なショックについて謝罪し、埋め合わせを確約し、特別使命をあたえるために、ノゾミを特に呼び出したのだ、と言つた。

「われわれは君が必要としている。」

少し考えて、ノゾミの申し出を受けることとした。求職するよりは割りが良さうだったから。

「とにかく、なにか元気がないようだが、どうかしたのかね。」「はあ、昨日の朝からなにも食べて、」「すぐに食事の用意を！」「とにかく元気がないようだが、どうかしたのかね。」「はあ、昨日の朝からなにも食べて、」「すぐに食事の用意を！」

ただちにあたたかい食事が供され、ノゾミが食べ終わるのを待つて長官は言葉を継いだ。当面、表向きは長官付き運転手兼護衛の名目で任用されるが、その実、調整局の特任隔時交通担当者としての任務につかなければならぬこと、養成訓練は直ちに開始されると、任用時の給与は中級準2等官44号の給与表に準ずること、など。

当然、この措置は軍内部に反感を巻き起こした。稀有な人材を強権で掠め取つたばかりか、その人材を『運転手兼護衛』などという誰でもできるような業務に就かせるなどとは…。しかし、「『統監閣下』がこの措置を無条件追認（完全可決判断）した」という情報が入るに及んで、わきあがりかけた抗議の声はそれっきり立ち消えになつた。『統監閣下の「」意向』とあつては、もはや誰も反抗することはできなかつたのだ。ちなみに、この役職の正式名称は『国際連邦監査統監』と称する。時間進行調整省長官は、『統監代理』のひとりとして、統監の威光をもつて命令を発すことができるのだ。・・・その命令の内容に全責任を負うといつ条件付きだが。「私はそんな命令は知らない」と統監のいわゆる『完全否決判断』を受けてしまつと、最悪の場合懲戒免職の憂き日が待つてゐるし、そいつた例は実はけつこうある。

ノゾミは直ちに養成課程に入り、「隔時交通担当者」としての訓練に明け暮れた。作戦開始予定日まであまり間がなかつたために『圧縮日程』が適用され、『特勤T』の勤務指定のもと、昼夜を問わず教程が続いた。『特勤』とは、要するにいわゆる『永久勤務』であり、『随時勤務態勢に入る必要が特に認められる人員』に対して適用される。『特勤』の指定を受けている人間はいかなる場合であろうとも、昼夜の区別なく、指示があり次第、執務に入らなければならぬ。その代わり、1日24時間、『時給算定有効時間』となり、給与の支払い対象となる。単純計算で給料が三倍になる勘定だ。ちなみに特勤には数字の0から9、アルファベットのAからZまでの計36段階ある。朝比奈みくるも特勤であり、彼女の指定は『特勤B』、時給算定額は現代の価値に換算してざつと4837円に相当する。（ノゾミの『特勤T』は3522円。）あと各種手当が計算されるため、実際の支給額は単純計算よりもかなり高額になる。

高給ではあるが、代償はそれなりに高くつく。普通の人生とはこれつきりおさらばだ。『いついかなる時であろうとも、特勤勤務者は公益のために専念して従事しなければならない』のである。朝比奈みくるが特勤の勤務指定から解放されたのは一生の間のごく僅かな間に過ぎない。

しかし、だからといって彼女が自分の運命を嘆いていたかというと、その形跡は認めることができない。概して彼女は、自分の現状にあまり強い関心を抱いてはいなかつたようである。そもそもがお嬢様じみた育ちで、金銭的な苦労とは一切無縁、彼女は最初からどこかしら浮き世離れした空氣の中で育ってきた。官庁の中でも最も他と隔絶し、従つて最も浮き世離れした時間進行調整省に事實上引

きこもつた毎日は、彼女のこの傾向を一層強めた。生涯彼女は、自分の勤務態勢や、月給の正確な金額、交付されている手当の種類、税額、そういうしたものと無縁だった。一生涯、自分の銀行口座の残高を気にしたことすらなかった。彼女の口座には、常に使い切れないほどの残高が眠っていたのだから。

ノゾミはこの特勤勤務の合間に、カモフラージュ的に運転手の任務にも従事していた。そしてある日、『公用車を野外訓練場に回送せよ』との命令を受け、朝比奈みぐると対面したわけである。

昼食時間となり、長官とノゾミと彼女の3人は、小高い丘のてっぺんの木陰に自動車を止め、軍用糧食の包みを開いた。長官が言つ。

「訓練期間中3日間は軍用糧食にて過ごす規定となつてゐるため、本日より9日間、昼食を軍用糧食とすることでの要件を満たすこととする。よいかな?」

「わかりました。」

「よろしい。あと、田^一とにレベルが落ちていくので、それだけは承知しておいてもらいたい。これも訓練の一環だ。」

「え? はあ・・・わかりました。」

軍用糧食は比較的味のよいものだつたが、なにせ彼女には量が多くすぎる。四分の二くらいでもうお腹いっぱいになつてしまつた。運転手さんはと見ると、とつくりにきれいに食べ終わり、付属品の使い捨てヒーターでお湯を沸かしていた。運転手さんは彼女の分もお湯を沸かしてくれ、インスタントコーヒーをいれてくれて、ホシノゾミといいます、よろしく、と自己紹介した。彼女も名乗つた。その後、少し話したが、これといった話題はでなかつた。それにしても、彼女は、『どこかで見た人』という印象を拭いきれず、何度も直接質問しよつとして思いどまり、結局聞けずに終わってしまった。夕刻、ノゾミの公用車が走り去つていくのを見送りながら、彼女は最後まで思い出せなかつた。もつとも、ノゾミのほうでも覚えてな

どいなかつただろうが。

彼女の訓練日程はそろそろ終わるとしていた。そして昼食のレベルはどんどん下がり、具体的には塩辛く脂っこくなり、一口くらいで入らなくなつてしまつものもあつた。最後の軍用糧食の昼食は「遭難用非常糧食」であり、脱塩剤と栄養キューク、という取り合わせだつた。長官もこの毎食にはつきあつてくれた。

「Jのコップに入つてゐるのは塩水だ。脱塩剤を一錠入れたまえ。

」

錠剤を入れると細かい泡がたつて反応があつり、白い沈殿物と薄緑色の上澄みが生成した。

「白い沈殿物が口に入らないよ」と、上澄みを飲むのだ。

口をつけてはみたが、おそらくカルキ臭いしろもので、変な甘味があり、香料が鼻について飲みにくいつたらない。簡単に言えばまずいので素直にそう言つと、

「うん、まずいな。でも、以前よりもだいぶましだ。」

「前使つたことがあるんですか？」

「うん、一度遭難したからね。飛行機が海に不時着してね。以前の脱塩剤はあんまり使いよいものじゃなかつた。とにかくにおいが酷かつた。体にもよろしくなかつた。腎臓と肝臓をやられるんだ。一度使用したら2時間あけなきやいけなかつたが、なんせ海上に漂つてるとのどが渴いて仕方ない。当時の仲間の中には連用したために、まだに通院の憂き目にあつてる人間もいる。そこへいくと、この新しいタイプはそういう心配はいらないみたいだからね。」

「大変だったんですね。」

「まあね。」

栄養キュークといふのは粉っぽい巨大キャラメルといった感じのものだった。例によつて、あまり食べやすいものではなかつた。

翌日、彼女は教程修了を言い渡された。

「『』苦勞様。」

と教官。彼女はひとまずほつとした気持ちで通いなれた訓練所の衣装の山にお別れした。その日の昼食は長官の仮設事務室で、とのことだつた。事務室に出頭すると、昼食が供された。われわれの時代にはどうといふことのない、いわゆる『天ぷら定食』。しかし、彼女の前に供されてきたそれはすべて天然材料で調製されたものだつた。・・・この時代では、平均月給が吹つ飛ぶほど高価な料理である。

この時代、食料事情はわれわれの時代とは大きく異なる。ある時期、気象の変動が特に激しく、数年間にわたって、世界的に記録的な不作が続いた。その不作のニッヂはちょうど実用化されたばかりのカーボンケーキが埋めたため、餓死者などはほとんど出なかつたが、不作と相俟つて農政と農業は壊滅的な打撃を受け、穀物や野菜類、果物などは暴騰し、そのままになってしまった。ビタミン類の補給はビタミンジェリーが引き受けた。不思議なもので、この工業生産物であるカーボンケーキとビタミンジェリーは非常に相性がよい。この組み合わせはそこそこ食える。しかし、組み合わせを変えることができない。カーボンケーキはビタミンジェリー以外と組み合わせると粉っぽく、味気なくて食べたものではないし、ビタミンジェリーは妙なクセがあり、変な甘つたるさが舌に残ってしまう。唯一の例外は紅茶と組み合わせることである。この紅茶にしても、人工のものが多く出回っているのだけれど。とにかく、朝食にはカーボンケーキ、ビタミンジェリーの他に紅茶がついてくるのがセオリーだが（水と同じく、無料飲料として添えられている。）、この紅茶はビタミンジェリーを残らず摂取するために使うためのものだ。余ったビタミンジェリーは、紅茶に混せて飲み干す。それが、この時代の常識である。もはや、マナーと言つてもよい。他の食料についても、われわれの時代とは激変している。漁業などはことにそうで、気象大変動時代、漁獲量も激減した。確たる原因是遂に突き止められなかつた。なぜなら、養殖漁業は依然快調だったから。海に原因があるわけではないらしかつたが、それ以上のことは不明なままだつた。各国は考えあぐねたあげく、『国際海洋保護協定』を締結した。これは、養殖漁業や海運、海軍などに関わる人間以外が海に近づかないよう定めたもので、ここに、従来の採集漁業は壊滅し、海水浴場はすべて閉鎖され、海なるものは人々から遠ざけられ、封

鎖線の高い一重の鉄条網の向こう側できらめく、未知なる領域となつていつた。養殖以外の海産物は調査として採集されるものだけになつて当然これも暴騰し、ものによつては同重量の金塊と価格がバランスしてしまつ始末だつた。反面、あまり変わりがないものもある。肉や卵なんかが該当する。カーボンケーキとビタミンジエリーは飼料としても使えるため、この分野はあまり目立つた変化がなかつたわけだ。あと、割と大きな変化としては、添加物についての考えかたが挙げられる。食料危機からこのかた、合成保存料の添加は常識となつた。緊急に食料を、しかも広範囲、長距離にわたり、ろくな冷蔵設備もなく輸送しなければならない事態のなかでは、それはむしろ必須の対応であつたが、危機が落ち着いた後も、再びの危機を恐れるあまりそのままになつてしまつた。従つて、とにかく食べ物が腐らない。極端な話、生肉を一週間そこいらに放置しても変色もせず、ハ工すらたからないと、われわれの時代の感じとしてはいささか不気味なことになつてゐる。どちらにしてもこの時代ではもはや、「自然派」などは途方もない贅沢と化している。養殖漁業は独自の発展を遂げ、いまや自然界には存在しない魚類を主力としている。マグロそつくりの赤身をもつ、見た目大型の近海魚、通称「マグロモドキ」、品種名『TM268RY1A』などが代表格。

さて、以上のような状況のなかで、彼女には「天ぷら定食」が供せられたわけである。茄子やししどうや玉ねぎなど、この時代においてはいずれも一個あたり換算価格にして五千円はくだらない高級品。さり気なく混ざつてゐる海老天がくせもので、これも天然もの。米も味噌も醤油も天然素材。・・・月給相当の金錢が吹つ飛ぶ理由がご納得いただけることと思つ。彼女は、この見かけ上ぱつとしない超高級食におつかなびつくりで箸をつけた。・・・その感想。

「正直言つて食べ慣れないもので、おいしいとかまづいとかいう

前に、物珍しさが先に立ちます。でも、・・・あの、ありていに言つて、そんなにものすごくおいしいというわけでもなかつたような・・・。

「・・・正直でたいへんよろしい。」

彼女はその翌日、訓練場を後にして、本庁舎に帰還した。あとはノゾミの訓練修了待ちだったが、日程表が押せ押せどころか遂には食い込んでしまい、3日間ばかり、着手は延期となってしまった。

そんなある日、彼女は長官室に呼び出された。何事かと思つていると、

「国際連邦中級準2等官・時間進行調整省第一作戦総局作戦局専従調査員朝比奈みくる、隔時工作執務員養成のための写真資料提供の功により、功第2級碧星勲章授与！あわせて中級2等官に昇格とし、功績報労特別手当を支給する。」

作戦従事命令24

女性秘書が彼女の胸に青い宝石で飾られた勲章をつけてくれた。そして、質問の暇もなく、長官が口を開く。

「明日午前9時をもって、第一作戦を着手とする。こよこよ執行段階への移行だ。過去への赴任の日がやつてきたわけだ。赴任の際は、隔時交通担当者に帯同で行つてもらうことになる。注意事項を述べておく。赴任時に着用する服はこちりで用意した専用の『交通服』を使用すること。任地に到着したら、なるべく早く、任地に準備してある衣装に着替えること。あと、帰任の際もその服で帰つてくることになるので、なくせないこと。あと、赴任にあたつて荷物を用意する必要はない。すでに必要なものは任地に準備済みだ。では、隔時交通担当者を紹介する。」

ドアが開いて、ノゾミが登場した。

「彼女が、君の隔時交通担当者だ。自己紹介はいらないな。では、また後で呼び出すので、それまで自室に戻つてこるよつ。」

彼女が出てこべと、長官はノゾミ、アリサ。

「第一作戦を着手する。明0900時を以て作戦従事員を帯同のうえ赴任せよ。所定の四元座標は事前通告の通り変更なし。」

「承知いたしました。」

「さて、君の任務は隔時交通、任地生活訓練、作戦従事員警護、である。そうだな？」

「はい。承知しております。」

「主たる任務は第三のものであると心得てもらいたい。」

「はつ。」

「妨害行為、傷害行為には遠慮は無用。未遂であろうとも、直ちに徹底的な鉄拳制裁あるのみ。のみならず、その生活基盤を粉碎して、這い上がり不可能のどん底まで叩き落とすこと。常に一罰百戒の心を忘れないように。殺人以外のあらゆる措置をとることを許可する。君は秘密工作員だ。格闘家の誇りや軍人の衿持はひとまず置いて、彼女を完全防護するために、いかなる相手であろうとも、縦横無尽にその鉄拳を振るえ。いいな。」

「心得ました。」

「たとえ計画段階であろうとも、察知次第直ちに対策せよ。先手必勝。疑わしきは罰せよ。彼らに与えられるものはただ、鉄拳の嵐、破壊の暴風、没落の雨。残るものは血の海、炎の海、涙の海。生き地獄の、後悔の泥沼の中に深く沈ませよ。」

「わきまえております。」

そして、長官は厳かに告げる。

「これは、統監閣下の『意向である。事前承認済みだ。そして君には、統監代理代行の権限が付託されている。統監閣下じきじきの『指名であるとのことだ。・・・異例のことだ。』」

長官は、『統監代理代行』記章を取り出して、ノゾミに手渡した。

「統監代理代行として、存分にその職分を振るわれることを。よろしく頼む。」

作戦従事命令25

そんなふうに長官はいたさか激しい檄を飛ばしたが、はたして末来人の鉄拳制裁を喰らわされた人々はどれくらいいるのか？ 実のところ、意外なほどその数は少ない。『調整局第一作戦保衛派出部』の活動報告書は秘密文書にあたり、閲覧不可能なため正確な人数は把握し難いが、『徹底撃滅』の憂き目にあわされたのは総計でも5人くらいだといわれる。工程は1・やんわり警告（前段階警告）、2・はつきり警告（警告）、3・軽く鉄拳制裁（前段階実力行使）、4・徹底撃滅（実力行使）と段階があり、4まで到るような事例はおよそ少なかつたせいもある。『秘密工作活動威嚇戦術工程紀要』に準じて執行され、具体的にはだいたい次のごとく進行する。

第一段階（前段階警告）

通りすがりに、すれ違ひざま、あるいは背後から声がかかる。こんな具合である。

「ねえ君、めったなことを考えるものじゃありませんよ。忘れておしまいなさい。」

当然、声をかけたのが誰なのかはまったくわからない。

第一段階（警告）

夜道の暗がりで、あるいは自宅で、自分の車の中で、およそほかの人間がない、いるはずのない場所で、突如声がかかる。

「そこ、動くな。お前だ！ 振り向かずに聞け。」

「ここので振り向いたりするとしばらく動けないくらいにぶちのめされる。・・・「動くなと言つたろ？ が。え？」

「さて、手短にいゝづ。われわれは君がどこの誰で、いかなる人物で、何を考えているか知つていい。手を引け。わかるな？」

「ここのでいくつか、「秘密」が語られる。警告されてくる前のやつ、なんとしても隠しておきたい秘密。

「手を引かないとバラすよ。あと、ちょっと怪我してもいい」とになるよ。いいかな。では、ゆっくり十数える。その間そこを動くな。」

ぶちのめされて倒れている場合はもとより、無事だったとしても、すぐさま振り向いても誰もおらず、くまなくあたりを探しても人がいた痕跡すら見いだすことができない。

第二段階（前段階実力行使）

再び、誰もいないはずの場合で声がかかる。

「言つてもわからんようだから、ちょっと理解しやすこよつじてあげようかね。」

そして一方的に袋叩きにされる。だいたいにおいて、三対一くら

いの戦力比である。

「Jの段階は最終警告にあたり、あまり致命的な痛撃をくらうことない。それでも全治数ヶ月。大抵はここで思いとどまるというか、やる気をなくす。

病室にいかにも医師然とした人物が白衣など着て現れる。「丁寧に、看護師ふうの人物と一緒にだつたりする。」二三回笑いながら言うには、

「Jの次はこんなものじやすまないよ。覚えておくといい。」

「Jの誰なのは、もちろん永久にわからない。

第四段階（実力行使）

再び誰もいないはずの場所で、もう声はかからない。いきなり殴り倒され、文字通り息つく暇もなく、徹底的に叩きのめされる。体の何ヶ所にも、整復不能の破綻が残留するよう、特に念入りに行われる。まさしく『半殺し』という言葉が相応しい。もはや全快の日は来ない。松葉杖や、車椅子や、集中治療室、人工透析、長期にわたる定期的な通院、間断ない苦痛、激しい耳鳴りといったものども、生涯縁が切れてくれない人生が待つている。退院できたところで、文字通り『生活基盤が破壊』されているため、自由になる金銭は一円たりともなく、もはや帰る家すらない。

Jの一連の工程で重要な点は、『朝比奈みくる』の名を一度たりともはつきり示唆しないことである。警告の焦点をわざとぼかすこと

とによって、かえってより一層有効に警戒をなし得るという考え方である。

「」の見ようによつてはいささか不気味な未来人組織の活動については詳しく述べる機会もあるつと思われるので、いつたんこのへんで話を打ち切つておいつと思ひ。

さて、ノゾミが立ち去ると、長官は内線をかけた。彼女を呼び出すためだ。妙な注意事項つきで。

約一時間後、現れた彼女はまったくラフなスタイルだった。長官も着替えていて、同じく身軽な衣装を身につけている。長官は彼女に、「なるべく、できる限り、ラフな服装で来るよう」に。職務記章も階級章も勲章も、絶対つけてきてはいけない。およそ形式ばつたものはすべて省略のこと。いいね。」なる、謎の指示を発していた。そして現れた彼女は、下された指示に見かけ忠実に見えた。しかし、

「君、そのバッジは外したまえ。
「いけませんか？」
「君はそのバッジが何だか知つているのか？」
「いいえ。ただ、小さい頃からずっとつけていたもので。」
「それは『優等児童顕彰章』だ。たぶん、なにかで表彰されたことがあるんだろう。とりあえず、外しておきたまえ。
「わかりました。」

彼女がバッジを外すと、長官は厳かに宣告した。

「「」れより、統監閣下に面接する。」

まさしく青天の霹靂、驚天動地の展開だった。統監閣下に面接！なぜ？　どうして私が？

「なぜかはよくわからない。ただ、統監閣下は君に強い関心をもつておられるようだ。形式ばつたことをことに嫌つておられるので、面接する際にはいちいち着替えて行かなきゃならん。そこまでする必要はないのかも知れんが、なにせ無口なかただ。私的な意向を表明されることなどまずない。先回りしておいたほうが無難だ。」

「はあ。」

「あと、『統監閣下』と呼びかけちゃいかんぞ。名前で呼ぶんだ。肩書きも大嫌いらしいからな。」

「・・・はあ。」

だんだん不安になつてきた。一筋縄ではいかなさそうだ。長官はそんな彼女の懸念を知つてか知らずか、

「よし、では、行こう。」つづだ。」

「というと、先に立つてさつさと歩き出していた。彼女も慌ててその後に続いた。

ふたりはエレベーターに乗り、廊下を歩き、渡り廊下を通り抜け、通路を左に三回曲がって、ふたたび渡り廊下にさしかかった。明るく日光の差し込む渡り廊下の突き当たりに銘板の掲げられた入り口があつた。

『国際連邦全国監査統監

国際連邦人事総局特別解任第一局局長

国際警察公務員経済事犯特別捜査本部本部長上席代理

図書館省上級長官

図書流通庁特別長官

図書審査庁上席長官代理

全国司書協会名誉会長

・・・

各種役職がずらすらと並び、最後に『合同執務庁舎』とある。変な取り合せもあつたものだ。中に入ると左右がガラス張りの執務室で、大勢の人たちが仕事をしていた。ありとあらゆる不正行為、贈収賄、違法蓄財、脱税などが暴きたてられ、相応しい処分命令が発せられる、泣く子も黙る法廷機関、それがこの合同庁舎の一面であり、その頂点に位置する者こそ、国際連邦監査統監なのである。ちなみに、処分には一通りある。「内聞措置」と「公的懲戒」である。「内聞措置」の場合、退職願いの提出と、退職金の一部分あるいは全額の辞退を申し出る文書の提出を求められる。辞退額あるいは率はたいていの場合予め決められている。言われる通りに提出すれば、不正行為に関しては文字通り「内聞」となり、それ以上罪に

問われることはない。この「内闇措置」を断つたり、悪質性が特に高いと判断される場合、「公的懲戒」ということになる。こちらの手法はいろいろあるが、刑事告発と懲戒免職がまずスタートラインとなる。残りの側面について要約するならば、『全ての書籍の支配者』といふことになる。くれぐれも間違えないでもらいたいが、これは検閲機関ではない。流通と所在とを総覧する機関である。この官庁に問い合わせれば、いかなる書籍であろうとも、この世に存在する限り、即座に発見し、手元に取り寄せることができるのだ。読者家にはまことにありがたい役所といえよう。

さて、この時代、政府機関は、『じく一部にしか知られていないことではあるが、二重構造になつていて』。まずは通常の政府機関。そして、高級官員や行政将官（われわれの時代でいえば政治家）にある。厳密には異なるが、最も近い概念）たちだけが知つていて、『上級政府』とでもいすべきもの。この組織には正式な名称がなく、『上局』『中央』『あちらのほう』『最上層部』『上』などと符丁で呼ばれている。いささか古めかしい言い方としては、『党中央』『核心』などといつものがある。彼女が今から訪問しようとしている『監査統監』は、疑いもなく、『上局』の一員、謎の人物なのだ。この『上局』なる組織、無論なんらの不満なく存立しているわけではない。あまりにも秘密のベル奥深くに立てこもつたこの『秘密政府』を批評しようという試みは過去連綿と行われてきた。そして、そのたびに失敗してきた。『上局』の失敗をあげつらおうにも、『上局』はそもそも失敗したことといふことは一度もなかつたのだから。『上局』の批判者全員が、『上局』の無謬性を嫌というほど悟らされて、無力感とともに挫折していった。過去一度たりとも誤りを犯したことがない組織。これは優秀というよりはむしろ、はてしなく不気味なものだ。政策も行政も完璧に進行し、世界中のありとあらゆるものごとを総覽、指導し、修正し、牽制し、懲罰する。普通の政府機関は文字通り手足に過ぎず、まさに頭脳にあたるもの、

それが『上局』である。

彼女は質問する。

「統監閣下は、『上局』のかたということになるのですか？」

「そうだ。」

それを聞いて、彼女は不安になつた。長官のどこか落ち着かない様子も、不安を増大させた。

彼女は『上局』にあまりいい思い出がなかつた。

ずっと小さい頃、『上局審判』という、要するに公開法廷のような大きな会合に連れて行きたくはなかつたことがあつた。両親はこんな会合に幼い娘を連れて行きたくなかったのだが、使用人たちも全員参加するため家が空っぽになつてしまい、彼女ひとり残しておくのは不安だったので、やむを得ず連れてくるほかなかつた。会合は大きな広場で開かれ、会合というよりは集会といったほうがいいほど、たくさんの人間が集まつていた。両親の周囲には同僚である高級官員の面々があつまり、低い声の不安げな会話が交わされていた。ある一人の発した言葉が彼女の耳に残つた。『タシカニヒドイジケンダケド、ジョウキヨクガチヨクセツシンパンナンテフツウジャナイ。（確かにひどい事件だけど、上局が直接審判なんて普通じゃない。）』
『彼女はかなりあとまで内容が理解できなかつたが、『ジョウキヨク』という耳慣れない言葉は、会話の不安な雰囲気とともに、彼女にどこかまがまがしい印象を残した。やがてざわめきが急に收まり、裁判長（正確には審判長）が登壇し、裁判が始まつた。しかし、正確にはそれは裁判ではなかつた。すでに確定判決は用意されていたのだから。それは判決言い渡し大会ともいうべきものだつた。』

判決文が朗読されたが、それは見事なまでのお役所的名文というやつで、彼女には最初から最後まで一言も理解できなかつた。しかし、非難のトーンだけは伝わってきた。彼女はふと気が付いた。裁判長の演壇、ビルの5階から張り出しでしつらえてあるバルコニーの正面、少し低い位置に、がつしりした石造りの、階段のついた櫓があり、一人の人物がその上に立つていた。判決はどうやらその人物に言い渡されているらしい。彼女のいる場所は演壇からかなり離れており、遠目でよく見えなかつた。裁判長がどんな人物なのかもよく見えなかつた。ただ、スピーカーから聞こえる声で、女性で、しかもかなり若いことはわかつた。非難のトーンはますます高まり、声の調子も上がつてゆく。文章が結論に向けてなだれこんでゆく。

「ヒコクニンノザイジョウハアマリニアクラツデアリ、ハンジョウハキワメテレツアク、ジョウジヨウノヨチハイツサイミトメラレナイ。カカルゴクアクノハンザイニンニタイシ、ワレワレハモハヤ、ソノセイゾンニドウイスルコトハイツサイフカノウデアルトイウケツロソニサケルコトハデキナイ。ヨツテ・・・」

そのとき、薄曇りだつた空がにわかに暗くなり、ごろごろとひくく、雷鳴が響いた。ラウドスピーカーが判決を告げる。いつそ晴れやかといいたいような、明朗な声が響きわたる。

「人民革命党の名において、死刑に処す！」

その瞬間、途方もない閃光がひらめき、爆発音にも似た大音響が轟いた。落雷だつた。石造りの櫓の上の人物めがけ、真っ逆さまに稻妻が襲いかかつた。即死だつた。静まり返つた民衆に、ラウドスピーカーが打つて変わつた冷静な声で、集会の終了、退場の際の注意事項、かかる犯罪の内容を記述したパンフレットの配布についてなどを告げ、「ご苦労様でした。皆さん気をつけてお帰りください。

ご協力に感謝いたします。」

金縛りにあつたように、人々は会場を後にしていった。子どもたちですら、例外でなかつた。誰もが押し黙り、列をなして、黙々と帰つていつた。誰しも何の感想も述べず、何らの批評の声も出なかつた。恐ろしい重圧が、人々を完全に征服していた。

以上が、『上局』に関しての彼女の原体験である。

『人民革命党』！

その名が人々に聞かれるることは、その『上局審判』以降、ほんのしばらくの間だった。このあとまもなく「最後の独立国」が降伏し、世界平定の立役者として隆盛を誇つた人民革命党は「所期の目的は達成された」として電撃的に解党、表舞台から姿を消してしまう。

『かねてより進行中の人民革命党綱領事業「世界平定事業」はこのほど達成された。従つて、党綱領規定編第111条（党綱領事業の達成による解党）に則り、人民革命党を解党する。』

然り、人民革命党は解党した。しかし、人民革命党の核心、司令部ともいいうべき部分、すでに相当以前から『上局』と呼ばれていた組織は党がなくなつてもそのまま残つた。もともと、『上局』には党の組織はそれほど必要なものでもなく、むしろ党の存在によつてその実在が浮き彫りになつてしまつたため、密行をこととする『上局』にとつては、いまや党はよけいなお荷物ともいえた。そして党は消え失せ、『上局』は何不自由なく、誰ばばかることなく、世界の裏側、時代の深層、秘密主義の海へと潜行していく。『上局』の命令は絶対であり、生殺与奪の権を完全に手中に収めていた。この時代、『上局』が、文字通り世界の支配者だった。かといって、『上局』は無慈悲な主人ではなかつた。でなければ、「世界平定事業」に成就の日は来なかつただろう。

『上局』の支配は巧妙だつた。彼らは、民衆の好意を得ること、畏怖させることを絶妙なバランスで実行し、支持を確固たるものにしていった。まずは『人民革命党』に、そして『国際連邦中央政府』

に。『上局』は自身に支持を集めることは決してせず、常にその執行機関に民衆の耳目を集中させていた。

『上局』の指令は常に理にかない、執行官は安心して職務を遂行できた。『上局』に不満を感じる人間ももちろんいたが、彼らにしても、『上局』よりもうまくやれるか、と言われば、それには反論しかねた。結果として、こうした消極的な支持の積み重ねも、『上局』の盤石の基盤を構成する一部となつてゆくのだ。

彼女の質問は続く。

「統監閣下に会つたことはあるんですか？」

「何度がある。」

長官は神経質そうに手の指を動かしながら答える。彼女は、長官もまた、緊張しているのだと悟った。2人は事務室を通り過ぎ、廊下の突き当たりの扉から中に入った。

「「」は統監閣下の専用の事務室だ。」

長官が小声で彼女に言つ。そこはまるで書庫だった。ずらりと並んだ本棚に、本がぎっしり詰まっている。天井が非常に高く、本棚も天井までの高さがあり、図書取り出し用のスライド式の梯子がそこにあつた。この時代の図書館の標準装備である、全自动図書取り出し装置もあるにはあつたが、作動してはいなかつた。

「統監閣下はこれらの本のうちのかなりに実際に目を通されたといふことだ。」

彼女はにわかには信じがたかつた。見渡しただけでも何千冊もありそうだといふのに。

「管理担当の事務員に挨拶してくるから、先に行っているよう。」

「

長官は本棚の間の通路を指差し、傍らの小さな階段を降りて姿を消した。彼女はおつかなびっくり歩きだす。しん、と静まり返つて、物音ひとつしない。しばらく歩くと、窓際の一角にとつてある広めのスペースにてた。大きな執務机や、立派な応接セットがある。本が何十冊か、乱雑にそこらに積み上げてある。片隅に、ひどく旧式の折りたたみ机が2つ。図書の保護のために掛けまわされている厚いカーテンがそこだけ開かれており、日光が明るく差し込んでいる。ふと、彼女は気が付く。窓際に人影をみとめる。人形にも見えるその人影は、しかし確かに人間だった。応接セットのふかふかのソファや、執務机の革張りの立派な椅子など、座りよさそうなものがほ

かにあるのに、その人物はおそらく旧式の、座り心地の悪そうな折りたたみパイプ椅子に腰掛け、何かの書物に熱心に目を通してい。その姿は、その場に似つかわしくないことはなはだしかつた。それは小柄な少女だったのだから。彼女は、「統監閣下の娘さんかな?」と思い、近寄つて、讀んでいる本を覗きこみ、尋ねた。

「何の本を讀んでるんですか?」

返事はない。

「本、おもしろいですか?」

なお、返事はない。彼女はいたたまれなくなつてきたが、このまま会話を打ち切るのも気が引け、なんというか、引っ込みのつかないまま、質問を続ける。

「統監閣下の娘さんですか?」

その時長官が現れ、ひどく慌てた身振りで彼女を呼び寄せた。彼女は小声で長官に尋ねた。

「なんだかちょっと、なんというか、風変わりな子がいますけれど、統監閣下の娘さんでしょうか?」

「な、何を言つてるんだ! あのかたが統監閣下! 本人だよ! ! !」

「ええつー?」

長官の答えと彼女の驚愕はかなりの大声になり、2人は同時に、しまつた、という表情を浮かべた。彼女は『統監閣下』のほうを見る。と、目が合つた。いつの間にか、『統監閣下』もこちらを見て

いたのだ。彼女は、慄然とした。こちらを眺めている瞳の深さは、彼女が知っているいかなる人間にも比較できない、恐るべき深遠さをたえていた。この瞳の前には何者をも逃げ隠れできないと思わせた。それはまさに、限りなく透き通った、深すぎて見通せない、深淵だった。彼女は直感した。『このひとは普通の人間じゃない。かつての原体験が蘇る。・・・』

「人民革命党の名において、死刑に処す！」・・・落雷・・・沈黙の群集・・・「ジヨウキヨク」・・・。彼女は全身が総毛立ち、体ががたがた震えだした。彼女は恐ろしかつた。泣き出すこともできなくらいだつた。ふたたび、集会後に感じたあの重圧感が蘇つてきた。長官が彼女を紹介する。

「彼女が、朝比奈みくるです。」

彼女は挨拶しようとしたが、口の中がからからで言葉が出なかつた。と、いつの間に移動したのか、統監閣下が目の前にいる。彼女の緊張は最高潮に達した。しかし、統監閣下は意外にも彼女を咎めることなく、「怖がる必要はない。」と言い、手振りで椅子にかけるよう促した。彼女と長官が応接用のソファに座ると、どこからともなく使用人が現れ、お茶とケーキを供した。彼女はケーキには手をつけられず、ほんの少しお茶に口をつけることができただけだつた。長官が統監閣下に何事か説明し、会見は十分あまりで終わつた。帰りがけ、彼女はぎくしゃくしながら、統監閣下に別れの挨拶をした。統監閣下は右手を差し出した。彼女は最初、意図が理解できなかつたが、長官が「握手！」と小声で言い、彼女は慌てて差し出された手を握つた。小さな、冷たい手だつた。統監閣下は一言、「よろしく。」と言い、2人は引き下がつた。

渡り廊下のところまで戻つてくると長官が言った。

「ほんなん危なっかしい余見は初めてだ！」

しかしその言葉は非難ではなく、安堵の色があった。長官による
と、今日の統監閣下はまだ動きがあるほうで、最初から最後まで無
視されてくるような気分にせせらげる」とも珍しくない、とのこと
だった。

「といひで、」

長面は彼女に問う。

「どう思つた？」

「何がですか？」

「統監閣下や。どいつの印象を受けた？ 正直などといふを聞いつけないか。」

彼女は、言葉を選びながら答える。

「・・・普通の人間ではないな、とは思いました。」

「その印象は正しい。」

長面は言葉を継いだ。

「統監閣下に初めてお会い通りかなつたのは20年ぶりに前の「」と
だ。」

彼女は奇妙に感じた。計算が合わない。統監閣下はどう見ても十
代半ばより上には見えなかつた。

「先代の統監閣下といつことですか？」

「国際連邦監査統監の職名を戴くのは後にも先にもあるお方ただ
お一人だけだ。」

ためらひよつて言葉を切り、迷つよつてまづり黙つたのち、長

官はふたたび続ける。

「」の際、信じようが信じまいが、私が確かに経験したことだから聞いておいてもらおう。いいかね、20年前、ある事情で、自宅に統監閣下おん自らのご訪問を賜つたことがある。の方は当時はまだ監査統監ではなかつた。『人民革命党最上級委員長』だつた。これは人民革命党の最高指導機関、『最上級委員会』の長ということで、はつきりいえば、当時としては、『世界最高の地位』にある。まあそれはいいとして、とにかく、統監閣下は20年前と少しもお姿にお変わりがない。恐らく、統監閣下はおとしを召されるということとは無縁の存在なのだ。」

「・・・それは、あの、人間とは、その、」
「統監閣下は人間ではない。」

「え？　え？　それは、」

「聞いたところによると、『宇宙人』だということだ。その真偽はいかにせよ、少なくとも、この20年間、統監閣下は年をとっていない。それだけは確言できる。つまり、それ以前の歳月においても、ずっと同じお姿であられただる」と容易に推測できるわけだ。」

「・・・信じられません・・・。」

「『上局』の人々は全く年をとらないといわれている。おそらくは、『上局』の構成員は全員、『宇宙人』なのだ。」

「それは・・・、」

「我々人類は、今や得体の知れない『宇宙人』たちに支配されているというわけだ。昔の映画なら、間違いなく宇宙人のほうが悪役だな。圧政をしいて人々を苦しめる役どころだ。ところがだ、しかして君、この世界はどうかね？　住み心地はいかがかな？」

「・・・正直なところ、とりたてて何の不満もありません。平和で、快適で、心安らかで・・・。」

「だろう。なんとも奇妙なことなんだよ。こんな状況だから、一

概に宇宙人たちは悪役とも言い切れないわけだ。

』

「上局の人たちは、まるで魔法使いみたいだと思わされたことはあります。」

そして彼女は、原体験の『審判大会』について話した。長官答えています。

「その大会なら参加していたよ。かなり前の方にいたがね。社会整理局主催の審判大会か。雷の他にも、隕石なんかが処刑に使われていたな。なるほど、確かに魔法的ではあるな。しかもあまりありがたくない種類の。・・・悪い、宇宙人の、魔法使い、か。」

長官はしばらく黙つていたが、ふと口を開いた。

「あまり、いい気分はしないだろう。われわれ人類は小僧扱い同然の有り様だからな。当然、不愉快な感想をいだく人間は多い。抵抗組織も、しかも複数、あるはある。が、はかばかしい成果はあげられていない。というか、どこも手詰まりなんだ。『上局』はね、なんせ完璧なんだ。文字通り。相手が悪すぎるよ。・・・僕は若い頃、『世界平定』の理想に憧れて、人民革命党に参加した。一心に活動し、出世して、党の資料室を任せられた。調べてみて驚いたよ。創党前の下準備に百年以上かけてるんだ。盤石の基盤の上に党を打ちたてるために。時間の余裕ひとつからして、僕らただの人間じゃ太刀打ちできない。できるとも思えない。いわば、宇宙人たちが僕らを支配しようと決めた瞬間には、事実上、僕らの運命は決まつていたんだ。」

長官はふたたび黙つた。彼女はふと、気になり、質問した。

「社会整理局つて、何ですか？」

「知らないのか。・・・うん、知らないほうがいい。」

長官はそれだけ言つと、医務室に行くように、と言い残して立ち去つた。言われたとおり出頭すると、ノゾミと、医務官の女医が待つていた。

「これより、『禁則事項ツール』の導入を行います。」

医務官はそう言つと、彼女にヘッドセットを着けるよう促した。彼女が装着すると、医務官は手元の操作卓のボタンをひとつ押した。5秒と経たないうちにブザーが鳴つて導入完了を告げた。これはまさしく強力な催眠暗示に相当するもので、禁則事項に該当する事項に対しても定型的な返答（『禁則事項です。』）か、あるいは発声不能となるものだ。次は導入試験を行うことになる。『ナルコ・インタービュー』といわれる技法を応用する。眠剤を用意し、ゆっくりと皮下注射しながら十から逆に数を数えさせる。声が微かになつたところで一旦注射を打ち切つて質問表試験を開始する。抑圧が緩解しているこの状態で、禁則事項ツールが正確に動作しているかを確認するわけだ。試験結果は『良好・動作正常』であった。試験が終了したら、残りの眠剤を注射して眠らせてしまう。試験の記憶は本人には残らない。ところが、ここでちょっととした問題が起つた。彼女が目覚めないのである。ショックでも起こしたかと皆が心配し、診察が行われたが、結論は『眠剤の効きすぎ』であった。結局彼女は翌朝7時過ぎまで眠つていた。長官は彼女を朝食に招待するつもりだつたらしいが、時間が足りなくなつて、お流れになつてしまつた。

「このひとはお酒を飲むのかな？」

「いいえ。」

「だらうと思つた。飲まないほうがいいね。確実に物凄く弱いぞ。」

そんな会話を耳にしながら彼女が田覚めると、すでに出発の僅か2時間前だった。長官が枕元にて、完全に田が覚めたら、人員管理官の執務席まで出頭して点呼を受け、そこで交通服を受領して直ちに着替え、長官室に来るよう」と、矢継ぎ早に告げた。

「いまいましい眠剤のせいで時間が押してるんだ。済まないが、なるべく急いでくれると有り難い。」

長官が立ち去ると彼女はまだ少しうつつきながらも起き上がり、ノゾミに付き添われて人員管理官のもとに出頭した。人員管理官は彼女に参加する作戦の名称と、氏名を述べよう求めた。

「第一作戦に参加いたします、朝比奈みくるです。」

「第一作戦、朝比奈みくる、確認・・・よし。では、とりあえず挨拶を交わしましょう。礼！」

二人は互いにお辞儀した。本来ならば彼女は敬礼すべきなのだが、なぜか彼女は、一度として敬礼を求められず、それどころか、『敬礼を受けてもお辞儀で返すように』と指導されていたのだった。人員管理官が引き継ぎ事項を述べる。

「特に変わったことはございません。」

人員管理官は点呼確認簿に彼女のサインを求め、彼女はサインした。交通服が交付され、人員管理官はお決まりの挨拶で彼女を送り出す。

「お気をつけて行つてらっしゃいまし。」

彼女は自室にとつて返し、交通服の包みを開いた。中から出てきたのは、どこかで見たような旧式の学校制服だった。どこで見かけたのか考えているひまはなかった。彼女はできる限り急いで着替え、ふたたびノゾミに付き添われて、長官室へ急いだ。ノゾミによると、材質や縫製が当時とは異なるため、平常での使用は厳禁されるのだとこうことだつた。8時40分を過ぎたころ、二人はようやく長官

室にたどり着いた。

「いよいよだね。」

「はい。」

「緊張しているかね。」

「はい。」

「無理なことだ。ま、しばらくはノゾミ君が指導についてくれるから、言うことをよく聞いて、しつかり取り組みたまえ。・・・ノゾミ君、・・・どうか、よろしく頼む。」

「承知しました。」

長官は、なんだかとても寂しそうに見えた。まだまだ言い足りないことがたくさんあるような様子だった。しかしあつ、時間が許さなかつた。時計はもうすぐ、9時ちょうどを指そうとしていた。長官は右手を軽く上げ、

「もう、時間だ・・・。じゃあ、いつまでもお元気で。どうぞ、末永く、お達者で。」

この、なんとなく年寄りじみた挨拶が、この時代の、長旅の別れの挨拶なのだ。

「わよなら。」

別れを告げる長官を後に残し、2人は航時機室へと急いだ。

さて、ここで注意せねばならないのは、『航時機に乗る』という言葉は実際に航時機なる乗り物に乗ることを意味していないということである。これは慣用表現であり、時間移動を、ことにその人にとつての最初の時間移動のことを指す。TPDは当初から『無形

で脳内に格納』という形式をとつていた。『航時機』なるものは一応存在はしていたが、それは時間移動者を保護するための、ただの箱も同然の乗り物に過ぎず、すぐに使われなくなつた。いまや慣用表現の中にその名を残すのみである。

二人はかつての時代そのまま、『航時機室』なる名前がそのままになっている、当の航時機はとつぐの昔に取り除けられてがらんどうの、かなり広い、天井の高い一室にやつてきた。そして、いつたん、付属の、これもかなり広い、控え室に入った。そこには、デジタル時計がずらりと並んでいた。これは『基準点時計』といわれるもので、時間移動者の帰着すべき時間を表示するものだ。『二重時間生活』に陥つて歳をとりすぎたり、『生活時間欠落』で不自然に若いままだつたりすることを防止するためのものである。ノゾミは一面に並んだ時計のなかからひとつ、動作していいものを探し出し、彼女に、タッチパネルに触れるよう促した。すると、装置の表示部に『朝比奈みくる』と表示があらわれ、デジタル時計が点灯して作動を開始した。

「さあ、これで準備はすっかり整いました。」

ノゾミは言い、一人は『航時機室』に戻つた。そしてノゾミは彼女に椅子に座るよう促し、内線電話で管理室に短く通報した。

「航時機室使用中。第一作戦出発。」

TPDDは時間移動者自身以外の人目があると動作しない。これは『マクロな観測問題』といわれるもので、まだ原因は解明されていない。とりあえず、誰かがふいに入つてきたりすると動作不良を起こすため、この通告で10分間、『航時機室』を封鎖するわけである。この部屋の鍵は管理室で操作するようになつていて。

「管理室了解。」

返答と同時にかちりと音がして施錠が完了し、ドアの上にある緑の表示灯が点灯した。ノゾミは座っている彼女に歩み寄り、静かに肩に手を乗せた。

「呼吸を整えて、静かに・・・。」

「は、はい。」

彼女は高ぶりぎみの気持ちを抑えようと努力する。いよいよその日その時がやつてきた。

「では、参ります。」

作戦従事命令34

「田を開じて・・・。」

彼女はぎゅっと田をつむる。ややあって、奇妙な加速感がやつてきた。上に向かって転落しているような、平衡感覚が狂いそうな感覚。肩にしつかりと乗せられたノゾミの手が頬もしかつた。しばらくすると、ふわりと暖かい空気が体を包み、彼女は再び、椅子に腰かけていた。

「20XX年12月23日。9時ちょうど・・・。任地に到着です。」

ノゾミが静かに告げる。ついにやつてきた。静かに田を開けると、そこは住宅の一室だった。暖房がほどよく効いている。室内はきれいに片付けられている。

「ここはあなたの家です。さあ、まずは着替えて下さい。交通服は他の服と間違えないようにしまっておくこと。」

彼女は衣装戸棚から服を見繕つて着替え、交通服を隅のほうにしまい込んだ。ノゾミが言つた。

「まずは食事にしましょ。」

階下に・・・到着したのは2階の部屋だった・・・降りると、すでに整えられた食卓が待っていた。

「わあ、食事にしましょ。私たちの時代なら半年分の給料に相

当する食卓ですよ。まあ、この時代なら月給の六分の一といつともうですけれども。」

それにしてもす」と駆走であることだけは分かったが、見慣れないもののが多かつた。特に、緑色が目をひいた。彼女の時代では、食卓に緑色はとても少ない。

「野菜が高いのですか？」

「いいえ。この時代ではむしろ肉のほうが高価なのです。」

言いながら、ノゾミは快調に食事を頬張っていた。彼女の方はといつと、そんなにたくさん食べるほうではない。むしろ小食だった。あちこちのお皿から少しづつ取り分けでは食べていたが、すぐにお腹がいっぱいになってしまった。肉類は彼女の時代ではむしろ豊富に出回っていたが、野菜、魚介類、穀類などは初めて口にするものも多かつた。味覚も食感も慣れないものがたくさんあった。ノゾミは彼女にもつと食べるよう勧めたが、もう完全に満腹だった。

「小食なんですね。じゃあ、私がいただいてもいいですか？」
「どうぞ。」

ノゾミはあつとこづ間にほとんどの皿をからにしてしまって、

「ふう、わすがに食べすぎましたかね。」

などと言いながら、大きな肉の塊を、ビールのフィルムをかぶせて、白い大きな箱に片付けた。

「これが冷蔵庫です。話には聞いたことがあるでしょう。」

食事が済むと、ノゾミはお茶を淹ってくれた。彼女はスマートなノゾミの体のどこにあんな大量の食料品がおさまったのか、むしろ純粋に不思議だった。ノゾミは彼女の不思議そうな眼差しには頓着せず、ミーティングの開始を宣した。

「さて、いよいよ任務開始です。しばらくの間は私がいつしょにおります。まずは現地生活習熟訓練から開始します。しばらくの間、特に実質上の使命はありませんから、そのうちにこの時代に十分なじむことが肝要です。」

この後しばらくは訓練の日々が続いた。ただ、訓練とはいっても、傍目には友達一人、呑気に出歩いているようにしか見えなかつたことだろう。風景に、生活に、習慣になじむこと。まずはそれが第一である。一方、彼女は驚かされ、不思議な気分を味わわされていた。彼女の歩く家の周りの街並みは、時間進行調整省の訓練施設そのままだつたのだから。彼女は、これを偶然と考えた。モデルがたまたま同じだつたのだ、と。因果関係の転倒に、彼女は生涯気が付かない。すなわち、たまたま偶然彼女の任地がモデルに選定されたわけではなく、彼女の任地を訓練施設のモデルにすることのほうが、あらかじめ決まっていて、共用の訓練所として運用されていることがむしろついでなのである、という事実に。さて、そんな日々のうちに、懸念されていた事態が発生した。すなわち、ノゾミの出番が到来したのである。

事態は次の「こと」が発生した。ある日の夜、外出から帰つてきた二人を5人組の不良が取り囮んだ。ここ何日か、一人の自宅を探つていた連中であることがノゾミには分かつていて。これまでに巧妙に奴らの追跡をまいてきたのだが、ついに強行手段をとることにしたらしい。ノゾミは彼女を壇に向かつて立たせ、声をかけた。

「動かないで・・・目を閉じて、ぜつたい、静かに立つていなさい！」

ノゾミは彼女の耳に耳栓を施し、次の瞬間、目にもとまらぬ速度で行動に出た。一人目の腹に強烈な一撃が食い込み、二人目のテンブルにパンチが炸裂、三人目に右フック、左フック、四人目の顔面に左ストレート、五人目に往復ビンタが決まった。反撃の暇もあれ

ばこそ、ほぼ一瞬の出来事である。不良どもはほぼ同時に地面にぶつ倒れ、だらしなくのびてしまった。ノゾミは彼女の肩に軽く触れ、びくつとして目を開けた彼女に優しく微笑んで、家に連れ帰った。そこからすぐ目と鼻の先である。ノゾミは彼女の耳栓を外し、帰りを待たずにつかり戸締まりをして、先に休んでいるように、と言い残し、現場に舞い戻った。不良どもはそのまま転がっていた。人通りが少なく寝静まり、売れ残りの建て売り住宅の立ち並んだ一角。一人目は背骨が折れていた。叩き込んだ一撃の強烈さが知られよう。二人目は正体なく昏睡していた。三人目は両側の顎のおどがいが粉砕され、四人目は前歯がほぼ全部吹っ飛び、下顎骨が真つ二つに割っていた。五人目は、口の中に裂傷ができ、歯が何本か折れていた。実はこの五人目は、脅されて襲撃に加わっていることが調査の結果分かつており、従つていくらか手加減したわけだった。ノゾミは街灯を背にして立ち、身動きして目を開けた五人目に押し殺した低い声で告げた。

「この次は生きて帰れないと思え。こんなことをするやつは誰でもこうなる。」

五人目は、今度は恐怖のあまり、再び気絶した。この男は街灯の逆光で真っ黒な人影に告げられた警告の恐怖が長らく忘れられず、その日を境に不良グループと関わることをきっぱりやめてしまった。ほかの四人も、不良グループと縁が切れたのは同様だったが、それは体に後遺症が残つたからだった。一人目は脊髄切断はまぬがれたものの、神経が傷ついたらしく、下半身の痺れに終生悩まされることになった。二人目は高次脳機能障害を発症した。三人目。顎のおどがいは損傷すると整復困難な部分である。四人目。下顎骨にしても同様。

さて、ノゾミの仕事はまだ終わっていない。不良どもが打ち倒さ

れた直後、闇の中を一目散に逃げていった人影、恐らくは首謀者を、追撃しなければならない。ノゾミは不良の一人の携帯を取り上げて 119 番し、一方的に通報して電話を切り、逃走者の追跡を開始した。

さて、逃走者はどこにいるのか？ 実際のところ、それはさして困難な問題ではない。件の不良グループが朝比奈みくるに目をつけ、彼女を「手段を問わず」獲得するために動きだしたときには、すでにこの「作戦保衛部隊」では、彼らの素性、習慣、弱点などを残らず調べ上げたあとだつた。従つて、立ち回り先、拠点、逃走経路、それらはすでに自明のことと、予想されるいくつかの可能性に従つて行動すればそれでよかつた。それにそもそも、そんなことをするまでもなく、『追跡ツール』を使用してもよかつた。これで対象に「追尾フラグ」を設定すれば、それこそ永久に、追跡から逃れることはできない。「追尾フラグ強制解除ツール」や「追尾フラグ読み換えダミー」などは、我々の時代には存在していないのだから。そして今や、ノゾミはその情報と追跡ツールの双方を駆使、逃走者の先回りをし、待ち伏せの態勢に入りつつあつた。ノゾミは、この逃走者の遭遇をどうするか、決定しなければならなかつた。この若い男は実力者の子息であり、それをかさにきて思うがままにふるまう鼻つまみ者、周囲のたいていの人間に嫌われている腐りきつた人物だった。ノゾミの見立てによれば更正の余地はなくもなかつたが、しかし、ノゾミは決心した。『第四段階』の遭遇、すなわち『完全撃滅』をもつて対応しなければならない。ノゾミの隠れる暗がりに、目標はいままさに、飛んで火に入る夏の虫の言葉通り、何の警戒もせず、まっすぐにやつてきた。ノゾミは目標が暗がりにさしかかると同時に、計6発の鉄拳と2発のロー・キックを、ぎりぎり死なない程度に手加減して叩き込んだ。それにしても破滅的なダメージだが。そして先程と同じく、携帯を取り上げて通報、悠々とその場を立ち去つた。ほんの数分間の出来事である。しかし、目標の被つた被害は甚大だつた。頭蓋骨は陥没、肋骨は半分以上折れ、歯は全部吹っ飛び、右足膝は完全に砕けて反対向きに折れ曲がり、左足の向こう

臍にいたつてはほとんど木端微塵に粉碎していた。結局この男はこののち一度と、自分の足で地面に立つことができなくなるのだ。

作戦開始前のある会議のおり、一人の作戦保衛部隊員がいみじくも指摘した。そこまでする必要があるのか。それは卑劣な所業とうものではないか。弱い者いじめ同然ではないか、と。ノゾミの答えは次のようなものだった。

「われわれはケンカに行くわけではありません。端的に述べて、われわれの任務は破壊活動と示威であります。従つて、一般的な価値判断はこの際措かねばならないといえましょう。」

「この会議には長官も臨席しており、ノゾミのこの見解に完全に同意し、このように付け加えた。」

「妨害者には、生涯消えない後悔を背負つて貰わねばならん。」

目標を片付けたノゾミは時を移さず、仲間たちに無線指令を発した。

『第5区分第25枠に属する資料を第19号から第32号まで全開示。』

『了解。5・25の19から32全開示。』

この指示により、『致命的なスキヤンダル』が関係各所に向け、郵便で発送される。しかも関係する人々のものも一緒にたてある。所轄の警察署に、あるいは検察庁に、そしてマスコミに。かくして、その後ほどなく、さきの男の父親は実力者でもなんでもなくなり、手が後ろに回り、一族郎党、関わつたいろいろな人々を巻き添えにして、全面破滅、総没落となり、隆盛を誇った一家は一朝にして、あわれ第一巻の終わりと相成った。初回の『第四段階処遇』はかくして、無事完了した。国會議員1名が辞職に追い込まれ、高級官僚2名が更迭され、暴力団が3つ壊滅的な摘発を被り、中堅企業4つが倒産、5つの名家が没落、6つの暴走族が解散を余儀なくされ、7人に実刑判決が下り、8人が自殺未遂、9人が破産した。ノゾミは細大漏らさずこれらを報告、長官から熱のこもった賞賛が作戦保衛部隊員全員にあたえられ、「この調子でしつかり取り組むように。」と激励の言葉があり、「初回戦闘完全勝利記念メダル」が、これも全員に授与された。（もっとも実際に交付されたのは帰還後であったが。）

ただ彼女自身はといえば、ただひとり、これらの大騒動には無関係だった。そもそも彼女は、最初に取り囲まれたことすら気づいておらず、突然壁に向かって立っているように言われ、素直にその通

りにしたに過ぎない。現場から立ち去る時も、ノゾミが背後の修羅場が彼女に見えないよう、ごく自然に立ち位置を選んだため、結局なにも見ずにつながった。社会学習活動の一環として彼女は毎日の新聞に目を通しており、この日本中を揺るがした政界財界産業界裏社会をすべて巻き込んだ一大スキャンダルのことも当然目にしているたが、まさかそれが自分自身を守るためにものだとはついぞ気がつかず、生涯にわたって、そうと知ることもなかつた。誰一人教えてくれるわけでもなく、知る機会もまったくなかつたのだから当然だが。

このスキャンダルは、巨大な衝撃を各方面にもたらした。「得体の知れない何者かが、不明瞭な目的をもつて、秘密に活動している。」これほど不気味なこともそうはあるまい。警察ですら頭を抱えた。スキヤンダルの端緒となつた告発の動機がまったくわからなかつたからだ。何者かの売り出しども思えないこともなかつたが、それならどうこかしらで名乗りをあげなければ意味がない。しかし、返つてくるものはただただ沈黙ばかりだつた。金銭目的で脅迫されるわけでもなく、警告があるわけでもなく、突如頭上に落ちかかる、再起不能の、破滅。しばらくの間、少しでも身に覚えのある人々は戦々恐々となり、互いに疑心暗鬼を抱く始末だつたという。もっとも、たいして長続きはしなかつた。それつきり、こんなことは起らなかつたからである。

少なくとも、こんな大スキャンダルに発展したのはこれ一度きりだった。その理由については少し後に述べるとして、まずは、ある興味ある出来事について語らなければならない。

ある日、もう深夜にも近い時刻、ノゾミは一人で歩いていて、公園にさしかかった。広い敷地の暗がりを縫つて歩いていると、ふいに、気配を感じた。誰かいる。ノゾミは立ち止まり、茂った藪のそばの、とりわけ暗い一隅に佇んでいる人物に声をかけた。

「「」用向きは何でしょう？」

その人物はゆっくりとノゾミのいる街灯の明かりの輪の中に進み出た。ノゾミより少し背の低い女性で、落ち着き払った微笑みを浮かべ、一見どこにでもいそうな、目立たない感じに見えた。ノゾミにはそれが誰なのかわかつたが、なぜいま、何の目的をもつて現れたのかは謎だつた。ノゾミは戦闘が発生する可能性を考慮しなければならず、相手の動きを注視した。見れば見るほど、その身のこなしさただ者ではなかつた。ノゾミにははつきりわかつた。この人は組み合うときわめて難しい。勝ちにいくなら、つかまる前に全力の鉄拳を躊躇わずに撃ち込まなければ。相手の方でもノゾミの実力を見抜いたと見え、一定の距離をおいて立ち止まつた。ノゾミの必殺の鉄拳のとどく間合いの僅かに外側に。このことひとつとっても、間違いなく、普通の人間などでは有り得なかつた。出し抜けに、相手が言葉を発した。

「未来からいらっしゃったホシノゾミさんですね。よつこそ我々の時代へ。」

「そういうあなたは『機関』の森園生さんですね。お噂はかねがね。時代の隅っこに、ちょっとお邪魔させていただいております。」

「早速ですが、さきの一連のスキヤンダルはあなたがたの発信であると伺いました。」

「早耳ですね。なにか邪魔をしてしまいましたか？ あるいはお手柄を横取りしてしまいましたか？ だとしたら申し訳ありません。我々としてはいささか急いだもので、正直なところ、『機関』の皆さんの意向までは汲んでおりませんでしたが。」

「いいえ、むしろ私は、われわれの仲間を代表しまして、まずは、お礼を言わせていただこうと思いました。あなたが没落させた、朝比奈さんを襲撃させたあの首謀者の男についてですが、実を言いますとわれわれの涼宮さんにも似たような襲撃計画をもつていたらしく、こちらとしても、排除作戦を考慮していましたところでした。あなたがたに主要なところを全部やつていただきましたので、われわれはあとは雑魚を始末するだけで済みました。」

「どういたしました。お役に立てれば何よりです。」

「このよつな場合の会話の鉄則。『まずは下手から。手のひらを返すのはこつでもできる。』ノゾミは言葉を継ぐ。

「とにかくで、お話は他にもあります。」

「ええ。実は提案したいこともあります。」

「承りましょう。」

「单刀直入に申し上げますと、あなたがたと私たち、双方の関係について、少なくとも、『静謐を保持』の方向でお願いしたいと思いまして。あなたがたも、活動の焦点は涼宮ハルヒさんでしょう。われわれもそうです。しかし、微妙な差異はある。しかも決定的です。しかし、ここから抗争状態になってしまってはお互い面倒ですし、非能率この上ないこともありますし、活動上の理論的相違は

ともかく描いて、とりあえずの平和共存を目指さうといふことです。

「

森嬢はさりに続ける。

「さらに、私どもといったしましてはもう一歩踏み込み、『相互業務協力』の段階にまで進めれば、と希望しております。手始めに、私どもの交通手段を提供いたしましょう。未来人の皆様に我が『機関』の『無料バス』を差し上げます。いかなる交通機関でも、このバスがあれば永久に無償で利用できます。」

「大変な好条件を提示されていますが、はつきり伺います。目的は何でしょうか？」

「私どもはただ、後顧の憂いなく業務に邁進したいだけです。無益な抗争は何としても回避しておきたいのです。」

「お話はよくわかります。しかし、私の一存では決定できかねます。決断までにご猶予をいただきたいのですが。」

「では、24時間では？」

「もう少しお願いしたいところです。」

「そうですね、・・・では、若干の余裕をとつて、50時間ではいかがでしょうか。2日と2時間のち、待ち合わせはこの場所で。」

「ではそれで結構です。それではその時にまた。」

「それでは。」

森嬢はきびすを返す。ヒノゾミが問を発した。

「しばらく。失礼ながら、なぜ、私たちの素性を『ご存知なのでしょつか？』

森嬢は振り返り、微笑んで答える。

「私どもにも、それなりの情報網がありますれば。」

そして向き直り、振り向かずに立ち去つていった。その背中には油断が見えたが、それがアピールであることをノゾミは承知していた。つまり、『争うつもりはない』ということだ。しかし、そのアピールがフェイクでないとも断定しかねた。『機関』なる巨大組織についてはノゾミはある程度知っていた。森嬢はじめ、メンバーの幾人かは見分けることができたし、活動状況や事業の方針についても、調査担当からの情報提供を受けてはいた。それによると、『機関』にはあらゆる分野のプロフェッショナルが集まっており、およそこの世で可能なことはすべて達成できるであろう、とのことだった。なるほど、『相互関係に静謐を保持』というのは、こちら、未来人側にとつても至当な選択には違いない。組織間抗争の行き着く先は大抵泥沼であるし、そんなことは願い下げだ。そんな暇はないのだから。しかしそれにしても、彼らのほうがノゾミたちの素性を知っていることにはどうにも納得がいきかねた。未来人側の何者かが故意に情報をリークしたのでない限り、『当該時間平面上の現住住民』である『機関』側がノゾミたちについて知ることはできないはずだからだ。ノゾミは厳しい表情でその場を離れた。とりあえず、仲間たちに、機関側の提案を諮らねばならない。疑惑についての調査もだ。

その場を離れたノゾミは、いくらも行かないついで、尾行がついていることに気づいた。ノゾミは大通りに出、通りの向かい側にある銀行の大きなガラス窓に映った姿から、尾行者が上背の高い男性で、金髪であることを見て取った。そして、尾行慣れしていないことも。しばしばこの尾行者は距離を詰めすぎ、最短で2メートル半くらいのところにいたりした。これは俊敏なハードパンチャーであるノゾミの間合いの内側であり、強烈きわまる左アッパーが炸裂するまでに0・7秒しかかかるない距離だ。ノゾミの姿勢が僅かに沈みこんだと見えた次の瞬間には、走馬灯を眺めながら宙を漂う羽目になる。わざとしているなら恐るべき不用心さといえる。しかし、尾行者のおどおどした、見るからに怪しいとしか言いようのない態度から、ノゾミは相手を素人であると判断した。従つて、『機関』の人間ではないと察せられた。それでは、その対抗組織であるところの、いわゆる『組織』のしわざか？ それはあり得る可能性だつた。調査担当によると、『組織』は素直で有能だが、若すぎて経験が足らず、行動上の定石や常識を欠いた若いアマチュアの集団であり、「非常識な突発的行動を除いては特に注意すべき理由は認められない」と、完全に雑魚扱いだった。ノゾミをはじめとするいわば『未来人主流』はみな『組織』を軽視する傾向があった。「アマチュア風情に出る幕はない」ということだ。件の尾行者はまさに「尾行のアマチュア」であり、ノゾミはとつつかまえて説教してやろうかとも思つたが、さすがにそれは自重した。あるいは、未来人のいわば「ご同輩」なのかも知れなかつたから。情報員の訓練のために先輩の尾行をさせることはよくあることだつたし、そういう場合は気がつかないふりをするのが先輩としてのたしなみでもあつた。あとで評価担当から連絡があるので、その時に正直なところを述べればよいのだ。または、やはり『機関』の手の者なのかも知れなかつ

た。『機関』という組織はその中に多数の入り組んだ派閥があつて、思惑の違いから論争に発展したり、根回しや折衝、抜け駆けや追い落としが日常茶飯事であるとのことだ。森嬢の属する派閥では未来人の平和共存を望んでいても、他の派閥では未来人と戦争して仕方がないかも知れなかつた。尾行者の正体は多少気がかりではあつたものの、いまはいわゆる『政治的に微妙な情勢』で、強手段をとることは慎まねばならない。かといって、ノゾミは家まで尾行者を引き連れていくつもりも毛頭なかつた。ノゾミは街中を意味もなく早足で歩き回り、尾行者を疲れさせる策戦に出た。ノゾミは健脚だった。訓練の賜物である。未来人はたいてい徒步に弱く、しかも運動音痴が多い。尾行者はかなり頑張つてついてくる。しかしさすがに約5時間が経過し、夜明けが近くなるにいたつて、距離を詰めがちな尾行者も落後し始めた。100メートルほど間隔が開いたところで、ノゾミは振り切りの仕上げに取りかかる。突如猛ダッシュを開始、開いたばかりの地下鉄の入り口から駆け下り、降りたところから別の階段を駆け上がって、ついさつき駆け下りた入り口を窺う。尾行者は慌てて階段を降りていくところだつた。ノゾミは静かに後ろに回り、再びさきの階段を下り、尾行者の2メートル半ほど後ろの、階段に立ち止まつた。尾行者はすぐ後ろにいるノゾミにまつたく気づかない。しきりに地下道の奥の方を窺つている。やがて諦めたらしく、溜め息をついて肩を落とし、地下鉄の切符を買い、改札を入つて姿を消した。最後まで、背後のノゾミには気がつかないままだつた。一方ノゾミは尾行者の背後であることを試した。未来人対応の身分照合ツールを起動してみたのだ。これは通常警察官が装備しているもので、生体IC／IDを導入している者が相手なら、見ただけで姓名職業年齢、手配のあるなしが判別できる。駄目で元々と試してみたのだが、驚くべきことにデータが表示された。それで、この金髪男が未来人であるとわかつたのだ。しかも、『隔時任務服務中脱走・手配中・逮捕命令未発令』の警告まで表示されていた。ノゾミは追跡フラグを男に設定し、疲れきつた様子で

ホームへの階段を降りていくのを見送った。これでもう、彼に逃げるすべはない。

ノゾミは帰りがけに食料品を買い込み、彼女の待つ家へと帰ってきた。彼女はまだ眠っているようだった。自室に入り、座り心地のいい椅子に体を埋めると、ノゾミは未来への通信回線を開き、まず最初に脱走者発見の緊急信を発報した。ついで長官を呼び出し、機関側の提案について報告し意見を求めたところ、意外な答えが返ってきた。

「本事案に関する決定権と交渉権、ならびに政策実施に関する権限のすべて、すなわち全権を貴官に付託する。」

「同僚への周知については？」

「任せる。・・・すべて君のいようにしたまえ。」

通信は以上で終わり、ノゾミは正直頭を抱えた。これはまさしくでもない「無茶振り」に思えた。しかし、任された以上やるほかない。ノゾミは『機関』との交渉にむけて、一心に頭を絞りはじめた。考えなければならないことは山ほどあり、しかもすべてが重要な案件であるといえた。今後の活動のすべてが、自分自身の交渉ひとつにかかっている。交渉ごとにかけては百戦錬磨であろう『機関』相手に、本当に大丈夫だろうかと心配だったが、逆に考えれば大丈夫だからこそ任されたとも思われた。そのうちに、徹夜の上に考えごとにふけったせいで、ノゾミは眠ってしまった。

ふと目覚めるともう日は高く、誰かがドアをノックしている。そうだ！ 彼女のことをすっかり忘れていた。

「あのう・・・行動時限表の予定時間が、・・・。」

ノゾミは努めて冷静に答えた。

「このが後先になつてしましましたが、本日より当分の間、行動予定時限表をすべて、暫時、白紙とします。復旧の可能性もありますから、時限表は保持しておくこと。」

「何があつたんですか？」

「訓練の一環です。本日より急遽、自宅待機訓練を実施とします。期限は当面定めません。外出は厳禁です。以上。」

「・・・わかりました・・・。」

彼女は明らかにがっかりした様子で立ち去った。ノゾミは本来の本日の予定を参照してみた。『高級物品購買訓練』とあった。一般的な言葉に直すと、『デパートにお買い物に行く』となる。がっかりの理由には合点がいったが、しかし今は正味それどころではない。ノゾミは再び椅子に身を横たえ、考え方を再開した。

そういつてこりに50時間が経過し、ノゾミは再び公園にいた。時間かかり、森嬢が現れて、回答を求めた。

「未来人の皆様の総意としての、お答えを伺いましょう。」

「まず、交通バスの件については、謹んでご辞退申し上げます。しかし、ある程度の業務協力、可能な限りの情報の共有については、実施にやぶさかではありません。平和共存については、当初からまつたく異存ございません。しかし、私どもは人数も少なく、禁令や禁則事項も多く、ご協力できることといつても限りがあることはご了承いただきたいところです。あと、窓口についてですが、未来人の側は私が代表します。それで、『機関』の側の代表は是非とも、森園生さん、あなたにお願いいたしたい。」

「窓口の件に関しては承知いたしました。もとよりそのつもりでおりましたゆえ。その他の項目についても、仰る通りの条件で結構です。静謐保持の達成が至上目的ですので。それでは、今後ともよろしく。」

「了解いたしました。」

ノゾミはひとまず安心した。と、ふいに森嬢が言つ。

「『機関』の組織人としてのお話はこれくらいで切り上げさせていただきまして、今度はわたくし個人として、ひとつお願ひがござります。」

「何でしょう?」

「一手お手合させ願いたいのです。」

「いいでしょう。いつでも、どこからでもどうぞ。」

一人は距離をおいて対峙した。まったく緊張感らしきものは感じられない。はたから見れば、ただ佇んでいるようにしか見えなかつたことだろう。しかし一瞬のち、一人は至近距離にいて、動きを止めていた。ノゾミの鉄拳は森嬢のこめかみに、森嬢のそれはノゾミの鳩尾に、それぞれ寸止めの状態だった。

「なぜ、私が寸止めにするとわかりましたか？」
「私もそうするつもりでしたから。」

一人は向き直る。

「さて、これでお互い、実力のほどは解ったわけです。」
「そうですね。」

暫く二人は向き合つたまま黙つていた。そして、

「もしこの先、あなた方と私どもが決定的に対立し、闘争が生じたら、我々は我々だけで決着をつけようではありませんか。お互いで手加減はなし、恨みっこもなし、全力で。最期の闘いに相応しく。」

「・・・不思議ですね。」

「とは？」

「私も今、まったく同じことを言おうとしていたのです。」

一人は固く手を握り合つた。

「相討ちですね。」

「おそらく。」

「では、その時にはともに旅立ちましょう。」

一人は古くからの友人同士のようす互いに挨拶し、それぞれ立ち去つた。公園の出口のあたりで、ノゾミはこの前の金髪未来人が頭を抱えているのに出くわした。花壇の縁に腰掛け、深刻そうな様子である。ノゾミには気がついていないらしい。ようし、ついでだからこの際逮捕してやろうと念のために持つてきた手錠を取り出そうとして、ノゾミははたと、逮捕命令がまだ来ていないのに気づいた。ノゾミは『警察中尉（警部補に相当）』の警察職務位階を保持していたが、これだけでは軍事規律違反者に過ぎない脱走者を捕らえるわけにはいかない。軍から警察へ『脱走罪』で告発が行われ、その結果発令される『脱走罪容疑者逮捕命令』が必要である。普通はまる一日もあればおりてくる筈。奇妙なことだとノゾミは思つたが、勇み足を踏むわけにもいかず、何食わぬ顔をしてその場を立ち去るほかなかつた。件の男は結局、ノゾミには全然気がつかないままだつた。ノゾミは静まり返つた深夜のなかを、ゆっくりと歩いて帰つていつた。晴れた気分のいい夜だつた。なぜだか、ノゾミは昔を思い出していた。歌手志望の時代を。もはや遠い昔にも思える記憶だ。あの頃と今では、自分はまったく別の世界の人間だ。いやむしろ、まったくの別人と言つてしまつてもいいかもしね。・・・思えば遠くにきたものだ。

未来人と『機関』の、それぞれ名づての実力者同士の間に、文字通り時間を越えて生まれたこの奇妙な友情は、この2つの組織間の繋ぎとして、またとない役割を果たした。ついでに、この2人が相争う機会はついに訪れなかつたことを付け加えておこう。

「」で、あるもつともな疑問が生ずる。なぜ、命令の発出しに時間を要するのか？ 命令の請求があつた時間あてに送付したほうがよ

いのではないか？確かに、その方が一見能率的ではある。しかし、

あえて実際にかかった時間を加算して発令することになつていてる。

これは一般に『時系列一致並進方式』と呼ばれる形式で、因果関係の複雑化や、時間感覚のくるいを防止するために行われている。特

に長期にわたる作戦においては厳正に適用することを求められる。

これに対する『時系列非一致方式』を常態化させている場合、指令の順番が前後入れ違つたり、通信がいちどきに極端に集中したり、情報提供や事務処理が適切に行われなかつたりする場合がある。現場で補正すればよいとの意見もあるかもしれないが、補正しきれないこともままある。こういった混乱から発生しがちな事故を予防するためには、基本的にはあちらの時代とこちらの時代の時間経過の足並みを揃えて業務を行なうことになっているわけだ。『時系列非一致方式』で指令があることはなくもないが、緊急事態に限定される。

帰宅したノゾミは自宅待機態勢の解除と、翌々日以降の時限進行予定表の復旧を彼女に申し渡した。加えて、翌日の時限表を臨時に変更することも。ちなみに、翌日の予定表に加えられたのは「高級物品購入訓練」「

彼女の購買意欲は旺盛だつた。高価な高級ブランド品や宝石類などにはあまり強い関心を示さなかつたが、とにかく可愛いものには目がなく、衣服やアクセサリーなど、思いつくままに買い込む傾向があつた。実際に着用する機会があるかどうかはお構いなしに、である。しかし、ノゾミは特にこれを咎めることなく、好きにさせていた。彼女は買いたいものを我慢することとは無縁だつた。両親は実に『甘い親御さん』で、娘には何一つ不自由させないようにしていた。この買い物癖は生涯直らなかつたが、とくに問題はなかつた。なぜなら、前に述べた通り、彼女は、金銭に不自由したことも生涯なかつたのだから。親許では両親が、就職してからは給料が、そし

て過去に赴いている間は『資金部』の交付する『渡しきり資金』が彼女に金銭を補充し続けた。

さて、その数日後、作戦にあらたな展開が生じた。ノゾミは彼女に、ミーティングの席で宣言した。

「高等学校入学の時機が到来しました。入学試験を受けなさい。」

作戦従事命令44

「書類はすでに提出済みです。」

そう言つてノゾミは彼女に受験票を手交した。

「明日、学校の下見に行きなさい。一人でね。」

彼女は不安を感じた。これまではずつとノゾミと行動していたのだ。

「私にしても、いつまであなたと行動をともにできるかわかりません。わかりますね。いつかは、あなたは、ひとりだけで行動しなければならなくなるのです。・・・そう遠くない将来の話です。」

彼女は不安そうに、しかし何か思つてゐるようになつて黙つて聞いていた。

「だから、明日からは基本的に単独行動をとるようになさい。行状には充分注意をはらいなさい。あと、こちらの時代にもいすれ友達ができるでしょうが、お友達のいるところではお買い物は控えるようにしなさい。大事なことですよ。多額の金銭を所持しているとわかつてしまふと、ろくなことはありませんからね。それから・・・」

「ノゾミの話は続く。彼女は相変わらず黙つて聞いている。2人とも、もうまもなくお別れだ、と悟つてゐるかのようだった。・・・実際は『完全単独行動』への移行はまだ何ヶ月か先になるのだが。

ともかくにもその畠中、玄関でノゾミに見送られ、彼女は自分が通つはずの高校を手指した。それにしても坂道には閉口させられた。未来人の「」多分にもれず、いやむしろの中でもことごとくべきか、彼女もまた、徒步は苦手だった。ようやく学校にたどり着き、校門の前でこれからのことを考えながらじょじょんやり佇んでいると、誰かが声をかけてきた。

「あつー キミつー」

快活な声が飛んできて、彼女は振り向いた。

「あんたも下見かい？ あたしもやつせー。」

非常に豊かな長い髪を足首のあたりまでなびかせた、とても綺麗な女の子がそこにいた。女の子は彼女のそばまで来ると、興味深げに、無遠慮な眼差しで彼女をしげしげと眺め、彼女の瞳を正面から覗きこみ、そして言った。

「キミ、可愛いねえ。名前は？」

「あ、朝比奈みくる、です。」

「名前も可愛いねえ。家はどこ？」

「え、ええと、・・・、あっちのほうです・・・。」

「あははっ！ まあそれでいいっせー。血口紹介が遅れたね！」

あたしは鶴屋・・・っていうのセー。よろしくー！」

彼女ははうつかりと名前を聞き落とし、そのまま聞き返せずにしまつた。これが彼女と鶴屋嬢との出会いの一幕である。

作戦従事命令45

鶴屋嬢と朝比奈みくるが出会ったことにより、ノゾミ達『作戦保衛部隊』は更に暇になつた。先にも述べた通り、「威嚇戦術実施対象」とされた人々は意外なほど少ない。実例に挙げられた五名、あと数人、程度である。彼女の周囲は平穏だつた。今まででは事実上の警備隊長であるノゾミがいつしょにいたせいもあるが、いよいよ入学し、学期が始まり、朝比奈みくるは単独行動で衆目に曝されるとあつて、警備態勢は常時3人の『密行警護』に移行、これからは忙しくなると予想されていたのだが、案に相違して、何事もない日々が続いた。それはやはり、鶴屋嬢との出会いが非常に大きな要因となつてゐる。鶴屋嬢は彼女を常に気にかけ続けた。彼女と一緒にいるあらゆる場面で、鶴屋嬢は言った。「この子、あたしの友達。よろしく。」鶴屋嬢は鶴屋家の次代継承権の保持者である。（継承権順位は5位ということになつてはいたが、諸般の事情を勘案すると、すでにこの時点で事実上の次代確定継承者とみなされていていたと判断して差し支えない。）鶴屋嬢自身、そのことはすでに受け入れており、高等学校入学時にはすでに、その責任に相応しい言動をほぼ完全に身につけていた。その鶴屋嬢が、このような発言によつて発生する影響に無感覚だつたとは到底思われないし、事実、鶴屋嬢はその影響を明らかに期待していた。詰まるところ、それは「この子に何かあつたら、あたしが黙つていらないよ。」ということを意味している。鶴屋家の威令はあまねく轟いており、鶴屋嬢自身はもちろん、その『友人』である朝比奈みくるも、また周囲に一日置かれるに至つた。過剰反応する者もあるほどだつた。（「よせ！あの女はヤバい！」）

言つまでもなく、鶴屋嬢は才媛だつた。成績は非常によく、体を動かすことも得意で、特に古流武術はひとかどの使い手である

と折り紙をつけられてもいた。朝比奈みくるに非礼をはたらく者にどのように黙つていなかは、火を見るより明らかなことであつた。すでに、鶴屋嬢はその実力を実際に披露してもいた。上級生に一人、身の程知らずがいた。この少女は空手の心得があると吹聴しており、徒党を引き連れて手のつけようもなかつた。そしてこともあります、入学前から評判の高かつた鶴屋嬢に挑戦したのだった。鶴屋嬢は最初この挑戦を受けようとせず、仲良くしようよと握手の手を差し出したがはたかれてしまつた。そこでやむなく挑戦を受けることにし、次のように取り決めた。金曜日の夕方、校舎内に生徒がいなくなつたら、校舎裏で決着をつけよう。はたしてその金曜日、夕暮れの中を、二人は校舎裏へと消えていき、程なくして鶴屋嬢だけが再び姿を現し、一言も発せず、置いてあつた鞄をひつつかむとそのまま帰つてしまつた。成り行きを見守つていた生徒たちのうちの幾人かが校舎裏へまわり、やがて担架に載せられた挑戦者を伴つて戻ってきた。彼らはぞろぞろと校門に向かい、しばらくして、なぜかサイレンを鳴らさずにやつてきた救急車に少女を乗せた。救急車はサイレンを鳴らさないまま走り去り、誰一人何のコメントもなく、三々五々、帰宅していった。勝負がついたことだけは誰の目にも明らかだつた。そして月曜日。北高の勢力図は完全に『鶴屋色』一色に塗り替わつていた。件の少女は満身創痍の有り様で一応は登校してきたものの、もはや針のむしろの上にしか居場所がないことを知るほかなかつた。面目は丸つぶれになり、評判は地に墜ち、仲間はいなくなり、どこに行つても白い目と陰口が待つていた。（「口先女！」）しかしこのどん底の少女に、他ならぬ鶴屋嬢が自ら手を差し伸べた。鶴屋嬢は少女の教室に現れると、少女に語りかけた。「キミはなかなかいい腕をしていたよ。」少女はやつれた顔を上げる。そして、再び握手の手が差し伸べられていることを知る。いくらか硬い表情のまま、鶴屋嬢は続ける。「水に流そう。仲良くしようよ。」少女はおずおずと鶴屋嬢の手をとつた。鶴屋嬢は少女の手を強く

握り返し、満面の笑みを浮かべた。

「これでいい。そうこうろ?」

ここにさすがの生意気少女も陥落し、大声で泣き崩れた。鶴屋嬢はこの一件で実力のみならず人間の器までを見せ、大いに評判をあげたわけである。

この件が一種仕組まれたものであつたことは疑う余地がない。もつとも、鶴屋嬢はほぼ無関係であり、どちらが勝つにせよ遅滞なく救護するようにと命じていたに過ぎない。

鶴屋嬢はこのころにはすでに自分自身の権力機構を持つていた。鶴屋家の内部では「第二課」または「第一指令」と称されているものがそれで、一応の正式名称は『株式会社鶴屋ホームサービス専従第一課』という。表向きは家事全般の請け負い会社でしかないが、実際は鶴屋嬢個人に直接奉仕し、その指令をうけて活動することがこの部署の真の使命なのである。家政局、警備局、秘書局、計画局、事業指導局にわかれ、指令は事業指導局が取りまとめて発する。この指令の権威は鶴屋グループ関連企業すべてに及ぶ。

さて、鶴屋嬢の入学にあたり、北高でもある小さな動きがあつた。書道部の復活がそれである。長らく休眠状態だつたのだが、入部志願者が突如として現れ、顧問もついてめでたく完全復活を遂げた。顧問教師は古文及び書道担当の鶴丸先生、部長は鶴江さん、部員は鶴田さん、鶴岡さん、鶴見さん、鶴井さん、である。もうお分かりだろうが、これらの人々はみな鶴屋家の親類にあたり、「第一課」に少なからず縁の深い人々である。詰まるところ、「北高書道部」とはつまり、「第二課北高出張所」なのだ。

鶴屋嬢は鶴江さんに決闘のことを伝え、救護態勢の点にだけ釘をさした。鶴江さんは鶴丸先生に伝達し、鶴丸先生（事業指導局秘密局員・部長以下部員たちも同様）は事業指導局会議を招集、善後策を協議した。その結果『鶴屋お嬢様の権威失墜の回避』が「主要行動方針」として策定され、考えられる限りのシナリオにそつて行動

計画が立案された。そして決闘の結果は「鶴屋嬢完全勝利」に終わり、事前行動計画案『事例A』にそつて処理されることとなつた。

鶴丸先生は立場上立ち会つわけにはゆかず、職員室のカーテンを閉めて決闘が他の教職員の目に付かないようとした。倒された少女の運び出しは書道部員たちが引き受け、校門のところで打ち合わせ通りに病院車に引き継いだ。病院車は一見したところ救急車そのものの外観で、車体には『医療法人鶴正会鶴屋診療所』の標記があつた。病院に運ばれた少女は、実際の負傷はごく軽微だったが、包帯を過剰に巻きつけられて、見かけ上満身創痍にされてしまった。また、奇妙なことに、医療費を請求されることがなかつた。鶴屋嬢には後刻報告があつたが、それは「救護活動は無事終了」という簡素なものだつた。かくして、主要行動方針は無事達成されたわけである。鶴屋嬢の権威を下支えしていた人々によれば、鶴屋嬢はもともと尊敬を集めるたちであつたため、比較的楽であつたとのことである。

鶴屋嬢は基本的に彼女と行動をともにし、彼女にとつては「ひらひらの時代についてのまたとない教師役として、実に有り難い存在となつていた。そしてそんなある日の放課後、鶴屋嬢は彼女に、クラブ活動に興味はないか、と尋ねた。彼女は興味はあるがなにをしたらいいのか正直なところよくわからない、と答えた。

「そしたらさあ、書道部なんてどうかなつ？」

「書道部、ですか？」

「そなんじよ。実はさあ、今年の新入生の集まりが悪いいらしくてさ、あたしは入つてないんだけど、友達に頼まれちゃつてね。どうかなあ？ 嫌ならそれでも全然いいよ！ 無理になんて言わなさい！」

彼女はしばらく考え、入部することにした。ノゾミからも、クラブ活動加入は奨励事項だと伝えられていた。

「じうじょろ？」

「あ、じゃあ、入部します。」

「本当かい！ ありがと！ ジャあ早速、今から行こう！」

かくして、朝比奈みくるは書道部員となつた。もちろん、彼女は裏の事情はこれっぽっちも知らない。唯一の「ただの書道部員」である。鶴屋嬢が自分自身の警備隊に彼女を送り込んだ意味は明白だつた。鶴屋嬢は例の台詞を忘れず残していつたのだから。曰わく、「この子、あたしの友達。よろしく。」即ち、「あたしを守るように、この子を守れ！」である。

さてここまで物語にお付き合いいただいた皆さんには、彼女の受けている法外なほどの厚遇に違和感を感じておられるかも知れない。これには意外な理由がある。ほとんど知られていないことだが、朝比奈みくるの瞳には魔力ともいうべき力があった。その瞳の力に影響されたすべての人間を完全に自分の味方に、むしろ肉親のことくにしてしまう、いわばある種の魔性の瞳。多くの人々がその魔力に捕らわれ、熱烈なる彼女の兄弟姉妹に、父母に、あるいは騎士となつていつた。時間進行調整省長官の激越な送り出しの檄しかり、ノゾミの過激な制圧しかり、鶴屋嬢の厚遇しかり。あの冷静なキヨン君ですら、涼宮ハルヒの無体な「みくるちゃんはあたしのオモチャ」宣言を耳にした瞬間、理性とは無関係に涼宮ハルヒを殴つてしまいそうになつてゐる。朝比奈みくるの「魔力」に抗することのできる人間はおよそ少なかつた。その明るい茶色の澄んだ瞳を覗き込んでしまうともういけなかつた。その心の奥底を直接とろかしてしまふ魔法の視線は、男女問わず、ほぼ一瞬で、誰であろうと、朝比奈みくるの、世話好きの肉親に変えてしまうのだ。長官にしてもノゾミにしても、鶴屋嬢にしてもキヨン君にしても、みんな同じ魔法にかかりつてゐる仲間といえた。そして、他の多くの人々も。記録に残っている限り、涼宮ハルヒだけが、彼女の魔力が通用しなかつた、ほとんど唯一の人間である。無論、朝比奈みくる自身は自分の瞳の力に徹底的に無自覚であつたことは言うまでもない。ある意味、この能力は彼女に非常に似つかわしいものであり、だからこそ疑惑を招くこともなく、知られないままなのであるともいえよう。ついでに付け加えるならば、この「ある意味魔性の瞳」は恋愛問題ではまったく役に立たず、彼女は精神的肉親と騎士には生涯不自由しなかつたが、恋人はなかなかできなかつた。

それならば彼女を庇護するような様子のみえない古泉一樹についてはどうなのか、と問う人もあるかもしない。その回答は極めてシンプルであつて、「実際に目を合わせたことがないから」というに尽きる。古泉一樹といつ男は非常に自信に欠けた人物だった。他人と目を合わせないことにかけてはいつそ名人と称してもいいくらいだつた。しかもそれだけではなく、彼女と古泉一樹とは遠慮しない、一定の距離をおいた付き合いをお互いに心がけていたふしがある。彼らの関係は、「任務上の協同」という枠を一切越えなかつた。「エンドレスエイト」事件の際にはキヨン君より前に古泉一樹に相談を持ちかけてはいるが、それは古泉一樹の「事情通」あるいは「ある意味での同僚」としての側面に着眼したためであり、なんらかの感情が介在したかのような解釈は適切でない。翻つてキヨン君は、彼女にとつては「ある意味での同僚」以上の意味をもつ人物であった。キヨン君に対しても、彼女は感情を吐露することができた。・・・
・厳重な禁則事項をパスすることに限つてのことではあつたけれども。

さて、長門有希嬢である。もとより宇宙人一派には彼女の瞳の力は無効であつた。長門嬢は見た目非常に無愛想で、取つ付きにくく見える人物である。そればかりではなく、さきにも挙げた通り、彼女は長門嬢をはじめとする宇宙人一派に恐怖を感じており、気軽に相談などともできる話ではなかつた。規制をかけられていたせいもある。長官はミーティングの席でノゾミにこのように伝達した。

「当然、あの時代にも統監閣下、長門有希同志はおいでになつておられるが、指示を仰いだり、相談を持ちかけたりすることは厳重に禁止される。違反があつた場合、直ちに解任、召還のうえ、厳罰

に処す。既にも伝えよ。」

ノゾミはこの警告を仲間たちに伝えた。彼女にも伝えたが、「統監閣下に直接指示を仰ぐことは厳に慎むようだ。」と、いさか簡略な言い回しだった。彼女はむしろ、「直接指示を仰ぐようなどと言われたほうが重荷であったから、そのほうがよかつた。

さて、我々はここで、きわめて興味深い人物である長門有希嬢の詳細について考察しなければならない。そもそも、長門嬢は、統合思念体の涼宮ハルヒ観測事業のために建造されたヒューマノイド・インターフェースでしかないはずである。しかし、その中でも、長門嬢ほどに際立つた個性の持ち主は珍しいと言つてよい。その謎を解くためには、長門嬢の来歴を明らかにしなければならない。

情報統合思念体は涼宮ハルヒ観測事業の立ち上げにあたり、配置するヒューマノイド・インターフェースの調達をどうするかという問題について各派閥間で討議した。「新規構築」か「改造導入」か。平たくいえば「一から製造」か「ありものの素材から製造」か。統合思念体にとってはどうちらでも大した違いではない。極端な話、そこのらにいる人々の中から任意にピックアップしてインターフェースに仕立ててしまつてもよいのだ。しかし、一応「観測の安定のために観測対象の現住生活する社会の無用の混乱を防止する」観点から、「任意ピックアップ」の手法は採用せず、「改造導入」の際には「ヒューマノイド候補者」の同意を取り付けるか、あるいは「新規構築」とするか、で各派閥は意見の一一致をみた。残るはその手法であるが、こちらの議論は一致した見解に到達できず、とりあえず各派閥別に個別に構築し、実際に稼働させてみて様子をみるとになった。その結果、3体のインターフェースが試作として建造された。それぞれ、所属派閥、構築手法、制御方式がいずれも異なる。長門嬢はこの最初期型に属し、上記に倣えば主流派・改造導入・完

全自律制御、となる。改造導入ということは、当然のことながら、改造元がいたことになる。

時間進行調整省はやる」とのなくなつた歴史研究所実査部を事実上配下に收め、そして次元断層後の近代史の詳細な研究を指令、そのなかでもとりわけ秘密の研究課題として、宇宙人一派の来歴を探れる限り探る事業に取りかかつた。その結果、長門有希同志だけは、その来歴を特定することができた。いまや長門有希嬢のもともとの出生地、名前、周囲の人間関係など、事細かに特定されている。無論、禁則事項中の禁則事項、『国際連邦國家機密』指定の文書である。従つて詳細を明かすことは許されないので、概要でご容赦願いたい。

孤独な少女であった。天涯孤独であった。雪の多い地方で、小さな家に、独りきりで暮らしていた。少女は、担任の先生に淡い恋心を抱いており、「万が一のときのために」という名目で自宅の鍵を渡してすらいた。しかし、先生はその言葉を字義通りに受け取り、決して訪ねてはこなかつた。かといってこの先生が冷淡な人間だつたわけでは決してない。基本的にはたいへん優しい先生で、生徒たちにはとても人気があった。ただ、誤解を招きかねない振る舞いを嫌い、行動を厳に謹んでいた。

ある年の年末、先生は連絡網で学校行事の日程変更の情報を流し、3本ある連絡線の最後の1本からの「連絡終了」の通報を待っていた。その連絡線の終端は少女だった。電話はやがてかかるつて来たが、それは少女のひとつ前の父兄からだつた。少女にどうしても連絡がないといふ。先生は妙な胸騒ぎを覚え、自分からも電話してみた。誰も出ない。どうもおかしい。体が弱い子で、あまり出歩かないと聞いている。先生は様子を見に行くことにし、預かっている鍵を持つと、厚着して外出した。こんなことはこれが初めてだつた。バス停まできてみると、ちょうどバスがやつてきた。車内は混んでいて蒸し暑かつた。吊革に掴まり、先生はぼんやりと考えごとに耽つた。

鍵を押し付けられたとき、先生は対処に困つて教頭先生に相談した。教頭は先生に、「君は生徒にずいぶん信任されているようだね。それはまことに結構なことだ。ただ、くれぐれも誤解をうけるようなことは慎むように。」と言い、先生は気をつけます、と答えた。この会話で、先生は、教頭もまた、自分を信任してくれていると理解したのだった。

気がつくと、降りなければならぬ停留所が接近していた。先生は慌ててボタンを押し、降車した。少女の家はそこから「ぐ近く」だつた。バス路線一本で来れるのだが、実際に来たことはほとんどなかつた。

先生は少女の家までやつてきた。鍵はかかっていなかつた。もう夕方遅くだというのに、家のなかはあかりも灯つておらず、留守なんかとも思われたが、先生は意を決して中に踏み込んだ。はたして、いちばん奥の部屋に伏せつっている少女を先生は発見した。額に手を当ててみるとものすごい熱で、しかし顔色は真つ青、冷たい脂汗が滲んでいた。先生は直感した。やばい。先生は直ちに救急車を呼んだ。病院で先生は医師の説明を受けた。

「重症の肺炎です。風邪をこじらしたようですね。担任の先生とおっしゃいましたね？あの子のご家族に連絡をおとりになつて下さい。手遅れにちかい状態です。今夜が山です。手は尽くしますが、・・・もう少し早かつたら・・・。」

最後の一言は先生を打ちのめした。・・・自分がよく見てやれなかつたのが、結局、いちばん悪いのだろうか？

先生は自宅に戻り、寝つけない夜を過ぎした。そして早朝、うとうとしていたところを電話で起こされた。病院からだつた。

「危篤状態です。」「すぐに行きます！」

早朝の移動手段は限られている。先生は車を持つておらず、バスはまだ始発前、タクシーもなかなか来ず、結局半分くらいの距離を

歩き、やっと来たタクシーをつかまえて、小一時間もかかつて病院に着いた。医師が待つていて、言つた。

「亡くなられました。」「・・・いつです。」「お電話したあと、すぐでした。」「・・・そうですか。」「

先生はそれきり黙つたまま、少女の遺骸に対面した。かつて気恥ずかしげな微笑みを浮かべていたその顔は、いまや青やめ、無表情にこわばつて、もうあの子はどこにもいないのだな、と否応なしに思はせられた。先生はいたたまれず、「もう結構です。」と言い、顔を背けた。

医師が質問する。

「「」家族のかたは？」

「・・・この子には身寄りがないのです。」

「そうですか。・・・それは困りました。」

「とりあえず、学校に戻って、どうするかこちらでもちょっと相談してみます。・・・一両日中にはなんらかの返事をします。」

「では、一応」遺体は安置しておきます。」

「お世話かけます。申し訳ありません。」

先生は学校へ帰つていった。一方少女の遺体は病室から運び出され、靈安室に安置されるはずだったのだが、ここのこところ亡くなられた人が多く、靈安室はいっぱいだった。仕方なく靈安室の隣の、普段使われていない控え室に安置された。冷蔵設備がないが、そこは真冬のことである。看護師たちはその底冷えのする殺風景な室内に少女の遺体を運びこみ、簡素な白木の柩に納めると、蠟燭を灯して線香をあげ、茶を一杯供えると立ち去つていった。遺体の様子の変化には誰も気がつかなかつた。遺体に直接手を触れず、遺体を包む布といつしょに一気に移したせいかも知れない。とにかく、少女の心臓は再びか細い鼓動をはじめ、その肺には再び空気が通いはじめていた。もつとも、どちらにせよ時間の問題だつた。肺炎のダメージは深刻だつた。あたかも蠟燭が燃え尽き際に一際大きく炎をあげるように、仮死状態だった少女は、いままさに、いまわの際を生きてしかたがなかつた。底なしの沼に飲み込まれるような、どこまでも墜落していくような感覚に翻弄された。死にゆく人が見るといふ赤い闇の中、いままさに自分の命が尽きていくとしていること

を少女は悟った。抗い、泣き叫びたかったが、もう声を出すことはかなわず、筋肉の一本たりとも動かせない。少女は肉体という名の牢獄に閉じ込められたごとく、もはやどうすることもできなかつた。少女は心の中で叫び、祈つた。たすけて。だれかたすけて。わたし、まだ、いきていたい。

宇宙から地上を探つていた統合思念体主流派の意識は、不意のコンタクトに遭遇した。統合思念体へのアクセスはそう簡単にできることではない。おそらく、希有な偶然の産物なのだろう。ともかく、少女の断末魔の叫びの「とき祈り」は、統合思念体のもとに届いてしまつたのである。

突然、少女の心の中に光が差し込み、声がどこからか聞こえてきた。

『助けを望むのか?』

『おねがいです。たすけてください。』

『そうか。助けることは造作もない。だが、対価は支払って貰わねばならん。』

統合思念体主流派は、好機の到来を感じ取つていた。またとない機会だ。

『たすけてくれたらなんでもします。』

『その言葉、忘れるな。どの道無くなるはずだつた命だ。おまえに、新しい命と、力と、使命を授けよう。これよりは、われわれのために生きるのだ!』

抗弁する暇もなく、心に差し込む光はぐんぐんその輝きを増し、恐ろしいばかりの強さで、少女の心を照らし続けた。少女は光に自

分が溶けだすように感じ、恐ろしくなつたが、ときすでに遅し。それは少女が自分自身でいることのできた、最期の瞬間だった。

せんせい、たすけて。

次の刹那、少女の意識は統合思念体の「加工改造工程」にともなう恐るべき情報圧により、崩壊した。

さて、個人とはなんだろう？　ある説によれば、個人とは、関係性の海の中に、「名付けられる」ことによって存在している、あたかもクラゲのような、頼りないものに過ぎないそうである。根拠が不確かであるという意味において。この議論に基づくと、「個人」の「崩壊」とは、「名前」あるいは「関係性」のどちらか、あるいは双方の「完全なる忘却」により、過不足なく成立することになる。この文脈で説明するならば、「記憶喪失」という症例のもつ独特的インパクトは、とりもなおさず、それが「個人の崩壊」を象徴するものであるからにほかならない。

話を持つて回ったが、つまりは、これが少女に起つたことであつた。統合思念体にとり、少女が自分自身であるための情報などは任務遂行上の妨害になりかねない雜音に過ぎない。従つて、そういうものは一掃された。雑作もないことだ。高圧洗浄をかけるようなものだ。そして、（統合思念体的な意味で）クリアになつた心の周りに、強力きわまりない心の構造体が構築される。富殿のように広壯で、要塞のように堅固で、牢獄のように頑丈な。そして、能力の付託。情報書き換え能力。ことに、戦闘性能に特化。そして、肉体の異常の補正。

少女は、夜の静寂の中、自らの柩から起き上がる。昼のうちに、「ご同輩」が二人、少女の柩に並んで運びこまれていたが、もはや少女に恐怖はない。少女は歩きだそうとする。と、引っかかるつづき、したたかに頭を打つた。額が切れて血が噴き出す。だが、それがなんだというのか？　呪文を唱え、手のひらで額をひと撫で。それでそこには、もうなにもない。透き通るように白い肌の、滑らかな、傷一つない皮膚。もはや、この世に理解できないものは殆ど

ない。立ち向かって打ち倒せない敵はおよそない。無敵の不沈戦艦はひそやかに進水し、威風堂々と進撃する。仮設靈安室の鍵のかかったドア。短く一言。かちり。廊下を真っ直ぐ。施錠された自動ドア。こちらも結果は同じ。病院を出ると指導役が待っていた。インターフォース仲間だ。少女はまだ、いささかぼんやりしていた。無理もあるまい。たった今、生まれ変わったばかりなのだ。指導役は少女に助言をあたえ、行くべき場所を思い起こさせ、姿を消した。少女は歩き出す。少女は今や、思つがままの場所に赴くことができるのだ。

人間は記憶はなくしても、人柄までが変わるわけではない。従つて、少女もまたそれに倣つている。かつてよりははるかに力強く振る舞うことができるのだけれど、それは統合思念体の施した補強によるところが大きい。ただ、この補強のせいで、ただでさえ淡い感情表現はすっかり封じ込められてしまふことになるのだけれど。

歩を進める少女の上に、雪がさらさらと降りかかった。少女は立ち止まり。暫しの間、降りしきる雪を飽かず眺めていた。ふと、少女は思う。

これを、わたしの、なまえにしよう。

その瞬間、少女「ゆき」の意識は一気に清明になった。と、同時に、微かにではあるが、なにかしらやるせない、大事なものを永久に無くしてしまったような感覚が生じた。それがなんのかは、ついにわからなかつたが。

所定の任地へと向かう歩を進める道すがら、「ゆき」はある建物の前を通りかかる。何かしら抗しがたいものを感じ、「ゆき」はその建物の中に入つていった。それは、「ゆき」のかつての自宅だつた。何かが思い出されようとして、そのくせ思い出すべきものが何一つないことに気付かされる、ひどく歯がゆい感覚に苛まれながら、「ゆき」はしばらく、かつて一介の病弱な少女だった頃、産まれて育ち、短い生涯の最期までを過ごした、小さな、古い家中を歩き回つた。そして、あるものに目をとめた。それは眼鏡だつた。銀縁の、飾り気のまったくない実用一途の。かつて、「ゆき」は眼鏡をかけていた。今ではその必要はない。いまや、可視光線に頼る不確実な視覚に依存する必要すらないのだ。「ゆき」は思うがまま、世界の果て、宇宙の彼方までも、その絶大なる観測能力をもつて、知覚することができるのだ。しかし、「ゆき」は、眼鏡を手に取り、かつてのように、鼻の上に載せた。その方が、より自分らしい姿のような気がしたから。そして、自分自身が以前瀕死で伏せついていた布団の枕元から文庫本を拾い上げた。「ゆき」はその場を去りがたい思いだつた。しかし、行かねばならない。果たすべき任務が、使命が、自分を待つてゐる。「ゆき」はほんの一瞬躊躇つたのち、今度こそ、これを最後と、かつての自宅を立ち去つた。もう一度と、帰つてくることはないだろう。

近傍のターミナル駅の駅員の証言。

「そのお客様でしたら、朝出札窓口を開けると同時にお見えにな

りました。たつた一言『西ノ宮』とおっしゃつたきり何を尋ねてもお答え下さいませんでしたので、とりあえず、東海道線の西ノ宮までの最速の切符を^レ用意しました。普通車に空きがありませんでしたので、すべてグリーン車で^レ用意させていただいたと記憶しております。従つてかなり高くなりましたが、料金はすべて一万円札の新札でお支払いいただきました。ええ、手の切れそうな新品の札でした。それで切符を先にお渡ししまして、お釣りを^レ用意している間に、お姿が見えなくなつてしましました。急いでコンコースに出てみましたが、お姿は見えませんでした。そうですね、年の頃は十代半ば、かなり整つた目鼻立ちの、ええ、有り体に言って可愛らしい子でした。あんまり似合わない眼鏡をかけてましたね。えらく足のはやい子だと思ったのを覚えております。』

作戦従事命令53

さて、学校に帰った先生は少女の死を教頭に報告し、指示を求めた。教頭は校長に相談してみようと答え、とりあえず溜まっている仕事を片付けるように、と言った。とても仕事に手をつけられる気分ではなかつたが、どちらにせよやるほかない仕事だ。その日は結局、さっぱりはかどらない仕事のうちに暮れていった。

翌日の先生の朝は、ひっくり返るような大騒動で始まった。病院から「遺体が紛失した。」とわけのわからない連絡が入り、病院に駆けつけてみると、皆が困惑していた。

判明した事実。夜半過ぎから早朝まで、病院はほぼ無監視状態だった。夜勤の医師と看護師はいずれもいたが、医師は普段通り0時半頃から仮眠室で仮眠しており、看護師の方は本来一人勤務しているべきところ人手不足のため単独で執務、加えて前日の午前中から連続勤務、非常に忙しかつたため疲れきつており、午前1時半ごろ休憩室の椅子に腰掛けたきり、午前5時に早朝勤務の看護師に振り起こされるまで仮眠状態だつた。防犯カメラはどうか？ 作動そのものは正常だつた。しかし、ビデオテープがいけなかつた。安物のテープを長年使い回したため、表面の粒子がとんでもしまい、判別できるような映像は残つていなかつた。仮設靈安室の鍵を預かっていた看護師も、玄関の自動ドアを施錠することになつてている受付の事務員も今一つ記憶が不確かで、きちんと鍵をかけたかどうか確言できなかつた。警察も動き出したが、動機も目的もわからず、捜査は最初から難航した。

そんな中で先生は、ある懸念にとらわれた。少女は仮死状態だつたのではないか？ 先生は医師に質問をぶつけてみた。医師は

愉快からぬ表情で、それでもしばらく考え、有り得ないことではないかもしない、と答えた。ただ、肺がかなりやられているから、息を吹き返したとしても、どの道長くは生きられなかつただろう、と。その時点ですでに病死の死亡診断書は有効になつており、法律的に少女は死亡していた。先生は納得がいかなかつたが、これ以上頑張つたところで無用の紛糾を招くだけかと思い、引き下がつた。学校に戻ると教頭が待ち構えており、先生を応接室に呼んで、封筒をひとつ手渡した。「遺言状」とある。社会科教諭を兼務している教頭が授業の一環として全生徒に書かせたものだということだった。校長と、その友人の弁護士も入つてきて、封が開けられた。

「内容は生徒たちに任せたし、特に検査もしていない。開ける機会など永遠に来ないで欲しかつたが……。」

教頭の咳きのうちに、折り畳まれた便箋が開かれた。内容は「簡単なもので、万一の場合には担任の先生に財産を遺贈する、とあつた。弁護士は遺言状を手にとつてざつと目を通し、

「内容は明瞭ですし、定式もきちんとしています。書類上の問題はありません。」

「知つての通り、あの子には身寄りがない。まったくない。どうするかね？ 遺贈を受けたくないのなら、断つてもよい。その場合、国庫があとを引き受けることになるが。」

先生は少し考え、遺贈を断ることにして、そつ告げた。「受ける理由がありませんから。」と先生は言った。

「よろしい。まあ、その方がよからう。あとは我々でやつておぐ。」「苦労さま。仕事に戻りなさい。」

先生は職員室に戻り、まずしなければならない仕事に取りかかった。クラスメートのひとりが死亡した事実を連絡網に流す仕事であった。少女の印象は希薄であった。クラスの半数以上の生徒が、名前を言われても少女の風貌を思い出せなかつた。葬儀も埋葬も行われなかつた。埋葬すべき遺体がなく、基本的に警察の捜査待ちをしていたこともある。しかし捜査は進展せず、そのうちにうやむやになつてしまつた。先生自身にしても、教頭たちに一任した時点ですっかり任せた気になつてしまつていた。かくして、薄幸の孤独な少女は、最後まで薄幸なまま、文字通り、この世から消えていったわけである。

作戦従事命令54

以上は歴史研究所実査部の調査報告書を翻案し、再構成したものである。途中に挙げられていた駅員の証言は、家出人捜索の私服警官を装つた実査部員に答えたものであった。

この実査部の調査は、「近代史の実相を明らかにする」という活動目的にそつたものでもあつたが、実は「宇宙人政権の弱みを探る」という裏の目的もあつた。これは、実査部に巣くっていた「反宇宙人政権」一派のさしがねだつた。しかし結局、この調査活動も奏功しなかつた。調査がほぼ完了したところで、調査チームのリーダー（実は実査部の反宇宙人政権派の頭目）は他ならぬ「長門有希同志じきじきの呼び出しをうけ、報告を求められた。資料をすべて持参のうえ出頭せよとのことだつた。リーダーは大わらわで出頭、本人を前におそろしく落ち着かない気分のまま報告した。本人自身からはなんらのコメントもなかつた。が、帰り際、ある人物に呼び止められ、資料をすべて巻き上げられてしまつた。この人物は宇宙人のひとりであり、調査の指示を下した当人でり、統合思念体内部の立ち入った事情について詳細を明らかにしてくれた人物でもあつた。呆然となつたリーダーはこのとき初めて、自分たちがいいようにあしらわれただけだと気づいた。目的は調査ではなく、実査部のなかの反宇宙人政権派を炙り出すためだつたのだと。リーダーは怒りにかられ、復讐を誓つた、はずだつた。しかし振り向いて一步踏み出した瞬間、記憶が消えてしまつた。いま誰と会つたのか、何が起つたのか、何に気づいたのか、すべてが、なんとなく振り返つたが、そこには誰もいない。首を捻りながら実査部に帰ると、調査中止命令が待つていた。資料はすべて破棄するようになつた。ところが資料はすべてなくなつており、リーダーは、「相変わらず仕事が早いじゃないか。」と声をかけられ、落ち着かない気分だつた。

なぜなら、自分が持ち出した資料をどうしてしまったのか、まったく覚えていなかつたのだから。ただ、無性に心配で仕方がなかつた。なにか取り返しのつかないことが起こるような懸念が、彼をおののかせた。

しばらくのち、組織改正と人事異動が発令された。ここに至つて、歴史研究所実査部は正式に解散され、その人員は時間進行調整省の各部署にばらばらに吸収されていった。ただ、「反宇宙人政権派」の一党は例外だつた。彼らは一様に一見昇級に見える事実上の降格人事にあり、他の官署にばらばらに散らされ、TPDDの返納（正確には再封止）を命じられ、隔時任務から永久に外されていったのだった。まさしく、反宇宙人政権派にとつては取り返しのつかない結果であつた。

さて、ここで我々は、黒幕に對面しなければならない。この調査活動の黒幕、未来人の黒幕、宇宙人政権の黒幕、この未来世界の、時代の黒幕、喜緑江美里同志に。喜緑同志は最初期型の3体のうちの1つであり、他の2体とは違つて、新規構築にて建造された。稳健派・新規構築・半自律制御（中位自律制御）。試作体であるが、良好な成績をあげ、以降の端末の構築にあたつては派閥を問わず、新規構築・半自律制御がスタンダードとなる。そして、試作構築であるだけに、試験的機軸（例えは多くの端末を同時進行監督できる機能もそのひとつである。）を多数搭載していた。必然的に、喜緑同志は、黒幕の位置に收まつていつた。『上局』内部での立場は長門有希同志の個人的な秘書、使用人、「専用の事務室の管理担当者」に過ぎない。しかし、それ以上になにが必要だろうか。喜緑同志の座る質素な事務机こそは、まさしく、『世界を総覧する席』なのである。世界のすべてを一手に掌握し、すべてをコントロールする、世界の黒幕、その名は、その名こそは、まさしく、そつ、・・・喜緑江美里同志。

さて、ここで興味ある一般的な疑問が生じる。なぜ、宇宙人たちは地球に留まり続けているのか？彼らの目的は涼宮ハルヒの観測であり、涼宮ハルヒ以外の一般人類などは凡百の有機生命体の中では一風変わった進化を遂げたという以外の価値はないはずである。この点に疑問を抱いた人間は数多い。長官もその1人である。以前長官は蛮勇をふるい、直接疑問をぶつけたことがある。

「人民革命党最上級委員長、長門有希同志！ 小職は閣下にござ質問致したくあります！」

当時はまだ長門有希同志は世界最高の地位を占めており、対応を簡略化する命令（「軽装令」）はまだ出ていない時期である。

「閣下をはじめ上局の皆様方には、常口頃、ご精勤まことにお疲れ様であります！ ご質問いたしたいことといいますのはほかでもございません！ なぜ、上局の諸姉諸兄方は、われわれ人類の命運のためにお心を碎いて下さるのでございましょうか！ 聞くところによりますと、上局の皆様方は『涼宮ハルヒ』なる人物の観測のために地上においてになられたとのこと！ しかし、その方はもうとうにお亡くなりだと聞きます！ なのになぜ、いまだに留まっておられるのでしょうか！ もとより個人的な疑問でしかございません！ お答えいただけなくともよづござります！ しかし、不都合がござりませんでしたら、お答えいただけましたら僕倆に存じます！」

長門有希同志はしばらく何も答えなかつた。気詰まりな沈黙が続いた。数分間が過ぎ、長官は立ち去る潮時がきたと感じた。謝罪し

て去りうとしたそのとを、不意に長門有希同志は口を切つた。

「観測事業は、」

瞬間間があり、

「 『 まだ継続中である。』

『 の要領を得ない答えで、長官は当面納得するほかなかつた。

「 有難うございました！ 失礼いたします！」

『 の問答の意味はなんだろうか？ 未来世界を概観すればわかるのだろうか？ 涼宮ハルヒがいるならば、機関もまた存在するはずである。実に、機関に相当する組織は存在し、その名を「環境保安省」といつ。「時間進行調整省」とはちょうど対偶のような関係にあり、官庁同士でありながら、直接の関係はきわめて希薄である。さて、逆に考えてみよつ。「機関」が存在するならば、必ず涼宮ハルヒはいるはずである。『 観測事業はまだ継続中』といふことならば、当然、そうでなければならぬ。

そう、実際に、涼宮ハルヒは『 いる』のだ！

さて、ここで我々は長門有希嬢の悲劇について知らねばならない。長門嬢は長らく、一つの大きな悲劇を抱えていた。それを簡単に言つてしまつならば、要するに、「死ぬこと」となる。「乞暇（暇乞い、すなわちこの世を立ち去る許可）申請」を長門有希嬢はずっと昔から折に触れて提出し、そのたびに却下されてきた。もうずっと以前から、長門嬢は、乞暇許可決定を待ち望んでいたのだ。

『貴下を用途廃止により担当事業の執務より解放し永久任務解除、自律的に自身に対し構成情報結合解除処理を適用することに同意を与え、または要求することを許可する。』

宇宙人一族は基本的に老化せず、原理的には死ぬことがない。この世から立ち去るにあたっては、仲間の誰かか、統合思念体自身に、情報連結解除処分を実行してもらうほかない。上に挙げた決定文書文例の文言の後半部分はそういうことを意味している。

長門嬢はもう少しで、情報連結解除処分を強制執行されかねない状況にいたつたことがある。それはあの12月18日事件のときだつた。統合思念体の開催した『特別観測事業評議会緊急臨時総会：ヒューマノイドインターフェース・パーソナルネーム長門有希の敢行した重大違反行為に対する審査ならびに処分決定会議』において、会議の流れは長門嬢に圧倒的に不利だった。『長門有希は明らかに動作不良である。供用に耐えない。直ちに撤収すべき。』という処分断行の論調が大半を占め、反論は弱く、『処分やむなし』の空気が充満していた。『長門有希という人物はすでに涼宮ハルヒにとって重要であり、軽率に判断を下すことは決定的な悪影響を誘発しかねない』という論旨が反論の基調であったが、強硬論の強いなか、

終始押され気味であった。しかし、あとは議決のみとこころまで議事が進行したところで、それまで沈黙を保っていた穩健派が突如発言した。穩健派は反論側の主張を完全に支持すると表明し、長門有希の動作に不安が残るならば後見役をたてればよい、と主張し、後見役には穩健派のインター・フェース喜緑江美里を充當しよう、と申し出た。この一連の発言で会議の流れはまったく変わり、議決の結果『長門有希任務継続・ただし後見役喜緑江美里の指導下において』が正式に決定となつた。

この劇的な転回はひとえに、それまでに喜緑江美里嬢の築いてきた実績の賜物だった。それというのも、喜緑嬢は一介のインター・フェースの身でありながら、急進派という統合思念体の一派閥そのものを信用失墜させることに成功したのだから。

急進派の意識は統合思念体のなかでは比較的新しい方にあたり、強硬意見を押し通して盛んに勢力を伸ばしており、穩健派主流派をはじめとする古株の意識にとつてはいささか面白くない存在であった。『特別観測事業』立ち上げの際も横槍を入れ、『主流派2・穩健派1』でほぼ確定していたインター・フェース建造計画から主流派担当分の1を自派に奪取、主流派の建造計画を台無しにして不興を買った。それで急進派が建造したのがかの朝倉涼子である。急進派は急進派なりに、朝倉涼子の建造にあたつては活動に不自由がないよう、丹精に努めた、はずだった。ところが蓋を開けてみると、朝倉涼子は涼宮ハルヒにまつたく相手にされず、口もきいてもらえず、朝倉涼子の評価と急進派の評価はいつしょくたに、とみに下落した。朝倉涼子は急進派が直接制御していただけに、その失墜はことに著しかつた。当初の任務は次の通りであった。『観測本務：朝倉涼子 警備主任・観測補助：長門有希 監査：喜緑江美里』。急進派がごり押しで本務の地位を奪取したことは言うまでもない。急進派が自信満々だった。朝倉涼子は急進派の秘蔵つ子で、失敗の可能性な

どは考慮すらしていなかった。しかし実際は惨憺たる失敗を喫し、朝倉涼子の担務は『観測本務』から『観測補助』、『観測本務者補佐』、『観測本務者後方補佐』と下落の一途を辿った。逆に長門有希の地位は相対的に向上、『観測主任・警備主事』を任せられ、急進派の面目は丸つぶれとなつた。状況の予期せぬ悪化に、急進派の焦りは深まつた。

朝倉涼子の、すなわち急進派の失敗の原因はどこにあるのだろう？それはやはり、急進派が朝倉涼子に施した人格設定に求めなければならない。急進派は朝倉涼子の建造にあたり、周囲の人間に影響を受けにくい心理機制を設定した。加えて、もともとの本人の性格もあつたのだろう、朝倉涼子は『優位からの指導』に長けていた。しかし、涼宮ハルヒはまさにこれらの点が気に障つたらしい。涼宮ハルヒという人物は独立心が強く、權威的立場への盲従を嫌つた。

『先生の覚えめでたい、優等生の学級委員』など、それだけで天敵も同然だつた。基本的に常に扱いづらい生徒だつた涼宮ハルヒについて、そういう立場の人間が自分に向ける『上から目線』は常に徹底的に我慢ならないものであつたのだから。

追い詰められた急進派は起死回生の策謀に打つて出た。それが『キヨン君暗殺未遂事件』である。それに先立ち、急進派は朝倉涼子を通して、穩健派のインタークエース喜緑江美里に接触をつけ、事前承認を取り付けようとした。その際、喜緑嬢はだいたい次のような答えを返した。

「あなたのするべきことをすればよいのではないでしょつか。」

この不明瞭な意思表示を朝倉涼子と急進派は『ゴーサイン』と解し、暗殺作戦を勇躍敢行した。

それより前、穩健派は急進派の焦りを感じ、何かしら過激な行動を起こすと予想していた。そして、インタークエースの一件以来折り合いの悪い主流派を通さずに、自分たち穩健派に事前承認を持ちかけてくるだろうとの予測もしていた。さて、対応をどうするべき

か？ おそらく彼らはインタークエースを介して接触していくだろうと思われた。統合思念体の意識野で直接話し合うと、衆人環視の中で声高に密談するに等しい。インタークエースを使用した方が却つてはるかに機密保持はたやすい。情勢は微妙である。非常に困難な判断をしなければならない。しかしてこの時、インタークエース喜緑江美里は穩健派の意識に対して大見得を切った。

「すべてこのわたくしにお任せ下さい。」

さすがに穩健派の意識といえどもこれには一瞬戸惑つた。一介のインタークエース風情がなにを大言壯語しようというのか？ しかし、このインタークエースの独断専行が致命的な結果にいたつたとしても、インタークエースの動作不良の名目で自分たちの責任は免れる。よし。ひとつ任せてみよう。ただし、失敗した場合、・・・

「みなまでおっしゃいますな。すべてせんからわきまえてあります。決してご迷惑はおかげしません。細工はりゅうりゅう、仕上げをご覧じる。」

そして、さきの受け答えとなるわけだ。インタークエース喜緑江美里の状況分析は以下の通りであつた。現在急進派ならびに朝倉涼子は予想外の情勢悪化に不安と焦燥を深めている。容認を仄めかす曖昧な応答ひとつで勇み足を踏む可能性は大きい。そうなればほぼ確実に、急進派は失脚だ。なぜなら、朝倉涼子の成功可能性は殆どなかつたのだから。インタークエース喜緑江美里は後に穩健派への報告の際こう言つたものだ。

「インタークエース喜緑江美里、貴下は急進派インタークエース朝倉涼子の成功可能性をどの程度と判断していたか？」
「1000分の1です。」

「0・1パーセントといふことか?」

「いいえ、1000分の1パーセントです。」

急進派は作戦立案にあたり、インターフェース長門有希の『建造仕様データ』を参照し、朝倉涼子よりもはるかに強力ではあるが、勝利の可能性はなくもない、と判断していた。しかし、彼らの参照したのはあくまで建造当初の仕様を記載した『建造仕様データ』であつて、現行の状態を記述した『現状仕様データ』ではなかつた。主流派はインターフェース長門有希にかなり頻繁に機能のアップデート、バージョンアップを繰り返し、長門嬢はいまや飛躍的に性能が向上していた。急進派といえど、『現状仕様データ』を目にしていたら、謀略の成就是有り得ないと理解したに違ひない。しかし急進派は、自分たちにいくらかでも有利なデータを鵜呑みにし、それ以上は調べようともしなかつた。『現状仕様データ』は『建造仕様データ』のすぐそばにあり、統合思念体全体に公開されていたというのに。喜緑嬢はアクセス記録を参照した際、『建造』のほうには急進派のアクセスの経歴があるのに、『現状』のほうにはそれがないことに気づき、おそらく焦燥のあまり早とちりしたのだろうと推測したが、実際にその通りだったのである。

かくして朝倉涼子はキヨン君を襲撃した。しかし、これは相手が悪すぎたと言えよう。なぜなら、これで朝倉涼子は長門有希を決定的に怒らせてしまったのだから。建造当初でさえ、駆逐艦で戦艦に立ち向かうようなものだつた。いまやその戦艦は艦隊レベルにまで強化されていた。

長門有希は激怒した。それは長門嬢自身かつて感じたことのない、赤くなるのを通り越して顔面蒼白になるほどの憤激だつた。恋する男の子が、大好きな男の子が、『くだらない理由で』殺害されようとしている。全身の血が逆流し、髪が残らず逆立つかと思われた。外見上、長門嬢にはなんの変化もなかつた。しかしその皮膚の下では、一途に恋する乙女の熱い血が沸き返つていた。長門嬢は朝倉の情報制御空間を朝倉もろとも崩壊させるための攻性情報を急ぎ入力し・・・叩きつけたと言つた方がいいかも知れない・・・、ついで自ら突入した。愛する男の子に怪我をさせるくらいなら、自分自身が切り刻まれたほうがましだつた。冷静な観察者なら、この時点で成功可能性は完全に0に帰したと悟つたことだらう。駆逐艦一隻に艦隊である。しかも駆逐艦の方は情勢判断を誤つており、艦隊のほうは完全に頭にきているという状況である。朝倉の命運はここに決した。そして急進派の没落も決定的となつた。最後の瞬間に急進派は朝倉を見放し、インターフェースの誤作動と強弁して責任逃れをしようとしたが今更手遅れだつた。急進派が朝倉に与えた詳細な訓令を、喜緑嬢は密かに傍聴、あらかじめ穩健派に提出していたのだ。

喜緑嬢はこの一連の過程で具体的に何をしたかと言えば、ただ一言曖昧な受け答えをしただけである。それ以外は、喜緑嬢は全体の

状況を注意深く観察して、つまり普段通りの仕事をしていに過ぎない。しかし手慣れた者にとつては、『事にあたつて何もしない』ということも立派に謀略の手段である。喜緑嬢は穩健派の総力を結集して建造したインターフェース。穩健派とはつまり方法論が穩健という意味であり、即ち、策謀を駆使した『静かな変化』を彼らは事としている。今回喜緑嬢が行使した手段はごく初歩的なものでしかないが、喜緑嬢にとつては小手先の手管に過ぎないことも、人間の目からすれば途方もない大謀略と化してしまう。

急進派は独断専行を弾劾され、卑劣な責任逃れを追及され、その上にインター・フェース喜緑嬢が『一存でした』曖昧な回答を早とちりしたことを見咎され、完全に信用をなくし、長らく雌伏を強いられることになる。

しかし喜緑嬢にしても、今回は幸運に助けられたことは認めていた。急進派の没落の原因は謀略に引っかかったせいばかりではない。むしろ彼ら自身の虚榮心と、不注意と、軽率さにその多くが求められる。

インターフェース同士の相互の関係は、その『操り主』である統合思念体各派閥間の関係を抜きにしては理解困難といえよう。統合思念体内部の諍いや思惑のぶつかり合い、権力闘争などはインター フェースたち同士の関係にかなりはつきりと反映されている。

朝倉涼子嬢と長門有希嬢はあまり仲がよくなかった。というよりはむしろ、長門嬢が朝倉嬢に対しても好印象を抱いていなかつたというべきだらうか。これも急進派と主流派の不仲を反映している。主流派は長門嬢への訓令の中で、再三に渡つて急進派とその手先（即ち朝倉嬢）への警戒感を表明しており、基本的に素直な長門嬢がそれにまつたく影響されなかつたとは考えられない。もともとそういう素地があつたため、長門嬢は朝倉嬢の処断にあたつて一切躊躇わなかつた。本来他のインターフェースを情報連結解除処分するためには事前承認が必要である。しかし長門嬢はその手続きを省略し、独自に処分を断行した。ここで、急進派の言い逃れ、『インターフェースの誤作動』が彼ら自身に裏目に出る結果になつた。『緊急避難措置』として長門嬢は免責され、さらに『果敢な判断により情勢の決定的な悪化を未然に防止した功績』により昇級、『観測主事』に任せられた。当然、真相はそうではないことなど先刻承知である。つまり、この措置そのものが急進派への当てこすりであった。

一方、朝倉嬢は長門嬢に比較的よい印象を抱いていたらしい。朝倉嬢は長門嬢のことを心配し、何くれとなく面倒を見、食事の支度をしたりしていたようである。『お節介なご近所さん』そのままに。しかし長門嬢の好意は獲得できなかつた。長門嬢は孤独な少女ではあつたが、だからといってお節介を受け入れるかというとそれはま

つたく話が別である。お節介な人間の常として、朝倉嬢は長門嬢の生活習慣や趣味には無頓着で、長門嬢の読書を一再ならず妨害し、殆ど外出しないことを難詰し、まったく実用性を欠いた読書傾向を批判し、その結果個人的にも印象を悪くした。長門嬢は一面趣味人であり、趣味人の常として、趣味に容喙を加えられることを非常に嫌う。好意の忠告が、好意を誘うとは限らない。

また、朝倉嬢のこうした好意的な態度も、やはり主流派と急進派の冷却した関係を反映していた。急進派は『他派のインターフェースの取り込みを図れ』との訓令を発していたのだから。この訓令は例によつて喜緑嬢に傍受され、喜緑嬢は穩健派に報告すると同時に直接これを主流派に通告、これによつて主流派の不信感はますます深まつた。理論上、ある派閥からその直属のインターフェースに宛てた通信は傍受不可能な筈であるが、喜緑嬢は『多チャンネルインターフェース監督機能』を使用、『監査モード』で朝倉嬢の通信データフォルダをスキヤン、急進派が送信した訓令をすべて読み取つていた。急進派の政策のすべては、穩健派に、さらには主流派に、筒抜けだつたわけである。ちなみに、主流派への直報には『緊急事態モード』を使用、長門嬢の通信チャンネルをいわばジャックして行つていた。この『監督機能』は「未完成のため実装はするものの当面使用しない予定」ということになつてはいたが、予定は予定である。ちなみに『監督機能』で行う他のインターフェースへのスキヤンや機能の使用などは、当該インターフェースへのスキヤンも感知もできない。ブロックも無効である。この特例的かつ特権的な機能は、穩健派の実力に他派が配慮した結果であつた。穩健派は実のところ主流派よりも古い意識で、主流派と協議のうえ権力闘争することなく脇に退き、普段は主流派のサポート役のような立場にあつたが、主流派よりもはるかに老獴であり、直接ことを構えようなどという派閥は存在しなかつた。急進派ですら、穩健派と直接対峙することは気が進まなかつたとみえ、さすがにいくらかの配慮

はしていた。そして、その稳健派はインターフェース派遣にあたつて、自派からは一体のみでよいが、実験的にいろいろな機能を搭載させて貰いたいと申し出、（急進派はかなり渋つたものの結局は）承認された。『生まれながらのフィクサー』『世界という名のゲーム盤で一人遊びに興じる女』『インター・フォース総監』、喜緑江美里嬢はかくして誕生した。そして、『監査』なる似つかわしい任務を帯びて任地へとやってきた。急進派の謀略を見事阻止（少なくともそうすることに少なからぬ貢献を）したことで、喜緑嬢はその任務を立派に果たしていたといふことが理解されよう。

さて、そういう背景を理解したうえで、もう一度朝倉涼子嬢について考察せねばならない。

急進派の訓令はともかく、朝倉涼子嬢の長門有希嬢に対する好意はどうやら真情であつたらしい。それだけに、長門嬢の好意を得ることができなかつたことは朝倉嬢にとつては痛手だつた。相手が『普通の女の子』なら、朝倉嬢にも十分可能性はあつたろう。しかし、朝倉嬢にとつては残念なことに、長門嬢はそうではなかつた。かつてキヨン君は長門嬢を最初に見かけたときにはじくも次のような感想をもらした。曰わく、「変な女」と。実際、長門嬢はかなり風変わりな女の子だつた。頑固なところもあり、扱いやさしい子ではなかつた。我々は長門嬢に素直で健気な、いじらしく可愛らしいイメージを抱いているが、その印象がキヨン君の目を通したものであることは念頭においておくべきだらう。恋する男の子に対する態度は当然、それ以外の万人に向けられるものとは異なる。長門嬢は関心のないことに対する徹底的無関心で、人間に対してもそれは同様だつた。長らく孤独に過ごしてきた人間の常として極端に無口で、非常に無愛想で、ある意味、遺憾ながら、人によつてはあまりそばにいてほしくないと思わせるところがなきにしもあらず。朝比奈みくるの腰の引けた態度にしても、途方もなく高い地位の人間に相対していることのみならず、長門嬢のぶつきらぼうな態度もその一因をなしているのだ。

朝倉嬢は長門嬢の好意を獲得できなかつただけではなく、その好意を「ただの人間」に『横取り』され、すこぶる面白くない氣分を味わわされた。それにとどまらず急進派の訓令はしだいに見放し気味のぞんざいなものになり、統合思念体全体でも朝倉嬢の評価は凋

落の一途、任務は責任を軽減される一方、まさしく四面楚歌であった。そんな中での急進派の秘密指令、「キヨン君暗殺作戦」は朝倉嬢にとつては朗報だつた。「こ」で事態を開けば、再び返り咲くことができる。それだけでなく、「彼」に復讐できる。注意すべきは、これは長門嬢の好意を横取りした「彼」への個人的な報復ではないということである。これは長門嬢を苦しめる「彼」に対する懲罰であった。長門嬢は恋する者がいつの世もそうであるように、「彼」のことを常に考え、心を碎き、時には酷く苦しみもしていた。朝倉嬢はごく単純に、長門嬢を苦しめる「彼」が許せなかつた。死の概念を理解できない者がどうして恋愛を理解できようか。朝倉嬢は統合思念体急進派が直接制御していただがゆえに、そういう一般的概念が理解不可能になつてしまつていた。急進派に理解できないことは、朝倉嬢にも理解できないのだ。

朝倉嬢は暗殺作戦の決行にあたつて、妙にゆっくりと取り組んできたことを想起されたい。本来、暗殺作戦は「速度戦」で実施することになつており、「通り魔作戦」と通称されていた。本来の目的にはその方が合致する筈である。しかし朝倉嬢はそうはしなかつた。独自のアレンジを加え、芝居がかつたやり方でことを進め、遂には長門嬢の突入を受けるに至つた。朝倉嬢は自分のシナリオをさらに進行させ、インターフェース同士でしかわからないやり方で、長門嬢が「彼」に対して抱いている感情を指摘した。ここまで展開で確実に言えるのは、朝倉嬢は自分の破滅の確実さを全然悟つていなかつた、ということである。とにかく、最初から激怒していた長門嬢はこの失敬な指摘を受けて更に怒り狂つた。この本質的にごく生真面目な少女にとって、精神の一一番鋭敏な部分に土足で踏み込むような言動は許容限度をはるかに超えたものだつた。いきおい長門嬢は必要以上の全力をあげて戦闘に傾注し、朝倉嬢を完敗に追い込んだ。

一つ確實に指摘できることがある。朝倉嬢は、長門嬢も彼もろとも葬り去つてしまつつもりだったのだ。いかなる感情の結果なのか、訓令を受けてのものなのか、あるいはただのついでなのか、判然としかねるが、明らかに殺害するつもりとしか考えられない攻撃ぶりからもそのことは明らかであろう。このように考えると、「彼」に正体を明かしたあの前段は、長門嬢を挑発し、おびき寄せるための餓だつたのだ、と結論することができる。獲物は餓にかかつたが、仕留めるには仕掛けの強度が不足だつたわけだ。結局、この「狩り」は、『獵師』が『獲物』に倒されて終わつた。去り際の朝倉嬢の科白は興味深い。「彼」に向かつて告げているといをとつてはいるが、長門嬢にも向けられていたとも思える。特に最後の一言、「涼宮さんとお幸せに。」は、長門嬢にはことにこたえる言葉だつた。長門嬢はまさにそのことで苦しんでいたのだから。朝倉嬢は「あなたがどんなに彼を好きでも、所詮あなたには出る幕はないのよ。」と言明したにひとしい。

朝倉嬢はいわゆる「ヤンデレ」ではなく、わかりやすい悪役でもない。朝倉嬢にとつては、生も死も大した違いはなかつた。殺人には際しても悪意はまったくなく、いかにも優しく振る舞つているときでも善意のかけらもありはしなかつた。朝倉嬢は現世に体をおいていながら、心はこの世にはなかつた。朝倉嬢の心とでもいうべきものは遙か空の彼方にあつた。統合思念体急進派の手先になつてこのかた、朝倉嬢はいわば常世の国の住人であり、善惡の彼岸も、生も死も、朝倉嬢にはまったく関係なかつた。情報生命体にとつて意味をなさないことは朝倉嬢にとつてもなんの意味もない。直結制御とは要するに人間としての心そのものを完全に中性化すること、情報生命体そのものを肉体ある人間としてこの世に配置すること、といったあつた。朝倉嬢の悲劇はここにこそある。ほとんど自由のない、窮屈な生活からようやく脱出すると、待つっていたのは完全に自由という概念を望むべくもない、操り人形の境涯だつたのだから。朝倉嬢は人間の姿をしていながら人間ではなかつた。まさに人形だつた。好意も惡意もなんの意味もなく、人を好きになることも嫌うこともなく、单なる手管として人に親切に接し、笑いによく似た表情で世をたばかり、周囲の『有機生命体ども』を、いかにも情報生命体的な、不完全で不条理な存在に対する、冷然とした軽蔑の高みから見下していた。朝倉嬢は同僚である長門嬢に対してだけは一定的好意的な態度で接していたが、残念ながら長門嬢にとつてそれは『押し付けがましく厚かましいお節介』以上のものではなかつた。就中、朝倉嬢は、ことあるごとに「彼」を批判し、「あの程度の有機生命体風情では長門さんには釣り合わないわ。」などと言つてしまい、決定的に長門嬢の逆鱗に触れてしまつた。もうずっと以前から、朝倉嬢は長門嬢にとつて『決して許せない女』だつた。しかし、朝倉嬢は長門嬢に嫌われていることには気がつかないままであつた。長

門嬢は常にあの調子で、誰に対しても対応が変わらない。即ち誰に対しても無愛想。反感を抱いていてもそれは表情に出ない。そういった理由で、朝倉嬢は好かれていないことは悟っていたが、嫌われているとまでは認識していなかつた。

その朝倉嬢を、長門嬢が12月18日事件の際残留させたのはなぜだつたのか？ これは難解な問題のようではあるが、歴史の進行のなかでは、重大な意味をもつ符合に見えることが単なる間違いの結果だつたり、偶然とは思えないような巡り合わせがまさしく單なる偶然だつたりすることが往々にしてある。この場合もそうだつた。長門嬢は、朝倉嬢に「始末をつける」のをうつかり忘れてしまつたのだ。長門嬢にとっては、朝倉嬢というのは、『どうでもいい人』のカテゴリーに属する。（広義に定義するならば「許せない人」もこの範疇に入る筈である。）長門嬢は自らの手で朝倉嬢の『ケリをつけた』ことで朝倉嬢を過去帳に繰り込んでしまい、以後要素として考慮することをやめてしまつた。涼宮ハルヒを一般人化して他校に移動すると朝倉嬢が消える理由がなくなつてしまつが、そこまで考えが及ばなかつたのだ。12月18日事件における世界改変が長門嬢個人の判断に基づいて実行されたことに留意されたい。よく注意して見るならば、世界改変の様態がいわば『雑』なことが見出されよう。即ちその時点での長門嬢の注意力の及ぶ範囲の限り、もともとが陰謀や謀略に不向きな長門嬢の、しかも累積したエラーで惑乱状態の粗雑な注意力の限界を如実に表しているのだ。つまり、ものはすでに忘れ去つたも同然の朝倉嬢の存在は見過ごされてしまつたのである。

朝倉嬢という人は、遺憾ながら、もともと壊れかけた人物だった。本来善良な人物だったのだが、疑心暗鬼の塊のような両親に間断なく抑圧をかけられ続けた結果心が挫けてしまい、それきり立ち直ることができず、遂には腐つてしまつた。統合思念体急進派に取り込まれた当時には既に文字通り心がボロボロの状態であり、急進派は定石である高情報圧心理洗浄を施工しなかつた。なぜなら、朝倉嬢の心はすでに高圧洗浄には耐えられない状態だったのだから。急進派は取りあえず修復可能な部分のみ急速立て直して構造保持加工を施し、そのままでは穴だらけの心の隙間に入り込む形で直結制御ツールを投入した。皮肉にも、これらの空隙があつたおかげで、かなり容量を必要とする直結制御ツールが正常動作することができたということである。朝倉嬢の崩れかかった心は、急進派の加工によって曲がりなりにも正常に近い状態を保つた。しかしやはり、そこかしこ、人間として保持すべきものが欠落してしまつていたことは否定できない。12月18日事件の際、結局朝倉嬢はキヨン君殺害に走つた。この事実こそは、この致命的な欠落を端的に表している。

朝倉嬢にとって長門嬢は意向を酌むことが困難な、扱い辛い女の子だった。というよりは、誰にとっても扱い辛い子だった。統合思念体にとってもそうだったことは特筆する価値がある。統合思念体主流派は長門嬢の活動に支障が生じないよう丹精に努めていたとはいえる、ときに困らされることもなくはなかつた。最初の違和感は長門嬢の着任のときにすでにあつた。長門嬢の任地到着を出迎えたのは病院の玄関でも待ち受けていたインターフェース仲間、具体的には喜緑江美里嬢であつたが、まず、西ノ宮駅に現れた長門嬢は、なぜか不要ない筈の眼鏡をかけていた。喜緑嬢は心得たもので批評は一切しなかつたが、それとなく水を向けてはみた。しかし明確な

答は得られず、『なにか変だぞ』という印象を主流派に抱かせた。

主流派自身も長門嬢に眼鏡の件に関しては下問してはいたが、回答は得られていなかつた。インターフェースが所属派閥に回答を寄せざらないなどとは前代未聞である。次には名前のことがあつた。主流派は穩健派と協議のうえ、『長門有理』なる名前を用意していた。

喜緑江美里嬢にその命名の儀が託されたのだが、意外千万にも長門嬢はこれを受け入れなかつた。長門嬢は『ゆき』という響きに頑固に拘つた。長門嬢とのコミュニケーションは容易ではない。基本的に、『不服があると黙る』のだが、始終押し黙つているうえに不意に会話を打ち切つてしまつことも多く、他の多くの場合に急に黙り込んでしまうものだから区別をつけるのが困難なのだ。さすがの喜緑嬢も幾分苦労しながら微妙なニュアンスを見分けて長門嬢の意向を聞き出し、結局命名は『長門有希』ということで妥結した。まさに『妥結』というに相応しい交渉だつた。インターフェースが所属派閥の命名を突っぱねるなど、前代未聞にも程がある話である。

長門嬢はその他にも読書好きな点、全般的に表現下手な点などインターフェースにあるまじき特徴が見いだされた。いわゆる『キャラ作り』かとの穿った観測もあつたがそうではなく、本人自身これらについては明確な説明ができないようであった。加えて、これらについて追及すると長門嬢は黙り込んでしまう。不服を抱いた緘默である。喜緑嬢は觀察の結果、これらの特徴は長門嬢のもともとの人格に深く根ざしたものであり、忠告はあるか命令をもつとしても変化を期待することはできないと悟り、これらの点については『誤差の範囲内につき特に許容するよう配意かた主流派に通告されたい』と穩健派に報告した。これにより、『変なインターフェース』長門有希嬢は一応その活動を許された。長門嬢はこの報告について耳にしており、おかげで喜緑嬢は長門嬢にとつての『信頼できる同僚』となりおおせることができたのである。朝倉嬢はこういった配慮には無縁だった。どちらかというと過干渉の傾向があり、長門嬢のインターフェースらしからぬ特徴をしつけずけと批判した。喜緑嬢が長門嬢に配慮したのはなにも優しさからではない。人間的情性に染まるには、喜緑嬢はあまりに『統合思念体的』過ぎた。喜緑嬢は長門嬢の気持ちを逆撫でし続けるとかなり強い反感を買い、結果拒絶されると見抜いたがゆえにそうしたまでのことである。長門嬢の『特徴』すべてはかつて人間だったころの、即ちもう思い出すことすらかなわないもののいわば残渣、批評を加えることは非常に強いフランストレーションを呼び起こし、つまり逆鱗に直結している。喜緑嬢はそのことを理解していた。朝倉嬢はそれよりもはるかに『人間的』だった。お節介な女子は、危なつかしい同僚が心配で仕方ないのである。あるいは、こういった政治的配慮に欠けることが朝倉嬢の人間的特徴であつたともいえよう。

長門嬢は任務には非常に有能、忠実であり、ときおり忠実すぎるのではないかと思われるほどだった。そんな長門嬢の前にひとりの男子が現れる。キヨン君の登場である。キヨン君についての詳述は他の機会に譲り、ここではキヨン君が長門嬢にとっての必要欠くべからざるキーマンであることだけを特に強調しておきたい。長門嬢にとって、キヨン君の登場以降、まさに『彼』が世界の中心になってしまったのだから。

就役開始後半年余りを経過した7月7日、長門嬢はそれぞれ違う時間平面上からキヨン君の訪問を受けた。その最初の、三年後から朝比奈みくると共に来訪した『彼』に相対した際、長門嬢は事情を理解する必要上、同期を実施した。その際、情報群に混じって、なにかが一緒にダウンロードされてきたのだった。それは、『彼』を不思議に大事に思える気持ち、とても暖かい、甘やかなものだった。『彼』のためなら何でもできる。故に、長門嬢はエマージェンシーモードを特に発動し、流体情報凍結といつ、秘蔵の離れ業をやってのけたのである。もつともこの措置はそうでなくとも必要なものではあったが、決断の過程に大きく寄与したことは否定できない。そして同時に、長門嬢は自身の運命を悟らされる。三年後の冬に原因不明のエラーを発生させることを。しかし、当面どうすることもできない。最初の二人に流体情報凍結を実施し、次の一人に自身に適用すべき補正プログラムを作成して手交、送り出してしまった、長門嬢はひとり、原任務に復帰した。そして、さきほど感知した「何か」を検討した。長門嬢は自身がこんなにも暖かな気持ちを持ち得ると知つて、何故だかそう悪い気はしなかつた。まるでかぐわしい香りの飴玉を味わうように、長門嬢は「それ」を心中で静かに転がしていた。

そして三年間が経過し、長門嬢は高等学校に入学の運びとなつた。そして、ある日の放課後、「彼」との初対面を果たした。・・・三

年前に一度会つてはいるが、実感としてはこれで正しからう。『中核目標』涼宮ハルヒ嬢も一緒だつた。

足音高く廊下を進んできた人物がノックもせずに勢いよくドアを開いた。ばん！　そして開口一番、

「いい部屋ね。あなたが新入部員？　この部屋、使わせてもらひうわ。いいわよね？　また来るわ。」

そして再び、ばん！　高らかにドアを閉めて立ち去つた。これがその同じ日の昼下がり、長門嬢と涼宮ハルヒ嬢との出会いの一幕である。

作戦従事命令64

それが昼休みが始まってすぐの話であった。涼宮嬢は昼休みが終わる少し前に再び現れ、長門嬢に質問した。

「本当に使わせてもらひつて構わないのね？」

「いい。」

「あなた、名前は？」

「長門有希。」

「ふうん。ずいぶん本が好きなようね？」

「そう。」

涼宮嬢はふいに長門嬢の正面にまわり、姿勢を低くして長門嬢を真っ直ぐ見つめた。さすがの長門嬢も「中核目標」本人の無遠慮な眼差しに、本から目を上げて涼宮嬢を見返した。目があった。涼宮嬢は白い歯がこぼれんばかりに満面の笑みを浮かべ、一回大きく頷いて立ち去った。殆ど同時に予鈴が鳴り、長門嬢も本を閉じて教室に戻つていった。

旧館の出口で、朝倉嬢が涼宮嬢に声をかけた。

「涼宮さん……」

呼びかけはたしかに聞こえていた筈だが、涼宮嬢は一切意に介さず、振り向きもせずに足早に立ち去つてしまつた。長門嬢もすぐに続いて通りかかり、朝倉嬢には無関心なふうで去つた。朝倉嬢はあまり悪い気分を味わわされながら、自分も教室へ戻つていった。どちらもいつもと同じだったとはいえる。

さて、これに先立つこと数ヶ月前、朝比奈みくるの身辺にも新たな展開が生じていた。星臨嬢の撤収、そして上司の交代である。

ある日彼女が帰宅すると、星嬢が奇妙に真面目な表情で待ち構えていた。ついにその日がやってきたのだ。

「本日をもって私の指導任務は終了となります。お世話になります」と、星嬢はそう言って手を差し出した。彼女は握り返す。

「もう生活上の不安などはありませんね？ 大丈夫ですね？」
「・・・はい。」

確かに、この時代で生きていいくことについてはすでに相当慣れていた。しかし、微かな不安がないでもなかつた。数日前にあつた、上司の交代である。そのときまで彼女は長官じきじきの指導下にあり、隔時通信、いじとはいえ、制限の多いなか、可能な限りの懇切丁寧な指揮を受けていた。しかしある夕方のこと、いつも通りの報告と指示伝達を受けたのち、長官は切り出した。

「朝比奈みくる、君には長らくの間本当に世話をなつた。私の指揮は今日で終わりだ。ついでに言えども、君に直接通信をとるのは今日が最後になろう。明日からは、今日付けで着任した作戦局長が指揮をとる。私は顔を合わせてないのでどんな人だかよくわからないが、よく言つことを聞いて、しっかり勤めてくれたまえ。・・・おかしなことを言つようだが、君の存在によって僕がどれだけ救われたか知らない。時折、娘が僕のもとに帰つてきてくれたような気がしたものだ。有難う、本当に有難う。・・・じゃあ、君とはこれで、しばしの間お別れだ。元気でな。・・・いつかまた会うときがあつ

たら、そのときにはゆっくつ話をじみつけ。では、さみない、
いつまでもお達者で・・・。
」

彼女が返答する間もなく、通信は切れてしまった。

彼女はノゾミに質問する。

「長官は『娘がぼくのもとに』とおっしゃっていましたが、なんのことはないのでしょうか？」

ノゾミはすぐには答えず、思案げな表情をしていたが、ややあつて、

「その質問に回答を与えるには、未だ時機ではないと答えておくことにしましょう。あなたはとりあえず、いまは職務に専念しなければなりません。」

ノゾミは言葉を切った。その表情は曇っていた。心配で仕方なかつたのである。しかし、命令は命令だ。ノゾミは泣き出しそうになる自分を必死に抑えなければならなかつた。ノゾミは努めて声と表情と明るくし、

「では、これでお別れです。またお会いするかもしません。しないかもしれません。いまのところどうなるかわかりません。いずれにせよ、どうぞいつまでもお達者で。観測問題クリアのため、明日朝7時までは私の部屋には入らないで下さい。」

彼女もまた不安だつた。長官の後を引き継いだ『作戦局長』なる人物は非常に不親切だつたのだから。彼女は木で鼻を括つたような局長に不安を抱き、ノゾミに相談してみた。しかしノゾミからは「その方が普通ですよ。」という返答が得られただけだつた。実際、その通りでもあつた。それにしても、心細いこと限りない。長官に

もノゾミにも相次いで去られてしまつたら、もう完全に自分は独りぼっちだから。そのとき突然、彼女は自分の決心を思い起した。自動送迎車での涙を。独りぼっちを堪える誓いを。彼女は、そう、彼女もまた、今このとき、泣き出しそうになる自分を抑えなければならぬ。必死に努力はしたが、涙が一つぶ二つぶ三つぶこぼれ、声は震えた。彼女は言う。

「……お世話になりました……。ノゾミさんもいつまでもお達者で……。」

ノゾミは微かに微笑み、もう一度手を差し出した。いま一度、2人は握手を交わし、ノゾミは、

「さよなら。」

と告げて、一階への階段を上がり、自室に退いた。彼女も自室に戻り、泣き出すのをなお必死に我慢しようと試みたが、涙は次から次へと頬を濡らした。ついに彼女は涙に負けた。うずくまり、彼女は泣き続けていた。決心したとはいえ、もうこれで、すっかり独りぼっちになつてしまつたのだから。いざ現実になつてみると、その心細さは言語に絶した。

さて、二階に退いたノゾミは未来へと帰るのだろうか？ そうではなかつた。ノゾミは音をたてないよう窓を開け、バルコニーから静かに庭に飛び降り、低い生け垣を越えて隣家の庭に抜け、庭に面した大きな窓から中に入った。おりから家人と客と思しき人々のホームパーティーじみた中にである。突然の闖入者はしかし、彼らを驚かせた様子はまつたくなかつた。そこにいた全員が、静かにノ

ゾミに注視している。ノゾミは一渡り見回し、口を開いた。

「これより現地派遣部隊の臨時会議を開く。」

そう、彼女の家のすぐ隣りが、未来人たちの本拠地、通称「現地本部」であったのだ。ノゾミは続ける。

「議長は私でよろしいか。」

返答はない。この場合これは議長選任への同意を表す。

「欠員は?」

「資金部副部長がまだ来ていません。」

誰かが答える。

「細目の勘定取り纏めがまだ済んでいないことがあります。」

「資金部長は?」

「ここにあります。」

「必要額は確保しているか?」

「もちろんです。」

「よろしい。前回の実績は?」

「執行資金二十万円、回収資金一百七十二万六千三百十円。細目の報告は必要ですか?」

「大変結構。細目の報告は本省に直接せよ。私には必要ない。」

「了解しました。」

「ううう」という言葉をすると未来人たちが高利貸しでもしているようだがそうではない。未来人たちの資金獲得は合法的に行われている。具体的には公営ギャンブルによって。よりはっきり言つてしまえば

競馬によって。未来たちは資金獲得問題について討議した際、ある厄介な時間の性質について考慮しなければならなかつた。『収束可能分岐』の問題である。別名『時間の弾力性』ともいわれる。これは『ある可能性の範囲内において発生し得る、あるいはし得た分岐が、時空間の連續性を保持しうる限度内において再現される際に発現する』ことを意味している。要するに、『ギャンブルの結果はその時あり得る可能性に常に左右される』ということに他ならない。これは資金獲得事業の最大のリスクである。

それでなくとも、未来人たちの資金獲得は困難を極める。まず、いわゆる正業につくことができない。どんなにこまかい仕事であろうとも、『当該時間平面上の現住住民の正規の資金獲得行動に対して一切の妨害行為を厳禁する』「派遣部隊就業禁止規則」により認められない。未来人が当該時間平面上において就業することは即ち『現住住民の働き口を略奪するという妨害行為』であるという判断である。かといって犯罪行為などはそれこそ問題外、時間移動の際金銭を携行することは禁則事項に該当、株式などの投資は当該時間平面上の経済に及ぼす影響が大きすぎるため厳禁、したがって資金獲得の手段は自ずから限られる。つまり公に認められた、あるいは事实上黙認されているギャンブル以外にない。しかし先に挙げた「時間の弾力性」により、ギャンブルの中でもさらに極限される。例えば、パチンコのたぐいなどはもつともいけない。基本的にこれは機械との一騎打ちであるため、平たく言ってしまえば普通にパチンコして勝つか負けるかというくらいの確度しか期待できない。したがってこれは検討段階で切り捨てられた。確度を上げるためにには、なるべく多くの人が関わり、なるべく多くの金銭が動くものでなければいけない。それも規模が大きいほどよい。従つて競艇や競輪よりも競馬、その中でも中央競馬のレースを集中して狙うことになる。あまり倍率の高くない堅い競走の投票券を多額に買い込み、少しづつ増やすのが未来人流だ。彼らの秘密兵器は言わずもがな、「明日の競馬新聞」である。未来に残っているデータなどは使わない。データが新鮮でないと、すなわちレースの現行時点から離れた時点で参照したデータを使用すると、「時間の弾力性」が発現してしまう可能性が高まるからである。まったく内容が同じであろうとも、新鮮なデータを使用してリスクを低減するわけだ。かといってレース終了直後では却つてよくない。詳細の説明は省くが、『直近観測に

よる波動変化』により、競走結果が変化してしまつことがあるからだ。これを『時間が柔らかい』あるいは『時間が固まつていな』と俗に称する。一晩くらい置けばだいたい『固まる』のだ。『固まつて』しまえば、堅いレースならば、そつそつ変化することはない。

このようにして未来人たちは、われわれの時代の競馬ファン諸君の勝馬投票券購入資金のうちほんの一部分を抜き出して、自分たちのために使つていた。この資金獲得事業は警備隊とは別に、専門の資金調達部隊が担当していたが、「まったく退屈極まりない、ただ神経がすり減るだけの作業だつた。」とのことである。・・・未来人はたいてい人混みに弱い。競馬場の雑踏のせいでくたくたに疲れてしまうのである。それはともかくとして、総額にして数億円がこの一連の地道な作業によって調達され、生活資金や彼女への渡しきり資金として支出されていった。

つづいてノゾミは質問を発する。

「警備部、何か異状は？」
「現在特にありません。」
「よろしい。」

ノゾミは一回を見渡し、続ける。

「不肖、本職星臨は先刻、『指導任務』を完了いたしました。これよりは警備部要員として合流することになります。よろしく『指導』鞭撻のほどを。」

ノゾミは一礼し、期せずして拍手が起こつた。未来へ帰る？ 否。ノゾミの職務はこれから始まると言つても過言ではない。まさしく、

『ここからが本番』なのだ。

さて、そういうつてもノゾミには欠点が一つあった。とても目立つのである。『すらりと背の高いスタイル抜群の美女』。さあ、目立たない理由が思いつく方は申し出ていただきたいほどである。ことに昼間は人目にとまつた。自然にノゾミは裏方に徹することになった。警備部の任務は以下の各担務、「先行哨戒」「前衛」「本務」「後方」「殿」^{しづか}「現地指揮」「指令」のうち、いくつかが適宜増強または省略されることになつていて。交代制ということになつてはいたが前述の理由でノゾミは現場に出られないため、担務が「指令」ばかりになつていつた。裏方の中でも要、もつとも重要な任務、場合によつては「見なし最高指揮官」の権限を発動できる立場である。もともと頼られていたノゾミのこと、ごく簡単にこの任務に習熟してしまい、理論上全員同格の未来人たちの中で一頭地抜きん出る存在となるのにほとんど時間はかからなかつた。しかし、連續して指令担務ばかり担当することは適切でないという業務指導が本省の人事担当からあつたため、ノゾミは時折「先行哨戒」担務を担当することになつた。彼女に一時間ほど先行し、行路の安全を事前点検するのがその任務である。

そしてある朝、ノゾミが「先行哨戒」任務に従事していると、不意に綺麗な女の子が間合いの中にじく自然に入り込んで、ノゾミに問いかけた。

「あんたたち、みくるのなんなんだい？」

ノゾミはこの綺麗な少女、縁なす黒髪をくるぶしに届かんばかりに豊かになびかせる、好奇心でいっぱいの瞳をきらきらと輝かせた、元気溌剌とした女の子が誰なのかを知っていた。従つて、じく自然に、次のように挨拶した。

「おはようござります。鶴屋さん。」

「おおっ！ あんたはあたしのことを知ってるんだね！ あんたとはじこかで会つたこと、あるつかなかつ？ あんたみたいな美人、ちよつとやそつとじや忘れないと思つんだけれどもなあ！」

表面上気楽な調子で言いながら、鶴屋嬢は警戒態勢をとる。一跳びで飛び下がつて戦闘に、防御戦、さらには制圧戦に入るための、脚のバネの準備。大金持ちの名家の娘で、次期確定継承権の保持者である鶴屋嬢はその一面格闘技に興味を持つており、ある古流武術で頭角をあらわし、「自分の身は十分自分で守れる」と折り紙をつけられていた。「ただし、深入りはしないこと」という条件つきではあったが。このことから、当然配置るべきボディーガードを学校の行き帰りに限つては省略するという特例が認められていたくらいである。しかしその鶴屋嬢にしても、自分よりもはるかに上手の相手に相対しているとはさすがに気がつかないようであった。ノゾミは鶴屋嬢の警戒を察して静かに述べる。

「そう警戒なさいますな。審意は一切ありません。あなたに対しても、朝比奈みくるさんに対してもね。私どもは朝比奈みくるさんの、いわば護衛です。諸般の事情により、本人に知られぬようになければならないのですが。」

「へえ?」

「問題の要点は、『朝比奈みくるさんへの対応』とこう一点に集約されると思われます。我々は朝比奈みくるさんを護衛しております。あなたも朝比奈みくるさんを心配し気にかけているご様子。奇しくもこの点で、我々とあなたの利害は一致しています。ただ、我々が何者であるかは、」

「あいわかった。皆まで言わずともいいによるよ。あんたたちがみくるの仲間なのはだいたい見当がついていたけど、何をしてるのか、ちょっと気になつたのを…。みくるはあんたたちのことは全然知らないみたいだからね。みくるを守つてゐるなら何も言つことないやー。」

「お気遣いいたみります。」

そこで学校に到着し、鶴屋嬢は校内に去り、ノゾミはそのまま校門を通過、『先行哨戒』任務を完了した。「通学行路上に現在のところ異状なし。」

ノゾミの見立てによると、鶴屋嬢はすでにかなりの使い手ではあつたがいまだに成長途上、伸びしろはまだ十分、『育て方しだいではかなりのものになる、将来楽しみな少壮格闘家』となる。ただ、少々不用心な点は指摘できた。ノゾミの間合いに不用意に侵入してきたことがそれである。ある程度の技量を達成した格闘家にとつて、力試しの機会を求めるのはむしろ自然なことではあったが、素人のようにではなく、心得のある格闘家らしく、気配を消してかかつたのは少々やりすぎだった。悪戯と言つてしまえばそれまでかも知れ

ないが、これは『交戦意志あり』と見なされても仕方のない行動なのである。実際、ノゾミは反射的に反応した。もう少しで、必殺の鉄拳がことともあろうに鶴屋嬢相手に炸裂してしまうところだったのだ。ノゾミはすんでのところで動き出していた鉄拳を收め、事なきを得た。未来人一派にとつても鶴屋嬢は重要人物である。鶴屋嬢はノゾミの鉄拳をよけられるほどの技量はいまだなく、誤つて反撃が成就してしまつたとしたら当然無事では済まず、最悪の事態にも可能性がないとは言えず、万一そんなことになつてしまつたら、未来人一派も、ノゾミ個人も、極めて困難な立場になつてしまうことは確実である。危機一髪だったのだ。未来人の代表と鶴屋嬢との初接觸は、かくのことく危なつかしい経緯であった。

さて、鶴屋嬢はそんなこととは知らず、いつも通りに登校した。しかし普段より早く到着したため、普段会わない人物と行き会つた。それは長門嬢であった。鶴屋嬢は元気に挨拶する。

「やあっ！ 有希つこおはよう！」

返事はないが、鶴屋嬢は意に介さない。長門嬢が自己表現を苦手とすることなどは先刻承知である。鶴屋嬢は相変わらずの上機嫌で立ち去り、長門嬢は部室へ向かつ。朝の読書のために。

その放課後、鶴屋嬢が下校し帰宅中、朝出会つた人物に呼び止められた。

「やあっ！ あんたかい！ お勤めご苦労！」

「星臨と申します。ノゾミとお呼びいただければ。」

「ノゾミさんだね！ 以降ともよろしく！」

「よろしくお願ひいたします。・・・で、あのう、ひとつお願ひがあるのですが。」

「なんだい？」

「朝のようなことはなるべく慎んでいただけと助かります。」

「どいつど？」

「急に私の間合いに入つておいででしたので、非常に驚きました。」

「あはは！ 驚かして！」めんよ！ すつごい美人がすつごい気合いで歩いてるからさ！ ちよつちよつ！」

ノゾミは言葉を選んだ。いくらなんでも、「そのせいではあなたは

命を危険にさらしましたよ。」などと脅迫めいたことを言つわけにはいかない。

「そうですか。恐れ入ります。ただ、今後は」勘弁いただけないと有り難いです。心臓によろしくありませんので・・・。」

のちに鶴屋嬢は述懐し、「あたしにもかつて無鉄砲な時代があつたが、その中にあつてこの事例は真に危険な、後になつて心底心胆寒からしめたものだつた。」というような意味のことを述べている。「無知というものは恐ろしい。かつてのあたしが現在のようにノゾミさんの実力を知つていたら、絶対そんなことはしなかつただろう。」

しかし、鶴屋嬢が修練の末にノゾミの眞の実力を悟り、無鉄砲さの代償を、間一髪、支払わずに済んだのだと理解するのは、まだ当分、先の話である。

ノゾミは非常に田立つゝえ、見かけ上そんなに強そつこは見えない。鶴屋嬢が見誤るのもある意味仕方ない面もある。何よりも、そもそもノゾミは、朝比奈みくるを心配するあまりに、時間進行調整省長官が強権で無理にねじ込んだ人員なのであるから。

さて一方、朝比奈みくるはといえば、彼女はノゾミと鶴屋さんがこのような危なつかしい接触をしているとはまったく思いもよらず、独りぼっちの不安な「現地時間平面」上の出張暮らし。最初こそ不安でたまらなかつたが、鶴屋さんの知遇を得て、それなりに学校生活を楽しむことができるようになつてきた。そんなある日、朗報が舞い込んだ。TPDDの実装が許可されたのである。いつもの定時連絡のあと、ごく事務的に「研修期間終了」が通告された。そして、TPDDの実装と現行化が指示され、直ちに有効となつた。具体的

には、彼女の生体IC／Dシステムの中にTPDDが認識された。

その後幾度かに分けて、厳密な指令のもと試運転および通信研修が行われ、「単独使用免許」が交付された。「必ず指揮伺いのうえ使用のこと」との限定付きで。この一連の手続きにより、彼女は曲がりなりにも一人前の、「時間進行調整省作戦局作戦部作戦課専従調査員」として認められたわけである。だがそのおかげで、指示内容などについての詳細はますます明かしてもらえなくなってしまったのだけれど。そしてその後しばらくして、まったくついでのようない人事異動が発令され、彼女は正式に「作戦課長」に昇任した。『命 国際連邦中級2等官朝比奈みくる 時間進行調整省作戦局作戦部 作戦課課長に任ずる。以上。』

一年は瞬く間に過ぎ去り、再び春がやつてきた。いよいよ本務開始である。入学式当日、彼女は鶴屋さんといっしょに校門のそばの階段において、どの子が涼宮ハルヒさんだらうと入ってくる生徒たちを見下ろしていたが、どうやら見落としたらしい。しかし、やがて物語は思わぬ方向に進み始める。

彼女は涼宮ハルヒとの関わりにおいて、『接触の予定なし、観察に徹せよ』との指令を受けていた。その観察は涼宮ハルヒ本人の見えないところで実施可能なものであった。生体IC／Dシステムに組み込まれた「時空間変位計」を記録モードで動作させておけばよいのだ。報告はデータをフォルダごと隔時送信するだけ。まったくなんてことない仕事だった。指令により、彼女は涼宮ハルヒに接近しないように注意を払っていた。しかし、向こうから来るぶんにはどうしようもない。

およそ1か月は何事もなかつた。そして5月のはじめ、「ゴールデンウイークの明けたあたりで、事態は急展開する。

しばらく前から、時折彼女は涼宮ハルヒの姿を認めていた。かなりの早足で廊下を歩きながら、ちらりと視線をこちらに巡らせる。幾度かは目があつた。しかし彼女はそんなことはあまり気にしていなかつた。何度も視線が自分に止まっているようにも感じたが、気のせいだらうと思ったのだ。もう少し注意力のある観察者なら、自身が注目されている可能性を考慮しただらう。しかしいかんせん、良くも悪くも、彼女は朝比奈みくるであつた。従つてある日の放課後、その他ならぬ涼宮ハルヒが教室に突然現れて彼女に一直線に近づいてきたとき、彼女はたまげた。反射的に逃げようとしたが、どうなるものでもなかつた。彼女は苦もなく捕まり、ぐいぐいと引っ張られて連行され、どこかに連れてこられた。校内には間違いないが、見慣れない一室である。彼女はなぜいきなりこんなことになるのか理解できず、ただおどおどしていた。と、なんとしたこと！涼宮ハルヒは部屋のドアに施錠するではないか！ 彼女は抗議したが、「黙りなさい。」と、冷厳な一言。彼女は困惑しきり、どうすることもできなかつた。室内にいた誰か男の子が涼宮ハルヒに語りかける。すると突然、涼宮ハルヒは彼女の背後にまわり、あろうことか彼女の胸を無遠慮にもみしやすく、なされるがことながら、もはや事態の展開についていけなくなり、なされるがままだつた。やがて件の男の子が止めに入つてくれ、再開された会話の進行している横で、彼女は室内を見渡す。窓際に人影を認め、それが誰であるか理解した瞬間、彼女はこの日幾度めかの、大きな驚きを味わわされていた。そこにおわすは見紛つかたなき、『国際連邦監査統監閣下』ご本人ではないか。しかもあの突然の面接の日

のお姿そのまま。ついでに、彼女は気がつかなかつたが、この一室もまた、長門有希『統監閣下』の執務室の一角に再現されていたものそのままである。彼女はなんとなく悟つた。あの面接はこの日この時のためにだつたのだと。とりあえず、彼女は涼宮ハルヒの要請に従うことに決心した。書道部退部、そして、『SOS団』なる、涼宮ハルヒの創設および命名になる、謎の団体への加入である。

朝比奈みくるの書道部脱退はただちに鶴屋嬢に報告され、調査が命ぜられた。涼宮ハルヒなる人間はいかなる人物像を有するか。背景は。家族関係は。交遊範囲は。非行歴はないか。詳細に調査が行われた。その結果。

『涼宮ハルヒの人物像以下の通り。背景は特になし。家族関係は正常にして良好。交遊範囲は善良だが狭小。非行歴なし。ただし、奇行多数あり。健康状況良好。知能すぐれて高。学業成績きわめて優良。精神生活は正常の範囲内だがかなり抑鬱的。言語話法正常。精神疾患を窺わせる兆候見つけられず。言動正常範囲。ただし尊大で無礼。ときに寛容。』

結論。涼宮ハルヒなる人物は、要約するならば単なる平均的女子高校生である。現在のところ特に憂慮すべき事由は認められない。対処すべき事情はない。

精神生活に関する追記。『よく最近変化あり。抑鬱状態は解消。軽快にして多動。多分に躁的。言動については変化なし。追記内容による結論の修正に関してはその要を認めず。以上。』

鶴屋嬢はこの報告に目を通した。自宅にある、専用の執務室で。そして卓上の万年筆を取り上げ、署名した。『可決承認』である。鶴屋嬢は側近にこう感想をもらした。

「軽快、多動、躁的か・・・まるであたしだね。」

かくして、鶴屋嬢は手元から朝比奈みくるを手放すことに同意した。朝比奈みくるは、涼宮ハルヒの手に委ねられることになった。さてここで我々は、涼宮ハルヒという人物について、あらためて究明することにしなければならない。

涼宮ハルヒの個人的生活史において、自我確立の戦いは小学校五年生時点に端を発する。両親に連れられ、野球観戦に球場に出向いたさい、大入り満員の盛況を呈する球場、そこに蝟集する人々を見、それまで心楽しい子供時代を謳歌していた涼宮ハルヒにある疑問が生じた。要約するならばそれは、「世界にはより楽しいこと、面白いことがある、それを享受する人々がある。それが自分ではないのは何故か。」となる。自分勝手な問いではあるが、青春時代の懊惱が、要約してみれば手前勝手なしろものでしかないことはしばしばあることだ。青春時代！ 然り、この口をもつて、涼宮ハルヒは画然として、青春時代に入った。大いなる憂鬱とともに。この突然の憂鬱が周囲に及ぼした影響は想像に難くない。両親は元気いっぱいだった娘を、同級生はガキ大将を見失った。担任教師は問題児の問題の質が変化したことを見いだした。憂鬱な問題児は、憂鬱の連鎖反応を巻き起こした。両親の憂鬱。同級生の憂鬱。担任教師の、そしてその他関係する人々すべての憂鬱。しかし涼宮ハルヒにとつてそんなことはすべて余計な雑音だった。涼宮ハルヒは大いなる疑問のただ中にあつたのだから！ 何故、世界は自分に、もっと楽しい、もっと面白い、もっとエキサイティングな側面を見せてくれないのか？！ この大いなる疑問の前にはすべてが色褪せた。両親の心配も、同級生の慨嘆もどこ吹く風、涼宮ハルヒは自らの憂鬱の中にとどまり続けた。両親は悩んだ末、娘の復活を期して、静かに様子を見続けることにした。同級生たちはしだいに付き合いきれなくな

り、だんだん距離をおくよくなつた。この距離は広がつても縮まることはなく、結局小学校卒業時に小学校での交遊関係はほぼ全面的に断絶してしまつた。当然、涼宮ハルヒはそんなものは一向に意に介さなかつた。頭を上げ、胸を張り、腕を組んで傲然とそつくりかえつた、仏頂面の偉そうな憂鬱少女は中学校に進級した。実験と試行錯誤の時代が始まつた。

中学生涼宮ハルヒは当初から注目の人だった。ひとつはその美貌である。もともと可愛らしい女の子だったが、しだいに成長するにしたがい、その容貌は「美しい」という表現に相応しいものになつてゆくのだ。いまはまだ途上とはいえ、大人びた雰囲気を纏い、決して笑わぬ美少女。男どもが群がるのも故なきとはしまい。なかにはその愁眉を開いてやろうと志すものもあつた。そして全員が失恋の苦杯を飲み干すはめになつた。涼宮ハルヒは誰にも心動かされなかつた。中学生風のおふざけやら、観光地への小旅行やら、お買い物やらは、まったく涼宮ハルヒの心に届かなかつた。見込みのない受験者を見つめる面接官のような冷然とした瞳の試練に耐えられる者はおよそ少なかつた。最長でも一週間。涼宮ハルヒはタイトルを防衛し、三年間の中学生時代を、憂鬱に、孤独のなかに過ごした。そして、なんといっても涼宮ハルヒを特徴づけるもの、それはその奇行だつた。それも並外れた大規模な奇行だ。集団ならばともかく、単独でやつてのける人間はおよそ珍しい。なかでももつとも大規模で、衆目を集めたものこそ、かの「校庭落書き事件」である。この一件は涼宮ハルヒ自身にとつても意義深いものだつた。なぜなら、この事件のなかで、涼宮ハルヒは初めて、「みどころのあらぬ」に出会うことができたのだから。その人物は門前の暗がりの中から声をかけてきた。北高の制服を着て、なぜか女の子を背負つていた。涼宮ハルヒの脅迫いた言葉にも大して動じず、校庭を駆け回つて「作品」を手伝つてくれた。そして、匿名希望として、『ジョン・スミス』と名乗つたのだつた。この「変な高校生」は、涼宮ハルヒに意外なほど強い印象を残した。周囲の「食い足りない」「わかつてない」面々とは、明らかに風合いが違つた。しかし涼宮ハルヒはその場ではそれ以上追及しなかつた。学校はわかっている。ならば搜索することは雑作もない。彼とはこれきり長いご無沙汰に

なる運命なのだが、それは今の時点の涼宮ハルヒには知る由もない。彼を校庭に残してのその帰りがけ、暗闇の中から声がかかった。

『世界を大いに盛り上げるための、ジョン・スミスをよろしく…』

言葉の意味は量りかねたが、誰が発したかはわかつた。周囲は暗がりで街灯は少なく、人影は見える範囲にはなかつた。この言葉は、発した人物と同じく、涼宮ハルヒに抜きがたく強い印象を残さずにはおかなかつた。後刻、ジョン・スミス捜索は意外にも完全な不調に終わり、涼宮ハルヒは謎の高校生に対する印象をますます強くした。・・・あるいは、それは恋のはじまりだったのかかもしれない。涼宮ハルヒは無自覚そのものだつたが、初めて見つけた、「ともに夢を語るに足る人間」に対して、恋に近い憧れを抱き、それがいつしか本当に恋に変わつたとしても、なにも不思議はない。だが、この問題はこのへんにして、話を急ぐことなく、事態の進展に立ち戻るつ。

「校庭落書き事件」の際、涼宮ハルヒは教師たちに徹底的に尋問された。涼宮ハルヒは基本的な事実関係については一切争わなかつた。然り、自分のしわざである。しかし、一点については頑強に否認し続けた。共犯者はない。単独犯である。すべては自分ひとりに帰せられる。企画立案、準備、実行、すべては自分单独で行つた。争うべき点は一切ありえない。教師たちは犯行の規模から、共犯者の存在を疑つっていた。涼宮ハルヒは否認の主張を最後まで押し通しつまるところ、それで決着した。以後、尋問は形式上の簡素なものになつていった。これは、涼宮ハルヒ独特の事情が深く関係している。涼宮ハルヒは成績優秀だった。常にトップクラスの常連だった。奇行を数限りなく繰り返していても、成績は決して下がらなかつた。まずこの点で、教師たちの舌鋒はゆるんだ。奇行は多数あつたが、非行はなかつたこともある。涼宮ハルヒの信じがたいほど堂々とした態度も一因に数えられる。涼宮ハルヒは真っ直ぐに、相対した人間の目を見つめた。星空のように輝くその瞳は、例外なく氣後れを感じさせた。そして一切物怖じせず、教師たちと渡り合つた。結果、追及は常に尻すぼみに終わつた。涼宮ハルヒは学習した。即ち、「成績優秀者は一種の貴族である。」実際、そういう傾向はあつた。

涼宮ハルヒは職員室の常連だつたが、自分ほどに明確な非違を犯したわけでもない人間が、自分よりはるかに激しく、頭ごなしに叱り飛ばされている光景を幾度も見ていた。たいてい、成績も素行もよくない連中だつた。翻つて、涼宮ハルヒ自身を代表とする成績優秀者は、かなり重大な反則を犯しても、表沙汰にならない限りは簡単な叱責で事实上無罪放免された。涼宮ハルヒは、大人の依怙贋負を、安全圏から実地に学んだのだつた。後片付けにしてもそうだつた。

涼宮ハルヒは問題を起こすと、非行少年じみた連中が叱りつけられ、襟首をつかまれ、時折張り飛ばされたりしているのを横目に職員室

を通り抜けて応接室に通され、簡単なお小言をくらつて後片付けを言い渡されるのが常だった。その点は、涼宮ハルヒも異論なかつた。自分のしたことの後片付けは当然自分がすべきことだつたから。しかし、それを最後まですることは稀だつた。ある程度進み、時間が遅くなり、他の生徒たちがいなくなると、教師たちがやつてきて言った。「あとはやつておくからもう帰りなさい。」自動車で家まで送つてくれることすらあつた。それにしても、涼宮ハルヒは後片付けの手は決して抜かなかつた。事実、涼宮ハルヒが自分で片付けた部分の方が、教師たちの部分より完璧だつた。ちなみに、涼宮ハルヒは不良少年に同意することは決してなかつた。涼宮ハルヒにとって彼らは、「とんまで没個性で目立ちたがり屋の救いようのない奴ら」でしかなかつた。従つて涼宮ハルヒは、彼らがぶん殴られても何らの同情もしなかつた。「自業自得。」冷然とした判定であつた。結局、涼宮ハルヒにとつて中学生時代は実りある時代ではなかつた。涼宮ハルヒは表情筋を殆ど動かさないまま中学校を卒業した。卒業の際にも一悶着あつた。涼宮ハルヒは北高を志望したが、教師たちの中にはよりランクが上の学校を執拗に勧める者があつた。涼宮ハルヒはその勧めをことごとくはねつけた。そんな教師の一人が言った。「もういい。お前は好きな場所で好きなことをするがいい。もう知らん。」見離されたわけだつたが、涼宮ハルヒはまつたく意に介さなかつた。そう、私は行きたい場所に行き、したいことをする。妨害は断固許さない。あたしを嫌いたい奴は嫌うがいい。あたしの道はあたしのもの。誰の容喙も認めない。余計な忠告は無用。むしろ見離してもらつたほうがいい。涼宮ハルヒは気位の高い少女だつた。三年間の「成績優秀貴族」生活はこの傾向を強めるものだつた。とにかく、涼宮ハルヒはトップの成績をもつて入学試験をパス、志望通り北高に入学した。かのジョン・スミスの北高、唯一の「わかつてゐる奴」の北高に、である。

涼宮ハルヒが北高に入学したのはもちろん故あってのことであつた。謎の北高生『ジョン・スミス』は言つた。「そんなことをして奴に覚えがあつただけさ。」文字通り解釈するならば、これは北高には「見どころのある奴」がいる、ということになる。涼宮ハルヒ自身としては、とうに『ジョン・スミス』は卒業してしまつてゐると思つてはいた。北高にいるはずの「見どころのある奴」もまた、卒業しているであろうと予想できた。しかし、涼宮ハルヒにはある期待があつた。もしかすると、彼らの衣鉢を継いだ者がいるかもしない。あるいは、ひょっとすると、彼ら自身が留年して、まだ北高にいるかも知れない。捜し出さねば。今度こそは。そこで、涼宮ハルヒはアグレッシブに、最初から素を出して、人目を集め作戦に出た。最初のホームルームでの自己紹介。記念すべき第一声。

『ただの人間には興味ありません！』

この一連の発言は、明らかにわざと衆目を集めるこことを意識したものだつた。その気になれば、涼宮ハルヒはいくらでも一般人を偽装することができたのだから。しかしそれでは意味がなかつた。あたしは北高にやつてきた。ジョン・スミスの北高に。明らかに北高生だつたのに、いくら探ししても見つからなかつた謎の北高生『ジョン・スミス』。学校に不法侵入しようとしていた奇妙な女子中学生の奇怪な言動にも、目的不明の作業や、意味不明の文字の羅列にも一切動じず、黙つて手伝ってくれ、あまつさえ「似たような奴に覚えが。」とまで言つた高校生！ 涼宮ハルヒはジョン・スミス本人、またはその眷属を呼び寄せるこことを決意していた。これらのことはすべて、自分自身を餌にした、壮大な釣りのようなものだつた。目立てばきつと、あたしに気がつくはず。涼宮ハルヒはあの単純明快

なメッセージを、再び発したわけだ。今度は宇宙ではなく、周囲に向かつて。曰わく、『わたしはここにいる』！　さあ、ジョン・スマス！　あるいはその仲間よ！　あたしを見いだせ！　そしてここへ来るがいい！　あたし、涼宮ハルヒのもとへ！

涼宮ハルヒは毎日髪型を変え、隈無く校内を歩き回った。すべての部活に仮入部したりもしてみた。涼宮ハルヒ流のローラー作戦であつた。そして各部ごとに引き止めにあつた。特に運動部系での引き止めは執拗と言つても差し支えないこともあつた。涼宮ハルヒは引き止めを全部はねつけた。普通の部活なんぞには何の用もなかつたのだから。あちこちで悶着が起こり、ことに熱烈な引き止めをかけてきた陸上部に至つては、在籍中の一部部員の不満から空中分解の危機に瀕したりもしたが、もちろん涼宮ハルヒはそんなことは一顧だにしない。文化部系でも引き止めにあつた。吹奏楽部では「A列車に乗つて」の見事なトランペット独奏を、軽音楽部では流れるようなギター演奏、茶道部では非の打ち所のないお点前を披露した。そして、涼宮ハルヒはそのうちに文芸部に辿り着く。文芸部室には人の気配はなかつた。涼宮ハルヒは無遠慮にドアを開け放ち、思ひがけず人影を認める。窓辺の椅子に腰掛け、読書に没頭する小さな人影を。それは小柄な少女で、しかも奇妙な少女だった。顔立ちはそれなりに綺麗だったが、能面のように表情に乏しく、騒々しい来客にもまつたくなんの反応も示さなかつた。少女は何もなかつたかのように沈黙を守つた。涼宮ハルヒも倣つた。涼宮ハルヒは文芸部室を一回り検分するだけで満足し、ひとまず立ち去つた。あるいは涼宮ハルヒは、その鋭い観察眼をもつて、この奇妙な小さな女の子、すなわち長門有希嬢の、人付き合いの苦手な、内気な性格を見抜いたのかも知れない。涼宮ハルヒはこの一連の行動で妙に有名になつたが、そもそも、もともとが有名なのであつた。東中出身の人間は北高に少なからずおり、そして彼らの大部分が涼宮ハルヒを記憶していた。低い声のひそひそ話がそこそこで起つた。「おい、あれ、涼宮ハルヒじゃないのか。」「うわあ、北高にきたのかあいつ。」「また騒動を起こすのか?」「奴はやる。絶対やる。意味のわから

ないことをな。」「でも美人だな。相変わらず。」「性格が壊滅的でなけりやな・・・。」「見た?」「見た見た。涼宮ハルヒ。」

「騒々しくなるわね・・・。」「勘弁してよ。」「あたし、あの子苦手・・・。」「なんで北高なの?」「彼女、もつといい学校に行けた筈よ? わからない・・・。」「でも、ちょっとだけ、憧れるかな・・・。」 言うまでもなく、最後の意見は圧倒的少数派に属するものだ。そうした会話を通して、涼宮ハルヒの名は、密かなうちに速やかに全校に浸透した。紙に油が染み込むように。東中そのものを振り回した途方もない大騒動の数々は、まだ彼らの記憶に生きしかった。東中出身者の大部分は、巻き込まれては大変と、彼女を遠巻きに見ていた。ほかの多数の人々もそれに倣つた。従つて、アプローチしてくる人間は凡そ少なく、釣果は連日坊主続きだった。しかしやがて、この努力は報われた。撒き餌をし、餌をつけ、釣り糸を垂れ、ポイントを変え、当たりを待つ日々は無駄ではなかつた。獲物は、前の席に座る男の子の姿をとつて現れた。入学式から程なくのある日のこと、彼はふいに話しかけてきた。「あの自己紹介、どこまで本気だつたんだ?」本気もなにも、涼宮ハルヒたるもの、冗談など言わぬ。本気も本気、大本気そのものだつた。これは投げかけられる質問のうちでも最も凡庸極まりないもので、従つて涼宮ハルヒはこのアプローチを却下し、彼は周囲の失笑をかつた。涼宮ハルヒ的に話にならん低レベルのアプローチであつたからだ。涼宮ハルヒは独自の論理を組み上げていた。アプローチを成功させるならば、その論理を読み取り、その論理に沿つて話をしなければならないのだった。当然ながら、これは容易なことではない。涼宮ハルヒはヒントをばらまいてはいたが、まずそれを意味のわからない奇矯な言動としてではなく、涼宮ハルヒなりの一貫性を有するある論理の一部分をなすものであるという理解が不可欠であつた。これは世界に対する涼宮ハルヒの謎かけであった。解答が得られるかすら不明確であつたが、何もしないことは凡そ性に合わなかつた。涼宮ハルヒは常に挑戦するのだ。さあ、誰か解いてみるがいい。就中、

ジョン・スミスの眷属ならば解ける筈。意外にも、解答者は比較的
すぐに現れ、再び前の席の男の子だつた。「曜日で髪型を変えるの
は宇宙人対策か?」・・・それこそ正解であつた!「あら、わかつ
てきたのがいるじゃない。涼宮ハルヒはその理解に免じて、彼に会
話を許した。獲物が釣れたわけだつた。この獲物が意外な大物であ
つたことが解るのは相当後のことである。大きさは普通、姿も一見
平凡だが、非常に珍しい魚が釣れた、とでも喻えようか。

前の席の男の子と話すようになつて、涼宮ハルヒはあることに気がついた。似ている。ジョン・スミスに。顔をはつきり見たわけではなかつたが、話し方、声、背格好はとてもよく似ていた。ジョン・スミス！ この三年間、この不思議な高校生が涼宮ハルヒの念頭を去つたことはなかつた！ いわば彼は、涼宮ハルヒの前に最初に登場した、「この世の不思議」だった。彼を捜索し始めたとき、最初に感じていたものは期待だつた。やがてそれは苛立ちに、一時はほとんど怒りに取つて代わつた。そして、次は寂しさに、ついで憧れに。ジョン・スミス！ 何度その名を口にし、何度その姿を追い求めたことか！ 何度その姿を、その声を思い起こしたことだろう！

背格好の似ている北高生を見かけて、何度胸を高鳴らせたことか！ しかしすべては空振りに終わつた。ジョン・スミスは存在の証拠を一切残さずにかき消えてしまつた！ 涼宮ハルヒはすぐに見つかるからとばかりに彼をその場で追及しなかつた自分自身の詰めの甘さを呪つたが、今更どうしようもなかつた。そして目の前の彼である。なるほど、よく似てはいた。しかし、問題があつた。似すぎているのだ。三年も経つているのに、何の変わりもない！ そんなことがあり得るだらうか？ 高校生といえば、まだまだ成長・変化の余地を十分に残している時期である。それだけではなく、三年間の孤独の間にジョン・スミスの像はしだいに理想化され、あたかも涼宮ハルヒにとっての白馬の王子様のように、この上なく寛大で優しく、自分のすべてを理解し受け入れてくれる、かぎりない癒やしの源、永久の伴侶、ともに夢を語りあえる生涯の友などとして、イメージが膨らんでしまつっていた。その理想像からすると、目の前の彼はいささか凡庸に過ぎた。試みに、かつて自分と出会つたことはないかと質問してみたが、答えは否定だつた。そこで涼宮ハルヒは一般的な解釈を受け入れることにし、この問題に一応の決着をはか

つた。・・・思い違いだわね。しかし、目の前の彼は彼で、なかなか話せる男だった。涼宮ハルヒはいつしか、習慣的に彼と話すようになっていた。

東中時代から涼宮ハルヒを知る者は皆一様に驚愕した。「涼宮ハルヒが会話を！！」それは一大エポックと言えた。あの仏頂面とつけんどんな返事、身も蓋もない拒絶でしかコミコニケーションがとれなかつた涼宮ハルヒが普通の話法で会話している！しかも男子だ！！ 仮にもかつて「涼宮ハルヒの彼氏」であった面々は、苦々しい気分を禁じ得なかつたことだろう。彼らは誰ひとりとして、涼宮ハルヒの「心の国境」の入国審査をパスできなかつたのだから。彼らは「涼宮ハルヒの論理」を理解していなかつた。それは必要書類を揃えず、場合によつてはパスポートも持たずに、イミグレーシヨンに臨むに等しいことだつた。「ダメね。」「あんたじゃどうしようもないわ。」「普通の人間と付き合つての……」「もう電話しないで。」「これつきりで終わり。さよなら。」
即ち、「入国申請を却下します。」この一連の「彼氏とつかえひつかえ騒動」も、「とりあえずなんでも取り組んでみる」アクティブな涼宮ハルヒらしい行動の一環であつたが、結局のところ、「男の退屈さ、しつこさ、ダメさ、弱さ、バカさ」などを実地に見聞するだけの結果に終わり、幻滅感以外に大したものはないなかつた。従つて、「恋愛とは精神病である。」これが当座の結論であつた。やがてほかのさまざまな奇行ぶりを發揮し始めるに及んで、男どもは近寄つてこなくなり、むしろその方がよかつた。奇行にヒく男などにはそれこそなんの用もありはしなかつたのだから。これまで奇行にヒかなかつたのはただ一人、ジョン・スミスだけだつた。ジョン・スミスとなら、世界をもつと面白くすることができるかもしね。それが涼宮ハルヒのいだく淡い期待だつた。さて、そこで前の席の男の子である。彼は初めて、必要書類一式をきちんと揃えてイミグレーションに現れ、晴れて謎の国、「大涼宮ハルヒ帝国」への入国を果たした。長い滞在になるのだが、彼はまだそのことを知

らない。ともかくも彼は、帝国の女帝に接見し、その「機嫌を伺う栄に浴したわけである。つれづれの会話の中で彼はある日、自説を披瀝したことがある。それを要約するならば、「才能ある人間が時代の要求に応えて発明や発見をする。それ以外の大多数の人々はその成果をただ享受し、平凡に人生を送るほかない。翻つて我々は平凡な人間であるから従つて、・・・」となる。女帝陛下はお気に召さなかつた。「つるさい！」とりあえず彼を黙らせ、それでいて女帝陛下はその言葉を検討した。「必要は発明の母。」究極的な要約はそれに尽きる。大涼宮ハルヒ帝国の女帝陛下はしかし、あることに思い当たつた。その瞬間である。あの野球場の夜以来、憂鬱に閉ざされていた心に変化が起こつた。心楽しい小学生生活を謳歌していた頃のように、体に力がみなぎり、いてもたつてもいられなくなつた！なぜこんなことに気がつかなかつたんだろう！前の席の男の子の注意を引こうとして勢いあまり、その男の子の頭を机の角にぶつけてしまつたがそれどころではない。まさにコロンブスの卵だつた！なければ自分で作つてしまえばよいのだ！「才能ある人間が発明を！」あたしほどの才女にできない理由はない！それに、あたしには仲間がいる！女帝陛下はその男の子に、即ちキヨン君に、「ジョン・スマス暫定代行」の官位を賜れたのである！
・・・「一の子分」「相談役」「小姓」「召使い」「奴隸」そして、
・・・「ともに夢を語れる人」「ともに生きるに値する人」。
かくして、自己確立のための、四年あまりにわたる戦闘は終わつた。青春時代の前段である「憂鬱の時代」は終わり、輝かしい「SOS団の時代」が始まるのだ。しかしここで時系列を追うことを見切つたり、より本質的な議論に移らなければならない。涼宮ハルヒを涼宮ハルヒたらしめているところの、所謂「情報創造能力」についての検討に、である。

それは何に起因するのだろう? どこに原因を求めるのだろう? その究明は容易ではない。周辺的な事項から指摘するならば、次元振動の原発時点と時空破断の発生面にはズレがあるということである。震源と断層とで微妙に位置が異なるわけだが、断面はおそらく、推定でしかないが、あの小5の野球場の夜あたりにありそうである。では震源はどこか。それは疑いもなく、あの七夕の、校庭の夜である。涼宮ハルヒのいわば「正史」は、あの夜にすべて端を発する。そして、涼宮ハルヒの周囲の、秘密の激しい活動のまさに発端ともなった。『機関』発足、そしてその活動開始、である。はじめに涼宮ハルヒの所謂『招集』を受けた人々は決して大勢ではない。それは各界の錚々たる人々であつた。ただし没落の危機に瀕していたり、実際に没落していたりしたのだが。彼らはひとまず、導きに従い、ある場所に集合した。そして現状について討議するとともに、彼ら自身が対面しているあらゆる問題についても話し合つた。『涼宮ハルヒ』問題に限らず、あらゆることが議題にのぼつた。その結果奇妙なことが明らかになつた。ある没落した人物（仮にAとする）を「立て直す」ために、会議の場にいる他の人物（仮にBとする）が実際に効果的な工作をなすことができ、また、その人物Bの現在の窮状に、人物Aがきわめて有効な対策を提供できるなどという、いわば相互扶助による相互救済が、ひとりも余さず、円満に成立するということであった。このようにしておそらく短期間のうちに彼らはみな『返り咲く』ことができ、彼らを引き合わせた奇縁である『涼宮ハルヒ』に「報恩」すべく、彼らに知覚された仲間たちをかき集めていった。最初に「招集」された人々は高級幹部クラスにあたる「検知指導員」（または「一次検知員」「根幹招集員」）、彼らがかき集めた人々が「検知員」（または「一次検知員」「枝招集員」）となる。彼らはさらなる仲間たちを招集するのが任務

である。「戦士」を、「実務家」を、「その他」を。「戦士」とは我々にとり、古泉一樹がその代表となる。「閉鎖空間」における「神人」との戦闘を主任務とする人々である。「実務家」は様々である。組織運営に携わる者あり、対外工作に専従する者あり、資金獲得を主任務とする者あり。「その他」というのは上記のはつきりとしたカテゴリーに分類し難い人々のことで、様々な人々がいろいろな役割を帶びており、いわく一言では説明しがたい。いずれ各論にて述べる機会もあるうから、ここはこれくらいでとどめておくこととしよう。ただ留意すべきなのは、このカテゴリー分類はそれほど厳密なものではなく、おおまかな傾向を表しているに過ぎないということである。

作戦従事命令78

さて、JJIJで、機関参加者の実例を提示するJとじよひ。

JJIJはある場所にある高層ビル。いま、このビルのかなり上階の一画に、多数の人員が集められている。今またひとり、怯えきつた青年が連れてこられたところである。

「君の名はなんといふのか？」

年かさの一人が尋ねる。

「・・・J、J、J、J、J、すみ、い、いつき、です。」

がたがた震えながら、半泣きの青年が答える。

「あ、あ、あ、あんたがたは、いつたい、」

「心配はいらん。我々は味方だ。仲間と言つたほうがいいかも知れんな。古泉一樹君、よく来てくれた。我々は君を歓迎する。今日このときより、我々は同志だ。栄光ある任務に召集された同志だ。君も知つての通り、例の彼女のために。」

「れ、例の彼女とは、ま、まさか、」

「そう、涼宮ハルヒさ。」

「そ、その名をなせ。」

「古泉君、我々はみんな、同じ事情でここに集まっているのだ。理由はわからないが、我々は選別をうけて、彼女に奉仕するために

力を与えられた。現在、戦力の実勢を計り、能率的な運用を期すべく、全要員を結集し、登録、組織化の推進中である。われわれの奉仕事業は、現在仮に『機関』と称されるこの組織体を通して、すべて執行される、予定である。ところで古泉君、なにか足りないものはないかね？」

「き、急に言われても。」

「お腹は空いてないかね。」

「言われてみれば……。」

「よし、古泉君、まずは腹ごしらえだ。任せておきたまえ。君がこれまで見たこともないような豪勢な食卓にご招待しよう。・・・彼に食事を！」

古泉一樹なる青年が食堂へ通され、言葉通りの夢物語のような食卓に對面している間に、あらたな面接者のために準備が行われる。まず、予備調査の書類ファイルを検分する。しかし、次の面接者のファイルの1ページめ。履歴書の左半分によく似た書類には顔写真以外なにもなかつた。氏名、年齢、履歴、すべて空白だつた。

「事務長、これはいつたいどういうことかね？　こんな不完全な書類を回して貰つては困る。調査の時間が足りなかつたとでも言いたいのかね。」

「いいえ、通常の調査のためには充分な時間を頂戴しております。」

「では、どうこうことなのかね？」

「通常の調査手段では身元を突き止められなかつたのであります。八方手は尽くしましたが、残念ながら。」

「そうか・・・。ただ事ではないな。」

「はつ。まさしく。」

「よし。とにかく、一度会つてみよう。・・・お通してくれ。」

通されてきたのは女性だった。若く見えたが、かといって、年齢がすぐわかるような物腰でもなかつた。この場に及んで、落ち着き払つていたのだ。その顔には笑みすら浮んでいる。高い訓練を積んだ軍人のようにも見え、年格好に合わぬ風格すら感じさせた。どうやらただ者ではなさそうだ。

「お名前は、なんとおっしゃいましょうか？」

「お答えいたしかねます。」

「お生まれはいつで、お年はお幾つで、おれこますか？」

「お答えいたしかねます。」

「性別は女性ですね？」

「その点は間違いございません。」

「あなたはどういう方で、今までどの様に過ごされてきたのか、お教え願えますか？」

「ご遠慮させて戴きたく存じます。」

「なぜ、質問にお答え戴けないのでしょうか？」

「そのわけはお答えいたしかねます。」

万事そんな調子だつた。そこで、異例のことだが試用期間が設けられ、服務状況を審査することとなり、平行して身分確定のための調査が継続して行われた。その結果、文句なく有能であることは実証された。とくにその戦いぶりは見事なもので、『確実に高度の実戦経験あり。戦闘能力は超人的。いわば、修羅の道を踏んできた女。』との評価を得るに至つた。身分調査は考えられるすべての手段が頓挫し、彼女のファイルはいつまで経つても空白のままだつた。ついにある日、彼女は再び面接に呼び出された。

作戦従事命令 79

「正直申し上げて、貴女には負けました。完敗です。なにかお望みはありますか？」
「特にございません。」
「ズバリお聞きしますが、あなたはスパイですか？」
「いいえ。」
「工作員ですか？」
「いいえ。」
「あなたは誰のために奉仕していますか？」
「涼宮ハルヒのために。」
「あなたは我が機関に何を望みますか？」
「これからも、私を置いて頂きたいのです。」
「それだけですか？」
「はい。」
「もう一度だけお尋ねします。貴女のお名前はなんとおっしゃいましょうか？」
「お答えいたしかねます。」
「わかりました。それでは、なんとお呼びすればよろしくでしょ
うか？」
「では、『森園生』でお願いいたします。」
「それでは、森園生さん、服務宣誓を。」
「はい。』われらが女王、涼宮ハルヒへの奉仕事業のために。私は奉仕する従僕です。いかなるご命令であろうとも、われらが女王の意を体する限り、一切異議なく、直ちに完全に服従いたします。涼宮ハルヒとわれらの奉仕事業とに栄光と、平穏なる進行を。もつて全世界に平和と安定を。」
「同志森園生、あなたを歓迎します。」

会議室に拍手が起こつた。こうして、機関きつての、最も有能な、最も興味ある人物のなかのひとり、森園生嬢は、正式な一員として、『機関』に迎えられたわけである。才能、手腕、明らかに公正な人柄で敬意を払われ、作戦現場では常に事実上のリーダーとして指示を求められる彼女。

その経歴は、未だに謎である。

しかし、それは表向きの話。一回目の面接の頃には、すでに『森園生嬢』の素姓はほぼ完全に突き止められていた。それは予想した通り、修羅の道、戦士の道を、望むと望まざるとを関わらず、踏んでくるほかなかつた、苦難に満ちた半生の物語だつた。深い心の傷の流した血の色に彩られた、裏切られ続けた人生の、あまりにも苦難に満ちた記録だつた。・・・首脳部のめんめんは『森園生嬢』に深く同情し、その心情を汲んで、『その素姓を追究することはついに不可能であつた』、と、表向き取り繕つた。しかし『森園生嬢』のほうでも、彼女独自の情報網を通じて、素姓を突き止められたことを察していた。・・・そして、さきの受け答えである。双方ともに、すべてを諒解していたのだ。すなわち、首脳部のほうでは、『森園生嬢』が素姓を探り出されたことを察知していることをもまた見抜いており、『森園生嬢』のほうでも、首脳部が探し出した素姓をわざと明かさずにいることを見通していた。そしてお互い、なにもなかつたふりを装つた。騙しあいではない。彼らはすでに、なにもかも分かり合つていたのだ。双方とも、相手の実力が相当のものであることを認めたのだ。ここに、お互いの実力の探り合いは終わつた。これからは協力の始まりである。森園生嬢は「服務宣誓」する。かつての『森嬢』はこれをもつて「死んだ」。『森嬢』はこれから、新しい名前と新しい世界のもとで、新たな人生を生きるのだ。

『森嬢』は行き詰まつていた。任務に失敗し、追つ手がかかり、命は風前の灯だつた。『森嬢』は気づいていた。『森嬢』の「後ろ盾」が失脚し、新しく実権を握つた、即ち『部長』職についた人間が、『森嬢』を嫌つて「消そう」としていることを。『森嬢』は新『部長』の秘密を握つていた。それは前『部長』のさじがねだつた。

・・・『森嬢』は「政治的抗争」の道具に使われたあげく、そのまま使い捨てられてしまった格好だつた。虚しい気持ちだつた。人生が終わりになるには、あまりに承服しがたい理由だつた。しかし追つ手は手ごわかつた。それはかつての同僚であつた。『部』きつての優秀な同僚だつた。なまじその実力を知つてゐるだけに、逃げらるるとはとても思えなかつた。それでも『森嬢』は逃げ続けていた命の限りと逃げ回つてゐた。どうせ残り少ない命なら、せめてできる限り逃げ回り、少しでも長く生きていたかつた。死を恐れたわけではない。死に臨む覚悟など、とつくの昔に完了してゐた。敵軍に捕らわれ、死刑の宣告を受け、刑場に引き出され、処刑柱に對峙させられても、『森嬢』はその微笑みを絶やさなかつたことだろう。あまつさえ、『新兵ども！　この私の鉄でできた心臓を射抜けるものならやつてみるがいい・・・よーく狙え！』などと言つてのけることすらできたであらう。

『森嬢』は死に場所を求めていたのだ。命をかけるに値する、兵士として、戦士としての死に場所。銃殺刑に処せられて、刑場の露と散華するならば、『森嬢』は從容と、笑みすら浮かべて、死に赴いたに違いない。それは兵士の死に場所、戦士の死に様であるからだ。政治的抗争の犠牲者として、慘めな野垂れ死にの最期を遂げるなどとは断固お断りだつた。だからといって、『森嬢』は狂氣や、あるいは死神にとりつかれていたわけでもなかつた。もともと、『森嬢』は兵士にも、戦士にもなりたくなかつた。どうしてもやむを得ない種々の事情により、無理にそちらの道を歩むことを余儀なくされてきたのだ。だから余計に、兵士として、戦士としての、一貫性をもつた生き様に、『森嬢』はこだわつた。いわばこれは、『森嬢』の美学であった。いずれは追い詰められ、最後の戦闘を戦わねばならないことは百も承知だつた。『森嬢』はすでに、捨て身の戦いを覚悟していた。そして、追跡者と差し違え、あの世の道連れにすることを決意していた。せめてそうでもしなければ、自分の生涯はあまりに惨めすぎるではないか。・・・従つて、ここ最近の行動の全ては、逃げ回つて相手を疲れさせる作戦というわけであつた。自分と追跡者の血の大輪の花で、長からぬ生涯の最期を華々しく飾るための準備段階なのであつた。望んでもいなかつた、戦士としての生涯を完遂するために。

多くの同年代の人々のように、花のように微笑み、笑いざざめきながら生きることができれば、どんなにか幸福だつたことだらう。しかしそれは、『森嬢』にとつてはかなわぬ夢だつた。花々で飾られた可愛い花嫁にも、ついになることはできなかつた。『森嬢』は、血と硝煙の匂い漂う世界に、あまりに深く踏み込み過ぎた。世の中の裏側を、誰もが知りたくない真相を、あまりにつぶさに見てし

まつた。『森嬢』の、勲章に飾られた英雄としての、それでいて人間的にはあまりにも惨めな人生は、間もなく終わるうとしていた。生涯の終わりに、せめて花束で自らを飾ること、それが『森嬢』の望みだつた。幸福な花嫁を飾る色とりどりの花々ではなく、真っ赤な血の花束、哀しみに満ちた戦士の死を記念する大輪の花で。

そんなとき、まったく突然のことだ。『森嬢』の脳裏に突如として、『涼宮ハルヒ』なる名があたかも天啓であるかのじとく閃いた。「私は招かれている・・・行かなければならぬ。」・・・しかし、そうはできなかつた。『森嬢』は遂に追い詰められ、最期の決闘に臨もうとしていたのだから。追跡者の任務は『森嬢』を殺すことだつた。話し合いの余地などはなかつた。『森嬢』はひとりごちる。

「ちょっと遅かつたですね、涼宮ハルヒさんとやら・・・死人は、たぶんお役に立てないでしょう。」

『森嬢』は決闘場所に出向いた。そこはオフィスビルの屋上で、めつたに人の立ち入らない場所だつた。追跡者と対峙する。勝てはない。死の時は目前だ。『森嬢』は自爆装置を身に付けていた。おそらく肉弾戦になる。そうしたらつかまる前に相手の内懐に飛び込みスイッチを操作する。ダイナマイトが炸裂し、自分もろとも追跡者も木つ端微塵・・・。戦士に相応しい、壮烈な最期を遂げることができるわけだつた。

しかし、なかなか思い通りにはことは運ばなかつた。『森嬢』は最初から相手の内懐に飛び込むことを狙つていたが、攻めがあまりに積極的だつたため相手に警戒感を抱かせてしまい、遂には追跡者のほうが逃げ回りはじめた。攻守ところを逆転し、追う『森嬢』、追われる追跡者。死に場所は今ここと思い定め、鬼気せまる様相の『森嬢』。なにか秘策があると感づいて、必死に逃げ回る追跡者。・・・『森嬢』の腕前は追跡者よりは若干見劣りがし、こうなると『森嬢』が追跡者を捕まえるのは至難の業である。しまいには双方とも疲れ果ててしまった。追跡者に隙ができる。この一瞬を逃さじと、

『森嬢』は最後の力を奮い、飛びかかるうとする。その刹那、勝負に割つてはいる声が響きわたる。

「双方、そのまま！」

いつの間に現れたやら、一人の周囲を銃を構えた人々が取り囲んでいる。彼らは真っ直ぐに、追跡者に狙いを定めている。

「動くな！ 手を頭の後ろに組め！」

追跡者は意外に素直に従う。鉄砲が相手では、いかな手練れとはいえ、勝ち目はない。

彼らのなかで年かさのひとり、割つてはいった声の主が、『森嬢』に向き直ると、打つて変わった丁寧な口調で言つた。

「『涼宮ハルヒ』なるお名前に心当たりがおありのはず。・・・お迎えにあがりました。」

『森嬢』は彼らに連れられて、とある高層ビルにやつてきた。『森嬢』は質問する。

「あなたがたは何者ですか？　なぜ、私をご存知ですか？　どうして、身体検査をしないのですか？　あまりに不用心では？」

「疑問はすべてござもつともです。しかし我々は、あなたをどうするつもりは毛頭ありません。・・・まずは、新しい服をひとつそろい、差し上げましょう。そして、入浴してから、お食事にご案内します。」

まず『森嬢』は被服倉庫に連れていかれ、新しい清潔な衣服を支給された。・・・ずらりと並んださまざまな服から、「どうぞ、気に入ったものを、どれでも取りなさい。」と言われ、その通りにしたわけだった。次は浴室だった。案内の人が「ごゆっくり。」と立ち去り、一人きりになると、『森嬢』は服を脱ぎ・・・隠しポケットの中のものを取り出して検討した。『党員手帳』、『認識標』、精度の低い小型拳銃と弾丸がいくらか、銃剣兼用の軍用短刀、接近戦用の麻酔針と毒針、自決用の青酸カリアンプル・・・薄いガラス製のアンプルで、「使用時」には噛み破ることになっている。当然口の中をケガするが心配はいらない。噛み破った次の瞬間には即死だから。・・・交付されたときのレクチャーが蘇る。・・・そして

最後に、「自爆装置」。さすがの『森嬢』もぎょっとする。スイッチに電線が繋がつたままだ。これではいつ「動作状態」になつてもおかしくない。・・・急転直下の展開に驚くあまり、「武装解除」するのを忘れていたようだ。・・・私もまだまだですね。・・・注意深く電線を取り外し、信管と電池を分離、次に炸薬と信管を分離し、簡易的に解体する。ひとまずこれで安心だ。かくしてようやく、『森嬢』は、落ち着いて入浴できる余裕を得たのだった。

作戦従事命令84

入浴を終えた『森嬢』は置いたままになっていた「秘密装備品」を検討し、大部分引き渡してしまったことに決めた。・・・一度は捨てた命だ。『呼出』と書かれた壁のボタンを押す。先ほどの案内の人が現れる。

「私の私物です。お渡ししておきます。」「では、お預かりします。」

案内の人は、「自爆装置」に目を止める。

「これは？」

「お恥ずかしながら、『自爆装置』です。簡易的に解体しておきましたので、現状危険はないと思いますが。」

「怖いことしありますね。・・・そのままお渡し下さつたら、こちちらで解体しますのに。」

案内の人は解体のしかたを尋ね、

「手順、間違つてませんか？」

と、指摘し、

「『』無事でなにより。」

と、いつたん品物を持つて立ち去つた。『森嬢』の手元には『党員手帳』と『認識標』だけが残つた。・・・『森嬢』のいた世界では、これが命綱だった。特に『党員手帳』は、『紛失した場合除名

処分に処す』なる無茶な『党規則』もあって、手放すことが躊躇わ
れたのだ。案内の人はしばらくすると戻ってきて、

「後ほど預かり証をお渡しします。まずは食事をどうぞ。」

と、『森嬢』を食堂に案内した。豪勢な食卓だった。非常に金が
かかっていることは見ただけでわかつた。案内の人いわく、

「どうぞ、存分にお召し上がりください。」

『森嬢』は何の躊躇いもなく食事に取りかかった。たとえ毒が盛
られていようと構わなかつた。『敵』に出された食事に意地汚くが
つついて、あえない最後を遂げるのも、それはそれで自分に相応し
いかかもしれない、という心境の微妙な変化もあつた。なによりも、
とてもお腹がすいていたのだ。料理は非常に美味しい、いくらでも
お腹に収まるように思われた。『森嬢』は見事な食いつぶりを見せ
た。案内の人、

「たくさんおあがりになられましたね。」

と、微かに呆れたような口調が印象的だつた。『森嬢』はほとん
ど生まれて初めて、お腹いっぱいになれた。『森嬢』のお国は貧し
く、お腹いっぱいの食べられる機会などは本当に少なかつた。
そのうえ搾取的に人をこき使つことが常態化しており、人間らしく
扱われたことなど、これまたほとんどなかつた。『森嬢』は自分の
国が嫌いだつた。どこにも行けないから、そこにいただけだつた。
しかしここでは、猜疑心に満ちた取り調べもなく・・・「ぐく些細な
理由で、罷のような誘導尋問に満ちた陰湿な取り調べに田常的に晒
されるのが、『森嬢』のお国であった。たとえば、『肖像画への敬
意を欠いた』とか、そういう容疑で。・・・、とりあえず今だけの

ことかもしれないが、服も食事も与えられ、入浴までできた。……このままここで死んでしまっても悪くないかもしない……。『森嬢』は眠気を催した。催眠薬や毒薬によるものではない。満腹感と疲労がその原因だつた。案内の人があいつ。

「お酒はいかがですか？」

「いただきましょ。」

『森嬢』は注がれたグラスを一気にあける。高価な酒だ。まるで夢のようだ・・・。酒で眠気はいや増し、『森嬢』はうつらうつらし始める。そして遂に、食堂の椅子に腰掛けたまま、『森嬢』は本当の夢の中へと落ちていいくのであつた。今まで見たこともないほど、楽しい夢の中へ。

田を見ますと『森嬢』はベッドに横たわっていた。昨晩着ていた服のままである。外はまだ暗い。飲み過ぎたらしく頭が痛い。起き出して水をコップに一杯飲み干し、再びベッドに横になって、『森嬢』は考える。これからいつたいどうしよう? ふと気がつくと、サイドテーブルの上に封筒があり、書類が一通入っている。それはあの「秘密装備品」一式の預かり証だった。

『預かり証

以下の物品をお預かりします。

- 1・小型拳銃一丁
- 2・弾丸七発(うち空包二)
- 3・軍用短刀一丁
- 4・麻酔薬塗布針七本
- 5・毒物塗布針一本
- 6・薬剤水溶液(青酸カリ)アンプル一個
- 7・ダイナマイト一本

8・信管一個

9・電池二個

10・スイッチならびにその配線一組

本証と引き換えに上記物品をお渡しします。また、権利放棄することもできます。

1・上記物品をすべて受領します

2・上記物品をすべて権利放棄します

3・上記物品のうち一部を選択して受領し、残りを権利放棄します

姓名・日付を記入してください

年　月　日

『

『森嬢』は迷うことなく項目2に丸をつけた。もともとすべて放棄するつもりだったのだ。手放しがたいものもなくはなかつたのだが。とくに軍用短刀は、戦友の形見だった。かわいそうな戦友。戦地にて、救援を求める緊急信号を最後に、連絡が途絶えた。『森嬢』が救援に辿り着いたとき、戦友は建物の陰にうずくまっていた。夜

半のことで、あたりには味方はおろか、敵の気配もない。『森嬢』は用心しながら呼びかけた。返事はない。さらに用心しながら、明かりを灯してみた。光のなかに浮かび上がったのは、無惨な遺骸と化した戦友だつた。潜伏中に発見されて機関銃の集中射撃を受けたらしく、首から下はずたずた、血みどろの肉塊と化していた。顔は比較的きれいだつたが、弾丸の突入痕がいくつかあるのは見て取れた。銃剣を装着した旧式の銃を抱えた戦友は、目を開けたまま、事切っていた。『森嬢』は不思議に無感動だつた。むしろ、戦友が羨ましかつた、と言つてもいいかも知れない。苦痛に満ちた辛い世界から、戦友は一足先に解き放たれたのだ。『森嬢』は戦友の目を閉じてあげ、その銃から銃剣を取り外した。そして明かりを消し、その場を立ち去つた。悲しいというよりは、虚しい気持ちだつた。これで『森嬢』は、すっかり独りぼっちになつてしまつたのだから。のみならず、無為に死んでいつた戦友の姿がちらつくのだった。なんのために生まれ、なんのために生き、なんのために死んでいくのだろう。なぜ、私より先に、彼女が死ななければならなかつたのだろう。・・・『森嬢』は憂鬱な気持ちで「本部」に帰り着き、そのとたん叱り飛ばされた。『玄関に掲げてある肖像画に敬礼を怠つた』というのがその理由だつた。

それからほどなくして、『森嬢』は今回の任務を託された。発端から奇妙な、異例尽くめの任務だつた。まず、ある將軍に呼び出しが受けた。それも入づてに、「呼んでいるらしいよ。さあ行け早く行けすぐに行け。」この將軍は理論上は上司にあたるが、實際はそうではなく、『森嬢』に直接指示することはないはずで、そもそも必要な命令権がなく、その指示ができないはずの人物だつた。初対面の將軍の事務室に出頭すると、將軍の机の上に膨らんだ大判の封筒があり、將軍は不機嫌そうな様子で、かすかに封筒を顎でしゃくつてみせた。『森嬢』は封筒を手に取る。將軍は一刻も早く、『森嬢』に立ち去つてもらいたそうだつた。『早く出ていけ！』と顔に書いてあるかのようだつた。『森嬢』は敬礼し、部屋を出る。と、そこには同僚。「車の用意ができる。」有無を言わさず『森嬢』を車に押し込んで中央駅へ。そして発車ベルの鳴り響くなか、国際急行列車に放り込むように『森嬢』を乗車させる。説明を求める間もなく列車は動き出し、かくして、これが『森嬢』と故郷との永遠の別れとなつた。乗車券は封筒の中に入つていた。指定の一等寝台個室に落ち着くと、『森嬢』はドアに施錠し、封筒の中身の検討にはいる。奇妙なことばかりだつた。入つていた命令書によると、ある國のとある官庁から、ある書類を手段を問わず入手せよ、とのことだつたが、それは『森嬢』に託されるべき任務ではないはずだつた。それはスパイの仕事だつた。『森嬢』は軍事特殊工作員ではあり、ときにスペイまがいの任務にもあたつたが、あくまでもそれは戦地でのこと、官庁から書類を奪取するなど、純正スパイの領域の筈だつた。のろくて揺れる汽車の中で、『森嬢』は困惑しきりであった。封筒の中にはほかに官庁の地図、偽造パスポート、活動資金、等が入つていた。とにかく、やるほかないということのようだ。車掌があらわれて乗車券とパスポートの提示を求める。『森嬢』は切

符と偽造パスポートを差し出す。本物のパスポートは自分の家に置いたままだつたのだから。車掌は両方を確認すると、食事の用意ができるでありますので食堂車へどうぞ、と告げる。食堂車には久方ぶりのまともな食事が用意されていた。・・・外国からの観光客には質素極まりない食事としか映らないだらうけれども。食事を終えて自室に戻り、資料を引き続き検討する。いくらか抜けがあるようだ。当該官庁の平面図や、警備状況の予備調査報告などがない。全部自分でせねばならないようだ。厄介なことだ。『森嬢』は頭を痛めながら、がたがた、ごどごと、ごつん、がん、じん、どん、などとひたすら賑やかに揺れ続ける列車に身を任せていたのだった。

現地に到着して、『森嬢』は罷にかかつてしまつたことに気づいた。平面図や警備状況の予備調査が見当たらぬのも道理だつた。なぜなら、指定されていた官庁そのものが、この世に存在していかつたのだから。地図は正確だつた。ただ、その官庁があるはずの敷地には雑居ビルや集合住宅が立ち並んでいるばかりで、どこをどう調べてもそんな役所は痕跡すらなく、したがつてその役所の書類など、この世にあるわけもなかつた。『森嬢』は悟つた。自分は肅清される側に振り分けられてしまつたのだと。任務失敗　本国召還　肅清、といふお決まりのパターンである。「かかる官庁は存在せず、任務遂行は不可能である」と、事實をそのまま報告したところで、理性的な議論は望めない。「失敗は失敗だ。責任をとれ。」それにしてもひとつ腑に落ちない点は、なぜわざわざ外国任務で失敗させたのか、といふことだつた。しかし考える時間はほしかつた。早晚、任務失敗の事実は明らかになろう。そうなれば召還命令が發せられる。それに応じない場合はどうなるか？　本国に無理に連れ帰るか、暗殺するか、どちらかのために何者かが派遣されてくるであろう。応じようが、応じまいが、結果はひとつ。死、である。・・・・・捕まつてたまるか！　こんな理不尽な展開で葬り去られることは、誰であろうと納得などできまい。『森嬢』とて同じであった。こうして『森嬢』は、『戦士としての決心』を固めるにいたつたわけである。

「……でひとつ、補足を付け加えるべきであろう。『森嬢』を外国任務に送り出したのは、失脚した前部長のさしがねだつた。どうやら、外国にいる『森嬢』に、なんらかの計画を抱いていたようである。どんな計画だったのか？　それは永遠にわからない。前部長は失脚と同時に肅清にあい、「わけのわからない容疑で」『裏切り者』

のレッテルを貼られ、刑場の露と消えてしまったのだから。付け加えるならば、『森嬢』のお国は全般的に混迷している状況下にあり、種々の手違いと勘違い、思い込みと偏見のあげく、『森嬢』は肅清の対象にされてしまったのだった。普通そんな人間を国外には出さないと思われようが、ここでもいろいろな手違いがあつた。まず、出国を差し止める国境の担当者には『森嬢』の本名が電話で伝えられただけで、『写真は届けられなかつた。・・・あまりに早くことが進んだせいもある。写真つきの手配書は郵便で発送されたが、『森嬢』の乗車したその列車の郵便車に、その郵便物の入つた郵便袋も積載されていた。郵便袋は列車から取り下ろされると鉄道郵便局にいつたん運びこまれ、種類ごとに仕分けされ、住所ごとに区分され、そこからあらためて配達される。速達でも間に合うかどうかはあやしい。しかも郵便を発送した本部の担当者は速達扱いの指定をうつかり忘れており、普通郵便として発送された手配書は、『森嬢』の出国の三日後に、国境の担当者のもとに届く始末だった。加えて、彼らは『森嬢』が正規のパスポートで出国するものと思い込んでいたふしがあり、名前さえ伝えておけば十分と考えていたらしい。このような事情で、『森嬢』は幸運にも、死神の手の指の間をすり抜けることができたわけである。

そして『森嬢』は案に相違せぬやつてきた追跡者と対峙、あわやこの世とおちりまう前、とこゝにひるんで、『機関』の迎えを受けたわけである。

『森嬢』は、この得体の知れない連中の出迎えに、ある程度の危惧を感じていた。長年猜疑心と陰謀に取り囮まれていた人間にとり、これは無理からぬ反応であろう。なるほど、善意はないらしい。歓迎の意志も見て取れる。しかし、『森嬢』はあえて、彼らをテストすることにした。第一段階はすでに完了した。「わけのわからない連中」の供した食事を頬張るという、我が身を賭したテストである。結果は飲み過ぎで軽い一回酔いになつただけだつた。合格である。第一段階。それが装備品の引き渡しであつた。この結果も、満足すべきものであつた。即座に没収されても仕方のない危険物品ぞろいの装備品に、わざわざ預かり証を発行してきたのである。これは明らかに、『あなたを信頼していますよ。』との『彼ら』からのアピールであつた。『森嬢』はこれに対し、『全部権利放棄』で答えた。（こずれそうするつもりだつた。）これは『森嬢』から『彼ら』へのアピールである。・・・『その信頼に応える用意はあります。』『森嬢』は過去と縁を絶つ決心を固めていた。戦友の形見までも手放してしまつのは、言わば『森嬢』なりの「けじめ」であった。過去の私は『死ななければならぬ。』そのためには、過去はすべて捨てなければ・・・。ある朝目覚めたとき、『涼宮ハルヒ』の名が頭の中に『とどろいた』。自分の使命、なすべき任務も、すでに自明であつた。もう祖国には帰れない。となれば、『森嬢』の落ち着く先は『機関』以外にはなかつた。『森嬢』自身も理解していた。自分の忠節を尽くすべき相手は、今や『涼宮ハルヒ』であり、その「秘密執行機関」である『機関』にしか、自分の居場所はないのだ、

と。しかし、『無条件帰順』には、いまだ要件が不足している、とも考えた。『森嬢』は彼らの実力を計りたかった。・・・夜が明けてくる。暗かつた部屋の中に朝の光が差し込む。心は決まった。・・・自分の出自については一切明かさずにおいて、彼らに調べさせるのだ。調べられるか？その後の対応は？・・・そして『森嬢』はある晩面接に呼び出され、あの伝説的な、『事実上緘默』の受け答えへと至るのである。最終試験、『第三段階試験』の幕は切って落とされたのだ。

『森嬢』は『暫定的特例試用』との資格で任務につくことになり、仮の身分証と名札を支給された。そこには『森嬢』の仮の認識番号が記入されていた。

『F・O・R-Est-Sonoo』。

(『F』は女性であることを表し、『E』は『東日本管区』を意味する。当時事務手続き上の都合から、各人はランダムに各管区内部の名簿に登録されていた。また、『S』は『特別』、『T』は『訓練生』、『O・R』は分類用の記号であり、『SO』は簿冊番号、『NO』が登録番号にあたる。)

まったくの偶然ながら、『森嬢』は一時的に『フオレストさん』と呼びかけられることになり、奇妙な気分だった。かつての職場で、『フオレスト』は自分を指す暗号符丁だつたのだから。そして、『森嬢』は初陣に臨む。閉鎖空間突入、そして超能力的戦闘。・・・『森嬢』は見事な戦いぶりを見せ、一躍注目と、賞賛を浴びるにいたつた。

『森嬢』が驚いたことには、最初の頃の『超能力者』達は指揮も統率もなく、それぞれが各個の判断でばらばらに行動していたに過ぎなかつたのである。もつと能率的、効果的な戦いぶりが可能だとわかる『森嬢』には歯痒くてならない。ついにある日、『森嬢』は、あまりに非能率な戦いぶりに終始している仲間たちに業を煮やし、指揮を取り始めた。閉鎖空間内の、「戦闘状態」になつている超能力者たちは、一種のテレパシーで交信可能なのだ。

「第一体目の右翼に展開、左翼にあるものは後退し、第二体目の攻撃に！　『カットダウン』戦法！ 攻撃、開始！」

仲間たちは素直に指揮に従い、普段よりはるかに短時間で「状況終了」することができた。『森嬢』の名声はがぜん高まつた。『森嬢』は軍人時代「準校（大尉と少佐の間に相当）」まで昇進しており、指揮はお手のものであったのだ。審査担当者は『森嬢』に太鼓判を押した。その間に、「非正規的ルート」にて『森嬢』の身元が判明した。そして『森嬢』のもともに、「現地協力者」を介して本国の（肅清をまぬがれた）知人から連絡があり（暗号符丁を多用した郵便の形で）、『森嬢』の身辺を探る動きがあつたことが伝えられた。彼らの実力は明らかになつた。彼らは外部との回路が極めて少ない『森嬢』のお国で、有効な調査をしうる確かなパイプをも有していたのだ。『森嬢』は『第三段階試験』を『合格判定』することにした。『無条件帰順』への条件は整つた。『森嬢』は祖国も、本名も、捨ててしまう決心を固めた。もう、過去の自分については「死んだもの」ときっぱり思い切り、新たな人生に踏み出すことに決めたのだった。『森嬢』はかつての、まだ何も知らなかつた子ども時代を思い起こしていた。つかの間の、平和で、幸福な時代だつた。森があり、庭があつた。・・・『森嬢』はしばらく考え、新しい名前を決めた。・・・『森園生』。・・・我ながら、よい名前に思われた。森嬢はこの名前のもとに「生まれ変わり」、新しい境涯に、勇躍踏み出したのである。義務と義理に縛られた強制ではなく、自由意志による完全な同意のもとに。

森嬢個人としては過去と決定的に決別したつもりでも、過去のほうでは森嬢をそうやすやすとは離してくれなかつた。ある印象的な出会いにしてもそうである。森嬢はある口会議に参加した。着席するや、森嬢は既視感を感じた。正面の人物に確かに見覚えがある。そちらの方でも森嬢を見分けたらしく、近寄ってきた。彼は敬礼し、言葉をかける。

「準校どのとお見受けします。お久しぶりです。『ご無事でなによりです。・・・といひで、・・・どうしてこちらに?』」

それは初老の紳士であった。我々は彼を『新川氏』として知っている。森嬢は答える。

「やつぱりね。『班長』。」

彼はかつて森嬢と同じお国に住み、一時いつしょに働いていた。彼はかつて『国家広報宣伝省内務宣伝局宣伝課人民宣撫班班長』であり、『文官位階軍事称号読み替え』によつて『次校』の階級で（準校と大尉の間に相当）、森嬢の一時的な部下として執務していた。彼は有能であり、重宝されていた。しかしその彼にしても、身辺に肅清の嵐が迫つた。彼はそれを敏感に察知し、敵方が行動に出る前に先手を打つた。口実を設けて海外に出張し、そのまま帰らなかつたのだ。内務宣伝というものは実は国内だけではできない。彼は特権として、いつでも国外に出ることができた。・・・彼のお國では、それは一般の人々には無理な話なのである。彼はこの特権を最大限利用し、森嬢と同じく、お国と名前を捨てたのだった。森嬢の一時的な部下だった、という点が、たつたそれだけのことが、

彼の『政治的なひつかかり』であった。森嬢は言葉を継ぐ。

「私はもう『準校』ではないので、これを最後に、そう呼称することを永久に禁止。」

森嬢に、ついでだいぶ遅れて『荒川氏』に、笑みが浮かぶ。これは森嬢なりのユーモアであった。この一人はこれ以後事実上のコンビを組むことになる。しかし完全に対等とはいかななかつた。一応仮にもかつて上司部下の関係であったことは後々まで尾をひいた。『新川氏』は森嬢に呼びかけるとき、敬称を欠かさず、敬語で丁寧に接した。森嬢は『新川氏』を呼び捨て、簡潔な言葉遣いで接した。統率の習慣が、なお一人の間には残つていた。軍事指揮官たるもの、例え父親ほどに年上であろうとも、部下に敬語で接してはならないのだ。そして、機関においてすでに、その有能さと同時に、人格者として敬意を集め始めていた『新川氏』を事実上の部下として扱い、そして当然のようにその『新川氏』の敬意を受ける森嬢の姿は、『新川氏』に注目していた人々にも影響をあたえ、『新川氏』への森嬢の権威を自分たちにも認める、という方向に発展していく。すなわち森嬢は、いつの間にか広範に指揮権を認められる結果となつたのである。そして森嬢は、その指揮権に相応しい度量と、指揮のための技術をすでに身につけていた。このほとんどなし崩しに行われた森嬢の指揮権の確立は、反対者も対抗者もなく、そのうちに盤石となり、『森園生隊長』はいつしか『実戦部隊』の全権を掌握していたのだった。

さて、いたさか唐突ながら、ここからはいま一人の興味ある人物、『新川氏』について、その事情を概括してみよう。

『新川氏』がお国と名前をかくも単純に放棄できてしまったのも、彼もまた、森嬢と同じく、自分のお国を嫌っていたからだった。そのうえ、祖国脱出直前の彼は不遇な事件に連続して見舞われ、故郷への最後の未練までも粉碎されてしまったのだつた。まず仕事のことがあつた。内務宣伝事業は長らく失敗の連續だつた。彼個人の有能さだけではもはや挽回不可能（彼の有能さは主に、他の部署の応援の際重宝された）なほどの、際立つた、あるいは目立たない、有象無象の失敗の果てしない連續。彼はその生贊にされ、毎日毎日昼夜にわたり、実行不可能な命令、無根拠な「批判」、單なる罵詈雑言、脅迫的な「指導」、などに曝された。彼は、内務宣伝事業そのものの身替わりにされてしまつた格好だつた。そもそも、内務宣伝事業といつもの、国家の成功なくしては有効な活動はできない。彼は失敗続きで左前のお国の身替わりともいえた。しかし、彼の個人生活に降りかかった不幸に比べれば、こんなことはなにほどのものでもない。・・・彼は家族を亡くしていた。妻と娘。彼女らは、失敗した国政の必然的な結果である、壊滅したインフラの犠牲者だつた。その落命は、鉄道事故が原因だつたのである。

事故は次のとく記録されている。

【前代未聞の多重複合事故：××××年××月××日7時50分頃、国有鉄道 線（単線・通信閉塞式）発 行き第308普通旅客列車（電気機関車牽引・三等客車7両編成）が起点52.5km付近（現場は308列車の進行方向からみて

15‰の登り勾配の入口付近であつた)を速度50km/hで力行中、本線を逆走してきた貨車(無蓋貨車5両・屑鉄積載)と衝突、機関車と客車3両が脱線転覆、1両が築堤下に転落し大破、2両が脱線、貨車1両が粉碎、1両が脱線転覆、2両が脱線した。ついでその5分後、後続の第310普通旅客列車(蒸気機関車牽引・三等客車7両編成)が速度約30km/hで力行のまま追突、これにより308列車は全列車が脱線、310列車は機関車および客車3両が脱線した。さらにその15分後、対向の第309普通旅客列車(蒸気機関車牽引・三等客車7両編成)が前方の事故をみとめ非常ブレーキを扱つたが及ばず、約20km/hで貨車の後方から衝突、機関車と客車1両、貨車1両が脱線し、またこの衝撃により、308列車の機関車および客車2両がさらに築堤下に転落大破した。この前代未聞の4重事故全体で約300名が死亡、多数が負傷した。まず第一の事故は、次駅 駅で貨車の入れ替え中に、該当する仕訳線にブレーキ担当者が配置についていないことを確認せずに貨車を突放、さらに流轉する貨車が転轍器を割り出して本線に流出するのを見逃したというものであった。第二の衝突事故は不可抗力とはいえ、前方確認が不十分だつたのではないかという疑いが残る。50km/hといえば該当路線においては最大速度であり、しかも力行のまま衝突しているからである。第三の追突事故については、明らかに310列車の前方不確認である。機関士は機関の不調に気を取られており、機関助士は投炭に忙殺され、互いに相手が前方を確認しているものと推察していた。そして第4の事故の原因については、明らかに 駅係員の確認ミスである。この係員は続行運転の308列車と310列車双方の到着を確認ののち軌道閉塞管理室に到着を通報、閉塞管理室の指示のもとに309列車に進路を開通、信号機を操作して進行現示、ついで発車合図をせねばならないにも拘わらず両上り列車到着の確認を怠り、両列車はすでに到着したものと推測、閉塞管理室に「上り列車到着」を通告したものであった。閉塞管理室は構内を見渡せる立地になく、係員の通報が頼り

であつたため、閉塞管理員は特に疑問をもたずには309列車発車のための一連の指示を行つたものであつた。本件は人間が頼りの通信式閉塞の弱点をさらけ出した事例ともいえよう。また、鉄道職員の規律と士気の顯著な低下を如実に示したものともいえる。本件は朝の通勤時間帯に相次いで旅客を満載した通勤列車が衝突、救助の暇もなく事故が拡大し、人的被害が際限なく増大したことは不幸であつた。現場に救助のため駆けつけたのはまず近隣住民、ついで鉄道職員、消防、警察の順で、救援列車の到着は事故発生後3時間後、軍隊の到着は5時間後であつた。当日は事故の当該時刻は晴天であつたがやがて天候が急速に悪化、激しく雪が降りしきり、事故による直接の死亡者のみならず、閉じこめられて脱出不可能となつた人々（多くは重傷者）を中心に、多数の凍死者もあつたことである。死者は最終的に500名を超えた。なおこの中には、いち早く現場に駆けつけたものの、第4事故の車両転落に巻き込まれて死亡した近隣住民も含まれている。】

この救いようのない大事故の当日、彼は早朝から午後遅くまで勤務していた。報道の速度は遅く、彼は帰宅して家族の姿が見えないことから不審に感じ、鉄道駅に出向き、初めて事故の報道に接した。

彼は一刻も早く現場に向かいたかった。しかし、事故と大雪で列車はすべて止まっていた。鉄道が使えないとなると、道路整備が行き届いていないこのお国ではもはやどうすることもできない。彼はいろいろする心を抱えて、もうすでにかれこれ五時間以上発車待ちをしている普通列車の片隅に潜り込むほかなかつた。車内は人間で充满しており、にもかかわらず暗く、寒かつた。車内灯は電力不足で消されており、暖房はあってもたいてい故障したままであった。よしんば作動するにせよ、これまた電力難で切られているのが常だつた。加えて車両の状態も悪く、窓ガラスさえたいていなかつたの

だ。乗客は衣服や毛布、厚手の布や板切れで窓を塞いで、木でできた座席につづくまるか、あるいは立つたままで、みな寒さに震えていた。彼もまた、扉に近い一隅で寒さに耐えながら、生死不明の妻と娘に思いを馳せるのだった。

彼と妻は折り合いがよくなかった。些細なボタンの掛け違いの連続がいつしか夫婦の仲を冷え切らせてしまい、今では喧嘩すらなく、必要最低限の会話があるだけだった。しかし彼は、いまでも妻を愛していた。彼は妻の不満の理由がある程度は理解できた。彼は熱心に職務に励み、前の部署では成功して出世し、収入もあがり、なにがしかの名誉も手に入れた。しかし家庭生活のほうは完全に疎かになり、共働きの妻にすべて任せきりになってしまっていた。そして気がつくと、彼はもはや家庭に居場所がなかったのだ。彼は娘にも好かれてはいなかつた。少なくとも、そのように思えた。娘との会話は殆どなく、彼はそれも仕方のないことだと思っていた。ほつたらかしにした家庭が自分にとつてアウェイになつてしまふことは、これまで考へもしなかつたこととはいえ、理解はできた。しかし和解の方策を練るまでにはいたらなかつた。引き続き彼は忙しそぎたのだ。彼は家族が目覚める前に外出し、寝静まつてから帰つくるのが普通だつた。休みはほとんどなかつた。そして、休みたいなどとは言えない空気が職場を満たしていた。目を覚ましている妻や娘の姿を見かけたのは、もうどれくらい前になるだろう？ この前妻と話したのは？ 生活費の不足について手短に相談されたのが最後だつた。あれは何ヶ月か前のことだ。・・・今日は久しぶりに早く帰宅できたのだ。明日も早朝から執務せねばならなかつた。会話も笑いもない、冷え切つた家庭。それでも、それが彼の家庭だつた。彼のホームだつたのだ。彼は壁にもたれたまま、うつらうつらしていた。真夜中を過ぎても列車は動かなかつた。半分寝ぼけたまま、寒気を通して、彼は隣の線路に楔のような形の車両が蒸気機関車に押されて入ってきて、ほどなく出発して行くのを見た。なんとなく、

雪かきのための車両だろう、と彼は思い、再び気絶同然に、立つたまま眠りに落ちていった。そしてようやく夜半過ぎ、なんの予告もなく汽笛が聞こえ、がっくん、とかなり大きな衝動とともに、列車は動き出した。

列車は鬱陶しいほどのもろさで進む。ときおり駅でもないのに長時間停車したりするうえ、各駅でもかなり長い間停車、事故現場の最寄り駅に到着したのは夜が明けてからだった。晴れ渡つた、寒い朝だった。事故現場に向かう人々はさらに先へと続く線路上を三々五々行き交っている。家族を探しにゆく人々、鉄道職員、軍人、警察官・・・。彼もその中に混じり、事故現場を目指す。徒歩で約30分、列車が見えてきた。それは救援列車で、事故現場はそのすぐ先だった。折り重なつて築堤の下に転落している車両が見え、多くの人がその周囲で立ち働き、あるいはあてどなくうろついて家族を探していた。近くの畑に死亡者が並んで横たえられている。遺体は雪に埋まつており、その顔のあたりだけ雪が払われ、不運な家族を探す人々がその一人一人に食い入るような眼差しを向けていた。・・・
・彼の家族はすぐに見つかつた。母子はしつかりと抱き合つたまま、2人とも息絶えて、雪にまみれて地面に横たわつていた。妻は最期まで娘を守ろうと努力したようだつた。その頭には大きな傷があり、雪の中に血が流れ出した跡があつた。娘の遺体は一見きれいで見たが、よく見ると首が折れていることが見て取れた。彼の古くからの知人である幹部鉄道職員がたまたま現場におり、彼を見つけて近寄ってきた。彼は凍りついたように佇んでいた。幹部職員は低い声で、転落した車両から発見されたことを告げ、短い形式的なお悔やみの言葉を述べて足早に立ち去つた。彼はなおしばらくそのまま佇んでいた。嘆く氣力すらなかつた。やがてふらふらとその場を離れると、もときた線路を歩いていった。頭の中は完全に空虚だつた。自分がどこに向かっているのかも、なんのために歩いているのかもわからなかつた。しばらく行つたあたりで彼は枕木につまづき、雪

に覆われた線路上にばつたり倒れた。かなりの間、彼は横たわっていた。ときおり行き交う人々はみな自分の用事に忙殺されており、彼を気にかける者はなかった。そのうちに先刻の幹部職員が通りかかり、虚脱状態で呆然としている彼を抱き上げ、家に連れ帰った。

家に帰ったところで、もはやこの家の住民は自分ひとりしかいない。彼はぼんやりしていた。ひたすら、ぼんやりしていた。悲嘆が強烈すぎると、泣くこともできないものだ。ほとんどまる一日、そうして時間が過ぎていった。その夕方も遅くなり、暗くなつてくる頃、彼はまだいくらかぼんやりしたまま立ち上がり、家の中を歩き回つた。特にどうするというあてがあるわけではない。ただ、そうせずにはおれなかつたのだ。

作戦従事命令・12月18日事件編（前書き）

これらは本作のもつ少し先に組み込まれる予定の部分というふうになります。いずれ追いついた時点で、通し番号に繰り込む予定です。

いわゆる『消失』事件についての分析を試みるのが、主たる着想であります。

掲載を急いだため、物語を中断する形で中間に挟まってしまっております。どうかご了承ください。

「この起じりはと問えば、やはりそれは三年前のある日、キヨン君が長門嬢のもとを訪ねたことに始まることになろう。長門嬢がそのとき、三年後の自分と同期した際、『何か暖かい甘やかなもの』がいっしょにダウンロードされてきたことは前に述べた。想像力を働かすまでもなく、それが所謂恋愛感情であったことは明白である。長門嬢の悲劇はここに端を発する。長門嬢自身、このような感情を保持していることが何かの障害の原因になるかもしれないという予感はなくもなかつた。従つて、より合理的かつ冷徹な判断によるならば、そのような『非合理的情動』は即刻削除されるべきであった。少なくとも、三年前の当時は観測本務に予定されており、本来的にはバックアップではなく長門嬢と同格であつた朝倉涼子嬢はそのように戻された。定期相互点検の際、朝倉嬢は長門嬢のデータ処理に、感情野に起因するかすかなノイズがあることを認め、『早期に完全削除することが望ましいわね。』『断然そうすべきだわ。』『言うことを聞かないと大変なことになるわよ。』などと再三にわたつて指摘し、忠告し、そして長門嬢からみた自身の印象を悪化させるに至つた。長門嬢はそんなことは先刻承知であつたのだから。長門嬢はその『不思議な情動』を削除したくなかったのだ。統合思念体の端末として取り込まれてこのかた、こんなに暖かな、幸福な気持ちになれたことはなかつた。そればかりにとどまらず、長門嬢にとつて、いまだ人を恋することができることが、すでに、泣きだしたくなるまでに、嬉しいことであつた。長門嬢にとって、それはまさしく、『人間の証明』であつたのだから。インターフェースの暮らしの中では冷徹、冷然、冷静な、徹底して鋭い判断を下すことを常に要求される。そのせいで宇宙人長門有希としての判断力は常に冷たく研ぎ澄まれ、その反面、少女長門有希としての心は震え上がり、縮こまり、凝り固まり、窮屈な思いを常に味わっていたのだった。

しかし、人を恋することで、少女長門有希の寒さに震える孤独な心は解き放たれた。この暖かな情動を放棄するなど、もはや思いもよらなかつた。長門嬢は心の隅に点つた恋の炎を消し止めず、むしろ燃え上がるに任せたのだった。長門嬢はその炎の暖かさのなかで、生きている喜びを味わうことができた。自分の生きている意味を、独自に再確認できたのだった。統合思念体に与えられたお仕着せの存在意義ではなく。

長門嬢の心の構造について、ここで概括しておきたい。長門嬢はもともとは人間であり、そのもともとの人間の心の外側に、宇宙人として必要な心の上部構造が構築されている。従つて、長門嬢の行動は基本的には、精神的に極めて強靭で一切物事に動じない『宇宙人長門有希』の冷静な判断が先行する。反面、『少女長門有希』も折に触れて微かにその姿をあらわす。（特にキヨン君に対して！）かといって長門嬢は二重人格ではなく、二重性格ですらない。激しいギャップをもつ性質が同一人に備わっている、という表現がもうとも近かろう。

恋を知つて、長門嬢は変わつた。人を恋すること、そして、その恋に挫折すること。そう、長門嬢の恋は運命づけられた失恋であつた。涼宮ハルヒ嬢とキヨン君とはきわめて親和性の高いふたり、似合いのふたり、まさしく「お互いに運命的な」ふたりであった。出会つたその日、すなわち初めて会話が成立したあのときから、このふたりは心を重ね合い、互いに不足したものを補綴しあい、日ごとに、表面上はどうあれ、本質的にはどんどん仲良くなつていつた。ほんの数ヶ月で、このふたりは実質的には夫婦同然、「お互いなしでは人生が立ち行かない」段階にまで、精神的共生関係を発展させるに至つた。さて、状況がこうなつてくると、長門嬢の苦悶は誰にも容易に理解できよう。恋する男の子が自分以外の女の子どんどん親密になつていくのを、長門嬢はただ手をこまねいて眺め

ているほかはないのである。妨害も自己アピールも許されず、日々しだいに心の交流を深めてゆくふたりを、ただ見ていることしかできない。長門嬢の一途に純情な恋心は日々手酷い挫折の連續であり、それだけによりいつそう燃え上がった。その無表情な見かけの奥では、恐るべきジレンマが常に渦巻いていた。ついにはその無表情に綻びが表れるほどに。キヨン君は単純にその変化を喜んでいたが、『見ぬもの清し』の言葉通り、喜んでいられるようなものではなかったのである。それはきわめて危険な兆候であった。強大な情報改変能力を行使できる長門嬢ではなくてはならぬ、厳重な自己統制機能の破綻を如実にあらわすものであつたのだから。長門嬢の恋心は燃え上がり、燃え盛り、燃え広がり、すでに長門嬢自身、コントロール不可能になってしまっていた。キヨン君の視線が自分に向くだけで長門嬢は至福に舞い上がり、その笑顔が他の女の子に向かられるだけで、あつという間に奈落の底に落ちこむ。かつて冷たい心を温めてくれた恋心は今や業火と化し、その猛烈な熱で長門嬢を苛んだ。

11月も後半に入ると、長門嬢の精神状態はもはや抜き差しならぬ段階に入つてしまつていた。猛烈に燃え盛る心の火はもはや大火の様相を示し、「全市にわたつて広範に延焼中、火勢きわめて強、消火困難。」とでも例えるほかない状況だった。長門嬢は自分なりに、なんとか火勢を抑えようと努力はしていた。長門嬢は自問自答する。少しでも自分自身に有利な状況を見つけ出し、もはやほとんど苦痛と化した、恐るべき恋の猛火を抑えるために。

問：あの二人の間に入り込むことは可能であるか。

答：不可能である。かの二人の間には、もはや隙間がない。彼らは心理的にお互いを共有、不可分に結びついている。

問：あの二人は仲がよいようには見えない。

答：見かけ上の反発のしあいに惑わされてはならない。かの一人はいかにも若く、そのプライドと羞恥心ゆえ、お互い反発しあう形態をあらわしているにすぎない。彼らの関係はいわば水に水を注ぐごとく、まったく自然で、本質的に違和感ないものである。

問：あの二人は所謂「深い関係」がない。

答：形式論に陥ることは避けねばならない。ここで「深い関係」のあるなしは大して意味のある議論とはいえない。前述されている通り、彼らの結びつきは非常に自然なものである。適当な時機、適切な機会に、彼らは「人間関係のあらたな段階」に至るであろう。不可避的な流れのなかで、ごく自然に。

問：「深い関係」を、涼宮ハルヒに先行して「私」が「彼」と締結することにより、彼らの仲に入り込むことは可能であるか。

答：不可能である。これも前述の通り、彼らの結びつきは既に非常に強固なものであり、「私」との「関係」があろうとも、それは「一般的事故」として処理されてしまう可能性が非常に大きい。彼らはお互いの過失を赦しあうこと学び、益々関係を深化させるであろう。

問：「私」と「彼」が「結ばれる」可能性はあるか。

答：激しく既出。

そういう経過で、長門嬢の対策は結局手酷い裏目に出てしまった。「少女長門有希」の淡い願望は「宇宙人長門有希」に木つ端微塵に粉砕されてしまい、「心の大火」はますます激しく燃え盛るのであつた。恋愛こそは、恋愛の最高の燃料であるのだから。しかしなお長門嬢は努力した。『未来を垣間見る』という、禁じ手に打つて出たのである。・・・しかし、それとも散々な失敗に終わつた。「あの二人」はどんな形の未来であれ、仲睦まじく、それなりに幸

福そうに暮らしていた。「彼」の近くに、長門嬢の居場所はなかつた。

「彼」と長門嬢が「結ばれる」未来など、あるわけもなかつた。

長門嬢は深くふかく傷つき、ひとり、悲嘆にくれた。長門嬢は誰に相談することもできず、独り、これまで悩み続けてきたのだ。心の大炎にただ一人、立ち向かってきたのだ。しかし、長門嬢はもはや限界に近づいていた。さしもの強大を誇る宇宙人長門嬢の心もこのところひどく惑乱ぎみで、原因不明のエラーが多発、はつきりと不調であった。長門嬢はさすがに不安を感じ、緊急自己点検を実施し、そして愕然とした。長門嬢の心は、もはや焼け落ちる寸前だつたのだ。長門嬢は自己評価を訂正しなければならなかつた。「消火困難」から「消火不可能」に。長門嬢は無意識に自己を過信していた。長門嬢は自己の心の強大さにいつの間にか依存していた。多少のことではこの心は揺るぎもしない。そう、多少のことでは。しかし、ことは多少のことではなく、大いに大したことであつたのだ。この「心の大火灾」の火元は「少女長門有希」、すなわち長門嬢の心の屋台骨にある部分であつた。屋台骨が焼け落ちてしまえば、すなわち全体が崩壊してしまう。強大な心の構造体が壊滅する際、どんな恐ろしい連鎖反応が発生するかわかつたものではない。時ここに至つて、ついに長門嬢は問題を独りで抱え込んでいることをやめたのだった。自分が崩壊する際には、かなり高い確率で、「愛する『彼』」に大変などばつちりを及ぼしてしまうことだろう。そんなことは許されない。愛する「彼」には、むしろ何も知らないでいてほしい、自分のせいで心乱すことなど……。長門嬢は決心した。長門嬢は自分自身を、統合思念体中央意志に対し、問題提起したのである。

12月18日事件は統合思念体にとつても不意打ちであつたと一般的には考えられているようだが、その可能性はきわめて薄いと言わねばならない。あの一件は『長門嬢の自発的な自己補正行動』の一環をなすものであり、従つて統合思念体中央意志との討議と立案

された計画に沿つて執行された、言わば作戦であった。（ただし、

主流派と穏健派を中心とする統合思念体の一部のみで意思決定し実施に移したため後刻問題になり、その結果『長門有希撤収』論が一時ほとんど可決されかねないところにまで到つたことは前述した。

・・主導的な派閥を名指しにすることは避け、長門嬢自身を問題にする形で。）長門嬢は決定的な崩壊を目前にして、自ら、もはや自己の統御が不可能となつたことを認め、言うなれば進退伺いを提出に及んだのであった。のちに長門嬢は『私の処分が検討されている。

』と述べてキヨン君を激怒させたが、このようにみてくるとそれはむしろ当然の流れであつたと理解できよう。長門嬢は自ら、自分が『欠陥インターフェース』であると立証してしまつたようなものなのだから。完全性を至上命題として追求する統合思念体にとつては看過しがたいことであつた。しかしここで穏健派が意見具申し、長門嬢は処分を免れたわけだつた。まったくこれは首の皮一枚で繋がつた命といつても過言ではない。長門嬢はとうに覚悟していた。任務解除、用途廃止、分解処分の運命を受け入れる心の準備はすでにできていたのだ。それでも長門嬢は自らの『立て直し』のための、計画を立案し提出した。意外にもこれはほぼそのまま承認され、執行所定期日を冠し、『準作戦（臨時調整工程）：事例1218』として実施の運びとなつた。概要は以下の通りである。まず、「心の火災」が延焼して焼け落ちかけている「増築構造体」部分を「爆破」、このいわば「破壊消防」的な措置によつて「心の火災」を大部分鎮火せしめ、後刻改めて「増築構造体」部分を再建する。なお、「破壊消防措置」執行の際、安全確保のため、部分的に世界改造を行しなければならない・・・。この起案はまず主流派が検討し、ついで穏健派が検査、主流派に再度差し戻され、主流派が最終的に承認した。このとき、『安全確保処置チェックリスト』、すなわち一時的な世界改造の青写真も同時に査閲された。・・・『朝倉涼子』の項目がまるごと抜け落ちているリストである。『朝倉涼子』こそは最大の危険性に他ならない筈だが、長門嬢は『朝倉涼子』のこと

などすっかり忘れ果ててしまっていた。長門嬢にとり朝倉嬢の存在はもともとあまり有り難くない類のものであった。『例の一件』でもともとあつたあるかなきかの反感は決定的になり、朝倉嬢への強制的情報連結解除処置以降、長門嬢はむしろ清々したような気分でいた。朝倉嬢の記憶は日々急速に薄くなり、起案が提出された頃にはすでに、「そういえばいた・・・そんな人が。」ぐらいの感想を、指摘されて初めて抱くような、希薄な存在感になってしまっていた。それに長門嬢はこの頃には、自分自身のことだけで手一杯となつており、従つて朝倉嬢のことなどはもうまったく忘却のかなたにあつたのだ。

ここに生じる疑問は、なぜ統合思念体は査閲の際その危険性を指摘しなかつたのか、ということである。まず主流派については、項目に挙げられていないものは長門嬢自身が「危険性が些少」と判断した、という解釈であつた。確かに、朝倉涼子という「人間」の人物像は、一般的な性質にとどまる限りは、危険性を感じさせるものではない。従つて主流派はその点は指摘するにはあたらない事項に該当と判断、チェックリストをそのまま承認した。穩健派はいささか事情が異なつていた。彼らはこの件全体について、彼ら自身の目的があつたのだ。彼らの目的、それは「長門嬢と朝倉嬢の決定的な離間をはかる」ということであつた。穩健派はすでにこの時点で、『涼宮ハルヒの観測活動ならびに分析は容易ならざるものであり、長期の活動期間を必要とする』という判断のもと、「長期行動計画」を策定、そのなかには長門嬢と朝倉嬢の役割がすでに明確に規定されており、なおかつこの両者の役割は決してなれ合つことができない、両極端ともいうべき対立関係にあるものだつた。穩健派は朝倉涼子の危険性を明白に認識していた。朝倉涼子が人間性の根底的な部分で完全に性格破綻しており、およそ良心というものに無縁な、いわば『からっぽの優等生』であることを見抜いていたのだ。彼らはチェックリストの不完全さ、朝倉涼子への対策の手抜かりに気づ

いていながら、見てみぬふりをした。そういうわけで、あの決定的なハプニングが発生してしまったのだ。朝倉涼子はキヨン君に対する、『殺人未遂の既遂犯』にうかうかとなりおおせてしまったのである。

朝倉嬢は長門嬢の頬に優しく触れた。その手は柔らかく温かかったが、長門嬢にとってはこの上なくおぞましく忌まわしい感触だつた。恋する男の子を刺した手だ！ わたしの大好きな男の子を、この手が！ この手が！ この手が！ 長門嬢がもう少しあつきり意思表示できる人物なら、次のごとく喚いたであろうことは疑う余地がない。即ち・・・「触らないで！ 犯らわしい！」

さて、ここで読者は考えてみなければならない。あなたは、自分のいちばん大事な人に手を下そうとした、あるいは実際に下した人間を容認できるだろうか？ あなたの恋人、妻、子ども、両親、兄弟、親しい友人、誰でもよい。それらの人々の誰であれ、実際に殺害にいたらすとも、瀕死の重傷を負わせ、あるいはそうしようとしただけでも、決して許せないのではないだろうか。しかもそやつは悪びれもせずにへラヘラと、「あの場合ああするしかなかつたのさ。」などと嘯いている始末である。さあ、この状況をあなたは受け入れられるか。・・・大部分の人間にはそれはとうてい無理な相談であろう。あなたはせめて一発ぶん殴るためにとびかかるか、あなたの手に刃物があれば、躊躇なく相手を刺しにかかるかもしれない。それらのことがなにもできないにしても、あなたの心には憎しみが生まれ、その相手を不眞面目の敵として、ゆるぎない嫌悪感を伴つて、それこそ炎のごとく燃え上がるに違いない。

要するに、そういうことであった。その同じことが長門嬢にも起つたのである。朝倉涼子は過ちを犯していた。それは誤解に基づいていた。朝倉嬢は長門嬢の「一重基準」を理解していなかつた。

長門嬢の基準には「宇宙人基準」と「人間基準」があり、長門嬢自身、無意識的にそれらを使い分けていたのである。そのうちの「宇宙人基準」は極めて広大な、それこそ思念体的な、宇宙的観点に立脚したもので、こうなると「許す」「許さない」の区別すら無意味なものとなってしまう。極端な話、自分自身に加えられたいかなる無礼乱暴狼藉であるうとも、無際限に許容することができます（『宇宙人長門有希』に対して実質的な被害を及ぼすことは、そもそも生身の人間には絶対不可能だがこの際そのことは描く。）切れ刻まれようが引きちぎられようが直ちに原状回復が可能な、つまり物理的に損壊することが事実上不可能な『宇宙人』ならではの見解といえよう。これに対して『人間標準』はまったく何の変哲もない、『一女子高生長門有希』の判断基準である。（『女子高生長門有希』という人物はいささか風変わりではあるが、それは単なる人間の多様性の誤差の範囲内に完全に収まるものだ。）長門嬢はこのうち、適用していた。朝倉嬢はそのところを誤解し、「長門嬢の判断基準は常に『宇宙人基準』なのだ」と判断したのだった。『宇宙人基準』に基づく限り、人間の生死などは自然界における一般的な現象の单なる表れであり、原因がなんであれ、それ以上の意味は有さない。従つて朝倉嬢は、長門嬢の意向については考慮せず、所属する急進派からの指令をそのまま実行に移した。この工作は是非とも現在必要なもので、いすれば長門嬢にも自分の行動の正当性が理解されるであろう、との予測に、というよりは希望的観測に基づくものであった。だが現実はそうではなかつた。キヨン君に適用されていたのは『人間基準』であり、普通の人間さながら、長門嬢は完全に怒り狂う結果となつた。しかもそれはそもそも自分自身の過失から発生してしまつたことなのだ。怒りは自分自身にも向き、そして鉢先を変えて、結局は朝倉嬢にすべて叩きつけられる結果になつた。長門嬢は朝倉嬢を『未来永劫永遠に許されざる不俱戴天の完全敵対分子』と規定、朝倉嬢に対する憎しみの感情を永久に掻き立て続け

る決心を固めた。自分自身の不甲斐なさを責める感情もない交ぜに。即ち、彼を傷つけてしまったのは私の過失（チエックリストの見落とし）によるものであり、従つて実質上私が手を下したも同じ。彼がどう思つていようが、私は自らを懲罰せねばならない。長門嬢は燃え盛る憎しみの感情を、自らの中に保持した。それは熱くて重く、鋭く苦痛な、灼ける剣のじときものだった。憎しみが薄らぎそうになると、長門嬢は自らの心の火を搔き立て、まさに剣を鍛えるように、朝倉嬢への憎しみをことさらに、ひたむきに保ち続けた。古い革命歌にあるがごとく。

にくしみの坩堝に

あかく灼くる

くろがねの剣を

うち鍛えよ

ある意味、朝倉嬢は生贊ともいえた。長門嬢は自分自身に向かつたあまりに激しい、遣り場のない、怒りと憎しみをまとめて朝倉嬢に叩きつけることで、自分自身を保つたようなものだったのだから。長門嬢の宇宙的な心の中で人間的感情は増幅され、巨大な奔流、炎の大河となつてさかまいた。長門嬢自身が受け止めるには困難なほどのものだ。もとからあつた個人的反感、彼を刺したことへの猛烈な抗議の感情がガイドウェイの役割を果たした。朝倉嬢は免責されない。犯罪は確かに実行されたのだから。しかし、のちに朝倉嬢は長門嬢から、意外なほど強烈な憎悪と拒絶をうけることになるのだが、そこにはこののような事情があつたのである。

長門嬢にしてはこの反応は激しすぎるのではないかと思う人もいるかもしれない。しかし、ある事実から考え起こしていただきたい。

長門嬢は一途に恋する少女である。しかして、一途さというものは即ち激しさを意味するものだ。長門有希という少女は、そのクールな、あるいはか弱い外見の奥に、意外なほどの中情熱を隠し持つてゐるのである。一途な恋というものは、必ず激しい情熱に支えられているものなのだから。そしてその情熱が反転して憎しみに向かうときもまた、一途に、ひたむきに、そして情熱的に。それが長門有希という少女であつた。長門嬢はインターフェースでありながら、極めて人間くさい性格を、しだいにはつきりさせはじめていた。そして、ここにこそ、稳健派の謀略の原因が、そして長門嬢の悲劇のよつてきたるところが求められるのである。

長門嬢は最初のうち、他のインターフェースたちとなんら変わることころがなかつた。即ち、きわめて目立たない存在だつた。いるのかいないのかもわからず、そもそもそんな人間が存在しているのかどうかもはつきりしないような。しかし、そのうちに長門嬢は目立つた存在になり始める。それも単なるクラスの人気者としてではなく、一種のカリスマ的な存在感を明らかにし始めるのだ。長門嬢のこの変化は、長門嬢独特のある事情と密接に関連して発現している。ひとを恋すること、そして恋に挫折すること、がそれである。この感情の大きな落差は長門嬢に微かな表情を出現させる程度の、ある種の柔軟性をもたらし、長門嬢はクラスにおいて、独特的の存在感を發揮するに至つた。稳健派は早くからこの現象に注目しており、長門嬢の浮き沈み揺れ動く危なつかしい感情の動きに気づいていながら、敢えてこれを放置、興味深く状況を観察していた。彼らのインター・フェース喜緑絵美里がこの秘密観測活動の直接的な側面を担当、喜緑嬢一流の的確な分析を行つた。統合思念体には理解しにくい人間的心理の面からのアプローチによるこの分析は、以後の稳健派のさらには主流派ならびに思念体中央意識の意向、さらには長門嬢の運命までも決定してしまつことになつた。喜緑嬢は以降、稳健派の同意のもと思念体中央意識と直結、思念体自体の意向決定に深く関

わるようになつていいく。12月18日事件の頃には、すでにその地位は確定的であり、長門嬢との討議の際、事態収拾のために幾つかの提案を行つた。（名田上は提案だが、実際は命令といつてよいものだつたらしい。）

長門嬢は世界改変にあたつて、いくつものトラップを仕掛けた。涼宮ハルヒの不在、わかりにくいメッセージ、世界復帰への时限を設定したこと、そして、自分自身、等々。そう、長門嬢自身こそは改変後の世界における最大のトラップだつた。長門嬢の意向は明白だつた。『涼宮ハルヒのいない世界で、私は彼にとり、何者かでありまするだらうか？』これは自己修復工程にかこつけた、長門嬢の自己実現の戦いでもあつたのだ。長門嬢は彼のことが大好きだつた。しかし、長門嬢の恋路は、「涼宮ハルヒ」という名の超えられない壁に塞がれていた。この壁に対しても、さすがの長門嬢も無力であつた。涼宮ハルヒはライバルとしては絶大に過ぎた。なぜなら涼宮ハルヒも彼を愛しており、とりわけ問題の彼はといえば、涼宮ハルヒを愛していた。しかもぞつこん惚れ抜いている有り様だつた。物事に基本的に無関心な彼が、率先して涼宮ハルヒに、自分から声をかけていることからみても、このことは疑いない。彼はほとんど一眼惚れに近いばかりに、涼宮ハルヒに「いかれて」しまつっていたのだ。とっかかりがそうであるだけに、長門嬢の恋路は初つ端からつまづきの連續であり、最初から勝ち目のない勝負だつた。長門嬢は悩んだ。世界改変にあたつて彼に手を加えるべきか？ そんなことはできるはずもなかつた。二重の意味でそれは不可能なことだつた。まず、彼を改変してしまうと、世界復帰のためのとっかかりが失われてしまつても、それはあまりに無意味な、哀しい勝利といえた。出来レースに勝つても虚しいだけだし、あまりにもそれはアンフェアに過ぎる。それにしても長門嬢は不本意だつた。喜緑嬢と協議のうえ策定された世界復帰の要件は、彼と涼宮ハルヒを引き合わ

せることにその要諦があった。彼らはすでに心理的に一体化しており、即ち涼宮ハルヒの喪失は彼に巨大な空虚感を抱かせることになる。彼はこの空虚感を埋め合わせるため、涼宮ハルヒを探し、発見したい、どうあっても、接触を試みずにはおれないであろう。涼宮ハルヒは彼のことを知らないことになつてはいるが、彼の接触を受けしたい速やかに心を開き、その直感と行動力をもつて、他の補足的な要件を直ちに充足せしめるであろう。長門嬢は彼が涼宮ハルヒを追い求める気持ちが復帰工程の中核をなしている点が気に入らなかつたが、反論はできかねた。長門嬢にはある望みがあつた。野望といつてもいいかもしれない。それは、彼の空虚感を自分で埋め合わせたい、という望みであった。

改変後の長門嬢は復帰後の長門嬢と記憶を共有しているかしないか？ この問には「当然している」と答えねばならない。「一介の女子高生」として彼と過ごした3日間の記憶は、長門嬢にとっては、不成功には終わつたものの、宝物のように大事な思い出だつた。それはなんと甘美な記憶だつたろう！ ライバルもおらず、任務もなく、ただ純粹に彼を想い、彼とともにいた時間がどんなに幸福だつたことか。大好きな男の子と2人つきりの時間がどんなに心ときめくひとときだつたことか。返す返すも、朝倉涼子を見落としていたことは手痛い失敗だつた。殺人未遂事件も当然そうだが、ほとんど蛮勇に近い勇気を奮つて彼を家に招待したのに、それすらもぶち壊しにされてしまったのだから。

長門嬢の自己実現の総力戦は、結局のところ総敗北に終わった。彼はトラップにひとつも引っかからなかつた。トラップがひとつひとつ撃破されるたびに、長門嬢は、涼宮ハルヒと彼の間には決して誰も入り込めないので、という突き刺さるような真実を、ひとつひとつ、確認させられるのだった。（そのときには長門嬢は改変中で認識能力は休止状態だったが、のちに復帰してから検討したときに、

結局そういう結論を避けられなかつた。）涼宮ハルヒの不在も、わざりにくいメッセージも、復帰期限も、「彼」をいたずらに焦らせただけで、本質的にはなんらの効果もなかつた。長門嬢自身すらも、有効ではなかつた。長門嬢は彼の前に、自分自身の根本をさらけ出した。人間だつたころの自分ほほそのままの、寡黙で、内気で、か弱い、まさに「守つてあげたくなる女の子」。しかも、キヨン君が大好きで、見つめられでもしたら恥ずかしさに俯いてしまうような、仕草の可愛らしい、純情可憐な美少女。しかし、キヨン君を動かすにはいたらなかつた。キヨン君はもうずっと前から、涼宮ハルヒを愛し、そして涼宮ハルヒに愛され、とうに相思相愛の、「お互いくして人生なし」ともいうべき関係になつてしまつていた。前述の通り、「精神的な共生関係」である。彼はすでに完全に涼宮ハルヒのものだつた。従つて、無意識的ながら、彼は涼宮ハルヒ以外の女性のアピールを、もはや一切考慮しなかつたのである。長門嬢は当然のことであらかじめ悟つてはいた。それでいて諦めはつかず、ちょっとでも自分になびいてはくれまい、そんな思いもあつたのだ。だが、長門嬢のアプローチはすっかりスルーされてしまった。そして涼宮ハルヒの所在が明らかになるに及んで、長門嬢の恋する乙女としての戦闘は、その敗北が確定した。要塞が陥落してしまつたのだ。戦線は突破され、正面の維持は不可能になり、全軍総崩れ、あつという間に本丸に攻め込まれて、長門嬢の、我が身を盾とした恋の冒険は終わりとなつた。戦争は全正面で終わつたのだ。全面的敗北をもつて。

それにしても、キヨン君が涼宮ハルヒを想う気持ちは意外なほど強いものだつたことは特に強調しておかねばならないだろう。彼は谷口君から涼宮ハルヒの所在を聞きつけるや否や、直ちに走り始めるのだ。しかも、この時的重要な懸案であるはずの『鍵』のことなどはすっかり忘れ果て、ただ、「涼宮ハルヒに会いたい」の一念で全力疾走しているのである。彼もまた、心に激しい情熱を秘めた、

一途な男であったのだ。長門嬢の悲哀は、その一途な情熱がすでにほかの女性にとられてしまつていて、決して自分には向いてくれない、ということであった。「一人暮らしの部屋に誘う」などといふ『女の飛び道具』じみた手まで繰り出しても、長門嬢は彼に、「女性としての影響力」を發揮することはできなかつたのだ。

彼は妻の部屋、娘の部屋にも入つてみた。当然ながら、部屋のようすにはなんらの変わりもない。ただ、そのあるじがもはや永遠に帰らないという事実だけが、普段と異なるのみである。彼は意味もなく、机の引き出しや戸棚などを開けてみたりしていた。と、娘の机の引き出しから、「お父さんへ」と記された封筒を見つけた。・それは娘から父宛てた、親愛の挨拶の手紙だった。古びた手紙だった。ずっと渡せずにいたのだ。手紙の最後はこのように結ばれていた。「・・・愛するお父さんへ　あなたの娘より　お誕生日おめでとう」。その時初めて、ぼんやりと霧のように彼の心に広がっていた悲しみが、はつきりとした形をとりはじめた。悲しみの霧の粒子は寄り集まって水滴となり、そして彼の目から流れ出した。長年枯れ果てていた彼の涙が、はらはらと床にこぼれ落ちていった。年甲斐もなく、彼はすすり泣くのだった。年齢など関係あるものか。愛しい娘が、妻が、彼をひとり置き去りにして、この世を去つていつたのだ。なんの予告とてなく。彼の胸は鉛のように重く感じられ、足ががくがくと震えた。今にも崩れ落ちようとしたとき、不意に、玄関のドアをノックする者があった。彼は悲しみに耽溺することを一時打ち切らなければならなかつた。必死に踏みとどまつて玄関を開ける。そこにいたのは、あの幹部鉄道職員であった。悲しみに沈む彼の心は、いまだ怒りの段階には達していなかつた。したがつて彼は「ごく平静な態度で来客を招じ入れ、来意を問うた。幹部職員は居心地悪そうにもじもじしていたがやがて口を切つた。幹部職員は、今日ここへ来たのは、ふたつの意向によるものだ、と言つた。まず一つは、事故の弔慰金を交付することであり、もう一つは彼の職場、即ち内務宣伝部からのメッセージを伝達すること、だと。まず彼は立ち上がると、丁重にお悔やみの言葉を述べ、封筒を差し出した。些少ですが、と彼は述べたが、実際にその通りだつた。わが国でこ

んな金額を、たとえ一時金にせよ手渡したとしたら、おそらく大問題になるだろう。しかし彼のお国では、それがすべてだった。なにしろ、事故が多すぎるのだ。政府の規定で定められた弔慰金はただでさえほんのお慰み程度のしろものだが、さらに「人民の政府への貢献の意向に配慮して」という名目で割り引きされるのが通例だつた。要するに、政府への「弔慰金減額への無条件同意」という形での、無償奉仕の強要である。今回は事故の規模からして割り引き率は八割程度に抑えられていたようだつた。・・・規定の一割の交付である。すでに、「十割の割引」などという信じられないような前例がある以上、出るだけましとも言えないではなかつたが。こういつたことに抗議など、できる話ではない。「叛逆の意志あり」とみなされ、それだけの理由で処刑台に送られかねないのだ。

彼は黙つて封筒を受け取つた。幹部職員は彼に深く頭を下げた。そしてほんの一瞬、彼の耳元で囁いた。

「逃げろ！」

幹部職員氏は、実は第三の意向をもつて彼を訪問したのだ。それは彼に警告を与えた、逃がすこと。幹部職員氏は彼に以前、恩義をこなしておついていた。ある事情……例によつてくだらない事情だが……で失脚寸前まで追い込まれたのを救つて貰つたのだ。しかし、恩返しの機会はついぞなかつた。一介の鉄道職員以上ではない職員氏にとり、できることは限られていた。しかし、政権政党の中堅党員でもある職員氏は、肅清の前兆を嗅ぎ取ることはできた。彼は一身の危険を冒す決心をした。訪問の理由はある。しかし、逃亡を唆したことなどが露見すれば、自身は言つに及ばず、一族郎党、広範囲に累が及ぶことだろう。逃亡の教唆は「政治犯罪」であつた。裁判なしで拷問され、そのうえで強制収容所に送られることは確実な罪状である。しかし、ここを逃せば、報恩の機会は永久に去つてしまふだろう。職員氏は黙つたまま、持つてきた鞄から鉄道職員の制服と職員証を取り出し、机の上に置いた。そして背筋を伸ばし、声高に職場からのメッセージを伝える……現在、民心は離背、勤労意欲はとみに低下し、士気は沮喪、忠誠心は地に墜ちている。精神的な国家の非常時である。今この時においては、個人の悲劇などは一切取り上げるべきものではない。国家に、指導者に、忠節の誠を尽くすため、家庭の悲劇などは直ちに打ち捨て、ただ忠勤一筋に、邁進しなければならない……。耳にタコができるよつな、相変わらずの空虚な美辞麗句というわけだつた。彼は黙つて聞いていた。職員氏は、言い終わるとそそくさと帰つていつた。制服と職員証はそのままに。

つまり、これらが『逃亡用アイテム』ということのようだ。こうしてはいられない。ことは切迫している。彼は家の明かりを消し、鉄道職員の制服に着替えた。そして最小限の荷物だけ持ち、玄関から出ていこうとして、危うく思いとどまつた。考えてみれば、もうこの家は監視下に入っているはずだ。彼は台所に行き、流しの下の板切れを外した。子どもの頃、よくここから出入りして怒られたものだ。流しの下、家の外壁には穴があつた。國家の責任でなされるはずの修繕はついに行われず、つまりはそのままになつていた。そしてその穴を抜けると、家の外壁に接した鉄道の高架線路の下に出ることことができた。子どもの時分には、よく職員用の階段からこつそり高架に上がり、たまに見つかって怒られたものだ。彼は長年通ることもなかつた秘密の通路、悪童時代の思い出の抜け穴をそつと通りぬけ、昔取つた杵柄の言葉通りに板を元に戻し、真つ暗な高架下に出た。昔よりは多少狭かつたが、それでもかなり楽に通ることができた。要するに、そういう大穴が数十年にわたつてほつたらかしなつっていたということだ。このあたりが、『人民の地上天国』を謳う彼のお国の、せいぜいの実力というところであった。

高架下の暗がりを進んで、昔の記憶通りの職員用の階段を上がる。素人目にも、線路が荒れているのがわかつた。砂利がすっかりなくなつた鏽色の土にひょろひょろと雑草がまばらに生え、枕木は腐つてぼろぼろになり、レールは磨り減つてでこぼこになつてゐる。・

・「ろくに」メンテナンスをされていないどころか、「まったく」されていなければどう見ても明白だつた。線路に沿つて、彼は歩き始める。自分の家、監視役らしい一人の私服。それらはやがて後ろに遠ざかり、かくしてこれが彼の故郷の見納めとなつた。鞄の中に平服、金錢、僅かの食糧、そして、娘の手紙。よほど置いていくべきかとも思つたが、どうしても手放せなかつたのだ。娘よ。可愛い娘よ。お父さんはお前と、もう一度だけでも、言葉を交わしたかつた。僅かなりとも・・・妻よ、許してくれ・・・私は夫としては失格だつた・・・お別れだ。これで・・・一人祖国を捨てる、お父さんを、夫を、この不甲斐ないありさまを、どうか許しておく・・・彼は静かに泣きながら、ゆっくりと歩いていた。さて、これからどこへ向かうべきか？暫く前から、彼の頭にはときおり、『涼宮ハルヒ』の名がちらついていた。・・・明らかに、今はその時だつた。行かねばならぬ。御許へ、赴かねばならぬ。頼るべきものは、他にはもうない。

しかしそれにしても、線路の荒れかたは尋常ではなかつた。彼の目についただけでも相当末期的だが、もっと細かい部分。すなわち、レールを枕木にとめるための金具はところどころ腐つた枕木から浮き上がり、レールの継ぎ目の留め板は緩み、ボルトは鏽びてひん曲がり、ある場所では折れてなくなつてゐることもあつた。・・・これでは事故が起きないほつが奇跡である。

線路を歩きながら彼は思う。人生の、なんと皮肉な巡り合わせであることよ。鉄道事故で妻も娘も亡くした自分が、鉄道職員の手引きを受けて、しかも鉄道職員の制服で落ち延びていくことにならうとは。・・・鉄道職員氏には、感謝してもしきれない。彼はきちんと恩を返してくれたわけだ。それもぎりぎりの危険を冒して。逃げ延びねば。逃げ切らねばならぬ。万一途中で捕まれば、結局彼も巻き込んでしまう。それも最悪の形で。前方に駅が見えてきた。列車が停車している。郵便車の扉が開いていた。居合わせた職員に便乗を申し出ると、職員は面倒くさそうに頷いた。本来郵便車は便乗禁止なのだが、もはやそんな規律は有名無実だった。列車は人間で溢れかえつており、郵便区分室の床、郵便区分職員の足元にまで乗客がゴロ寝している始末だった。彼は郵便保管室に潜り込み、郵便袋の山を寝具に、泥のように眠り込むのだった。他の幾人かの乗客と、非番あるいは休憩中らしい職員たち同様。

小突かれて目を覚ますと列車は終点に到着しており、郵便袋の取り下ろしが始まるところであった。彼はこんな具合に、あるいは郵便車、または荷物車、使われていない車掌室や物品格納室などを乗り継ぎ、国境に接近していった。そして国境にほど近い鉄道管区本部に入り込んだ。入るぶんに苦労はない。鉄道職員の制服さえ着用していればほぼ完全にノーガードである。国境を越えるにあたり、彼は自分の手配状況を知らねばならなかつた。彼が受け取つた職員証は「幹部鉄道職員／国境地域執務」の青線入りのもの（ほかには「首都地域執務」の赤線入りのものと、「その他の地域執務」の線なしのものがある）で、これを提示して、党中央から配信される「政治日報」を閲覧させてもらひつもりだつた。かなり危険が伴うが、迷つたすえのことだつた。彼は「政治日報」を管理している鉄道政治監督官を探して歩き回つた。執務室にはいない。結局彼は、休憩室で監督官を発見した。・・・飲んだくれて正体なく眠りこけている監督官を。監督官の傍らの机の上には半分ばかり空いた強い酒の瓶と陶器のコップ、そして最新版の政治日報が放置されていた。政治日報の注意書きが虚しく目に映る。『幹部職員もしくは政治監督官限定／極秘書類指定文書／放置厳禁・要厳重管理』。題字の横のスローガンはさらに虚しい。『執務中の飲酒ならびに酩酊・泥酔・居眠り・職務放棄等の士氣に関わる不良な行いを徹底的になくそう！』特に幹部職員ならびに政治監督官は率先垂範せよ！』・・・・・彼は政治日報を取り上げ、ざつと目を通す・・・・・変わつたことはなにもない。そう、なにも。・・・・『広域手配・発見次第即通報！薄謝進呈 政治警察局』の欄にも彼は載つていらない。・・・どうもおかしい。彼はちょっとと考え、結局非正規ルートでの越境を決意した。大事をとつたほうがよい。彼は一計を案じ、報告書を一通書き上げると封筒に入れて切手を貼り付け、鉄道管区本部に隣接した駅

に出向いた。停車中の普通列車ではおりから郵便物の取扱中で、郵便車にはしきりに人が出入りしている。彼は何食わぬ顔で郵便車に入り込み、郵便区分室の区分棚の適当な場所に自分の封筒を放り込み、素早く立ち去った。こうしておけばいつかは職場に報告書が到着するはずだ。報告書の内容は『緊急に海外出張する』というものであつた。彼は近々隣国の高官と会見する予定になつており、それがいい口実になつた。報告書の口付は事故の3日後、そして切手には消印がない。どこまで通用するかはわからない。だが、姑息な手とはいえ、職場に出勤しない理由を何がしかつけておかなければ、『無断欠勤』を理由に手配されてしまいかねない。時間稼ぎである。そしてその間に、彼自身は、できる限り速やかに、国境を越えてゆかねばならないのだ。

彼は国境至近まで行く普通列車に飛び乗った。短距離の区間普通列車で、すぐに終点に到着する。列車から降りると暫く線路を国境に向かって歩き、途中で線路脇の森の中に入り込む。森を抜けると堤防がある。国境の川の堤防だ。国境警備隊の兵士がときおり行き交っている。彼は暗くなるまで森の中に潜んでいた。その間に平服に着替え、着てきた制服を処分する。またもや悪童時代の杵柄、木によじ登つて、かなり上のほうの木のうろに丸めて詰め込んだのだ。夜半過ぎ。いよいよ祖国脱走の敢行の瞬間がやつてきた。警備隊の兵士が行きすぎてかなり遠ざかるのを待つて森から飛び出し、堤防を越えて、一目散に河床を突っ走る。ちょうど渇水期のこと、水はほとんどなかつたが、石がころごろしていて足元がぐらつき、真っ暗で大変危ない。幾たびか足を滑らせ、浅い水に腰までつかりながら、それでもついに彼は無事渡河を果たし、対岸の堤防によじ登つて、その向こう側の道路に降り立つことができた。寂しい道だ。堤防と林に挟まれた一本道。しかしその道路には街灯が灯っていた。街灯から外れた暗がりにつづくまり、彼は少しだけ休んでいた。もうここは隣国だ。・・・もう少しだ。もう少しで、自由の大地だ。彼は次の旅程を目指して、立ち上がり、歩き始める。

ここよりは彼の旅程を辿ることを慎まねばならない。かのお国からの逃走経路は、いまだ陸續として逃走者が続いている以上、彼らの安全のためにも、厳に秘しておかねばならぬ。苦心惨憺のすえ彼はわが国に到着、待ち受けていた『機関』の接触を受ける。彼の場合は、森嬢のような相互テストの工程はなかつた。彼は一切躊躇うことなく、機関の一員となつた。彼は『機関』というカードに、最初から有り金全部賭けてかかつたのだ。どの道、ほかに行く場所はないのだから。そして、彼が正しいカードに賭けていたことは、わ

ざわざ指摘するまでもなく自明であろう。妻子を失い、故郷を棄て
て払つた甚大な犠牲を贅うにはいまだ不足かもしけぬが、彼はかな
りの払い戻しを受けることができ、そしていまだに受け取り続けて
いるのだから。それも物心両面にわたつて。

あまり本筋には関係ないかもしだれぬが、ここで小さなエピソード
をひとつ。『機関』に帰順して間もないある晩のこと、彼は奇妙に
はつきりした夢を見た。・・・彼の前に、彼に背を向けて、若い女
性が立つていて、不意に声が聞こえてくる。田の前の女性が話して
いるようだ。

「あまり時間はないの。」

背を向けたまま、女性の声は続く。

「身近にいる女人を、私の代わりに見守つてあげて。・・・あたしだつて、もう一度、話したかったわ。でも、もうそれはかなわない・・・。さあ、もう行かなきゃいけないわ。」

彼は黙つて聞いていた。いつたいこの人は誰だらう？ どこに行くのか？ このメッセージの意味は？ 女性は付け加える。

「手紙、読んでくれてありがとう。あれだけが、最後の心残りだつたの。見つけてくれて本当に良かった。」

手紙？ 手紙？ 何のことだらう？

「わよなら、お父さん。」

その瞬間、彼ははつと目覚め、自分の目から涙が流れているのを感じ、そして女性の正体を悟った。・・・自分の娘が、人生を全うすることがかなわなかつた可愛い娘が、あの世への旅の道すがら、自分の夢枕に立ち寄つてくれたのだ・・・。もとより根拠はない。ただの思い込みかもしれない。願望が夢に現れただけなのかもしない。だが、それがなんだというのか？ 彼は娘の靈魂が彼のもとを訪ってくれたのだと、信じることに決めた。娘は最期の言葉を自分に伝えに来てくれたのだ・・・。娘よ・・・娘よ！ よくぞ、この不甲斐ない父のもとに立ち寄つてくれた。お前の言葉、必ずや果

たそつ。

見守る相手はすでにはつきりと決まっていた。森嬢である。といつても、森嬢は彼の娘にそれほど似ているわけでもない。似通っているところといえば、だいたいの年齢と背丈くらいなものである。しかし彼は、このうら若い事実上の上司に対し、かねてから不思議な親しみを感じていた。それは彼女の不幸な生い立ちを知ったせいかもしないし、それにも関わらず、温情ある、責任から逃げ出さない、立派な上司ぶりを見せてくれたせいかも知れなかつた。彼の関わつた責任ある人々の誰にもまして、彼女は理想的な上司だつた。あるいは、彼女の隠し持つた寂しさが、彼をひきつけたのかも知れない。とある夕暮れ時、彼女が長い影法師を引きずつて、ひとり歩いてゐるのを遠くから目にしたとき、彼はなぜだか、涙が溢れるのを止めることができなかつた。ともあれ、彼は森嬢を自らの娘と仮託し、静かに見守つていくことにした。つまり、彼女を守るためにらば、命をも惜しまぬ決心をしたのだ。もちろん、森嬢には彼は何も言わなかつた。娘に何も言わなかつたように。・・・彼は、とてもシャイなお父さんだつたのだから。

さて、ひとまず機関員たちのHPソードを締めくくるにあたり、最後に、以前ひとまず置き去りにしたHPソードをここで補完しておきたい。森嬢とその追跡者についての挿話である。

森嬢が「機関」に参加を決意し、その過去を投げ打つて、彼らの旗のもとに帰順して数日のある日、突然、理由を告げられずに呼び出しを受けた。指定の会議室に出向くと、渉外担当の人間が待っていた。彼は森嬢に着席を促し、語りかける。

「あなたの追跡者を覚えていませんか？」

「はい。」

「彼は我々に拘束されていたのですが、どうしても任務を完遂し、帰国したいと主張しております。」

「はあ。」

「実を申しますと、我々は彼をも我々の同志として迎えたいと思つていたのです。・・・ もつとも彼は『招集』を受けていませんから、完全な同志としてではなく、いわば『外郭要員』として。・・・ しかし彼は非常に意志堅固で、頑として主張を曲げません。無論、あなたを引き渡すなど論外です。しかし、彼をこのまま解放するとも適切とは言えません。」

「私に何をお望みですか？」

「單刀直入に言いますと、彼を騙すのです。嘘も方便です。ついでは、何か血で汚してよいものと、まことに失礼ながら、血を少々いただきたい。」

「わかりました。」

森嬢はずつと持ったままでいた『党員手帳』と『認識標』を取り

出した。こんなものはもついたない。そして、ナイフを取り出し、腕を切つて血を出そうとした。と、涉外担当者は彼女を押しとどめ、内線電話をかけた。するとすぐに医師が現れ、セオリー通りに彼女から採血し、血液を金属製のトレイにあけた。涉外担当者がそこに彼女から受け取った『党員手帳』と『認識標』をひたし、血で汚れたそれらをビニール袋に入れれる。

「事故にあつて」「くなつた、と言つておきます。」

その場はそれで解散となり、森嬢はこの小さな逸話をわりとすぐ忘れてしまつた。

しかしある日のこと、『新川氏』と二人でいたときのことである。簡単なミーティングが終わり、彼らはそのまま、各自の手元の資料を検討していた。突然森嬢が叫んだ。

「ばかな！　・・・ばか者が！　ばかめが！・！」

森嬢は『新川氏』に向かつて言つたわけではない。森嬢は椅子をはじいて立ち上がり、小さな新聞のようなものを手にわなわなと震えていたかと思うと、それを机に叩きつけ、

「なんという・・・おろかな！」

と呟き、ふいに出て行つてしまつた。『新川氏』はそれを取り上げる。それは懐かしの『政治日報』であつた。彼ら二人はその出身から『情報分析主管』に任せられ、かつての祖国の各種資料をもとに、情勢判断を行う仕事もしていた。彼らにはじく簡単な仕事であった。かつて職場で用にしていた資料の、それも最新版が、自由に利用できたからである。『機関』の人脈のたまものであつた。とこ

ろで、いつたい何事だというのか？考えるまでもなく、黒枠の目立つ記事が嫌でも目に入る。肅清の広報だ・・・。「祖国と指導者の名において、以下の反逆分子に正義の鉄槌を下したるものなり。」

・・・そして、聞いたよつた名前がそこにあった。森嬢が以前話していた、追跡者の名前であった。「・・・この者指導者同志の信頼篤きところに付け入り、任務中連絡を絶ち、国外において妄動、指導者同志の名誉を傷つけたる段重々不届き至極につき、出党撤職（党からの除名ならびに職籍抹消）、名誉剥奪のうえ銃殺をもつて処断されたり。」・・・要するに、定時連絡を欠かしたというだけの理由だった。森嬢は一時追い詰められたとはいえ、追跡者を高く買っていた。その技の汎えに敬服していたのだ。森嬢が立腹する理由も理解できよう。「それ程の男をむざむざと！」森嬢と同じく、理不尽な話には慣れっこのはずの『新川氏』も、これはことに酷い話だと思った。こんなことではもうビリしそうもない。につして、この亡命者たちは、また一つ、かつての祖国への幻滅の種を増やしたわけであった。

さて、われわれはここで一時的にこの興味ある挿話を切り上げ、ことの本質に立ち帰らなければならない。涼宮ハルヒ嬢のその情報改変能力の、よって来たった原因の究明である。

念のためお断りしておきたいが、この問題に関しては従来のように時系列に沿つて記述することが適切でないようと思われるため、物語の舞台をいつたん「われわれの時代」から引き離し、「この時代」の中で語られなければならぬ。朝比奈みくるの本来の時代、すなわち、この物語が記述された時代である。

本文の記述者である「わたし」はある日、時間進行調整省内の長門有希連邦最高将本営事務室に喜緑江美里嬢を訪ね、補充的な取材の続きを行つていた。そのおり、かつて提出していた質問状に回答を得られていなことをふと思い出し、喜緑嬢に質問してみたのである。・・・喜緑さん、以前提出した質問状第861号についてですが、ご回答をいまだいただいていないように思います。

あの喜緑さんに対して、尊称を欠いて話しかけるとは大胆なと思われようが、そうとしか呼びようがないのだ。初めて面接した際、「閣下」と呼びかけたところ、即座に正された。

「わたしは現状、『閣下』と称されるべき官職を有しておりませ
ん。」

・・・確かに、それはその通りであった。そこで「同志」と呼び

かけたところ、またしても正された。

「なんの『同志』ですか？ 人民革命党が解党されて、もうついぶんになります。」

こちらも確かにその通り。・・・では、「喜緑さん」。

「それで結構です。」

・・・さて、また話がそれた。質問状第861号とはまさしく、涼宮ハルヒ嬢の力の根本原因について問うたものであった。一般的に質問状に対する回答は素早い。回答に時間のかかる場合でも、少なくとも「回答可能」か「回答不能」かの通知は数日中にあるものだ。しかしこの質問状については、数ヶ月の間、なんの反応もなかつた。喜緑嬢はちょっとと考え、

「回答することは十分に可能ですが、信頼にたる裏付けをつけることができません。それで回答が遅れおりました。・・・しかしこの機会ですので、私自らご説明申し上げることいたしましょう。」

そう言つと喜緑嬢は金庫から大きめの宝石箱のよつなものを取り出し、開いて見せた。濃いグリーンの天鵞絨の座布団の上に、同じ天鵞絨に包まれたものが載つてゐる。包みを開くと、金属製の物体が現れた。喜緑さん、こちらは確か、鶴屋家収蔵になる、『T-O P/O O 1』、『発掘品・製作時代確定不能・作成目的不明・用途不明・分類「オーパーツ(仮)』、例の謎の金属製品ではありますか？

「現在は私どもの研究所でお借りしています。」

拝見してよろしいですか？

「どうぞ。」

そこで、「わたし」はその金属製品を手にとってじっくり観察した。と、どこかで見たような紋様が目に入った。

「わたし」は質問を発する。喜緑さん、ここにある紋様に見覚えがあります。これはもしや……？

「その紋様に関してはよくご存知の筈です。」

確かにその通りであつた。念の為、持ち歩いている資料を取り出して見比べる。見たところ、両者は同じ紋様であった。少なくとも、よく似ていた。まったく奇妙な符合としかいいようがない。なぜなら、「わたし」が取り出した資料なるものは、中学生の涼宮ハルヒが校庭に描き出した、例のあの謎の図形だつたのだから。喜緑さん、この符合はどうのよつて説明されるものなのでしょう？

「今から私が物語ることは、到底信じがたいことだと思われるかもしれません。確かに、証拠を提示することはほぼ不可能なことです。とにかく、聞いていただきましょ。・・・はるかな昔、太古といつてもよい頃のことです。宇宙の片隅に文明が生じ、発達し始めました。その文明を担つた生物は、あなたがたの、すなわち地球の平準で測ろうとするならば、実に奇妙なものです。彼らは有機的な肉体に、無機物の脳髄を備え、非常な長命を誇りました。肉体の老化速度が非常に遅かったのです。彼らは文明を段階的に進歩させ、世代交代の非常に緩やかな彼らの種族にとっての数世代のうちに、進化と文明の突端に到達しました。そして、滅亡への道を辿りはじめたのです。理由は単純で、世代交代が完全にゼロになってしまつたからです。彼らは精神的進歩をも完成させ、新しい世代を作り出すことへの関心を完全になくしてしまつたのです。そして、沈思默考と瞑想のうちに、彼らはゆっくりと、しかし確實に数を減らしていく、ついに一人を残すのみとなりました。彼らの中でももっとも

深く思念の海に飛び込み、その秘密を探ることに成功し、その結果宇宙の全てを思つままにコントロールできる秘訣を得た存在です。彼はもはや、自分の生死すら自分で制御可能な境地に達しました。そして、もはや仲間のひとりもいない自らの種族は『滅亡の時機に到達した』、との見解にいたり、彼自身もまた、仲間たちと同じく死に赴く決意を固めました。しかしひとつ、ちょっとしたいたずらを仕掛けてゆくことにしたのです。最期のコーモアというわけです。それこそが、この金属製品というわけです。彼は自らが体得した秘訣を一連の文字に仮託しました。彼ら自身の言語、彼の死と共に完全に滅ぶ言語で、『わたしはここにいる』を意味する言葉です。そして、ノーヒントでその言葉を完全に正確に記述した者先着一名様限定で、無条件でその秘訣をプレゼントすることになりました。つまり、この金属製品は解答編といつわけです。

すると、喜緑さん、この金属製品を手にした者は、その時点で失格ということですね？

「その通りです。」

話がそれるようですが、『精神的進歩の突端への到達』とは、必ず『緩やかな絶滅』に繋がるものなのでしょうか？

「そうとばかりは言い切れません。知性の様態により、種族の特性によりけりです。とにかく、話を戻しますと、その金属製品は今や、言わばただの金属片に過ぎません。すでに解答した者がありますから。そして、その金属製品を世に送り出し、一連の条件付けを終えると彼は最期の瞑想に入りました。自分の精神を肉体から完全に切り離す瞑想です。ここに、彼の種族は滅びました。彼の生きた惑星は未だに存在し、生命の楽園の觀を呈しております。ただ、あなたがたには一見そうとは見えないでしょうな。褐色の荒れた惑星としか……。」

その方は、死の前にわざわざこの金属製品の加工をしておられたということでしょうか？

「いいえ。すでに申し上げました通り、すでに『秘訣』を会得していたのですから、そういうものを虚空から取り出すことも容易なことです。」

たしかに、・・・信じがたいことです。そして、その解答を下されたのが、他ならぬ、

「そう、涼宮ハルヒさんです。彼女は、完全ノーヒント、出題されたことすら知られない問題に見事に正解し、限定先着一名の特典を勝ち取ったのです。」

なにゆえそういうことをなし得たのでしょうか？

「正直申し上げて、ことの詳細は私たちにもわかりません。しかしあなたもご存知の筈。涼宮ハルヒさんの特性を。例の彼もかつてそのことは述べていたはずです。曰わく、『あらゆる可能性を飛び越えて正解に到達する女』と。」

それは確かにその通りですが。

「要するに、もうこうしておいたのだと、ここにひとです。」

わからぬい」とはまだあります。

「何でしょ？』

なにゆえ、この金属製品はここにあるのでしょう？　ここになければならなかつたのでしょうか？　つまり、なぜ、鶴屋さんのご先祖の手に入ることになつたのでしょうか？

「その問い合わせに解答を与えることは困難です。因果関係の説明が極めて難しい。言葉で説明できることながらに属するのです。因縁めいたものと言つてもよいかもしません。とにかく、このものを作り出した『彼』は、このものを虚空から取り出したのですが、そのまま適当にどこかに放り出した、と言つたほうがよい。それがたまたまこの惑星の上であり、そしてたまたま鶴屋さんのご先祖の手に

入った、としか言いようがないません。

「

・・・さっぱり理解できません。

「あなたがたにはいまだ理解困難な領域に属することです。無理もありません。ともかく、涼宮ハルヒさんが森羅万象を思い通りにできる『秘訣』を手にしたことは事実。その点に変えようがないといふことをもつて、この、あえて申しあげますが、わけのわからぬい物語の数少ない証明とみていただきたいものです。」

それでその日は時間切れになり、会見は打ち切りとなつた。「わたし」はいつも通りに挨拶し、微笑み返す喜緑さんをあとに退出した。そしてしばらく廊下を行つたところで、思いがけず、長門有希『国際連邦全国監査統監および連邦最高将』閣下に出会つた。「わたし」は脇によけ、直立不動の姿勢をとつて閣下を見送つた。閣下はあたかも、「わたし」などいなかのように通り過ぎて行かれた。こちらもいつも通りというわけだつた。

この時代、軍の階級には「元帥」にあたるもののがなく、大将以上の階級を細かく設定することで対応している。下から、大将・上級大将・連邦高等将補・連邦準高等将・連邦高等将・連邦最高将。長門有希連邦最高将閣下は、この新しい階級制度の発足と同時にこの地位につかれ、以後そのまま執務されておられる。連邦最高将は軍隊の最高指揮官である地球防衛軍連邦高等将のみならず、行政の最高指揮官、即ち国際連邦大統領である行政連邦高等将、連邦警察の最高指揮官である司法警察連邦高等将の三者を統率する地位である。文字通り、地球の支配者なのだ。

長門嬢に対する「わたし」の態度について、「軽装令違反」とと

る人たちもあるかもしれない。しかし、それもゆえなきことではない。この時代の長門嬢の前に進み出るとき、人はある感慨にとらわれるであろう。・・・「いま、わたしは偉大な人物、しかもきわめて偉大な人物の前にいる。」・・・思い起こしてもらいたい。初めて長門嬢に対面した際の朝比奈嬢の度を越した緊張ぶりを。正面きつて対面すると、ことにその目を見てしまうと、誰もが圧倒されてしまう。「軽装令」なるものは、実際、遵守することがかえって困難なものなのだ。長門有希閣下から受ける圧倒的な印象のままに、最高の敬意をもつて接するほうが、どれだけ楽かしれない。どんなに場に似つかわしい立派な服装をしていたとしても、長門有希閣下の前に立てば、普段着のまま宮殿に入り込んだような気恥ずかしさを覚える。ましてや、実際に普段着だつたら！　この威令は長門有希閣下ご本人から発しているもので、情報操作の産物ではない。しかし長門有希閣下は、好き好んでこのような威令を発揮しておられるわけではないということは明記しておかねばならない。そこには、ある不幸な事情があるのだ。その事情を説明するためには、ふたたび時間を遡り、われわれの時代のほんの少し先にまで戻らなければならぬ。

そして、その事情を語るためには、われわれはあまり触れたくない話題に敢えて踏み込むことにならなければならない。涼宮ハルヒの死と、その周辺の種々の事情である。

××××年12月18日午前4時23分、涼宮ハルヒが死んだ。長寿のはてのことと、長い外国旅行から帰ったばかりだった。夫と一緒に旅行だった。（彼ら夫婦は世界最高齢夫妻として、ギネスブックに掲載されるほどであった。）涼宮ハルヒ老人は非常にかくしやくとして眼光炯々、その年齢からすると信じられないくらい元気なご老体だった（ある新聞記者が年齢詐称を疑つて取材に訪れたことすらある。）が、この頃さすがに衰えは見え始めており、今回の旅行では南米のピラミッドの石段を上り下りする際に、しきりに中途で休みをとらざるを得なかつた。（ほんの数ヶ月前、ギザのクフ王のピラミッドを頂上までよじ登つた際は、途中考えられる限り最低限の休憩しかとらなかつた。）そして帰国とほぼ同時に体調の不良を訴え、一旦は帰宅したものの、ほとんどすぐに病院に駆け込むことになり、そしてそのまま入院の運びとなつた。12月17日の夕刻のことであつた。その枕辺には夫が、つまりキヨン君が付き添つた。（彼は婿養子になつたため、涼宮氏といふことになるが、煩雜を避けるため敢えてこの呼称で統一することとする。）冬の朝の夜明け前、うつらうつらしていたキヨン君はふと、目覚めた。傍らの妻、涼宮ハルヒは目を見開き、じつと自分を見つめている。意味するところは明らかだつた。いまこのとき、妻はこの世の旅路を終えようとしていたのだ。涼宮ハルヒはただひとこと、呟いた。

「キヨン、先に行つてるわね。」

夫は妻の手を取った。一人の覚悟は、じつに昔に決まっていた。
夫はつとめて平静に、妻に言葉をかける。

「ハルヒ、あの世でも元気でな。・・・あんまり閻魔大王さんを
恼ますんじゃないぞ。」

妻は微笑み、夫の手を握り返す。と、その目にかつての星空の輝
きが宿る。手に更に力がこもる。涼宮ハルヒは、SOS団長閣下
は、かつてのように言明する。常に不可能を可能にしてきた、その
火のような言葉が、これを最期と、夫へ、世界へと送り出される。

「でもね、キヨン！　あたしの物語は、まだ終わっちゃいないわ
！　・・・しつかりついでらっしゃい！」

「ああ、もちろんだとも！」

夫の力強い答えに得たりと一度頷き、心の底から幸福そうに微笑
み、・・・そのまま目からは星空の輝きが消え失せて静かに閉じられ、
体はベッドのマットレスに沈む。医師や看護師が駆けつけてくる。
・・彼らは「今、どうしても、涼宮ハルヒさんの様子を見に行かね
ばならない。」との思いに突如とらわれ、馳せ参じてきたのだ。

もとより、彼らは延命のために呼ばれたわけではない。彼らが駆けつけたとき、老女涼宮ハルヒはまだ生きており、まるで静かに眠つてゐるよう見えた。そして、ほどなく呼吸が止まつた。主治医が夫に質問する。

「どうしますか？」

延命術を施術するかどうかの問い合わせだ。夫は一瞬迷つたようにも見えたが、やがてきっぱりと答えた。

「もう結構です。」

「わかりました。それでは・・・12月18日午前4時23分。・

・・・『臨終です。』

「・・・さよなら、ハルヒ。」

『老衰による多臓器不全』の死亡診断をもつて、涼宮ハルヒの人生は終わった。医師たちは、この死亡診断の速やかな確定のために呼び寄せられたのであつた。変死扱いになつたり、解剖に回されたりといった余計な手間を省略し、さつさと旅立つためであつたと考えられている。そして事実、実にスムーズにことが運んだのであつた。

涼宮ハルヒの死の、周辺への波紋は意外なほど小さなものだつた。涼宮ハルヒの知名度はあまり高くはなかつた。全世界に令名とどろく「佐々木研究室」の「上席主任研究員」とはいえ、「研究室室長」佐々木博士の名声に比べれば涼宮ハルヒのそれははるかに霞む。ノーベル賞受賞者でもある、『数学と物理学の革命家・新しい時代の

創造者・偉大な佐々木博士』。『賢察の」とく、あの佐々木さんが将来戴くことになる名声である。とりあえずここでは、涼宮ハルヒが佐々木博士の同僚であったという事実のみ記憶にとどめておいていただきたい。さて、涼宮ハルヒ氏の死にあたり、その葬儀にはいろいろな人々が駆けつけてきた。娘たちは言つに及ばず、古い友人たち。長門嬢、古泉氏とその妻。ここで読者は奇妙な感想をもたれたであろう。なぜここに、古泉氏が登場しうるのかと。ここには非常に革新的な、新しい医学の発展の成果がみられるのだ。革命的新薬、通称『エンジエルミン』。これは本来、制ガン剤として開発されていたものであった。読者は、この物語に制ガン剤がなんの関係があるのかと訝しく思われようが、いましばらくこのままおつきあい願いたい。

この制ガン剤はまさしく革命的な薬剤であった。発見が遅れて第4期まで進行し、もはや打つ手なしと見なされていた患者に試験的に投与したところ、数週間でその患者は完治し、退院した。投与を受けた患者のすべてで同様の卓効がみられ、そればかりでなく、内科的な様々な疾病に対して際立った効果がみられた。医学界はあらたなブレイクスルーへの歓声にみたされ、開発者たちはこの世の名声の極みに達した。

強力な薬剤には当然、強力な副作用がある。開発段階で判明していたこととしては、生殖系に対する決定的な影響があつた。生殖系に対してだけは、この薬は毒薬も同然で、たつた一回の投薬で破滅的な影響を顯す。造卵、造精機能が変調をきたし、まともな生殖能力をもたない、機能不全の卵子・精子しか造れなくなる。投薬を続けるとやがて造卵・造精機能そのものが低下し、いづれは廃絶する。女性に関しては、最後には子宮の着床能力も喪われる。そして器官そのものは、あたかも盲腸のごとく、もはやなんの機能ももたないが、維持のためだけに栄養を受領するものへとなつてゆく。対処法

はない。したがって、投薬に当たつては、このあたりの患者の同意をどのように取り付けるかがネックとなるのだ。

「この薬剤の副作用はほかにある。そして、「ひかりの副作用」ではない。・・・老化が遅れ、寿命が伸びるといつ副作用である。薬理的にどのような作用が発生しているのかは、実は未だにはつきりしたことはわかつていない。ただ、老化速度が鈍麻、場合によつては停止する、ということだけははつきりしている。お察しの通り、この薬剤が『長寿延命薬』として使用され始めるまでは、そんなに時間はからなかつた。

医学会は当初、『エンジュルミン』を『長寿延命薬』として使用することには反対していたが、投薬を要求する人々の圧倒的な声に押し切られてしまい、結局は使用を容認するほかなかつた。

さて、この時において、涼宮ハルヒ氏とその周囲はどのように振る舞つたか？ まず、佐々木博士のように、いち早く投薬を受け始めた者もあつた。

「研究のために普通の一生では足りない。・・・科学者は時は科学の発展のための突撃部隊の先鋒を務めなければならず、最大の犠牲を払う覚悟する必要すらある、と、私は考へてゐる。従つてこの信念に従い、私は自身の女性としての機能と社会的権利を永久に放棄する決断を下した。・・・私は、私の研究と科学とに永遠の愛を誓つ。」

30歳台後半、すでに名声揺るぎなく、ノーベル賞は目前、しかしながら研究への意欲に燃え、

「研究室以外には、私のいるべき場所がない。研究と主婦生活を両立できるならまことに結構なことだろうが、残念ながら私にはそれは無理だ。」

とまで述べた佐々木博士。残念ながら家庭には恵まれなかつた。時間の流れの分岐により、彼女は独身を通していか、結婚してもすでに失敗していた。彼女は、いち早く決断を下したわけだつた。見込みのない家庭人としての自分に見切りをつけ、研究者、科学者として、遙かな未来へ向けて、研究生活を続けてゆくことにし、

その犠牲を払うことにしてたのだ。（ただ、この時点で、かなりの高確率で、彼女が一度出産していたことが後世の研究者の手により判明している。そして、結婚していたとしても、それはその夫の子ではどうやらなかつたらしい。）

かと思つと、古泉夫妻のような例もある。古泉夫人は30歳台後半に不幸にしてガンを患い、『エンジュルミン』の投与を受けて全快、当然その副作用の影響下に入つた。彼女は夫に投薬を勧めたが、夫はかなりの間躊躇逡巡し（およそ20年）、かなり高齢に達してからようやく投薬に同意した。その結果、彼らはまるで『年の差夫婦』の如き外観を呈するに至つた。妻はそれを嫌つて夫に投薬を勧めたのだけれど・・・。

さて、当の涼宮ハルヒ氏はこれにどのように対応したか。端的に述べて、それは拒絶であった。

「意味がよくわからないわ。」

彼女は言つたと伝えられる。

「生命を無為にひきのばすことがなんだつていうの？ 人生の意味は長さでは決まらないわ。なにをしてきたか、なにを成し遂げたか！ その質で決まるのよ！」

上司としての佐々木博士はしきりに翻意を促したらしいが、涼宮ハルヒ氏は頑として首を縊には振らなかつた。しかし、佐々木博士の決断については、

「結局は各人がその意向と責任で決めればいいことよ。」

と言い、批判は一切しなかつたという。涼宮ハルヒ氏の夫は妻に倣つた。彼ら夫妻は老化と死を從容として受け入れる道を選んだのである。これは却つて英断ともいえよう。『エンジエルミン』は工業的に大量生産ができ、その卓効からすると信じられないような廉価で提供されていたのだから。

『エンジエルミン』の登場は巨大なパラダイムシフトを巻き起こした。年齢と序列に関する考え方は全面的な混乱をきたした。『エンジエルミン』は健康保険が適用される。なにせ安価なのだ。健康保険の適用下で、事実上の不老長寿が手に入る世の中が忽然として到来したのだ。なぜ、これが混乱の原因にならない訳があるう。所謂「自然派」の人々は、口を極めて、この薬剤を、それこそ狂気のようになつて罵つた。しかしそんな彼らの間にも、「転向者」が続出した。結局みんな、「死ぬのは嫌だ」という感情の方が勝つたのだ。しかし行き掛かり上黙ることができず、実は『エンジエルミン』の投与を受けながら、薬剤を罵り続ける人々もあつた。・・・所謂「自然派」の、中核を占める人々の一部であつた。彼らは運動に長らく関わり過ぎ、主張を変えることができない立場となつてしまつていたのだ。彼らの主治医、投薬を実際に担当していた人々には、さぞかし滑稽に見えたことであろう。閑話休題、さて、この『エンジエルミン』は、投与開始年齢が早いほど効果が持続するという特徴がある。しかしあまり早過ぎても駄目である。投与量が多くなり、成長過程の特に早期においては、この薬剤は「劇症ショック」という反応を引き起こす。一瞬にして全生命反応が消失し、回復不能。即ち即死である。投薬可能年齢は概ね16歳以降とされる。投薬開始すると、老化と同じく、成長も停止する。ここに、はるかな未来に向けて、『永遠の若者』の出現に対する用意は整つたわけだ。

さて、涼宮ハルヒは友人知己一同の弔意を受けつつ靈安室に退場、物語のヒロインが舞台袖に引っ込んだわけだ。そうなると、こんどは主人公のクローズアップとなる。妻の死の後ほとんどすぐに彼は体調が悪化、病院が満床だったことから、妻が息を引き取つた同じ

ベッドに、今度は彼が横たわることになつた。病状は思わしくなく、医師は家族に、「心の準備」を求める。彼と彼の娘の、病床での対話。先に口を切つたのは彼の長女である。

「主治医の先生の話によると、どうも確たる原因は不明とのことだ。」

「そうか。」

「ことによると、ママがキヨンくんを浮んでるのかもしれない。」

「あることは、本当にそうかもしれんな。」

彼の顔には微笑みが浮かぶ。

「目を閉じるとな、あいつの姿が浮かぶ。本当に見えていいように浮かぶ。・・・高校の頃そのままの姿だ。・・・腰に手を当てる。・

・・ちよつと不機嫌そうな・・・。」

「『なにをぐずぐずしてるの? 早く来なさい!』って言つてるのさ。」

「俺もやう思つよ。」

そして、心底寂しげな咳。

「あいつがいなくなつてみて、俺にはわかつたよ。」

暫く言葉が途切れ。そして、

「あいつのいない世界は・・・俺には、静かすぎる。」

そして彼は静かにベッドに体を預け、事実上、それが彼の最期の言葉となつた。呼吸に困難が生じだしたために入工呼吸器の装着を

余儀なくされ、以降の会話は不可能となってしまったからである。

長門嬢にとり、恐るべき試練の瞬間が目前に迫りつつあった。長門嬢は成長も老化もできないまま、あの頃そのままの姿で、ずっと彼を愛し続けていた。幾多の年月を重ねてもその愛情には些かの変化もなく、むしろさらに深まつていたといえるだろう。長門嬢は危惧と不安におののいていた。愛する彼が、彼女をひとり残して、この世を立ち去ってしまうのではないかという不安である。そして、その不安は、いよいよ具体的な形をとりはじめた。危惧は現実となるうとしていた。長門嬢が彼を延命させようとどれほど頑張ったとか！　彼女は彼の老化の鈍麻や死の時期の延期、せめて肉体的な不調の情報操作による調整などを、幾度も幾度も申請し続けていた。しかし、そのたびに回答は同じ、「本申請を付帯事項にいたるまで全面的に却下。」というものであった。彼女の後見人、指導員であり、統合思念体中央意志の代理人である喜緑江美里嬢は長門嬢に直接説諭したほどである。

「彼の運命はその自然の成り行きに任せられなければなりません。

」

立ちゆく長門嬢に向かつて、あくまでも笑みを絶さずことなく、喜緑嬢は続ける。

「それは涼宮ハルヒさんの望みであり、何よりも彼自身の望みなのです。彼ら自身の自由な意向は、なんとしても尊重されなければなりません。」

彼の病状は悪化を続け、運命の12月21日の夜が明ける頃には、既に彼の運命の大勢は決したと見なされるにいたつた。医師は家族に告げる。「この方は恐らく、今日のうちに亡くなられるでしょう。明日の朝を迎えることは不可能と思われます。彼は人工呼吸器の補助のもと、比較的はつきりした意識のまま、最期のときを生きています。知己友人、親類一同に対し、再び集合がかけられる。差し迫つた彼の葬儀のために。そして、かなうことならば、彼らからの、生前最期の挨拶のために。」

長門嬢のもとにもその連絡がやつてきた。しかし、長門嬢は明確な返答を与えたかった。彼の末娘から、妹から、次女から、相次いで電話があった。あるいは震え声で事実のみを端的に告げ、あるいは泣きながら、そしてほとんど懇願するばかりに、彼の臨終の枕辺への彼女の来訪を求めていた。しかし長門嬢はそのたびに返事を濁し、電話を切つてしまつた。長門嬢は彼の臨終の枕辺になどいたくなかつた。愛する人の死に様など、見たくなかったのだ。長門嬢は思い出に耽りながら、なにもかも嘘であればいいと考へ、自室でひとり、うずくまつて、虚ろな時を過ごしていた。電灯も暖房もつづく、電源の切れたこたつに潜り込んで。室内の肌寒さも、薄暗さも、彼女には何らの関わりもなかつた。愛する人がこの世を去つていく予感に、この恐るべき現実に、長門嬢はたじろいでいた。すべてから逃げ出してしまひたかつた。そもそも涼宮ハルヒ「生き今、長門嬢の使命は完了したはずであった。少なくとも、理屈のうえではそうであった。インターフェースの同僚の中には、活動停止、または休止、あるいは用途廃止を指令されるものもあつた。しかし、長門嬢は「用途廃止決定通告」はあるか、「動員解除命令」も、「活動休止許可」も、受領できなかつた。何事が、自分にはまだ任務が

残つてゐるらしかつた。長門嬢はもう、なにをする氣力もなかつた。やがてやつてくる決定的瞬間を、できれば立ち会わずに済ませたい、そして、静かにこの世から消えてしまいたい。それが、いまの望みのすべてであつた。その時、再び電話が鳴つた。彼の長女からの電話だつた。彼女は前置き抜きで、冷静に語りかけてきた。

「あなたの気持ちはわかる。キヨンくんの死に際に居合させたくないことも理解できる。しかし、しかしだ。キヨンくんはあなたに会いたがつてゐる。是非とも来てほしいとは敢えて言わない。もしもそうして貰えるならばでいい。どうしても来れないなら、あるいは来たくないなら、無理にとは言わない。しかしこれだけは伝えておきたい。・・・最後にあなたに余つことが、キヨンくんのこの世の最期の望みなんだ。」

電話は切れ、長門嬢はしばらくぼんやりしていたのち、のろのろと外出の用意をはじめる。愛する彼の最期の望みとあらば、どうしてむげにできようか。

それでも長門嬢は、きっぱりと決心できたわけでもなかつた。心は千々に乱れ、揺らいだ。彼の望みを叶えたい思いと、彼の死の床に立ち会いたくない思いがぶつかり合い、どちらにも心が定まらなかつた。長門嬢はとりあえず家を出たものの、彼の入院する病院に向かつて、急ぎ駆けつける気にはどうしてもなれなかつた。長門嬢は決して近くはないその病院に向かつて、徒步で進んでいくのだった。ゆっくりと、あくまでゆっくりと、近づいてゆくのだった。踏み出す一歩一歩が、どれだけ重苦しく辛いことだろうか。彼の死の床に近づくその歩みは、従つて進めば進むほどにいよいよゆっくりとなり、靴底が地面に粘着しているようにすら思われるのだった。引き裂かれた心のジレンマは激しくなる一方であつた。いつそ泣き喚くことができればどんなに良かつたろう。しかし長門嬢の表情筋は常日頃と同じく微かにすら動かず、長門嬢は我と我が身とに絶望するほかはなかつた。進むことは苦しく、立ち止まることもできなかつた。進むことは彼の死の床に近づくことであり、立ち止まることは彼の最期の望みを裏切ることであったのだから。

長門嬢が長女からの呼びかけの電話を受けたのは暁過ぎのことだつた。厚い雲のかかる天候で、雨が降りそうな様子はなかつたが、外出するにはじつに鬱陶しい曇天であつた。雨でも降ればいいのに。長門嬢は思う。彼の死に際して、天も涙すればよい。しかして、歩みを進める間に雲には切れ目が現れ、そこからしだいに空は晴れ上がり、漸く病院が見えてくるころには、雲一つない見事な快晴となつていた。そろそろ傾きだす日の光に燐々と照らされながら、長門嬢は病院に到着する。決定的な、あまりにも決定的な現実に相対するためだ。

長門嬢の最後の彼の助命への努力も、従来と同じく、失敗に終わった。それだけではなく、長門嬢の独断専行に対する禁令までもかけられてしまっていた。「違反行為はただちに露見します。」喜緑嬢は言つのだつた。「それだけでなく、わかつていますね? 無闇な助命はそれこそ、彼自身の意向に背くものです。ものの生き死には天地自然の理、逆らうことは許されません。」・・・さすがに喜緑嬢は要点をしつかりと把握していた。「彼自身の意向」という一言が、長門嬢にとり、こよなき呪縛として作用することを知悉していたのだ。長女からの電話に長門嬢が呪縛されてしまったように。

そのうえなお始末におえないことに、長門嬢は喜緑嬢の言つ『彼の意向』が、まさしく彼本人のそれと完全に一致していることを理解してしまつていた。それはすなわち、涼宮ハルヒ亡きいま、彼はこの世になんの未練もないということでもあつた。彼らふたりはまさに一心同体だつた。即ち、生きるも死ぬも共に。片方が現世に別れを告げたとなれば、残りの片方も速やかにそのあとに続くことは明白だつた。それはとりもなおさず、彼をこの世に引き留めるには、長門嬢では役不足である、ということを意味していた。長門嬢はずつと、彼にとつての何者かでありたいと熱望していた。たしかに、彼女は彼の『かけがえのない友人』としての盤石の地位にあつた。しかし、そこまであつた。長門嬢は彼にとつての、それ以上の存在でありたかつたのだ。しかし、それ以上の部分は完全に、涼宮ハルヒが独占していた。彼の愛のすべてを受け止めるのは、涼宮ハルヒだけの特権だつた。ときここに到つても、結局その点には何らの変更もなかつた。涼宮ハルヒ亡きいま、もはや彼はこの世を去ることもまたよし、と思つていることは確かだつた。長門嬢は彼のことならなんでもお見通しだつたのだから。しかしそれだけに、より一層、病院に向かう道々は、苦難の行軍、十字架の道行きであつた。愛する人が彼女を愛してくれないまま、彼女のもとを永遠に立ち去るうとしていたのだから。

ふらつく足どりで長門嬢は病室に到着する。遅れればいい。そう思つていた。しかし、彼はまだ生きていた。親族たちが駆け寄つてきて、彼女を彼のもとに連れていいく。長門嬢の手を取り、彼の手に重ねる。彼は弱々しく彼女の手を握る。しかし長門嬢にはわかつた。それは彼の精いっぱいの握手だつた。彼の顔には微笑みが浮かび、目からは涙が溢れ出す。彼の言葉がたしかに伝わつてくる。もう発

やめじとのでかなこと葉が。

・・・長門！ 長門！ 最後に会えてよかったです！ すまんが、俺は先に行くわ。世話をなりっぱなしで、ついでにお返しができなかつたな、すまん、本当にすまん。・・・じゃあな。せめて、心楽しく暮らせ。・・・

彼の目が閉じられ、そして、いよいよそのときがやってくる。

「何かを追いかけてこいつをしてこいつを見えた。」

彼の長女は語る。

「指が動き、手が震えた。・・・手を伸ばすと見てこいつ。去つて行く何かに差し伸べようといやむしかつかまえようとすむかのよつこ。」

「非科学的、かつロマンチックな見解を採用するならば、キヨンくんはママのあとを追っかけていったのだろう、ということになるのかな。・・・ふたり仲良く、追っかけっこをするみたいに、いつも楽しく、笑いさんざめくよつに、勇躍あの世に旅立つていったのだ、とね。」

と、自身医師であつた彼の長女は語るのであつた。最後の決断は、この長女が下した。長女の觀察からほどなく、心臓が停止した。主治医が問う。どうしますか？ 彼の末娘、妹、次女、答える者はない。しかし、沈黙はほんの一瞬だつた。長女が微かに震える声で、それでもきつぱりと述べたのだ。

「もう十分です。延命術の施工には及びません。たぶん、ここを長らえてももう意識は戻らないでしじうから。」

「わかりました。それでは。」

人工呼吸器が取り外され、時計が確認される。

「12月21日、午後4時ちょうど。『臨終です。』

彼の娘たち、そして妹は足早にその場を立ち去る。いつの頃からだろう、死者の枕辺で泣き声をたてることが極めて不調法、かつ無作法なことであるという社会的なコンセンサスが成立、死者のために泣きたい者は死者から離れなければならなくなつていた。彼女らは彼の死にあたり、押さえ切れぬ涙を流しに、その場を後にしなければならなかつたのである。幾人かがその後に続く。あるいは遺族向けの遮断室（かなりの大声でも外に漏れないようになつて）いる部

屋。一種の控え室）に、あるいはその他適宜の、病室に泣き声の届かない場所に。しかし、その場にどどまっている人々もあつた。あまり近しい親類でも親しい友人でもなく、従つて号泣するには動機が不足する人たち、あるいは医師や看護師、葬務士（新しい制度によつてこのあたりの時代ではすべての病院や老人ホーム等に配置されている、葬送にむけての基本的措置を遺族に代わつて執行する任に当たる職位）たちなど、するべき仕事のある人々、そして、悲しみのあまり茫然とする人々。そういう人たちの中に、長門嬢はいた。言うまでもなく、長門嬢は最後の項目に属する。長門嬢は彼の最期に立ち会つてしまつた。旅立つ彼の最期を、その傍らで、具に看取つてしまつたのだ。それは、長門嬢にとり、この世でもつとも見たくない光景、できれば見ずにするませたい光景であつた。長門嬢は、今や生命のない肉体と化した彼のそばに、ただ茫然と立ち尽くしていた。彼の顔は安らかで、微笑んでいるようにも見えた。しかし長門嬢には、もはや彼が遺体であることが、遺体でしかないことが、いやでもわかってしまうのだ。長門嬢の知覚は、彼女に冷厳な現実を突きつけ続ける。目の前の彼は、呼吸、心臓、脳波、すべてが停止していた。回復の可能性はなかつた。彼は死んだのだ。彼は死んでしまつたのだ。そう・・・彼は死んでしまつたのだ！　わたしをこの世に残して。・・・わたしをひとり残して。

長門嬢は立ちぬいていた。ひたすらぼんやりと立ちぬいていた。まとまった思考を形成することができず、断片的な思い出や、現実を拒否したい思い、漠然とした空虚感などがつぎつぎと去來した。長門嬢はいつしか歩きだしていた。目指すべき場所があるわけでもなく、自分がどこを歩いているのかもわからず、歩いている自覚とてなく、ただ足の赴くまま、ふらふらと歩いていた。心の中にはなにもなかつた。自分の足下に、地面があるとも思えなかつた。長門嬢は病院の廊下を歩き回り、いつしか非常階段の踊場に出た。建物の外にある非常階段は夕日に照らされていた。彼の娘たちと妹がそこにいた。長女が彼女らの中央にあり、比較的しつかりと立っていた。次女が長女にすがりつき、崩折れる。喉から悲嘆の声が絞り出される。

「キヨンくん・・・死んじゃつた！」

そして号泣が続く。まるでそれが念図でもあつたかのように、妹と三女も、今はもういない彼を偲んで泣き崩れるのだった。長女だけが立ち続けていた。涙を流してはいたが、泣き声をあげてはいなかつた。長女は目をあげて遠くを見つめていた。雲一つない、赤く染め上げられた夕暮れの空の一点を。

「ありありと見えるよつた気がしたものだ。」

のちに長女は語つた。

「ママとキヨンくんが、笑いざわめきながら、高い空で追つかけていをしているのが。それこそ天空の全面を駆け巡っているのが。」

長門嬢は彼女らの傍らを行き過ぎ、階段を上り始めた。悲嘆にくれるなか、彼女らは誰も長門嬢には気付かなかつた。長門嬢は階段をどんどん、どんどん上つていった。そして、屋上に到達した。屋上には誰もいなかつた。

病院の屋上は、長門嬢にとつてことさらに思い出深い場所であつた。遠い昔の日、長門嬢がかりそめの自己実現を目指して戦い、そして失敗に帰したのち（『事例1 2月18日』・所謂『「消失」事件』）、彼は長門嬢に同情し、その運命に悲憤慷慨してくれたものだつた。その対話は病院の屋上で交わされた。長門嬢にはまるで昨日のことのように思い出されるのだった。長門嬢は晴れ渡つた夕暮れの空をふと見上げる。ある思考が、はじめて、はつきりした形をとりはじめる。惑乱した思索の断片の海から浮かびあがつてくる。

もう一度と、彼に会つことはできない。

もう永久に、あの笑顔に出逢つことは、かなわない。

その瞬間、真に思いがけないことが起こつた。長門嬢の両目から大粒の涙が零れだし、頬を伝い、地面へと落ちていった。相変わら

ず表情は僅かにも緩んではくれなかつたが、涙だけは流れていた。とめどなく、流れ落ち続けていた。長門嬢は途轍もない悲しみに苛まれながら、どこかしら嬉しくもあり、混乱した気分だつた。私はここに至つて漸く、愛する彼のために、落涙することだけはできたのだ。はじめて、微かにでも、人間らしく振る舞うことができたのだ。それは愛する彼の為だけに流される涙であつた。まさしく空前絶後のことであつた。ただ愛する彼ただ一人だけが、そしてその死のみが、この宇宙的な悲劇の少女の紅涙を絞ることができたのだから。

長門嬢にとり、彼の存在は、彼女自身の存在意義の全てを構成していた。その彼亡き今、彼女にはもうこの世に生きる意味がなかつた。長門嬢は固く決意した。私は今こそ、この世を去りう。そして、愛する彼の傍らで、ともに永遠のまどろみに憩うのだ。あの頃の幸福な思い出を抱いて。夢のように幸せだった、彼の生きていた頃の思い出を。

涼宮夫妻は、長門嬢のとりわけ思い入れ深い日時を、敢えて選んで世を去つた。それは長門嬢の夢の始まりと、終わりのときであつた。涼宮ハルヒの不在こそが、彼女自身の夢の実現にかりそめにせよ希望をあたえ、その復帰はその希望が潰え去ることを意味したのだから。そして、長門嬢の永遠のライバルは、長門嬢自身の夢の始まりの時間に、そして永遠に愛する彼は、その夢の終わりに。それはまさしく夢の終わりであつた。その愛する彼自身が、いまや決定的に、永遠に不在となつてしまつたのだから。長門嬢はおそらく純情で、そして極めて不器用な少女であつた。好きな人を変えることも、好きでなくなることもできなかつたのだ。その彼亡きいま、もはや長門嬢はこの世界にいかなる未練もなかつた。長門嬢はその場で直ちに、『乞暇ならびに用途廃止確認申請』を、統合思念体主流派に対し提出した。永久的な任務解除と、自身の『存在の取り消し許可』を求める申請であつた。しかし、主流派からの回答は『本申請は必要とされる定式を満たしておらず受理できない』、すなわち門前払いであつた。『貴下は後見人の監督下にあり、かかる申請には後見人の同意が必須である。』後見人とは喜緑江美里嬢であつた。長門嬢は喜緑嬢に対し緊急アクセスを要求したが、『面談にて対話とする。』なる回答だけで接続を切られてしまい、やむなく病院を後にして喜緑嬢の自宅へと向かつた。・・・長門嬢の悲劇は、不幸にも、いまだ残り時間をはるかに残していたのである。

午後6時半、長門嬢は自宅マンションの上階、808号室に居を構える統合思念体稳健派代表ならびに中央意志代理人、『インター フェース総監』、喜緑江美里嬢の事務室に出頭した。喜緑嬢は物憂い様子で、郵便物の開封をしていいるところであつた。さして重要なも思えないダイレクトメールやチラシの類いが部屋の中央に置かれ

た事務机の上にあり、喜緑嬢はいつそエレガントとでもいいたいようなゆつくりした動きで鍵を動かし、ダイレクトメールの封を丁寧に切つては、逐一熱心に目を通していった。まるで長門嬢の来訪など氣づいていないような態度だったが、不意に静かな声が告げる。

「お話しなさい。」

「乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。」

即答であった。『白物家電大安売り!』などと大書された派手な印刷物からその視線は搖るきもしない。長門嬢はさらに言い募る。

「乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。」

喜緑嬢は今度は『アクセサリー高価買い受け! 期間限定! お急ぎ下さい!』なるチラシを熟読している。

「乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。」

『分譲マンション完売間近! 資産形成にも好適。価格応相談。お電話はお気軽に!』

「乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。」

『本日牛肉特価日! 数量限定! 早い者勝ち!』

そんな問答が都合16回繰り返され、長門嬢はいまにも挫けてしまいそうだった。そして17回目。

「乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。」

『バーゲン！ 冬物大量入荷！ 全面大幅値下げ！ 投げ売り価格！ 掘り出し物満載！ いまがチャンス！』

長門嬢はもう限界だった。怒りの限界ではない。悲しみでもない。疲労の限界である。彼の死のあまりにも強烈なショック、実りのない問答、暖簾に腕押しの対応、それらが積み重なり、暗く濁った重い疲れが体の芯のほうに溜まっているような感じ。その場に倒れそうになりながら、長門嬢は問いを発する。

「私の任務は完了した。存在理由の全ては完遂された。したがつて正当な資格を保持する者として、乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。資格の正当性は認められません。存在理由の完遂ならびに任務の完了に関しては、あなたの自己決定の管轄外の事項に属するものです。従つて要求は当然に却下されます。第一、事実あなたの任務は完了しておりませんし、存在理由はいまだ残存しています。」

『新色入荷。在庫僅少。お値打ち価格。お求めはお早めに。』

あまりといえば当然の答えであった。常識に則つた、実につまらない回答。しかし、長門嬢にはこの無味乾燥な回答の意味するところ

ろは、心の折れそつなばかりに重すぎるものであった。私は生存を義務づけられている。それも、どうやら将来、短からぬ時間にわたつて。彼のいない世界に。愛する人がこの世にいない、灰色の無価値な世界に。なぜ。なぜそうしなければならないのか。もはや涼宮ハルヒもいないというのに。長門姫は反論しそうになる。心の中で呟く。

「でも、」

しかし、その後は続かない。この一言でさえ、その口から出ることはなかつた。長門姫は性分が素直すぎた。筋道立つた説得にはことに弱かつた。喜緑姫の持ち出した常識論ひとつで、長門姫はほとんど身動きとれなくなつてしまつたのだつた。長門姫は完全に疲れきついていた。もう口を開くことも億劫で、その場に立ち去りしていった。喜緑姫はそんな長門姫の様子など知らぬげに、目を通し終わつたチラシを軽く纏めると『リサイクル・紙』と書かれたラックに放り込み、今度はそれよりはいくらか価値ありげな、公共料金の請求書の封を切り始めた。先ほどまでとかわらず、エレガントな、ゆつたりとした鋸使いで、丁寧に丁寧に。

喜緑嬢はあくまでも落ち着き払い、その顔には変わらぬ明朗なる微笑み。それはこの問答の間を通しても微動だにしない。ぼつねんと立ち尽くす長門嬢を前に、やおら手提げ金庫を取り出し、電気料金一万五千五百三十一円也をあくまでも丁寧に数えて、「支払」と記された封筒に入れているのであつた。一万五千五百三十一。15532。さりとはまた、思い出深い数字を出してきたものだ。あの繰り返し回数とは。

「八月事件（特異的事由による一過性の時限的時間反復事象）」の繰り返し回数とは。・・・長門嬢の心は再び、この世を離れて、思い出の世界に羽ばたく。八月後半が際限なく繰り返すという事件。理由は実に単純なものであつた。「夏休みの宿題」である。河原での花火の際、彼が何気なく吐いた「夏休みの宿題はまだ全然手付かず。」という言葉が、涼宮ハルヒに小さな不安を生じさせた。涼宮ハルヒは中学時代、「成績優秀貴族」としての特権を余すところなく享受しており、当然高校でも引き続きそうするつもりであつた。そのためには自分のみならず仲間たちにも、相当の成績を修めてもらう必要があつた。彼以外の三人には特に心配すべき点はなかつた。彼らは成績優秀者揃いであつたのだから。しかし彼に関しては心配が残つていた。従つてせめて、「課題を全て終わらせておく」ことが重要であつた。内容がいかに間違いだらけであれ、「期日までに全て終わらせておく」ことは「意欲の表明」として効果的である。成績が多少悪くとも、「罪一等減ずる」形になることが期待できるのだ。しかし、彼は全くやる気がなかつた。これは涼宮ハルヒにとり、問題であつた。SOS団の活動に、付け入るスキを作ることになりかねないからだ。成員の成績不良を理由に活動に容喙を許し、あまつさえ活動差し止めの危機すら招き寄せるに至る。涼宮ハルヒにとり、それらのことは断固容認できないものであつた。涼宮ハルヒは、八月後半を無意識に反復、いわば再試行し始めたわ

けである。反復回数がやたらに増大したのは、ノーヒント状態では彼がいつまで経っても宿題のことに思い当たらなかつたこと、そして内情に通じている筈の人物が故意にアドバイスを避けたこともあつた。それは他でもない、長門嬢であつた。長門嬢はかなり初期の段階で原因に気付いていた。しかし、彼女は彼に対し何らのアドバイスをもせず、「私の任務は観測だから。」という事実上の言い訳に逃げ込んで、ただ無為に延べ時間が積み重なるに任せた。長門嬢は当時すでに、恐るべき危惧を抱いていた。自分は死ねないのかもしれない。するとどうなるか。いつかは愛する彼と死別する日がやつてくることになる。長門嬢はこの結論におののき、そしてなんとか彼との日々を引き伸ばしたいと願つていた。そこに起つたのがこの事象である。長門嬢は涼宮ハルヒの尻馬に乗つかつたわけだ。例え同じ日々の際限のない繰り返しであろうとも、「決定的瞬間」をすこしでも遠くに押しやれるならば、長門嬢にとつてはそれでよかつたのである。それにしても最後にはすっかり飽きてしまつたのであるが。

だが今となつては、その退屈極まりなかつた停滞の日々も、宝物のように大事な、甘やかに懐かしい、思い出の1ページであつた。愛する彼が生きていた日々。そして、そのそば近くで生きることができた日々。と、思い出に耽る長門嬢を、微笑みを含んだ冷静な声が現実へと引き戻す。

「そういうえば、長門さんが以前提出された起案、『世界平定論』でしたか、あれは興味深いテーマでしたね。」

郵便物の整理を終え、支払うべき現金もすっかり準備し終わり、机の上をきれいに片付けた喜緑嬢は、ふと思いついたようにそんなことを言った。長門嬢はその意図がわからない。なぜ、いま、そんなことを？ 確かにそんな起案を提出したこともあつた。はるかな昔々のある日、彼がふと、こんな言葉を漏らした。・・・「世界が平和ならそれで言うことなし。」・・・長門嬢は例によつて彼の望みに応えたいと思い、起案書を起草して統合思念体に提出した。それが「世界平定論」である。要約するならば統合思念体の介入のもとに、手つ取り早く世界平和の達成を図るための起案。そのおおまかな論旨は次の通りである。

現在、涼宮ハルヒの解析活動には相当長期の期間を要するであろうことが明らかになりつつある。然るに、涼宮ハルヒの現住するところの惑星上においては不安定な要素が充満し、不慮の事故（「戦争」等の人災により観測対象が被害を被る等）がいつ発生するとも知れず、安定した観測活動を長期間継続するに当たつては適切な環

境であるとは言い難い現状である。我々の進化の可能性の探求との見極めという重要欠くべからざる工程の推進にあたり、今や我々は観測者の中立原則にあくまで固執することを終止せねばならない時機に到達したものと判断されるべきであらう。要するに、我々の介入のもとに、観測の安全を妨げる事象を直接的、間接的に排除することをも、もはや当然に考慮されなければならない。しかもこれは喫緊の課題といえよう。いまこの時にも、所謂「世界最終（核）戦争」の火種はぐすぶり続いている。これなどはまさに看過せざるべきからざる危機といえよう。いままさにこの時において、我々自身の進化の可能性を保持、また進化を推進、かつまた促進するための観測の安定的継続のため、我々は一般的な用語で指されるところの「人間社会」に積極的に介入し、「人間」同士の無意味な同士討ち的抗争（即ち所謂「戦争」）を、できうる限り阻止する方針のもとに行動を開始すべきである。観測対象および観測活動の安定並びに、その所要時間の短縮を図るために有効な手段は多くはない。この起案はその数少ない有効な手段について提起するものである。よろしく検討されたい。

以上の要約の長門嬢の記述した原文は、非言語的思念情報の複合立体記述法によって記述されており、そのままで読み取ることができない。そこで、それをかなり無理矢理に平面的かつ言語的に展開したものを作らに読解し、要約したものである。すべてを文章化すると非常な長文となるうえ、そのままで非常にわかりにくいため、この文章の記述者である「わたし」の視点で大幅に削除し、適宜記述を変更した。なお、喜緑さんの査閲を経ており、「だいたいこの通りで間違いありません。」との承認を頂戴した。「あなたの主觀も少々強く入っているようですが、発表に当たってはそのままで差し支えありません。」との但しつきではあつたが。原文の長門嬢の文章は訥々として質実、いかにも人となりのよく表れたものであつた、らしい。展開済みの文章からではすでにそういう個人的特徴は感じ取れなかつた。従つてこの感想は、じかに原文に接した喜緑さんからのものである。

さて、怪訝そうな長門嬢の様子になど委細構わず、喜緑嬢は言葉を継ぐ。

「なかなか興味深く拝読させていただきました。」

長門嬢は悪い予感を覚える。話をそらすと試みる。『今暇申請への同意を要求する。』と言おつとする。だが口を開きかけた瞬間、機先を制される。

「なにとは言いませんが、却下するだけなら大した手間でもあり

ませんから、何回申請していただいても結構ですよ。」

即ち、『断固認めるつもりはない』といつてはいる。長門嬢は虚を突かれ、言葉を飲み込んでしまう。しばしの沈黙。長門嬢は漸く、あらたに『いつでも見いだす。

「起案書を撤回する。」

「いいえ、もう遅すぎます。あなたの起案書はすでに承認され、作戦として編制されています。」

「起案書の撤回と作戦の取り消しを重ねて要請する。あれは間違いだつた。」

「手遅れです。すでに各派の承認のもと、作戦は発動されます。即ち、かかる起案はすでにあなたの手を離れているということです。それにしても、あなたは起案者として、この作戦の成就を見届けたいと思うでしよう?」

「作戦の成就の見届けを希望しない。乞暇申請への同意を要求する。」

「却下します。第一、あなたはこの作戦の従事者の一人として、枢要な任務のひとつを課せられる予定です。」

「拒否する。」

「認められません。あなたの起案です。あなたから、すべてが始まりたのです。必ず任命に服して貰わねばなりません。」

「拒否する。」

「認められません。」

「拒否する。」

「だめです。絶対に。」

満面の微笑みのまま、喜緑嬢は長門嬢の拒絶を受け流す。長門嬢は黙つてしまつ。思えば、起案書を提起したときがだいたいおかしかつた。まったくのなしのつぶて、提出以来何らの反応もなかつたのである。当時の長門嬢は却下の通知すらこないことをほんの少し訝しく思つただけで、そのうちに起案書のことなどすっかり忘れてしまつっていた。だから、今頃になつて起案の結果が自分に降りかかるつてくるなど、まさに想像を絶したことであつた。・・・起案の動機である、当の彼がもうこの世にいないといつのにー。しかし彼の永遠の不在を理由に取り消し要求することは無理な相談だつた。長門嬢は彼のことを起案書に書かなかつたのだから。そんなことが記述されていたとしたら、第一取り上げても貰えない。『動機不明瞭』『問題点不明確』『審議に値せず』などの理由で門前払いである。・・・今となつては、そのほうが良かつたかもしれない。長門嬢は少なくとも審議にはかかるように、統合思念体むけに記述に工夫を凝らしたのだが、今となつてはそんな余計な小細工をした当時の自分を呪うほかななかつた。長門嬢は殆ど息も絶え絶えという感覚におそれ、やつとのことで一言だけ搾り出す。

「経緯について、説明を要求する。」

「あなたの起案書は提起と殆ど同時に可決され、直ちに作戦に編制され、すぐに発動されました。今までお話ししなかつたのは、この作戦が現在にいたるまで『前段階・機密工程』であつたからです。

本日只今をもつて、本作戦は『予備段階：極秘工程』に移行しました。ここにおいて、インター・フォース長門有希、あなたに対し、世界平定作戦の進行予定表、すなわち『第一作戦工程紀要』を交付し、『第一作戦』への従事を命令します。

絶句する長門嬢に向かい、笑顔のまま、喜緑嬢は発令する。

「情報統合思念体中央意思特別観測集中分掌部第一作戦工程進行管理本部発令・命令第708号・作戦従事命令。対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインター・フォース長門有希。第一作戦に従事せよ。インターフェース総監・第一作戦インターフェース運用主管・喜緑江美里。惑星時間西暦 年12月21日。以上。ちなみに、異議はいつさい受け付けません。」

長門嬢は気が遠くなりそうになる。せめて一矢報いたい。目眩に近いものを感じながら、長門嬢はどうにかこれだけ言つてのける。

「無期限の休暇を申請する。」

「申請を承認し、一時的にすべての任務を解除します。ゆっくりお休みなさい。どこへ行つてもよいし、何をしていても構いません。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5843p/>

作戦従事命令

2011年10月8日21時24分発行